

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第2集

広島市佐伯区五日市町所在

城ノ下A地点遺跡 発掘調査報告

1991・3

財団
法人 広島市歴史科学教育事業団

は し が き

近年，都市化の進展に伴い，本市周辺部においても宅地造成等の開発が盛んに進められています。

佐伯区においても，大規模な宅地の造成，道路網整備等が進められ，それに伴い，埋蔵文化財の調査件数が増大しており，八幡川流域を望む丘陵上に位置する城ノ下A地点遺跡も宅地造成に伴い，記録保存のための調査を行ったものです。

今回調査の結果，遺跡からは20数軒の竪穴式住居跡や10基を数える古墳群が確認されるとともに，弥生時代後期から古墳時代前半の土器が多数出土したほか，古墳時代の武具類をはじめとする多数の鉄器や，金銅製品が出土し，本地域における古代の人々の様子を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が地域の歴史学習の一助となり，郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てばと願っている次第です。

終わりに，調査を行うにあたり，ご指導いただいた諸先生方，ならびにご協力いただいた方々，精力的に発掘作業に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団
理事長 鍋 岡 聖 剛

例 言

1. 本書は、広島市佐伯区五日市町口和田地区における土地区画整理事業に伴い、平成2年度に実施した城ノ下A地点遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(仮)口和田住吉土地区画整理組合設立準備委員会及び三井不動産株式会社広島支店から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 発掘調査において出土した人骨の鑑定は、長崎大学医学部解剖学第二教室に委託した。
4. 本書は、Ⅰ・Ⅲ－(1)を脇坂伯史が、Ⅱを若島一則が、Ⅲ－(2)を多森正晴が、Ⅳを脇坂・若島が、[付編]を松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信が執筆し、若島が編集した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、若島・多森・脇坂が分担して行った。
6. 遺物の実測及び写真撮影は、若島・多森・平岡正宏・吉本健一・池淵俊一が分担して行った。
7. 図面のトレースは、岡野孝子・住川香代子が分担して行った。
8. 本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
9. 炭化材の樹種同定は、パリノ・サーヴェイ(株)に委託した。
10. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を複製したものである。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	遺構と遺物	
1.	弥生時代集落跡	5
2.	城ノ下古墳群	25
IV	総 括	47
[付編]	広島市城ノ下A地点遺跡出土の古墳時代人骨	54

挿図・表目次

第1図	城ノ下A地点遺跡周辺遺跡分布図	第33図	第7号土壙実測図
第2図	城ノ下A地点遺跡周辺遺跡分布図	第34図	第8号土壙実測図
第3図	城ノ下A地点遺跡地形図及び遺構配置図(折り込み)	第35図	第9号土壙実測図
第4図	第1号住居跡実測図	第36図	城ノ下古墳群古墳配置図(折り込み)
第5図	第2号住居跡実測図	第37図	第1号・第10号古墳墳丘測量図(折り込み)
第6図	第3号・第4号住居跡実測図	第38図	第1号・第10号古墳上層断面図
第7図	第5号住居跡実測図	第39図	第10号古墳墳丘測量図
第8図	第6号住居跡及び第1号土壙実測図	第40図	第1号古墳主体部実測図(折り込み)
第9図	第7号・第8号住居跡, 第1号テラス状遺構実測図(その1)	第41図	第1号古墳主体部遺物出土状況(西半)
第10図	第7号・第8号住居跡, 第1号テラス状遺構実測図(その2)	第42図	第4号古墳主体部実測図
第11図	第2号住居跡状遺構実測図	第43図	第4号古墳墳丘測量図
第12図	第2号土壙実測図	第44図	第2号・第5号・第6号古墳墳丘測量図(折り込み)
第13図	第9号住居跡実測図	第45図	第2号古墳主体部実測図
第14図	第1号住居跡状遺構実測図	第46図	第5号古墳主体部実測図
第15図	第10号・第11号・第12号住居跡実測図	第47図	第6号古墳A・B主体部実測図
第16図	第13号～第19号住居跡, 第3号住居跡状遺構実測図	第48図	第3号古墳墳丘測量図
第17図	第13号・第14号住居跡実測図	第49図	第3号古墳A・B主体部実測図
第18図	第13号・第14号住居跡断面実測図	第50図	第7号古墳墳丘測量図
第19図	第16号・第17号・第18号・第19号住居跡及び第3号・第4号土壙実測図	第51図	第7号古墳主体部実測図
第20図	第16号・第17号・第18号・第19号住居跡断面実測図	第52図	第8号古墳主体部実測図
第21図	第1号掘立柱建物跡実測図	第53図	第8号・第9号古墳墳丘実測図
第22図	第15号住居跡, 第3号住居跡状遺構実測図	第54図	第9号古墳主体部実測図
第23図	第20号住居跡実測図	第55図	土壙墓実測図
第24図	第21号住居跡実測図	第56図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(1)
第25図	第22号住居跡実測図	第57図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(2)
第26図	第4号住居跡状遺構実測図	第58図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(3)
第27図	第23号住居跡実測図	第59図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(4)
第28図	第5号住居跡状遺構実測図	第60図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(5)
第29図	第2号掘立柱建物跡実測図	第61図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(6)
第30図	第2号テラス状遺構実測図	第62図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(7)
第31図	第5号土壙実測図	第63図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(8)
第32図	第6号土壙実測図	第64図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(9)
		第65図	城ノ下A地点遺跡出土土器実測図
		第66図	城ノ下A地点遺跡出土土器及び須恵器実測図
		第67図	城ノ下A地点遺跡出土鉄器及び銅鏃実測図

第68図 城ノ下第1号古墳出土鉄器実測図・・・・
第69図 城ノ下第1号古墳出土短甲実測図・・・・

第70図 城ノ下第1号古墳出土金銅製品
及び玉類実測図・・・・

図 版 目 次

- 図版1 遺跡近景及び周辺遺跡（南から）
図版2 a 城ノ下A地点遺跡遠景（調査前北東から）
図版2 b 遺跡全景（調査前）
図版3 遺跡全景（調査後）
図版4 遺跡東側近景
図版5 a 第1号住居跡
図版5 b 第2号住居跡
図版6 a 第3号・第4号住居跡（完掘後）
図版6 b 第4号住居跡炭化材及び遺物出土状況
図版7 a 第5号住居跡
図版7 b 第6号住居跡及び第1号土壙
図版8 a 第7号・第8号住居跡及び第1号テラス
状遺構（東側）
図版8 b 第7号・第8号住居跡及び第1号テラス
状遺構（西側）
図版9 a 第9号住居跡
図版9 b 土壙墓
図版10 a 第1号住居跡状遺構
図版10 b 第2号住居跡状遺構
図版11 a 第10号・第11号・第12号住居跡
図版11 b 第2号土壙
図版12 a 第4号古墳及び第1号掘立柱建物跡
（東から）
図版12 b 第4号古墳主体部
図版13 a 第13号・第14号住居跡
図版13 b 第15号住居跡及び第3号住居跡状遺構
図版14 a 第18号住居跡炭化材及び遺物出土状況
図版14 b 第16号～第19号住居跡群及び第3号・
第4号土壙
図版15 a 遺跡西側近景
図版15 b 第1号・第2号・第3号古墳近景（調査前
西から）
図版16 第1号古墳（完掘後）
図版17 a 第1号古墳主体部内遺物出土状況（全景）
図版17 b 第1号古墳主体部内遺物出土状況（西半部
分）
図版18 a 第1号古墳主体部内短甲出土状況
図版18 b 第1号古墳金銅製品出土状況（東から）
図版19 a 第1号古墳主体部（完掘後）
図版19 b 第1号古墳土層断面（南側から）
図版20 a 第10号古墳及び第2号掘立柱建物跡
図版20 b 第1号古墳盛土除去後（東から）
図版21 a 第2号古墳全景（調査後）
図版21 b 第2号古墳主体部石棺（開棺前）及び第
20号住居跡
図版22 a 第2号古墳石棺内人骨出土状況
図版22 b 第3号古墳全景（西から）
図版23 a 第3号古墳A・B主体部
図版23 b 第5号古墳全景（南から）
図版24 a 第5号古墳主体部石棺（開棺前）
図版24 b 第5号古墳主体部石棺内人骨出土状況
図版25 a 第5号古墳主体部石棺（完掘後）
図版25 b 第21号住居跡
図版26 a 銅鏃出土状況
図版26 b 第5号土壙遺物出土状況
図版27 a 第5号土壙
図版27 b 第6号土壙
図版28 a 第7号土壙
図版28 b 第6号古墳全景（東から）
図版29 a 第6号古墳A主体部
図版29 b 第6号古墳B主体部
図版30 a 第6号古墳東側周溝
図版30 b 第6号古墳西側周溝・第3号古墳東側周溝及
び溝状遺構（南から）
図版31 a 第23号住居跡
図版31 b 第8号土壙
図版32 a 第7号古墳全景（東から）
図版32 b 第7号古墳主体部
図版33 a 第7号古墳東側周溝遺物出土状況及び第5号
住居跡状遺構
図版33 b 第8号古墳全景（東から）
図版34 a 第8号古墳主体部
図版34 b 第9号古墳全景及び主体部
図版35 a 第9号土壙
図版35 b 第22号住居跡及び第4号住居跡状遺構
図版36 a 第2号テラス状遺構
図版36 b 貝塚近景（西から）
図版37 城ノ下A地点遺跡出土土器（1）
図版38 城ノ下A地点遺跡出土土器（2）
図版39 城ノ下A地点遺跡出土土器（3）
図版40 城ノ下A地点遺跡出土土器（4）
図版41 城ノ下A地点遺跡出土土器（5）
図版42 城ノ下A地点遺跡出土土器（6）
図版43 城ノ下A地点遺跡出土土器（7）
図版44 城ノ下A地点遺跡出土土器（8）
図版45 城ノ下A地点遺跡出土土器（9）
図版46 城ノ下A地点遺跡出土土師器
図版47 城ノ下A地点遺跡出土須恵器及び金属器
図版48 城ノ下A地点遺跡出土鉄器
図版49 城ノ下第1号古墳出土短甲、金銅製品及び
玉類
図版50 城ノ下古墳群出土人骨
図版51 西尾古墳出土短甲残欠

付 表 目 次

表 1	城ノ下A地点遺跡出土弥生土器觀察表 . . .	1 8	表 4	城ノ下A地点遺跡古墳群出土須恵器觀 . . .	4 4
表 2	城ノ下A地点遺跡住居跡計測表	2 4	表 5	城ノ下A地点遺跡古墳群出土鉄鏃計測表 . . .	4 5
表 3	城ノ下A地点遺跡古墳群出土土師器觀察 . . .	4 4			

I はじめに

広島市教育委員会は、1987（昭和62）年7月24日、広島市佐伯区口和田・住吉地区における団地造成計画を知り、施行区域内の埋蔵文化財の分布調査を行った結果、その存在の可能性があることがわかった。そこで、造成主（仮）口和田住吉土地地区画整理事業組合設立準備委員会、及び施行主である三井不動産株式会社広島支店（以下組合等）と遺跡の取り扱いについて協議を行い、並行して試掘調査を実施した。その結果、6か所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後、埋蔵文化財の取り扱いについて組合等と再三協議を重ねたが、地理的条件から設計変更は不可能であり、記録保存もやむなしとの結論に達した。これを受けて、広島市教育委員会は3か年計画の発掘調査を行うこととした。

本調査は、計画の2年次にあたり、組織改正による財団法人広島市歴史科学教育事業団の成立に際して、これを引き継ぎ、1990（平成2）年5月から1991（平成3）年1月までの期間、当事業団で実施した。

調査の関係者は、下記の通りである。

調査委託者 （仮）口和田住吉土地地区画整理事業組合設立準備委員会
三井不動産株式会社広島支店

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当係 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課事業係

調査関係者 鍋岡 聖剛 理事長
片岡 寿一 常務理事兼事務局長
若野 健二 文化財課長
幸田 淳 文化財課事業係長
岡野 孝子 文化財課嘱託

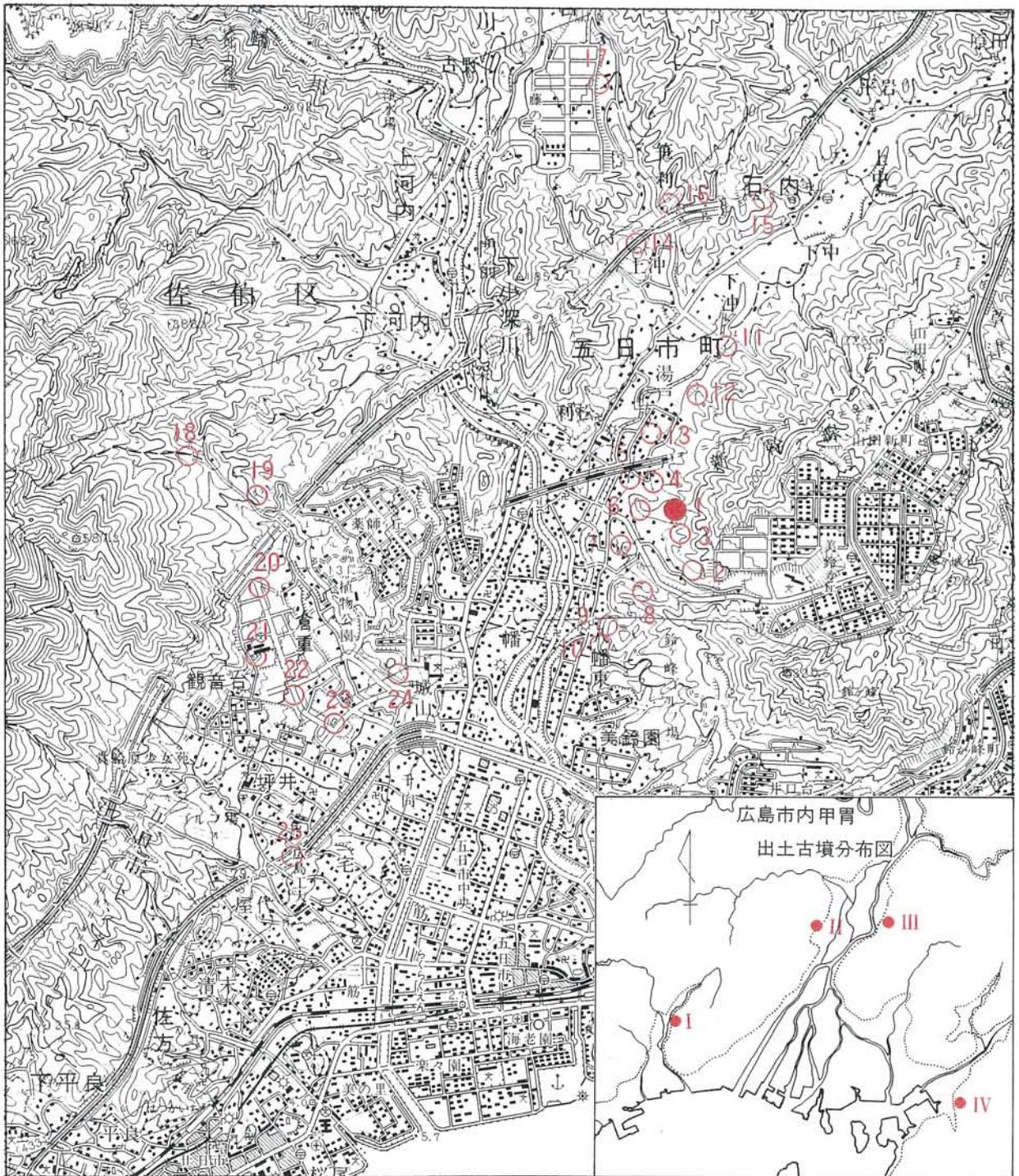
調査者 若島 一則 文化財課主査（調査担当者）
多森 正晴 文化財課主事（調査担当者）
脇坂 伯史 文化財課学芸員（調査担当者）

調査補助員（順不同）

杉田春人、大背戸知香子、岡野慶子、奥田拶子、国本敬子、阪部照美、長力初江、中田南枝、西垣内やす子、本田春子、道添キヌ子、吉谷美佐子、森崎幸江、田中孝雄、広田武子、宍戸節子、横山 茂、木村武勲、大下一人、小方照子、塚井数馬、中村小幸、森下静江、袖上竹男、袖上光子、畠美喜子、森野逸夫、佐々木伸夫、美川和枝、日下甚文、小野 圭、原 智巳、松野一雄、平山琢也、横山吏志、原田靖久、石田晴行、河合淳子、住川香代子、佐伯ひとみ、小林和子、栗林隆幸、山岡美咲、岡田淑子、平岡正宏、吉本健一、寺尾友紀、古屋慶子、太田紀彦、池淵俊一、河瀬陽子

また、（仮）口和田住吉土地地区画整理事業組合設立準備委員会、三井不動産建設株式会社広島支店事務所、広島市教育委員会、八幡東公民館、美鈴ヶ岡公民館、八幡コミュニティーセンター、広島市立八幡東小学校の職員の方々をはじめ、広島市文化財保護指導員三野丈一氏外多くの方から調査を円滑に進めるために多大なご配慮、ご援助を頂いた。また、調査中、広島大学文学部考古学研究室からは広範なご教示を頂き、長崎大学医学

部解剖学第二教室の松下孝幸先生，分部哲秋先生，佐伯和信先生には，出土した人骨を鑑定して頂き，玉稿を得た。ここに記して謝意を表したい。



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 城ノ下A地点遺跡 | 2. 小林A地点遺跡 | 3. 小林B地点遺跡 | 4. 利松住吉遺跡 | 5. 利松遺跡 |
| 6. 高井2号遺跡 | 7. 高井遺跡 | 8. 早稲田遺跡 | 9. 深山迫A地点遺跡 | 10. 深山迫B地点遺跡 |
| 11. 下沖3号遺跡 | 12. 下沖5号遺跡 | 13. 和田1号遺跡 | 14. 長尾城遺跡 | 15. 水晶城遺跡 |
| 16. 浄安寺遺跡 | 17. 笹利迫田遺跡 | 18. 柴草原古墳群 | 19. 稗畑遺跡 | 20. 倉重2号遺跡 |
| 21. 倉重古墳 | 22. 白禿遺跡 | 23. 月見城遺跡 | 24. 倉重向山遺跡 | 25. 三宅古墳 |

(広島市内甲冑出土古墳分布図)

- I. 城ノ下第1号古墳 II. 三王原古墳 III. 中小田第2号古墳 IV. 西尾古墳

第1図 城ノ下A地点遺跡周辺遺跡分布図

Ⅱ 位置と環境

北部の山塊に源を發した石内川と八幡川は、それぞれ沖積地を形成しつつ南西側及び南側に流路をとり、やがて合流して広島湾に流れ込んでいる。市域の中で遺跡の密集する地域の一つである佐伯区において、特にこの合流点周辺は遺跡が密集しており、かつては古代における土地開發の証拠ともいわれる条理割りの残存していた地域の一つでもある。また、「郡（こおり）」という地名が残っており、『倭名類聚抄』にある大町郷の中心地域として、あるいは大町駅の候補地の一つとして比定する説もある。

城ノ下A地点遺跡は、石内川の形成する沖積地及び石内川・八幡川合流地点周辺の肥沃な沖積地の双方を眼下に見おろす絶景の地にあり、周辺には佐伯区東部に広がる山塊から派生し、南西方面に伸びる低丘陵が数多く存在している。遺跡は、この低丘陵上の大部分が分布しており、現在、分布調査や発掘調査等によって確認された遺跡は12か所を数える。そのなかで発掘調査が実施され、概要の判明しているものは次のものである。小林A地点遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の時期の遺跡で、住居跡17軒等のほか溝に囲まれた土壇墓1墓が検出されている。小林B地点遺跡は、弥生時代後期中葉以降の遺跡であり、溝によって囲まれた土壇墓6基の他、住居跡2軒等を検出している。住吉遺跡は、縄文時代早期の遺物を中心とした包含層の中に弥生時代前期及び後期の土器を含む遺跡であり、和田1号遺跡については、弥生時代前期及び後期の住居跡はもとより、古墳時代全期間を通しての住居跡が検出された長期間にわたる複合遺跡である。下沖5号遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての集落跡であり、住居跡18軒、掘立柱建物跡6棟等を検出している。下沖3号遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての集落跡であり、住居跡4軒等を検出している。その他、高井遺跡については、性格は明確にしがたいが、水田の中から縄文時代や古墳時代の遺物とともに、弥生時代前期の土器や石包丁等の出土が伝えられている。

以上のように、石内川・八幡川合流地点付近東岸に連なる低丘陵上及びその周辺には、弥生時代前期の遺跡や市内初検出の古墳時代の集落跡をはじめとして遺跡の分布密度が極めて高く、市域でも有数の遺跡密集地域の一つとなっている。また、石内川を挟んだ対岸においても、山陽自動車道建設等に係る発掘調査において遺跡が発見されている。浄安寺遺跡は、弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落跡であり、住居跡1軒土壇3基等を検出している。笹利迫田遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の土器を多量に出土した遺跡で、住居跡1軒土壇2基等が検出された。以上のように、石内内西岸においても比較的大規模な集落と小規模な集落の2種類の集落が、狭い谷地形によりながら互いに関係しあって存在している様子が看取される。特に、太田川流域の集落跡と比較して、大規模な集落跡の占める割合が高く、遺跡、遺構の分布密度も高いと言えよう。ただ、流域の別を問わず集落跡のいずれもが、古墳時代初頭を境として丘陵上から姿を消している点では共通している。

古墳時代になると、丘陵上から集落は発見されなくなる。市内唯一の古墳時代集落跡である和田1号遺跡の例によれば、集落はその立地を変え、沖積地周辺の丘陵縁辺部や微高地へと移動していったものと推定できる。丘陵上には、集落に変わって古墳が築造されるようになる。古墳については、概要の明確なものは乏しく、須恵器、鉄刀、金環

などの出土が報告されている高井古墳（消滅）や、7世紀中頃の横穴式石室を内部主体とする倉重古墳（消滅）、鉄刀、鉄鏃、玉類など多数の副葬品を出土した三宅古墳（消滅）、4基以上の横穴式石室からなる栄草原古墳群（未調査）等が知られているが、いずれも調査例が古く、また、大部分工事中の発見であるため、概要が明確にしがたい。近年の発掘調査によって概要の把握しうる古墳には、和田古墳と月見城古墳群がある。和田古墳は、城ノ下古墳群の北500mの微高地上に位置し、6世紀後半から7世紀前半の時期のもので、後世の攪乱および破壊により遺物の残存状態は極めて悪いとはいえ、須恵器の他、馬具一式、刀装具、石突、鉄鏃等の多様な鉄器を出土している。月見城古墳群は、5世紀後半を中心とした11基の古墳から構成されており、5世紀代のものの中に農工具等の鉄器数点や須恵器などが周溝内へ供献されているものもあるが、主体部内から出土したものとしては、鉄器1点程度や副葬品を全く持たないものが大部分を占める。なお、鏡片を副葬している古墳や古式土師器等の出土もあることから、中には築造時期が古墳時代初頭にさかのぼるものもあると考えられる。また、平成2年度に調査を実施した倉重向山古墳は、石内川・八幡川合流地点周辺の沖積平野を挟んだ対岸の丘陵上に位置しており、トレンチ調査のため概要は把握しがたいが、全長38m、後円部の径19m、前方部の幅15mの規模を有する前方後円墳で、幅2.3m長さは推定7m程度の粘土槨を主体部に持ち、当地域で最大規模の古墳と考えられる。時期は4世紀末から5世紀前半と考えられるが、墳裾に貼石状の列石が巡っており、古式の古墳の様相を呈している。なお、同一丘陵上には、他の古墳の存在を予想させる高まりを確認しており、当丘陵の先端部に位置する池田城跡の調査に際しても、第一槨から古墳の主体部と考えられる二重土壙を検出していることから、古墳群を形成しているものと考えられ、その概要の解明が待たれる。

一方、広島湾頭全域に目をやれば、前半期の古墳の集中する地域として、旧祇園町周辺から安川流域、旧高陽町口田地区、旧矢野町周辺等が上げられる。これらの地区では、口田の中小田第1号古墳に代表されるように4世紀代から古墳の築造が開始され、質量共に5世紀後半にその中心があるようである。特に、5世紀中葉から後半の時期のそれぞれの地域の代表的な古墳がある三王原古墳、中小田第2号古墳、西尾古墳は、短甲をはじめとする鉄製の武器や馬具などの豊富な鉄製品を出土した古墳として著名であり、古墳の規模及び形状が直径15m～20m程度の円墳である点でも共通している。一方で、安芸国最大の前方後円墳である三ツ城古墳が西条盆地において築造されたのがこれと同一時期であり、前述した4基の古墳がそれぞれの地域を代表する内容を有しているだけに注目すべき事象と言えよう。その場合、墳丘の規模等はでははるかに及ばないそれらの古墳が、三ツ城古墳にはない特殊な副葬品である短甲をはじめとして内容的に遜色ない副葬品を出土しており、安芸国造の墓とも言われる三ツ城古墳との関係について再考を要するであろう。

注（1） 広島市編『新修広島市史』第1集総説編1970

（2） 広島市教育委員会『小林A・B地点遺跡発掘調査報告』1990

（3） 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988

- (4) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅲ)』1986
- (5) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告書』1985
- (6) 注2に同じ。
- (7) 注3に同じ。
- (8) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
- (9) (財)広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告書』1991

Ⅲ 遺構と遺物

城の下A地点遺跡からは、住居跡20軒、掘立柱建物跡2棟、住居跡状遺構6か所、テラス遺構2か所、土壙（貯蔵穴）9基、古墳10基、土壙墓1基、貝塚1か所を検出した。また、建物としては、弥生時代のものとして、弥生土器、鉄器（鉞、鉄鏃等）、鉄鏃等があり、古墳時代のものとしては、土師器、須恵器、鉄器（短甲、鉄剣、鉄鏃、鉄製農工具等）、金銅製品、玉類等が出土している。

遺跡は、西方向に派生する丘陵尾根が標高95mあたりからおよそ長さ100mにわたって緩傾斜になる部分に形成されており、ほぼ中央部分の鞍部を境として西と東に分けられる。丘陵上平坦面の広さは、西側において北と南西の二方向に尾根が派生しているために広がっている。古墳は、尾根の広さや景観等に配慮してか、鞍部を含めた西半分にすべて築造されていると言えよう。弥生時代後期の集落跡については、遺跡全域に分布しているが、西側については古墳によってその大半が削平を受けており、住居跡埋没後の平坦面を利用して古墳が築造されているためか、古墳の丘陵と住居跡の重複しているものが全古墳中の6割を占め、その他の古墳についても住居跡の痕跡を思わせる柱穴等が墳丘内から多く検出されている。

1. 弥生時代後期集落跡

(1) 調査の概要

本遺跡の所在する丘陵の標高は80m前後、付近の水田からの比高は約40mである。

遺構は細長い尾根上に立地し、その配置から東側、中央部、西側住居跡群の3群に分けられる。東側住居跡群は東側の平坦面を取り巻くように配置された住居群で、第1号～第9号住居跡、第1号住居跡状遺構、第2号住居跡状遺構及びテラス状遺構から構成される住居跡群である。中央部住居跡群は尾根上の鞍部を中心につくられた第10号～第19号住居跡及び第1号掘立柱建物跡からなる住居跡群であり、それより西側の遺構を西側住居跡群とする。特に西側住居跡群の位置する尾根は古墳による削平を受けているため、地形及び集落の構成の全貌は不明瞭である。なお、遺構・遺物に関する詳しい計測値については文末に示している。

(2) 遺 構

a. 東側住居跡群

第1号住居跡状遺構（第14図）

本遺跡最高所の尾根線を南にはずれた斜面に位置する遺構である。地山を掘込んだ、①幅45cm、長さ280cm、②幅30cm、長さ120cm、③幅150cm、長さ300cmの3段の平坦面を検出した。特に、最下段の平坦面については現存する壁のほぼ全体にわたって溝が巡っている。平坦面及び周辺からの柱穴と考えられるピット15個を検出したが、平坦面との関係は明確にしがたい。ただ、検出された壁及び柱穴等の組み合わせからは上屋構造は想定しがたく、ここでは一応住居跡状遺構としておく。

本住居跡状遺構平坦面状からは土器が出土しており、細片のため図示し得なかったが

形態の特徴から本遺構の時期は上深川Ⅱ式ⅠP時期に属すると考えられる。

第1号住居跡（第4図）

壁は東側及び北側が完存しており、南側の壁及び西側の壁のほとんど、床の一部を斜面により流出している。本住居跡床面からは、柱穴と思われるピット10個が検出された。住居跡に伴う柱穴の組み合わせとしては、P1-P2、P3-P4の2本柱の組み合わせやP1-P2-P7及びその位置関係から流出した斜面にP7に対応する柱穴の存在を想定するなら、4本柱の組み合わせも考えられよう。しかし、残存する壁から推定されるプランに対して4本柱の柱穴位置が東側に偏ること、通常の住居跡と比較して、壁と柱穴の間が離れすぎていることから、本住居跡は2本柱の住居跡が妥当であると考えられ、プランは長方形のプランが想定できる。また、先述したように2本柱の組み合わせが2通り考えられることから、少なくとも1回以上の建て替えがあったものと考えられる。

本住居跡床面からは弥生土器（1）が出土し、埋土中からは鉄鏝（74）が出土した。本住居跡の時期は、出土した土器の形態から上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第2号住居跡（第5図）

斜面に立地しているため、南側の床、壁の一部は流出している。現存する床面から柱穴と思われるピット2個を検出した。現存する壁及び柱穴から4本柱の方形のプランを想定することもできるが、斜面とはいえP1、P2に対応する位置からピットが検出されていないこと、及び北側の壁と柱穴が離れていることから、本住居跡を4本柱の住居跡と考えるのは困難であり、本住居跡は2本柱の長方形プランを持つ住居跡と考えられる。

また、本住居跡の北側の壁に沿って幅30～40cmの帯状の段を約3mにわたって検出した。土層観察から住居跡に伴う何らかの施設と考えられる。

本住居跡の床面上からほぼ完形の土器4個体（2、3、4、5）が出土しており、本住居跡の時期は出土した土器の特徴から上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第3号・第4号住居跡（第6図）

お互いに重複する住居跡である。床面の高い方から第3号・第4号住居跡と呼称する。第3号住居跡と第4号住居跡の床面のレベル差は60cmである。

第3号住居跡は第4号住居跡との重複のため遺構の大部分は消失している。第3号住居跡の現存する床面から柱穴と考えられるピットが5個検出された。これらは、底面レベルにばらつきがあるものの、壁に並行に配置されていること及び直径がほぼ同じことなどから、第3号住居跡に伴う柱穴と考えられる。これらの柱穴の配置から、本住居跡は8本柱の住居跡を想定し得ようが、P5、P6、P8に対応する柱穴については、第4号住居跡と重複する範囲に位置しているために確認し得なかった。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、時期は不明である。

第4号住居跡は、先述した第3号住居跡と互いに重複する住居跡である。掘り方内部及び床面周辺から多量の炭化材を検出したことから、焼失住居と考えられる。床面からはほぼ1列に並んだ柱穴と考えられる4個のピットが検出された。P2、P3の中からは炭化材が検出されたが、P1、P4からは炭化材は検出されなかった。このことから、本住居跡は焼失時にはP2、P3を支柱穴としていたと考えられ、その場合、P1、P

4を支柱とする組み合わせも考えられることから、1回以上の建て替えが行われた可能性が高いと考えられる。床面中央に楕円形の平面プランを持った深さ約10.6cmの掘り込みを検出し、位置関係と形状から本住居跡に伴う炉跡と考えられる。

本住居跡床面から弥生土器(6)及び鉞(73)を出土した。この土器(6)は、出土例の希な形態のもので、当地域での編年的位置づけは明確にしがたい。しかし、これに伴って出土した鉞と同形態のものは他の遺跡では上深川Ⅲ式(古段階)の土器と共伴していることから、本住居跡出土の土器についても上深川Ⅲ式(古段階)の時期まで下がる可能性が考えられる。

第3号住居跡との新旧関係は不明である。

第2号住居跡状遺構(第11図)

第3号住居跡の北側1.2mのところから検出した遺構である。斜面を50cm程度掘り込んで平坦面をつくり出しており、斜面のため西側の壁の大部分は流失している。一辺が340cm程度の隅丸方形の平面プランを呈するが、壁溝、柱穴が確認されず、壁も不明瞭なため通常の竪穴式住居の想定が難しく、住居跡状遺構としておく。

本遺構床面から弥生土器(7)が出土しており、本住居跡状遺構の時期は、出土した土器の特徴から上深川Ⅲ式(古段階)の時期と考えられる。

第5号住居跡(第7図)

第6号住居跡と切り合い関係を持ち、ほぼ円形の平面プランを呈する住居跡である。

床面から柱穴と考えられるピットが4個検出された。壁とピットの位置関係から本住居跡はこれらを支柱穴とする4本柱の住居跡であると考えられる。南側では斜面のために、床と壁の一部が流失している。床面中央から深さ約14cmの不整形の掘り込みを検出した。位置、形状から炉跡と考えられる。壁溝内から小ピットが多数検出された。

また、住居跡プラン南端に沿って約10個の小石が積まれているのが検出された。小石のレベルは想定されるプラン内側で住居跡の床面レベルとほぼ同じであり、プラン外側で若干高くなっている。このことから、小石は本住居跡に伴う遺物としては土器(8)が出土しており、形態から本住居跡の時期は、上深川Ⅱ式の時期の属すると考えられる。

第6号住居跡及び第1号土壇(第8図)

第5号住居跡と一部切り合い関係を有する住居跡である。斜面の立地のため南側の壁と床の一部は流失している。推定されるプランは隅丸方形である。床面から柱穴と考えられるピットを4個検出した。本住居跡は、壁と柱穴の位置関係から、これらを支柱穴とした4本柱の住居跡と考えられる。床面中央から不整形の掘り込みを検出した。掘り込みの深さは約12cmを測り、周囲から焼土を検出したことから炉跡と考えられる。

本住居跡北西コーナーからほぼ方形のプランを持つ第1号土壇を検出した。

第1号土壇は、平面プランはほぼ方形を呈し、規模は南北190cm、東西130cmを測る。土壇の底面と第6号住居跡の床面とのレベル差は45cmを測り、断面形はやや袋状を呈することから貯蔵穴と考えられる。本土壇の北側と西側の壁は第6号住居跡の壁に沿って掘り込まれており、住居跡の北西コーナーを意識して造られていることが想定されることから、第6号住居跡に伴うものと考えられる。

なお、本住居跡の北側の壁に沿って地山を掘り込んだ幅30cmの帯状の段を約5mに渡って検出した。住居跡の壁に沿って造られていることから、本住居跡に伴う何らか

の施設であると考えられる。

本住居跡床面からは上深川Ⅱ式に属すると考えられる土器が出土しており、本住居跡の時期は上深川Ⅱ式の時期と考えられる。また、埋土中からは小片のため図示しえなかったが、多数の鉄片が出土している。

第7号・第8号住居跡及び第1号テラス状遺構（第9・10図）

平坦面の南側斜面に重複する形で検出された住居跡及びテラス状遺構である。6段の平坦面が検出され、各平坦面のレベルは東側から西側へ低くなる傾向を示している。各平坦面のレベル差は10cm前後である。このうち、西側の2段については、規模、形状が通常の竪穴式住居跡とほぼ同じであることから、住居跡とし、他のものは、建物の想定が困難であるため、テラス状遺構とした。なお、住居跡については東側から第7号・第8号住居跡とし、テラス状遺構については西側から（Ⅰ）、（Ⅱ）、（Ⅲ）、（Ⅳ）とする。

第7号住居跡は斜面のため、南側の約2分の1を流失しているが、残存する壁から、隅円方形のプランが推定できる。残存する壁には壁溝が巡っているが、炉跡は検出されなかった。

第8号住居跡は第7号住居跡の西に近接して検出された。斜面のため南側約2分の1を流失しているが、残存する壁から隅円方形のプランを推定できる。壁溝及び炉跡は検出されなかった。

第7号・第8号住居跡内から検出された柱穴と住居跡との関係は明確にし得なかった。

第1号テラス状遺構は第6号住居跡の南西約8mの所から等高線に沿って約20mにわたって検出された。4段になっていると考えられる。斜面のため遺構の東側及び南側は流失し、西側では第8号住居跡と重複しているため全貌は明らかではないが、一番西側の段（Ⅰ）の壁が現存する端で曲がり始めていることから、この段の長さは約8mと考えられ、他の段についても同様の規模、形状と考えられる。壁溝は（Ⅰ）については西端から約5mにわたって検出され、幅5～10cm、深さ8～10cmを計測し、（Ⅱ）、（Ⅲ）、（Ⅳ）については、壁溝は検出し得なかった。壁高は最高所で（Ⅰ）が33cm、（Ⅱ）が27cm、（Ⅲ）が47cm、（Ⅳ）が33cmを計測する。また、西側の段の北側に地山を掘り込んだ東西約290cm、南北約50cmの段を検出し、同様の遺構の存在の可能性も考えられる。

本遺構群及び周辺から柱穴と考えられるピットが24個検出されたが、テラス状遺構との関係は不明である。しかし、これらの柱穴のうちテラス状遺構の壁に沿って検出されたものについては一部を除き西から東へと底面レベルが高くなっていく傾向が認められる。これは、テラス状遺構の床面レベルが西から東へと高くなるのに合わせていると考えられ、地形に沿って柱の上端が直線状に並ぶように工夫されていることが予想されるため、テラス状遺構に何らかの屋根施設があった可能性が考えられる。

本遺構群の時期は、遺構全体にわたって埋土中から上深川Ⅱ式の土器が多数出土しており周辺からも上深川Ⅱ式以外の土器は出土していないことから、上深川Ⅱ式の時期と考えられる。また、テラス状遺構埋土中からは鉄鏃（75）が出土している。

住居跡とテラス状遺構との新旧関係、及びテラス状遺構の各段の新旧関係は不明である。

第9号住居跡（第13図）

西側の壁は斜面のため流失している。床面から柱穴と思われるピット4個が検出され、壁との位置関係から本住居跡は、これらを支柱穴とする4本柱の住居跡と考えられる。

東側の壁の上部に壁に沿って、幅35～40cm、長さ350cmの帯状の段と多数の小ピットが検出され、土層観察から本住居跡に伴う何らかの施設と考えられる。

これと同様のものは、第2号、第6号住居跡からも検出されているが、特に、第9号住居跡では段の上に小ピットが検出されていることから、垂木をふきおろすために造られた平坦面と考えられる。これらの段に共通している点は、壁の中で最も高くなる斜面側に造られており、帯状の施設の床面からの高さ50～70cm前後であることがあげられる。この高さは、削平を受けていないと考えられる住居跡の壁高とほぼ共通しており、竪穴式住居を新築する場合、上屋構造の関係からか、住居跡の壁の高さについて何らかの制約があったと考えられる。すなわち、これらの段は、斜面などに住居跡を造る際に壁の高さを50～70cm前後に揃えるために造られた施設であると考えられる。

なお、本住居のほぼ中央に古墳時代の墓壙と考えられる土壙1基が検出された。

本住居跡の床面から完形の弥生土器(11)が出土しており、本住居跡の時期は、出土した土器の特徴から上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

b. 中央部住居跡群

第10号・第11号・第12号住居跡(第15図)

お互いに隣接、又は切り合い関係を有し、西側部分を第4号古墳の周溝によって削られている住居跡群である。各住居跡の床面レベルの差は10cm前後である。北側から床面の高い順に第10号・第11号・第12号住居跡と呼称する。本住居跡群及び周辺から柱穴と考えられるピット13個を検出したが、第11号住居跡に伴うと考えられるP17、P19を除いては、住居跡との関係、組み合わせは明らかではなく、本住居跡以外にも幾つかの同様な住居跡があった可能性が考えられる。

第10号住居跡は西南部分約3分の1の床と壁を第4号古墳東側周溝によって削られている。残存する北側の壁の西端及び東側の南端で壁が曲がり始めていることから壁がそれ以上西又は南へのびるとは想定しがたく、横長の隅丸方形のプランを想定できる。残存する床面から炉跡は検出されなかった。

第11号住居跡は第12号住居跡及び第4号古墳により削平されているために、床の大部分と古墳周溝の西側の壁は消失している。東側に残存する壁はその両端で曲がり始めており、このことから本住居跡は1辺約300cmの方形のプランを持つものと考えられる。

第12号住居跡は第4号古墳周溝及び第4号古墳により削平によって削られている。また、周溝の西側、古墳墳丘下の整地面上から長さ110cm、幅3～5cm、深さ2～3cmの溝を検出しており、東側に残存する壁溝との位置関係及びレベルから第12号住居跡に伴うものと考えられる。残存する壁及び溝から本住居跡のプランは方形が想定される。炉跡については想定される位置である中央部分が古墳の溝によって削られているため確認しえなかった。

第10号、第11号住居跡の埋土中及び周辺から上深川Ⅱ式に属すると考えられる土器が出土している。周辺から上深川Ⅱ式以外の土器が出土していないことから第10号、

第11号住居跡の時期も上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第12号住居跡からは時期決定可能な遺物は出土しておらず時期は不明である。

第10号・第11号・第12号住居跡群相互の新旧関係は不明である。

第13号・第14号住居跡（第17・18図）

互いに重複した住居跡であり、両住居跡の床面のレベル差は11cmを測る。東側より床面の高い方から第13号・第14号住居跡と呼称する。両床面からは、柱穴と考えられるピット24個を検出した。

第13号住居跡の平面プランは残存する壁から円形が想定される。本住居跡の西側約2分の1は第14号住居跡によって削られており、北側の一部は斜面のため流失している。第13号住居跡の床面からは柱穴と考えられるピットが3個検出された。さらに想定される住居跡のプランとの位置関係より、第14号住居跡から検出されたP4、P7、P19も第13号住居跡の主柱穴の一部と考えられ、その場合、第13号住居跡は7本柱の住居跡と考えられる。ただ、今回検出された柱穴は6個であり残りの1個については想定する位置の床面が斜面のため消失しており、確認しえなかった。

想定されるプランの床面中央に深さ約29.5cmを測る不整形の掘り込みが検出され、位置から第13号住居跡に伴う炉跡と考えられる。

本住居跡床面から弥生土器（12、13）が出土しており、それぞれ上深川Ⅰ式（12）及び上深川Ⅱ式（13）に属すると考えられる。上深川Ⅰ式に属する土器と上深川Ⅱ式に属する土器が同時に出土していることから、本住居跡は上深川Ⅱ式の時期でも比較的早い時期に使わなくなったものと考えられる。また、その場合、本住居跡が造られた時期が上深川Ⅰ式の時期に遡る可能性も考えられよう。

第14号住居跡は楕円形の平面プランを呈しており、床面から柱穴と考えられるピット16個を検出した。平面プランに対応する柱穴の組み合わせとしては、A) P5-P6-P10-P12-P14-P17の6本柱の組み合わせが考えられる。さらに、柱穴の位置関係、底面レベルからB) P7-P11-P13-P19、C) P6-P9-P12-P14-P18の組み合わせが考えられ、2回以上の建て替えがあったものと考えられる。土層観察によれば残存する平面プラン及びAの組み合わせが最後の住居跡に伴うものと考えられる。B、Cの組み合わせについては、壁との位置関係がいびつであり、小さな住居からの拡張があった可能性が考えられる。さらに、住居跡西側の床面からも深さ約24.5cmの不整形の掘り込みを検出した。この掘り込みについても周囲から焼土を検出したことから炉跡の可能性があるが、プランに対して西に偏った位置にあることから疑問が残る。

本住居跡埋土中から上深川Ⅱ式に属する土器が出土し、周辺からも上深川Ⅱ式に属する土器以外は出土していないことから、本住居跡の時期も上深川Ⅱ式の時期と考えることができよう。

第13号住居跡と第14号住居跡の新旧関係は、土層観察から第13号住居跡が第14号住居跡に先行するものと考えられる。その場合、第13号住居跡のP17及びP19がBの組み合わせの柱穴に共用されていることから、まず、第13号住居跡が造られ、それに引き続いてBの組み合わせに伴う住居が造られ、続いてC、Aの順で建て替えられたものと考えられる。このことは、第14号住居跡の所で述べた前後関係とも一致す

る。

第15号住居跡及び第3号住居跡状遺構（第22図）

第15号住居跡は第3号住居跡状遺構とお互いに切り合い関係を有する住居跡である。

第15号住居跡の床面から柱穴と考えられるピット4個を検出した。残存する壁との位置関係から本住居跡はこれらを支柱穴とする4本柱の住居跡と考えられる。また、南側の壁の東端で北側へ、西側の壁の北端で東側へ曲がり始めていることと、柱穴と壁の位置関係から隅丸方形の平面プランを想定できる。

床面から炉跡その他の施設は確認されなかった。

本住居跡床面からは弥生土器（14）が出土しており、形態の特徴から小林B地点遺跡出土の高坏（上深川Ⅱ式）と倉重向山遺跡出土の高坏（上深川Ⅱ式）の中間の形態であると考えられることから、この土器も上深川Ⅱ式に属するものと考えられる。したがって、本住居跡の時期は上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第3号住居跡状遺構は第15号住居跡の北側に地山を掘り込んで平坦面をつくり出している。現存する平坦面は東西200cm、南北80cmであり、溝は壁の東側70cmに渡って検出された。残存する壁からプランは隅丸方形を想定できるが、遺構の残存状態が悪く住居跡を想定することに無理があるため住居跡状遺構としておく。

平坦面上からは土器（15）が出土しており、本遺構の時期は出土した土器の特徴から上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第15号住居跡と第3号住居跡状遺構との新旧関係は不明である。

第15号住居跡及び第3号住居跡状遺構と第13号・第14号住居跡との新旧関係であるが、出土した時期の特徴から第13号住居跡と第15号住居跡の同時存在及び第15号住居跡の先行は考えがたく、位置関係から第14号住居跡と第15号住居跡の同時存在は不可能であるため、第13号—第14号—第15号住居跡の順に造られたものと考えられる。また、第3号住居跡状遺構との関係については、位置関係及び土器の形態の特徴から第13号住居跡より後出のものではあるが、第14号・第15号住居跡との前後関係は明確にしがたい。

第16号・第17号・第18号・第19号住居跡、及び第3号・第4号土壇（第19・20図）

第1号古墳墳丘から検出された重複した住居跡群である。北西から第16号・第17号・第18号・第19号住居跡と呼称する。第16号住居跡の大部分及び他の住居跡の東側の大部分は第1号古墳築造時に削られたものと考えられる。

第16号住居跡の床面及び壁の南東側の大部分は第1号古墳の造成時に削平されており、東側部分については第17号住居跡との重複のため消失している。壁及び壁溝を北西側で約240cmに渡って検出した。残存する床面及び床面と考えられる範囲から、本住居跡に伴う柱穴と考えられるピット3個（P1, P2, P3）を検出したが、遺構の大部分が他の遺構と重複しているため全貌は明らかにし得なかった。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり住居跡の時期は不明である。

第16号住居跡の南東側から第17号住居跡が検出された。第16号住居跡との床面レベル差は約58cmである。想定される平面プランは円形であるが、第1号古墳によって壁の東半分を削られ、さらに、第18号・第19号住居跡との重複により床面の約3

分の2を消失している。

残存する床面から柱穴と考えられる3個のピットを検出した。壁との位置関係、底面レベルから、P4、P5、P6は本住居跡の支柱穴の一部と考えられる。また、想定されるプランとの位置関係及び底面レベルから後述する第18号・第19号住居跡の床面から検出されたP22、P17、P12が本住居跡の支柱穴と考えられ、この場合、第17号住居跡はP4-P5-P6-P22-P17-P13-P19-P21の6本柱の住居跡と考えられる。

本住居跡に伴う遺物は皆無であり住居跡の時期は不明である。

第18号住居跡の壁及び床の東側部分は第1号古墳によって削平されている。残存する壁から、本住居跡の平面プランは円形と考えられる。第17号住居跡との床面レベル差は約25cmである。第18号住居跡の想定される平面プラン内からは、多量の炭化材を検出しており、焼失住居であると考えられる。炭化材は住居跡の中央部を中心として放射状に検出されたが、住居跡の西側部分を除いて全体に残りが悪く、上屋構造を推定するには至らなかった。

住居跡の床面と考えられる範囲から柱穴と考えるピットを17個検出した。このうち、炭化材が検出されたのは、P9、P14、P18、P23であり、壁との位置関係からこれらが本住居跡の支柱穴と考えられ本住居跡は焼失時4本柱であったと考えられる。なお、プランとの位置関係、底面レベルからP7-P11-P13-P19-P21の5本柱の組み合わせも考えられることから、1回以上の建て替えがあった可能性が高い。

また、住居跡床面からは、第3号・第4号土壙が検出された。

第3号土壙及び第4号土壙は第18号住居跡の西側及び南側の壁に沿うように配置されており、両方とも本住居跡に伴うものと考えられた。第3号土壙は隅丸方形の平面プランを有し、規模は検出面で南北150cm、東西95cm、底面で南北135cm、東西で85cmであり、断面形はやや袋状を呈し、本土壙の底面と第18号住居跡の床面とのレベル差は40cmを測る。

第4号土壙は隅丸方形の平面プランをもち、規模は検出面で東西150cm、南北100cm、底面で東西135cm、南北で75cmであり、断面形はやや袋状を呈し、本土壙の底面と第17号住居跡の床面とのレベル差は40cmである。

両土壙は規模、形状から貯蔵穴と考えられる。第4号土壙については、内部から炭化材が流入した状態で検出されたことから、焼失した際に使用されていたと考えられる。なお、第3号土壙については、炭化材が検出されておらず、第18号住居跡が焼失した時には使用されていなかったものと考えられる。その場合、第3号土壙については焼失時の4本柱の住居跡に先行する5本柱の住居跡に伴うものとも考えられることもできようが、他に証拠もなく明確にしがたい。

本住居跡床面より6個体の弥生土器(16, 17, 18, 19, 20, 21)が出土し、形態から本住居跡の時期は上深川Ⅱ式の時期に属すると考えられる。また、炭化材直上からは鉄鏃(76)が、埋土中からは鏝(77)及び不明鉄器(78)が出土している。

なお、第18号住居跡の東側で住居跡の壁溝と考えられる若干湾曲する溝を約360cmにわたって検出した。このことから第18号住居跡の東側に住居跡があったものと

考えられ、これを第19号住居跡とする。溝の残存状況から先行する住居跡の床面はほとんど削平を受けておらず、第18号・第19号住居跡の床面のレベル差は殆ど無いと考えられる。このことから、第19号住居跡の床面を利用して第18号住居跡の床面を造っている可能性が高いと考えられる。

また、東側の大部分については第1号古墳との重複のために消失している。残存する溝より東側の平坦部分からは柱穴と考えられるピット9個を検出した。本住居跡に伴うと考えられる支柱穴の組み合わせは、壁溝との位置関係からP17とP22またはP19とP21の2本柱の住居跡の可能性が高いと考えられるが、遺構の残存状態が悪いため明確にはしがたい。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、本住居跡の時期は不明である。

第16号から第19号住居跡の新旧関係については、次のとおりである。第16号住居跡と第17号住居跡との関係であるが、第16号住居跡は第1号古墳築造時の削平を大幅に受けているため明言はできないが、土層観察によると第16号の住居跡の床面は第17号住居跡状まで延びておらず、これは、第16号住居跡を掘り込んで第17号住居跡が造られていることを示唆しているといえよう。また、第17号住居跡の床面より高いレベルから第18号住居跡に伴うと考えられる炭化物の広がりを検出したことから、第17号住居跡が第18号住居跡に先行すると考えられる。また、第19号住居跡については壁溝の残存状態から、床面の削平が殆ど考えられず、このことから、第18号住居跡の造成時に第19号住居跡の床面が利用された可能性が高いと考えられる。以上のことを総合すると第16号ー第17号ー第19号ー第18号住居跡の順に使用されており、全体として4回以上の建て替えがあったと考えられる。本住居跡群の時期については最期の第18号住居跡から上深川Ⅱ式の土器が出土しており、周辺から上深川Ⅰ式の土器は出土していないことから、全体として上深川Ⅱ式の時期であると考えられよう。

第1号掘立柱建物跡（第21図）

第10号～第12号住居群の西に隣接し第4号古墳に重複した状態で検出された1間×1間の建物跡である。棟方向はN79°E、柱間は桁行220cm、梁行200cm、柱穴の直径は50cm前後である。現状において地山は、第4号古墳墳丘下約40cmのレベルで整地されており、第4号古墳による削平が行われている可能性が高いが、隣接する第10号～第12号住居跡の壁溝の残存状況から大きな削平は受けていないと考えられる。

本建物跡は第4号古墳による削平を受けているため、本建物跡に伴う壁、壁溝、床、炉跡等の施設の有無は明確にし得ないが、柱穴間距離は本遺跡の中規模の住居跡とほぼ同じであり、竪穴式住居跡となる可能性もある。しかし、柱穴の直径が同規模の柱穴間距離を持つ竪穴式住居跡のものと比較してかなり大きいことから、本住居跡は高床式の建物跡を想定することが妥当であると考えられる。

本遺構に伴う遺物は皆無であり時期は不明である。

第2号土壇（第12図）

第12号住居跡から南へ約80cmのところに位置している。平面プランは楕円形を呈し、規模は底面で南北175cm、東西170cmであり、深さは最深部北側で73.5cmである。断面形はやや袋状を呈す。形状規模等から貯蔵穴と考えられる。

本土壙底面から土器（22, 23）を出土し、この形状から本土壙の時期は上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

c. 西側住居跡群

第20号住居跡（第23図）

第2号古墳の平坦面上から検出された住居跡である。住居跡の西側3分の2の壁及び壁溝は斜面のため流失している。また、住居跡全体に古墳、及び後世の削平を受けており、現存する壁は最高所で15cmを測るのみである。

床面からは柱穴と考えられるピット4個を検出した。残存する壁との位置関係、底面レベル等から、本住居跡はこれらを主柱穴とする4本柱の住居跡であると考えられる。通常炉跡が配置される住居跡中央部を第2号古墳主体部により掘り込まれているためか、炉跡は確認されなかった。

本住居跡埋土中及び周辺から出土した土器はいずれも上深川Ⅱ式に属しており、本住居跡の時期も上深川Ⅱ式の時期となる可能性が高いと考えられる。

第21号住居跡（第24図）

第5号古墳中から検出した住居跡である。北側約2分の1は斜面及び古墳との重複のため壁及び溝の大部分を流失しているが、320cmにわたって溝が検出されている。残存する壁及び壁溝から本住居跡の平面プランは隅丸の台形を想定できる。床面からは柱穴と考えられるピットを10個検出した。壁との位置関係、底面レベルから本住居跡はP1-P2-P10-P7を主柱穴とする4本柱の構造が考えられる。さらに、柱穴相互の位置関係、底面レベルからP4-P5-P9-P6の柱穴の組み合わせも考えることができ、ある時期に南側へ拡張が行われた可能性が考えられる。床面中央からは、ほぼ楕円形の平面プランを持つ掘り込みが2か所検出された。北側の掘り込みは、深さ12.5cmであり、内部から炭化材を検出したこと、柱穴との位置関係等から、拡張前すなわちP4-P5-P9-P6の柱穴組み合わせ時の住居跡に伴う炉跡と考えられる。南側の掘り込みは深さ13.7cmであるが、東側を古墳主体部によって削られており全容は明確ではない。先述した柱穴との位置関係から拡張後の住居跡にともなう炉跡と考えられる。

本住居跡床面から弥生土器（24, 25）を出土し、埋土中から青銅器（銅鏃）を出土した。出土した土器の形態から本住居跡の時期は上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第22号住居跡、第4号住居跡状遺構（第25・26図）

第21号住居跡から北西へ約9m程度下ったところで傾斜が緩やかになり、その西側から第22号住居跡、北側から第4号住居跡状遺構が検出された。

第22号住居跡の西側は斜面のため流失している。残存する壁から方形の住居跡を想定できる。遺構の範囲からピット3個を検出したがいずれも本住居跡に伴う主柱穴と考えることは難しく、本住居跡は無柱の住居跡の可能性が考えられる。

なお、本住居跡の床面西側からは南北約400cmにわたって住居跡の壁溝と考えられる溝が確認されたことから建て替えのあった可能性が考えられる。

本住居跡床面からは土器（26, 27）を出土した。本住居跡の時期は出土した土器の形態から上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第4号住居跡状遺構は、現状では斜面を60cm程度掘り込んで幅2m長さ3mの平坦面としているが、壁溝及び柱穴を検出されず、壁も不明瞭なため建物の想定が難しく、住居跡状遺構とする。

本遺構床面から弥生土器(28, 29)が出土し、土器の携帯の特徴から上深川Ⅱ式に属する時期と考えられる。

第23号住居跡及び第8号土壙(第27・34図)

第23号住居跡は、第6号古墳中から検出された住居跡である。中央部より西側を第2号及び第6号古墳によって削られている。現存する東側の壁から想定されるプランは円形である。本住居跡の床面と思われる範囲から柱穴とする4本柱の住居跡の組み合わせが考えられる。また、第8号土壙の存在によって確認されなかった。ただ、南東側主体部の南東側隅の住居跡床面上から焼土を検出したため、焼土の付近に炉跡があった可能性が高いと考えられる。

第23号住居跡床面上から第8号土壙を検出した。底面円形のプランを持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面の壁に沿って溝が全周しており、溝の幅は5cm~18cm、深さ3cm~4cmを計測する。深さは、住居跡床面から95cmあって住居跡による削平は考えにくく、また、住居跡の壁に沿うように配置されていることから本土壙は第20号住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる。

第23号じゅうきょあと床面から弥生土器(30)が出土しており、本土壙埋土中からも上深川Ⅱ式の土器片が多数出土していることから、本住居跡の時期は上深川Ⅱ式の時期と考えられる。

第5号住居跡状遺構(第28図)

第23号住居跡の南西約12mの尾根線上で第3号古墳の裾と第7号古墳の溝が交差する所に位置する遺構である。現状では斜面を40cm程度掘り込んで平坦面をつくり出している。本遺構は第3号及び第7号古墳によって削られており、遺構全体に残りが悪く住居跡と断定しがたいため住居跡状遺構とする。現状では、壁は長さ約1mしか残っていないが、残存する壁には全体に渡って溝が巡っている。遺構の範囲と思われる範囲からは柱穴と考えられるピット2個を検出したが、全体に遺構の残りが悪いため前述した壁との関係は明らかにしえなかった。

本遺構に伴うと考えられる遺物は皆無であり、時期は不明である。

第2号テラス状遺構(第30図)

第5号住居跡状遺構から西へ約13mの尾根線上に位置する遺構である。長さ約430cm、幅が約150cmの平坦面及び壁が検出され、壁高は最高所で35.9cmを測る。溝及び柱穴は確認されなかった。

埋土中からは上深川Ⅱ式に属すると考えられる土器が多量に出土した他、本遺構に伴う遺物は皆無であり、その時期は不明である。

第5号・第6号・第7号土壙(第31・32・33図)

第21号住居跡の北東約1mの斜面から第5号土壙、西側に隣接して第6号土壙、南西約60cmの斜面から第7号土壙を検出した。

第5号土壙は、平面プランは楕円形を呈す。規模は底面で南北175cm、東西150cmであり、深さは最深部南側で63cmを測る。断面形は袋状である。底面からは壁に沿って浅い

溝を検出した。形状、規模から貯蔵穴と考えられる。

本土壙内からは弥生土器（34, 35, 36, 37, 38, 39）が出土している。これらは土器の間に殆ど土を挟まず、重なりあった状態であったことから、土壙が2分の1程度埋没した後一括投棄されたものと考えられる。これらの土器は形態から上深川Ⅱ式に属すると考えられる。

第6号土壙は、底面プランは円形で直径115cm、深さは最深部東側で70cmである。断面形は一部袋状を呈しており、形状、規模から貯蔵穴と考えられる。

第7号土壙は、底面プランは楕円形を呈す。規模は北東-南西方向165cm、北西-南東方向160cm、深さは最深部東側で105cmである。断面形は袋状を呈しており、形状、規模から貯蔵穴と考えられる。

時期については、第6号及び第7号土壙からは時期の判定可能な遺物は出土していないが、第5号・第6号・第7号土壙は、第21号住居跡を取り巻く形で分布しており、第21号住居跡以外にこれらの土壙を伴うと考えられる住居跡が見られないことから、第21号住居跡にともなう貯蔵穴と考えられよう。

第9号土壙（第35図）

第8号古墳墳丘中から検出した土壙である。底面プランは円形を呈す。規模は直径125cmである。断面形は袋状であり、深さは現状で90cmであるが、第8号古墳築造時に削平を受けた可能性も考えられる。底面には壁に沿って溝が全周しており、溝は幅5cm～15cm、深さ6.6cm～8.5cmである。形状から貯蔵穴と考えられる。本土壙からは時期の判定可能な遺物は出土しておらず時期は不明である。

d. その他の遺構

貝塚

貝塚は東側住居跡群の中心となる東側平坦面北側斜面から検出された。検出範囲は、斜面落ち際から約2m下がった地点より長さ約4m、幅は最大で5mあり、貝層の厚さは最大30cmである。カキ殻を主体としており、その他に二枚貝や巻き貝も認められた。

貝塚からは、多数の土器片が出土しており、大半は上深川Ⅱ式（40, 41, 42, 44）に属すると考えられるが、それらに伴って、弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期と考えられる土器（43）が出土している。この他に西側住居跡群西側斜面からも小規模な貝溜まりが確認されている。

(3) 出土遺物

本遺跡からは多量の土器片及び鉄器、青銅器が出土した。土器の器種については高坏、器台、壺形、甕形、鉢形土器が確認された。以下、各遺物について述べる。なお、個々の土器の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

a. 弥生土器（第56図～64図）

本遺構から出土した土器は、口縁部が外反し、端部は平たくおさめているものが大半を占めており、これらの土器は、形態的特徴から上深川Ⅱ式に属するものと考えられる。

特に、第2号住居跡、第18号住居跡、第5号土壙からは一括遺物が出土した。これらは、今後の土器編年において貴重な資料になるといえよう。

この他に上深川Ⅰ式及び上深川Ⅲ式（古段階）に属すると考えられる土器が若干出土している。

出土した土器のうち上深川Ⅱ式のものについては、完形品が特に多く、その形態からa) 肩部付近に刺突文があり、胴部外面のヘラ削りの痕跡を中位以下に残すもの(26, 56, 57), b) (16)に代表される刺突文はみられるものの、胴部外面のヘラ削りの痕跡が3分の1以下に下がるもの及び、c) 肩部に刺突文がみられず胴部外面にヘラ削りの痕跡が確認し得ないもの(46, 48, 50, 52, 53)の3つに分けられる。このうち、肩部に刺突文のあるもの(a, b)は、胴部最大径が肩部付近にあるのに対して、刺突文のみられないもの(c)は胴部最大径が中位付近に下がる丸胴化の傾向を示している。

出土量についてみると、a)は極めて少なく、c)も少量であり、b)が大半を占めている。また、出土位置についてみるとa, bは中央住居跡群より西側に多くみられ、cは東側住居跡群にみられるという傾向を示している。

刺突文を有するものの形態は典型的な上深川Ⅱ式の特徴を示しており、刺突文が無く胴部が丸胴化するものは上深川Ⅲ式(古段階)に類似した形態的特徴を持つことから、上深川Ⅱ式の時期にもすでに上深川Ⅲ式(古段階)の形態的特徴を持つものが出現しはじめることがうかがえる。

以上のことから、本遺跡から出土した上深川Ⅱ式の土器は比較的古い形態と上深川Ⅲ式(古段階)の要素をもつ新しい形態のものに分けることができるといえよう。

b. 鉄器

鉞(第67図73)第4号住居跡床面から出土したものである。全長132mm, 刃部長22mm, 茎部長110mmを測る。刃部は関でゆるやかに屈曲している。刃部は鎖形をしており、最大幅13mm, 厚さ2mmを測る。断面形は三日月形を呈し、わずかな裏すきを有し、刃部先端から10mmあたりまで不明瞭ではあるが鉞がみられる。茎裏部には関から9mmあたりから63mmの範囲に木質が残存し、表には関から25mmと60mmのところに約15mmの幅で糸等の繊維の跡が残っている。このことから、裏に木柄をあて糸などで巻き締めて装着していたと考えられよう。なお、この鉞は古墳時代前葉の頃のものに類似した特徴を持ち、同様の特徴を持つ鉞が下沖5号遺跡では上深川Ⅲ式(古段階)の土器と共伴して出土している。

鉄鏃(第67図74, 75, 76)74は第1号住居跡埋土中から出土したものである。全長30mm, 最大幅12mm, 厚さ2mmの無茎三角式鉄鏃であり、腸挟をもつ。

76は第18号住居跡より炭化材とともに出土したものである。無茎三角式鉄鏃で、全長40mm, 最大幅32mm, 厚さ2mmを計測し、腸挟をもつ。なお、刃部先端に近い位置で円孔の痕跡と考えられる部分が存在しており、円孔の開くタイプの鉄鏃と考えられる。

75は第1号テラス状遺構埋土中から出土した無茎三角式鉄鏃である。残存部の長さ25mm, 幅17mm, 厚さ2mmを計測する。

鑿(第67図77)第18号住居跡埋土中から出土したものである。残存長43mm, 幅11mm, 厚さ7mmで、刃部は先端に近づくとつれてやや幅広になり、断面はわずかに片刃状を呈している。形態から突き鑿と思われる。

不明鉄製品(第67図78)第18号住居跡埋土中から出土したものである。現存する部分については長さ16mm, 直径9mmの円錐形を呈し、先がやや湾曲している。裾の部分の左右対象の位置に穿孔が施されている。本遺跡からは、同様あるいは、類似の形態を持つものが他に3点出土しているが、いずれも用途は不明である。

c. 銅鏃（第67図79）第21号住居跡埋土中から出土した。全長29mm，最大幅7mm，厚さ4mmである。両面に鏃を有しており，茎尻まで途切れることなく続いている。茎の先端をたがね様のもので断ち切った後，磨いた痕跡が認められることから，湯口は茎側にあったものと考えられる。全体に湯まわりが悪く，刃部先端を中心に研ぎ出すことによって，形を整え，鏃を付けている。他の部分は鋳あがり面をそのまま残しており，全体に鋭さに欠けることから，非実用品と考えられる。

注) (1) 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良事業地内遺跡群発掘調査報告』1988

古瀬清秀「古墳出土の鉞の形態的変遷とその役割」『考古論集』1977

(2) 年代的位置づけについては，上深川Ⅰ式を弥生時代後期前葉，上深川Ⅱ式を弥生時代後期中葉～後葉に，上深川Ⅲ式（古段階）を弥生時代後期終末～古墳時代初頭として整理し，以下すべてこれに準拠した。

広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良事業地内遺跡群発掘調査報告』1988

広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988

(3) 大村 直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻3号

広島市内弥生時代青銅器出土地

遺跡名	住所	出土青銅器	出土遺構等
城ノ下A地点遺跡	佐伯区口和田	銅鏃	第21号住居跡埋土中
浄安寺遺跡	佐伯区石内	銅鏃	SB8床面上
長う子遺跡	安佐南区紙園	銅鏃	第6号住居跡内土器群中
西山貝塚	東区戸坂南	銅鏃・巴形銅器	貝塚
池の内遺跡	安佐南区山本	銅鏡	調査区内埋土中
真亀C地点遺跡	安佐北区口田	銅鏡	第3号住居跡埋土中

城ノ下 A 地点遺跡出土弥生土器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
1	第1号住居跡	甕形土器	口径14.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は凹面を呈している。	外面 口縁部ハケ目、以下横ナデ。胴部横ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部ハケ目、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 軟 口縁部、胴部の一部の外面にスス附着。
2	第2号住居跡内	甕形土器	口径12.5 器高14.4 底径3.0 胴部最大径12.7	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ。胴上部2分の1横ナデ、以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ。胴上部2分の1ヘラ削り、以下ハケ目。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟調 全体にスス附着。
3	第2号住居跡内	壺形土器	口径7.8 器高28.2 底径2.5 胴部最大径20.0	ほぼ真直ぐに立ち上がる頸部から外反する口縁端部に外湾ぎみに内傾する立ち上がり部を持つ複合口縁である。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、下部3分の1ヘラ磨き。頸部上部2分の1ハケ目、一部に指頭痕あり、以下ヘラ磨き。胴上部ヘラ磨き。中部ハケ目後ヘラ磨き。以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。頸部から胴上部までハケ目後ナデ、以下ヘラ削り。底部は未調整。頸部最下部に6条の沈線 肩部に一段の施紋帯を貼りつけている。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 良好 胴下部3分の2スス附着。内面上半に炭化物附着。
4	第2号住居跡内	壺形土器	口径11.7 器高28.5 底径3.5 胴部最大径19.7	やや外湾ぎみに立ち上がる頸部からゆるやかに外反する口縁端部に内傾する立ち上がり部を持つ複合口縁である。端部は平たくおさめている。底部はやや凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。胴部ヘラ削り、下部3分の1ヘラ削り後ナデ。 肩部に1段の波状紋を施す。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
5	第2号住居跡内	甕形土器	口径11.6 器高36.1 底径5.0 胴部最大径27.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は若干器厚を減じつつ凹面を呈している。底部はやや丸みを帯びている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴部ナデ。 内面 口縁部ハケ目、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好 口縁部、胴部外面及び、胴下半部にスス附着。
6	第4号住居跡内	壺形土器	口径14.3 器高27.4 底径5.8 胴部最大径21.2	ほぼ真直ぐに立ち上がる頸部から外反し、端部は丸くおさめる口縁部である。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ。頸部上部2分の1ハケ目、以下横ナデ。肩部横ナデ。胴上部2分の1磨き、以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内面 口縁部から頸部にかけてヘラ磨き。肩部ナデ、以下不明。 頸部最下部に7条の沈線、肩部に1段7条の波状紋を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
7	第2号住居跡状遺構	鉢形土器	口径18.3	口縁部は外反し、端部は器厚を減じつつ平たくおさめている。	内、外面とも口縁部横ナデ、以下不明。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 やや軟 口縁部内面、胴部内、外面にスス附着。
8	第5号住居跡内	甕形土器		口縁部はゆるく外反し、端部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。胴部ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
10	第1号テラス状遺構	鉢形土器	口径14.2 器高6.8 底径4.0	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、以下ナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
11	第9号住居跡内	鉢形土器	口径11.2 器高7.7 底径3.5	口縁部はやや外反し端部は僅かに丸くおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや良 底部に黒斑がみられる。
12	第13号住居跡内	壺形土器	口径13.8	口縁部はゆるく外反し、端部は指でつまむことによって若干肥厚させており、4条の凹線を施している。	外面 口縁部横ナデ。頸部はハケ目後ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ナデ。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 軟
13	第13号住居跡内	鉢形土器	口径19.8 器高19.6 底径7.3 胴部最大径22.5	口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部は平たくおさめている。底部は指頭により粘土をはりつけ台としている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目後ナデ。胴上部貝殻腹縁による調整後ナデ下部ヘラ削り。台は指頭により接合。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。順下半部ヘラ削り後ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
14	第15号住居跡内	高杯		ゆるやかに開く坏底部である。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ナデ。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 良好 胴部に黒斑が見られる。
15	第3号住居跡状遺構	甕形土器	口径14.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は指でつまむことによって若干肥厚させている	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ハケ目後ナデ、以下ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良好 胴部に黒斑が見られる。
16	第18号住居跡内	甕形土器	口径20.1 器高28.9 底径3.7 胴部最大径23.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は器厚を減じつつ2条の凹線を施す。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目、屈曲点付近ナデ。胴部ヘラ削り。底部未調整。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや良 外面順下部3分の2にスス付着。
17	第18号住居跡内	鉢形土器	口径11.5 器高9.3 底径5.7	口縁部はゆるく外反し、端部は若干丸くおさめている。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下縦ナデ。底部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 良好
18	第18号住居跡内	鉢形土器	口径12.8 器高9.4 底径4.1	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ、一部にハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡黄褐色 外面 赤褐色 内面 赤褐色 胎土 密 焼成 良好 黒斑あり。
19	第18号住居跡内	鉢形土器	口径21.5 器高18.5 底径7.2	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ。胴上部3分の1ハケ目。中部貝殻による調整後ハケ目、以下ヘラ削り後貝殻による調整後ナデ。底部ナデ。 内面 口縁部貝殻腹縁による調整後はけ目屈曲点付近ナデ。順上半部ヘラ削り以下不明。肩部に貝殻による刺突紋を施す	色調 淡黄褐色 外面 赤褐色 内面 赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや良

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
21	第18号住居跡内	甕形土器	口径15.9 器高23.8 底径4.5 胴部最大径18.3	口縁部は外反し、端部に1条の凹線を施す。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。胴下部にヘラ削り痕あり。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ。胴上部3分の2ヘラ削り、以下ナデ。 口縁直下にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
22	第2号土壙内	鉢形土器	口径14.0 器高13.4 底径4.3	口縁部は緩く外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ。胴最上部ナデ、一部に指頭痕が見られる。屈中部ヘラ磨き以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。 肩部に貝殻腹縁による刺突紋を施している。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
23	第2号土壙内	不明	底径5.8	鉢等の底部である。	内、外面とも調整不明	色調 明赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
24	第21号住居跡内	不明	底径5.1 胴部最大径16.4	平底の底部を持つ。	外面 ヘラ削り。後ナデ。 内面 上部約6分の1横ナデ以下、ヘラ磨き。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや良
25	第21号住居跡内	甕形土器	口径13.2 胴部最大径13.3	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 暗黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 胴部の一部に黒斑がみられる。
26	第22号住居跡内	鉢形土器	口径17.2 器高12.9 底径6.9 胴部最大径16.5	口縁部は外湾し端部は平たくおさめている。底部は凹面を呈している。	外面 口縁部横ナデ。胴上半部ヘラ磨き以下不明。内面 口縁部横ナデ。胴上部3分の1ヘラ削り、以下ナデ。肩部にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 淡赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好 底部赤変。口縁部までスス付着。
27	第22号住居跡内	不明		口縁部ハ外反し、端部に2条の凹線を施している。	外面 口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
28	第4号住居跡状遺構	不明		平底の底部を持つ。	摩滅が著しく調整不明。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好
29	第4号住居跡状遺構	不明		口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。	外面 胴部ハケ目後ナデ又は磨き。 内面 胴部ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 暗褐色 胎土 やや粗 焼成 良好
30	第23号住居跡内	不明		口縁部はゆるく外反し、端部は凹面を呈する。	外面 横ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良好
31	第2号テラス状遺構	壺形土器	口径11.7 器高24.9 底径3.4 胴部最大径17.4	口縁部はほぼ真直ぐに立ち上がる。端部がゆるやかに外反し、丸くおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴部ハケ目、最下部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴部ヘラ削り。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
33	第2号テラス状遺構	鉢形土器	口径7.1 器高7.8 底径1.5	手づくね土器である	外面 上部3分の1横ナデ、一部ハケ目後ナデ。底部ナデ。 内面 上半部横ナデ後ヘラ磨き、以下指頭圧痕。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良好
34	第5号土壙内	甕形土器	口径16.8 器高20.9 底径5.2 胴部最大径18.4	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ。胸上部3分の2ハケ目後ヘラ磨き、以下不明。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや良 口縁部の一部、胴中央部にスス附着。底部周辺赤変。
35	第5号土壙内	甕形土器	口径17.7 器高20.9 底径5.0 胴部最大径16.2	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は指でつまむことにより若干肥厚させている。底部はやや丸みを帯びている。	外面 口縁部横ナデ、以下条痕後ヘラ磨き底部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡暗黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや不良
36	第5号土壙内	甕形土器	口径17.4 胴部最大径20.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、肩部ナデ、以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟 外面全体にスス附着。
37	第5号土壙内	甕形土器	口径17.0 器高24.8 底径5.5 胴部最大径19.5	口縁部はゆるく外反し、端部は凹面を呈している。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ。胴上部から中部ハケ目後ヘラ磨き、以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ磨き。胴部ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや良
38	第5号土壙内	甕形土器	口径10.3 器高12.4 底径3.0 胴部最大径11.0	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目後ナデ。順下部3分の1ヘラ削り痕あり。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施す。	色調 淡黄褐色胎土 密焼成良好口縁部、胴部5分の1以上にスス附着。底部赤変。
39	第5号土壙内	甕形土器	口径17.0 器高48.7 底径7.8 胴部最大径32.7	口縁部はゆるく外反し、端部はやや凹面を呈している。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ。頸部ナデ。胴上半部ハケ目後ナデ。胴下半部2分の1ハケ目後ナデまたはヘラ磨き、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。頸部ナデ、指頭痕あり。肩部ナデ。胴上半部ヘラ削り、以下不明。 肩部にヘラ状工具による刺突紋を施している。	色調 淡黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
40	貝塚	鉢形土器	口径6.4 器高4.5 底径1.5	手づくね土器である	内、外面とも指頭圧痕。	色調 暗褐色 胎土 密 焼成 やや軟
41	貝塚	高坏	口径23.9	口縁部は外傾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめている。	外面 ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、一部ハケ目。坏部ハケ目後ヘラ磨き。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 やや軟

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
43	貝塚	不明		口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目以下ヘラ削り。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 良好
44	貝塚	高坏	口径25.4 器高22.9 底径14.5	口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり端部は丸くおさめている。脚部はゆるやかに開き、端部は丸くおさめている。脚部には2段5か所に互い違いに円孔が穿たれている。	外面 口縁部横ナデ後ヘラ磨き以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。坏部ヘラ磨き。脚下半部ハケ目後ナデ。	色調 明茶褐色 坏内面 黒色 胎土密 焼成 良好
45	第5号住居跡南側土器溜まり	甕形土器	口径14.1 器高16.3 底径3.2 胴部最大径15.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は若干凹面を呈している。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ。胴上部3分の1ハケ目以下ハケ目後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。 肩部にヘラ状工具による刺突文を施している。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 口縁部から胴上部4分の3までスス付着。
46	第5号住居跡南側土器溜まり	壺形土器	口径12.2 器高20.7 底径3.0 胴部最大径15.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴上部3分の2ハケ目、以下ハケ目後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好 胴下半部にスス付着。
47	第5号住居跡南側斜面	鉢形土器	口径12.2 器高9.0 底径6.21 胴部最大径13.4	口縁部はやや内湾ぎみにほぼ真直ぐに立ち上がり、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴上半部ハケ目以下ヘラ削り後ハケ目。 内面 口縁部ヘラ削り、以下不明。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 底部に黒斑がみられる。
48	第1号テラス状遺構東側土器溜まり	甕形土器	口径8.8 器高12.0 底径3.2 胴部最大径10.9	口縁部はゆるく外反し、端部は若干丸くおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ。肩部ハケ目、以下ハケ目後ナデ又はヘラ磨き。底部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
49	第1号テラス状遺構東側土器溜まり	甕形土器	口径17.8 器高29.0 底径5.1 胴部最大径21.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ。胴上部3分の2ハケ目後ヘラ磨き、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや良 外面口縁部から底部までスス付着。
50	第9号住居跡北側土器溜まり	鉢形土器	口径17.7 器高11.7 底径5.4 胴部最大径15.3	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ。胴上半部ヘラ削り以下ナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
51	第9号住居跡東側土器溜まり	壺形土器	口径18.8 器高34.9 底径6.7 胴部最大径24.5	外方にひらく頸部から外反する口縁端部に外湾ぎみに内傾する立ち上がり部を持つ複合口縁である。底部は粘土をはりつけ若干凹面を呈する。	外面 口縁部ハケ目。頸部ハケ目後ヘラ磨き。肩部ハケ目。胴部ハケ目後ヘラ磨き。底部周辺ハケ目。 内面 口縁部立ち上がり部横ナデ、以下ヘラ磨き。頸部から肩部ナデ以下ヘラ削り。底部未調整。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好
52	第9号住居跡北東側土器溜まり	甕形土器	口径18.2 器高29.7 底径5.1 胴部最大径20.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ、胴上部3分の1ハケ目。中部調整不明、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや良 口縁部にスス付着。底部赤変。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
55	第9号住居跡北側斜面土器溜まり	甕形土器	口径17.7 器高31.2 底径5.8 胴部最大径25.8	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は凹面を呈している。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目以下ヘラ削り。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 良好
56	第13号住居跡埋土中	甕形土器	口径10.4 器高18.5 底径3.7 胴部最大径12.9	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ後ヘラ磨き以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。坏部ヘラ磨き。脚下半部ハケ目後ナデ。	色調 明茶褐色 坏内面 黒色 胎土 密 焼成 良好
57	第15号住居跡、第3号住居跡状遺構北側	甕形土器	口径17.0 器高20.1 底径3.2 胴部最大径17.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は指でつまむことにより若干肥厚させており、凹面を呈している。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ。胴上部3分の1ハケ目以下ハケ目後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ。屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。肩部にヘラ状工具による刺突文を施している。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 口縁部から胴上部4分の3までスス附着。
58	第21号住居跡北西斜面	鉢形土器	口径10.4 器高9.5 底径4.7 胴部最大径10.7	口縁部はゆるく外反し端部は平たくおさめている。底部は凹面を呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴上部3分の2ハケ目、以下ハケ目後ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好 胴下半部にスス附着。
59	第4号住居跡状遺構西側斜面	鉢形土器(台付)	口径11.6 器高10.7 底径6.2 胴部最大径12.4	口縁部はほぼ真直ぐに立ち上がり、端部は丸くおさめている。底部は凹面を呈している。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。胴上半部ハケ目以下ヘラ削り後ハケ目。 内面 口縁部ヘラ削り、以下不明。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 底部に黒斑がみられる。
60	第1号古墳北側斜面	鉢形土器	口径5.3 器高4.0 底径2.0	手づくね土器である。	外面 口縁部横ナデ。肩部ハケ目、以下ハケ目後ナデ又はヘラ磨き。底部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
61	第1号古墳南側斜面土器溜まり	鉢形土器	口径11.4 器高12.4 底径3.6 胴部最大径11.3	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。底部は平底である。	外面 口縁部横ナデ。胴上部3分の2ハケ目後ヘラ磨き、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点付近ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや良 外面口縁部から底部までスス附着。
62	第7号古墳西側土器溜まり	鉢形土器	口径3.2 器高3.4	手づくね土器である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ。胴上半部ヘラ削り以下ナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良好
63	第7号古墳西側土器溜まり	器台形土器	口径8.1 器高14.2 底径9.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部は平たくおさめている。脚部はゆるやかに開き、端部は丸くおさめている。	外面 口縁部ハケ目。頸部ハケ目後ヘラ磨き。肩部ハケ目。胴部ハケ目後ヘラ磨き。底部周辺ハケ目。 内面 口縁部立ち上がり部横ナデ、以下ヘラ磨き。頸部から肩部ナデ以下ヘラ削り。底部未調整。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良好
64	第7号古墳北側土器溜まり	甕形土器	口径10.4 器高15.6 胴部最大径12.1	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。底部はとがりぎみである。	外面 口縁部横ナデ、胴上部3分の1ハケ目。中部調整不明、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部横ナデ、屈曲点ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや良 口縁部にスス附着。底部赤変。

2. 城ノ下古墳群

(1) 古墳群の概要

古墳群は、前述した如く本遺跡の分布する尾根上の西半部分にのみ分布しており、最も標高の高い位置にあるのが第1号古墳、その後第2号古墳、第3号古墳の順となる。調査以前の地表観察によって、その存在を確認しえたのはこの3基のみであり、他の古墳については畑地として利用されていたためか、調査前の地形測量の際にもその痕跡をわずかな平坦地として確認し得るのみであった。特に、第6号古墳については、第2号古墳築造時にその大部分を削平されており、現状では第2号古墳と第3号古墳に挟まれた凹地として存在していた。

古墳は、互いに溝を接するように築造されており、その一部は重複している。また、第6号古墳は第2号古墳によって大部分を、第10号古墳においては第1号古墳によってわずかに溝を残すのみの姿になるまで削平されている。

(2) 第1号古墳

外観（第37・38図）

第1号古墳は、本遺跡の中央、古墳群中の最高所に位置しており、墳頂平坦面の標高は81.5mあたりにある。眼下には石内川流域の沖積地や石内川・八幡川の合流地点周辺の沖積平野はもとより、遠く広島湾をも遠望しうる絶景の地に位置しているといえよう。墳形は、地形に制約されているためか長円形を呈しており、規模は長径21m、短径14m、高さは鞍部側の東で3.3m、西で2.2mである。古墳の西側と東側から尾根を切断するようにめぐる周溝を確認しており、規模は東側で幅1.6m、長さ17m、深さ0.3m、西側で幅1.5m、長さ10.5m、深さ0.3mである。形状は、断面浅いU字形を呈していたようである。また、西及び東の墳丘斜面中位辺りから幅0.7m、長さ15m程度の平坦面の存在を確認しており、段築の可能性も考えられる。

墳丘は、西側裾から0.7m辺りまでの地山を平坦に成形し、その上に1.5mの盛土を施すことによって形成されている。特に、地山成形面から0.8mについてはマサ土と暗褐色土が互層を成す固くつき固められた層によって形成されており、それから上については主体部構築を考慮したためか比較的柔らかい土の層によって形成されていた。北及び南の墳丘斜面については、尾根両側の斜面がかなりの急斜面となっているために墳端及び段築の有無等については確認し得なかった。なお、本古墳築造時の地山成形の際に、周囲の地形と共に本古墳墳丘下から検出された第10号古墳も削平を受けたものと考えられる。

主体部（第40・41・42図）

主体部は、墳丘平坦面の中央やや西寄りに位置しており、主軸をN65°Eにとる。墓壙はほぼ長方形を呈しており、西側が若干外に膨らんでいる。構造は二重土壙で、一次壙の長さは中央で360cm、幅は194cmである。深さは現状で20～30cmである。そのほぼ中央部に二次壙が掘り込まれており、規模は上端で長さ295cm、幅は55cm、深さは東側で45cm、西側で35cmである。二次壙内からは、全面にわたって赤色顔料が検出された。その分布範囲は、長さ287cm、幅は東側で60cm、西側で47cm、厚さは東側で30cm、西側で10cmと、幅・厚みとも東側が優っている。赤色顔料の分布範囲は、量的に西側が少なくなっているとはいえほぼ二次壙の範囲に対応していることから、棺の範囲を示している板石が立っている。これは、二次壙との位置関係から木棺の小口部分を覆った石と考

えられる。本土壙に埋納されたと考えられる木棺の形状は、土層観察によると底部がU字形を呈しており、前述した小口石の形状が縦横ほぼ同じ規模をもっていることから、割竹形の木棺と考えられる。その場合、棺の規模は、長さ280cm、幅60cm、高さは棺蓋ともで60cmと推定される。

なお、推定される木棺の範囲外、前述した小口石と一次壙の間の埋土中からも多量の赤色顔料の分布を確認している。

遺物（第67図87～97、第68図、第69図）

主体部内から、玉類（管玉、ガラス小玉）、金銅製垂飾一対、鉄製武器及び農工具類が出土し、墳丘斜面及びその周辺からは、多量の須恵器片が出土している。主体部内の遺物については、出土位置及び出土レベルから木棺内及び木棺外に分けられると考えられる。

木棺外の遺物については、いずれも鉄製品であり、短甲1領、鉄鉾1本及び鉄鏃2群があげられる。短甲は、二次壙西側小口と一次壙西側小口に挟まれた部分に主軸に沿うようにして埋納されていたと考えられる。出土状態から判断して、前胴を下にして木棺の小口部分に後胴の押付板を接するようにして横たえられていたようである。鉄鉾については、一次壙底から28cm浮いた状態で刃部を東側に向け、木棺に沿うように出土した。鉄鏃は、東側の一群が刃部を西に向け4本以上、西側の一群が刃部を東に向けて26本以上、それぞれあたかも木棺に接するかのよう位置から出土している。

木棺内の遺物としては、玉類（管玉、ガラス小玉）、金銅製垂飾一対、鉄製武器及び農工具等があげられる。木棺との位置関係については、東側小口から50cmの位置で金銅製垂飾一対が、また110cm離れた中央部に管玉1個が、更にその位置から西半分には鉄製武器および農工具が出土している。鉄製武器については、何れも二次壙の南北両壁に沿うように出土しており、南側の壁については鉄刀2本が切っ先を合わせるように刃部を外に向け、互いに45cm程度重なった状態で出土している。北側の壁については鉄剣1及び鉄刀1が切っ先を合わせるように互いに40cm重なった状態で出土している。なお、鉄刀については、刃部を外に向けている。また、鉄鏃が南北それぞれ1群ずつ検出されており、北側のものについては鉄刀98の下から30本、南側のものについては鉄刀99の西側から23本が刃部を西側に向けて出土している。鉄製農工具については、刀子87が北壁寄り東側小口から120cmのところから、刀子88が鉄刀98と鉄鏃が重なった部分の上から、その他の物については東側小口から240cm、二次壙中央部南寄りから鉄斧2、鋤・鍬先1、刀子1、施1、その他不明鉄製品2が出土している。鉄製品全てに、木質の付着が観察されるため、柄及び鞘等が装着されていたことが推定される。これは、刀子を除くすべてがミニチュア製品と考えられる鉄製農工具についても全く同様である。また、遺物の出土レベルについてであるが、棺外遺物の内、鉄鏃及び短甲と鉄鉾の出土レベルにかなりの違いがあり、高い出土レベルを取る鉄鉾についても原位置を保っていると考えられる事から、前述した出土レベルの相違は葬送儀礼に於ける埋納段階の相違を表していると考えられる。棺内遺物の出土レベルについては、ほぼ東から西へ緩やかに傾斜しており、西の端が一番低くなっている。このような遺物の出土レベルの変化、及び遺物の出土状態、赤色顔料の分布状態等から推測して、頭位は東側にあったものと推測されよう。その場合、一対の金銅製垂飾は頭部周辺の両側に、管玉は胸辺りに装着された状態で埋葬されたものと考えられる。また、鉄製武器及び農工具については、位置関係から被葬者の下

半身の両側面及び足元に副葬されたものと考えられる。

a. 金銅製垂飾（第70図125～129）

被葬者に装着されたままの状態出土したものと考えられ、頭部の左右を同様のもの一対で飾っていたようである。現状では、遺存状態が悪くバラバラな状態で出土しているたると考えられる。その場合、赤色顔料は棺内に散布されたものと考えられる。また、一次壊上、二次壙西側小口部分に接するようにして、高さ55cm、幅60cm、厚さ10cm前後め、その全体像をつかみがたいが、個々の部品の観察結果を総合すれば、これは2～3cmの2個の垂飾をぶら下げた径0.3cm長さ16cm程度の細長い棒状の金銅製品とすることができよう。細長い棒状のものは、一方の端に小さな耳搔き状の突起がついており、その部分から1/4程度までが断面方形を呈し、以下断面が丸くなって次第に細くなっている。断面方形の部分については、それぞれの面に2個づつ、合計4個二対の穴が0.8cm前後の間隔をおいて交互に開けられている。先端から遠い側の一対の穴は用途不明である。先端に近い側の一対の穴については、径0.8mmという細い銅線2本を撚ったものが通されていたことが観察できる。残存状態から判断すれば、直径1cm前後の銅線の輪が2つ造られていたようである。垂飾は、左右2個づつ計4個出土した。いずれも径0.2mmの細い銅線を使用し、中を通した1本の銅線にコイル状に銅線を巻きつけたもので、先端に径0.5cmの丸いものを付けている。二次壙内の埋土を篩にかけた結果、径0.45cmのガラス小玉1個（131）を検出しており、4個出土した垂飾のうちの1個が先端に付けられた同形状の丸いものを欠いている（126）ことから、このガラス小玉は垂飾に付いていたものが抜け落ちたものようである。次に、棒状のものと垂飾との接合方法であるが、左右それぞれ径1～2mmの銅線を曲げて造った円環に垂飾を巻き付けたもの（128）や棒状のものから出た2本の銅線の輪の中に円環を通したもの（125）が出土しており、これらことから2個の垂飾を円環に巻き付け、それを棒状のものから出た2本の輪に通して連結していたことが推定できる。

この金銅製品の性格については明確にしえないが、出土状態から考えれば、被葬者の髪或いは耳等を飾る装飾品であったと考えられる。その場合、用途不明の一対の穴については、紐等をそこに通して髪或いは耳等に結び付けたものであろうか。

詳しい計測値は、以下の通りである。

〈南側〉棒状部（125）

長さ 16.7cm（現存長）、太さ 方形部分一辺2.5mm
円形部分直径3mm（最大）

垂飾部

（125）長さ 2.8cm（現存長）、太さ コイル部直径0.25cm
先端部直径0.45cm

（126）長さ 2.2cm（現存長）、太さ コイル部直径0.2cm
先端部（欠損）

〈北側〉棒状部（127）

長さ 14.5cm（現存長）、太さ 方形部分一辺0.3mm
円形部分直径0.3mm（最大）

垂飾部

（128）長さ 2.8cm（完存）、太さ コイル部直径0.25mm
先端部直径0.5mm

（129）長さ 3.3cm（現存長）、太さ コイル部直径0.25mm
先端部直径0.5mm

b. 鉄製武器類

短甲（第69図124）主体部棺外足位から出土したものである。

短甲の形式は、横矧板鉾留短甲である。前胴部分の残存状態は極めてよく、右前胴側が中央付近で折れてはいるもののほぼ完全に残っている。大きさは、前胴高35.0cm、正面幅35cm前後と考えられ、鉄板の厚さは平均2mm前後である。現在後胴部分については、押付板の一部が残存しているのみであり、左前胴の脇部分及び蝶番板部分で引き千切られた状態となっていることや、後胴の残欠と考えられる鉄片が墳頂平坦面表土から出土していることから、後胴部分は後世引き起こされて破壊されたものと考えられる。長側3段に2孔、右前胴長側3段に1孔が開けられている。なお、右前胴については腰結孔のある辺りで折れており明確にし得ないが、本来2孔あったものかもしれない。

覆輪は、鉄包覆輪である。本古墳出土のものの場合、一部剥落している部分もあるが、その痕跡等が残存しており、上縁、下縁及び脇部側縁の全てに施されていたものと考えられる。ただ、左前胴下縁については、その痕跡は残っているものの覆輪が全て剥落しており、右前胴側がその端部を引合板の一部を裏に折り込んで固定しているのに対して、この部分については覆輪が折り込まれていないことから、左前胴下縁引合板付近で部分的に覆輪が施されていなかった可能性も考えられる。

連接手法についてであるが、基本的に2枚留めを原則としている。特に3枚の鉄板の重なる押付板や引合板、蝶番板などの部分では、帯金を挟むような位置に鉾留めする事により3枚留めを避け、かつ地板と帯金を同時に固定する工夫が行われているようである。また、引合板の上下両端の処理については、引合板に小さな爪状の突起をつけ、それを裏に折り曲げてかしめ、裾板に接続している。その際、前述したように覆輪も一緒に固定しているようである。

なお、裏側の地板の成形を左右の前胴で比較すると、右前胴がより丁寧な成形されていることに注意を引かれる。これは、右前胴が装着時に開閉されるため、特に丁寧に仕上げられた結果と考えることもできよう。

鉄剣（第68図101）棺内北側から出土した完形品である。

刃部断面は偏平なレンズ状を呈し、明瞭な鎬は認められない。刃部には、使用時の刃こぼれと考えられる欠損部分が2か所存在している。また、関部手前1.2cmから3.4cm辺りにかけて、両側が3～4mm程度丸く窪んでおり、その中間辺りで錆も直線的に変化していることから、柄を装着するための切欠等と考えられる。関部は僅かに段をなして茎部につながる。茎部は、刃部幅2/3程度まで急速に細くなり、以下そのままの幅で茎尻に至る。茎尻は、直角に切られ、断面は長方形を呈する。目釘穴は2カ所有り径0.2cmである。刃部及び茎部に木質が付着していた。各部の計測値は次の通りである。

全長65.1cm <刃部>長さ52.3cm 幅3.6cm 厚さ0.5cm
<関部> 幅3.1cm 厚さ0.4cm
<茎部>長さ12.8cm 幅1.6cm 厚さ0.4cm（中央部）

鉄刀（第68図98・99・100）98は、木棺内北側西よりに鉄剣101の上に重なって出土したやや内反り気味の完形品である。棺内北側鉄鏃群の上から出土しているため、土圧によって若干曲がっている。刃部には使用時の刃こぼれと考えられる欠損部分が2か所観察される。関は直角に切られており、茎部は幅を少しづつせばめながら直角に切られた茎尻に至っている。茎部の断面は逆台形を呈し、径0.4cmの目釘穴が2か所開けられている。刃部、茎部ともに木質が付着している。各部の計測値は次の通りである。

全長91.6cm <刃部>長さ74.4cm 中央 幅2.7cm 厚さ0.4cm

関 幅3.1cm 厚さ0.6cm

〈莖部〉長さ17.2cm 中央 幅2.1cm 厚さ(棟側)0.7cm (刃側)0.3cm

関 幅2.6cm 厚さ(棟側)0.6cm (刃側)0.3cm

99は木棺内南側西寄りに鉄刀100の上に重なった状態で出土した完形品である。僅かに外反り気味であり、刃部に使用時の刃こぼれと考えられる欠損部分が3か所観察される。関部は直角に切られており、断面逆台形の莖部に続く。莖部には、関から1.5cmのところ幅0.5cmの方形の切欠がある。また、0.3cmの目釘穴が2か所開けられている。刃部、莖部ともに木質が付着している。各部の計測値は次の通りである。

全長92.4cm 〈刃部〉長さ75.1cm 中央幅2.8cm 厚さ0.6cm

関 幅2.8cm 厚さ0.7cm

〈莖部〉長さ17.3cm 中央 幅2.4cm 厚さ(棟側)0.6cm (刃側)0.2cm

関 幅2.4cm 厚さ(棟側)0.7cm (刃側)0.2cm

100は、木棺内南側東よりに鉄刀99の下になって出土した内反り気味の完形品である。刃部には使用時の刃こぼれと考えられる欠損部分が3か所観察される。関部は緩くカーブしており、莖部は次第に幅をせばめながら莖尻に至っている。莖部の断面は逆台形を呈し、径0.3cmの目釘穴が2か所開けられている。刃部、莖部ともに木質が付着している。各部の計測値は次の通りである。

全長81.7cm 〈刃部〉長さ66.5cm 中央 幅2.5cm 厚さ0.5cm

関 幅3.1cm 厚さ0.6cm

〈莖部〉長さ17.2cm 中央 幅2.0cm 厚さ(棟側)0.5cm (刃側)0.2cm

関 幅2.7cm 厚さ(棟側)0.6cm (刃側)0.2cm

鉄鉾 (第67図97) 棺外一次壙内から出土した完形品である。全長28.6cm、袋部長17.3cm、刃部長11.3cmを計る。刃部は関周辺で幅2.2cm、厚さ1.0cmで断面菱形を呈し、明瞭な鑄を中央部に持つ。関は緩く斜めに造られており、関を境として断面形が横長の長円形に変化する。鑄は関部においても途切れず、袋部まで続いている。鑄の長さは鋒から15.4cmである。袋部の断面形は、関周辺が長円で、端部へいくに従って正円へと変化している。袋部の幅は関周辺で1.7cm、端部で2.9cm、厚さは関周辺で1.1cm、端部で2.7cmである。袋部には径0.4cmの目釘が残存している。また、袋部の両外面に木質が付着していた。

鉄鏃 (第68図102～123) 棺の内外から合計83本以上が出土している。全体に保存状況は良く、莖部に矢柄の痕跡を残すものも多くあった。出土した鉄鏃は全て長頸鏃であり、形式としては鑿箭式と片刃箭式のものがある。

鉄鏃は4群に分けられて副葬されており、棺外東側の一群が片刃箭式のみであるのを除けば、他のものについては1～2本片刃箭式のものがまじっているものの、ほとんどが鑿箭式である。棺外東側が4本以上、棺外西側が26本以上、棺内南側が23本、棺内北側が30本を数える。詳しくは計測表の通りである。

c. 農工具類 (第67図87～96)

刀子を除くと他のものは全てミニチュア製品である。

刀子 (87・88・89) 3本出土している。87は、木棺内東寄りから出土したものである。現存長8.5cmで、鋒をわずかに欠いている。刃部長4.5cm、最大幅は関周辺にあり1.3cm、背の厚さは0.3cmである。関は刃側だけでなく棟側にも有り、双方直角に切られている。それに続く莖部は長さ3.9cm、最大幅は関部にあり幅0.9cm、厚さ0.2cmで莖尻に向かっ

て次第に細くなり、端部を三角に切り落としている。茎部から関部にかけて木質が付着しており、木柄が付いていたと考えられる。88は、木棺内北寄り鉄刀98上から出土したものである。外反り気味で現存長8.2cmで、茎尻を欠いている。刃部長6.1cm、刃部最大幅は関部にあって1.5cm、背の厚さは0.2cmである。関は刃側だけでなく棟側にも有り、双方直角に切られている。それに続く茎部は、現存長2.1cmで、茎尻を欠いている。茎部最大幅は関部にあり幅1.0cm、厚さ0.2cmで端部に向かって次第に細くなっているようである。

89は、木棺内西側足位から出土した一連のミニチュア農工具とともに出土したものである。出土状態からいえば、鉞(91)、鑿状鉄製品(92)、錐状鉄製品(93)とともに整然と並べられた状態で出土している。外反り気味の完形品であり、全長9.5cmである。刃部長は7.5cm、最大幅は鋒から1/3程度の場所にあり、幅・1.3cm、背の厚さは0.2cmである。関は斜めに切られており、長さ1.8cmという短い茎が付く。茎部の幅は0.7cm、厚さは0.2cmである。関部から茎部にかけて木質が付着しており、木柄が付いていたと考えられる。

鉄鎌(90) 西側足位中央、整然と並べられた工具類の上から出土したミニチュア製品である。現存長7.9cmで、折り返し部分を大部分欠失している。刃部は緩やかに湾曲しており、幅は中央で1.6cm、背の厚さは0.2cmである。立ち上がりはほとんど欠失しているため規模等は明確にし得ないが、折り返しは直角に行われているようである。折り返し部分には、木質が付着しており、木柄が装着されていたことが推定しえた。

鉞(91) 西側足位中央、刀子89等と共に整然と並べられた状態で出土した工具類の一つで、ミニチュア製品である。現存長11.1cm、刃部長1.9cm、茎部現存長9.2cmを計り、茎尻を欠損していると考えられる。刃部は、関で直線的に屈曲しており、饅形をしている。刃部最大幅は1.0cm、厚さは0.1cmで、断面三日月形を呈し、わずかに裏すきを有している。茎部は若干狭くなっており、幅0.7cm、厚さは中央が最も厚く0.3cmである。茎部裏には、関から2.3cmのところから木質が付着しており、表には繊維を巻き絞めた痕跡も確認できるため、木柄が装着されていたことが推定される。

鑿状鉄製品(92) 西側足位中央、刀子89等と共に整然と並べられた状態で出土した工具類と共に出土したものの一つである。全長6.0cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、断面長方形の鉄製の棒の一方を斜めに切取り、他方に柄を付けるようにした用途不明の鉄製品である。工具類のミニチュア製品と共に出土しており、この鉄製品も一方に木質が付着していることから、木柄を装着して使用するような工具類のミニチュア製品と考えられる。形状から推測すれば、鑿である可能性が考えられる。

錐状鉄製品(93) 西側足位中央、刀子89等と共に整然と並べられた状態で出土した工具類と共に出土したものの一つである。全長4.0cm、幅0.3cm、厚さ0.2cm、断面長方形の鉄製の棒の一方を1.1cmの長さで四角錐状に尖らした鉄製品である。もう一方の端には木質が明瞭に付着しており、木柄に差し込んでいたと思われる。この鉄製品も、前述した92と同様に木柄を装着して使用するような工具類のミニチュア製品と考えられ、その場合形状から推測すれば錐である可能性が最も高いと考えられる。

鋤(鋤)先(94) 西側足位南寄り鉄刀99の上から出土したミニチュア製品である。全長3.6cm、刃部幅5.4cm、折り返し部の幅5.0cm、厚さは最大で0.2cmである。刃部端から

1cm辺りで折り返されており、折り返しの幅は双方共1.3cm前後である。折り返し内側に木質が付着しており、木柄が付けられていたものと考えられる。

鉄斧(95・96) 鉄斧は、木棺内西側足位から、それぞれ北と南に寄った位置からの1個ずつ、合計2個が出土している。両方とも、ミニチュア製品ではあるが、袋部内部に木質が付着していたことから、木柄が付けられていたことが推定される。95は南側から出土したもので、全長4.2cmである。刃部の幅が3.0cm、袋部の幅が1.4cmで、刃部両端から2cm辺りのところで明瞭な肩が付く。袋部断面は内法で1.0cm×0.9cmの円形を呈している。

96は北側から出土したもので全長4.9cm、刃部両端と折り返しの一方を一部欠いている。刃部の幅は推定で2.3cm、袋部の幅が1.3cmであり、袋部断面は内法で1.2cm×0.9cmの長円形を呈している。

d. 玉類(第70図130・131)

管玉(130) 金銅製垂飾から50cm西に寄った地点の中央から出土したものである。淡い緑色の石材で造られており、外形0.4cm、長さ2cmで、穿孔は2方向から行われている。なお、出土状態から判断すれば被葬者に装着した状態で埋納されていたとは言え1点のみの出土であり、その使用方法に疑問が残る。

ガラス小玉(131) 1点のみの出土である。主体部掘り方の埋土を篩にかけた結果検出したため出土地点は明確にしがたい。ただ、前述した如く、垂飾に付けられていたものが剥落したものと考えられる。外径0.4cm、孔径0.1cm、厚さ0.3cmで、半透明な濃青色を呈している。

e. 須恵器(第66図71・72)

破片から見れば、2点以上供献されていたと考えられる。何れも外面平行タタキ、内面スリケシが施されており、断面は暗紫色を呈している。口縁部の出土しているのは2点のみであり、何れも口縁端部が若干拡張を始める傾向がうかがわれる。全体に古式の様相を示している。詳しくは土器観察表に示した。

小桔

第1号古墳は、本吉墳群中最大の規模を誇り、出土遺物においても他の古墳の追隨を全く許さない程の豊富さを有しており注目される。墳形は長円形で、主体部は割竹形木棺を直葬したのと考えられる。副葬品としては、装飾品(金銅製垂飾、管玉)、鉄製農工具、鉄製武器類の3種類に分けられよう。装飾品については、被葬者に装着した状態で出土しており、他のものについてはいずれも供えられたものであろう。鉄製農工具については、刀子を除き全てがミニチュア製品と考えられるが、全て木質の付着を観察しており、実用品と同様の柄が付けられていたことが推定される。一方、鉄製武器類については、鉄鏃や鉄鉾などいずれも柄や矢柄が付けられており、鉄刀・鉄剣についても柄や鞘の装着はもとより、刃部に刃こぼれと考えられる欠損部分を全て持つ等、極めて実戦的なものが副葬されていることが予想され、本古墳の被葬者の性格を考える上で重要な手掛かりとなるであろう。また、金銅製垂飾や方形一鉞の蝶番金具を持つ短甲など全国的にも稀な遺物を出土しており、その入手経路が注目される。本古墳の時期については、主体部から出土した鉄器の特徴や墳丘から出土した須恵器等から、5世紀中葉かそれをわずかに下る時期と考えられる。

(3) 第2号古墳

外観 (第44図)

調査前から墳丘の存在が確認しえた3基の古墳の1基である。しかし、現状では畑として利用されていたためか、墳形等の確認は困難であり、わずかな高まりとしてその存在を認識しえたのみである。位置は、第1号古墳の西に隣接しており、墳頂平坦面の標高は80・5mである。墳形は、南北方向にやや長い方形を呈しているが、若干歪んでいる。本古墳は、墳裾の一部について西側で第5号古墳と、南西側で第6号古墳と切り合い関係を有しているため規模等について明確にしえないが、現状では南北方向が一辺11.5m程度、東西方向が13m程度と推定される。高さは、東側で0.8mで、他の側もおおむね同じ数字を示していると推定される。ただ、主体部である石棺の蓋が現地表から20cm程度と極めて浅く、他の部分でも20～30cm程度と全体に浅かったため、墳頂平坦面は、耕作時に削平を受けているものと考えられ、築造時にはさらに高かったものと考えられる。周溝は尾根を切断する形で東側のみ確認されており、現状では幅3.5m、長さ10m、深さ20cmであるが、東側立ち上がり部分の上端辺りで隣接する第1号古墳の周溝と一部切り合っている。西側の周溝については、第6号古墳及び第3号古墳東側周溝と重複しているため明確にしえなかったが、土層観察によれば第6号古墳上に本古墳築造時の削平の痕跡がうかがえることから、周溝の存在していた可能性も考慮しておく必要がある。また、土層観察によると明確な盛土の存在は確認できなかったことから、墳丘のほとんどは地山削り出しによって形成されていたものと考えられる。その他の外表施設については確認し得なかった。なお、墳頂平坦面中央には、第19号住居跡が存在しており、本古墳築造に際して住居跡埋没後の平坦面を利用し、古墳を築造したと考えられる。

主体部 (第45図)

主体部は、墳頂平坦面の中央やや西寄りに位置し、主軸をN50° Eにとる箱式石棺である。墓壙は、現状では地山を長さ200cm、幅110cm、深さ35cm程度に掘り込み、そこに石棺を納めている。石棺の規模は、内法で長さ145cm、幅が東側で30cm、西側で35cm、深さは東側で30cm、西側で27cmを計る。側壁の棺材は、概ね横長に立てられ、小口部分は各1枚、両側壁はそれぞれ各3枚、蓋石としては5枚の石材が使用されている。側壁、小口、蓋とも使用された石材は、東側が大きく西に行くほど小さくなる傾向がある。石棺内には、流入土が充満していたものの人骨一体分が遺存していた。人骨の遺存状態は悪く、わずかに頭蓋骨(後頭部)の一部と左右大腿骨の一部が確認しえたのみである。人骨の出土状態から、頭部を東に向け、仰臥伸展の状態で葬られたと考えられる。副葬品は出土しなかった。

小結

第2号古墳の築造時期については、遺物が全く出土していないために明確にしえなかった。ただ、第1号古墳、第5号古墳、第6号古墳と切り合い関係を有しており、土層観察等から判断すれば、第5号古墳、第6号古墳より後出し、第1号古墳より先行して築造されていることがわかる。特に、第6号古墳の大半を削り込んでいるのに対して、第5号古墳については、その墳丘及び溝の存在をある程度意識して本古墳が築造されていることが考えられる。このことは、第5号古墳との関係に比して、本古墳と第6号古墳の築造時期の隔たりの大きさを予想させる。なお、本古墳の被葬者については、比較的若い男性の可能性が強いとの鑑定結果が出ている。

(4) 第3号古墳

外観 (第48図)

調査前に墳丘の存在を予想しえた古墳の一つである。本古墳は、第1号古墳から西に延びる平坦な尾根が次第に傾斜を始める場所に位置しており、墳頂平坦面の標高は79.5mである。丘陵先端部に近くかつ高い位置にあるという点で、本古墳群中最も景観的に優れた位置にあると言えよう。そのため、石内川や八幡川の形成する沖積地の全域を見渡すことが可能である。現状では、地形が後世の改変によってかなり変形を受けているようであったが、わずかなマウンド状の高まりを観察することが可能であった。特に南西斜面については、階段状の畑が何段にも造られていたため、旧地形はほとんど遺存していないと考えられた。墳形は円墳であり、規模は直径14.5m、高さ1mである。周溝は、東側で第6号古墳の周溝と重複しており、西側についても土層観察等から第7号古墳の周溝と一部重複していると考えられるが、他の古墳との重複や後世の耕作による削平などによって、その全容の解明はし得なかった。周溝の規模は、現状では僅かにその痕跡が残存しているだけで明確にはし得ないが、土層観察によれば幅1.2m、深さは0.65m程度と推定される。墳丘は、主に地山を削り出すことによって形成されていると考えられる。なお、西側墳裾からは、住居跡の存在を予想させる壁及び床の一部を検出している。

また、東側墳丘斜面の中位、第6号古墳の周溝と接するような位置から、尾根線と直交する方向で掘られた溝状遺構を検出した。溝状遺構は、幅1.5m、深さ0.4m、長さ8.5mで、直線的に延びて北端で本古墳を取り囲むように曲がっているようである。加えて、北側墳丘斜面の一部に溝状遺構の北端から連続するような位置で方墳状に直線的に削られた面があり、前述した溝状遺構やこのような直線的に削られた面の存在は、本古墳築造以前に他の遺構が存在した可能性を示唆していると言えよう。

主体部 (第49図)

本古墳からは、2基の主体部を検出した。2基の主体部は、墳丘平坦面のほぼ中央部に平行して掘り込まれている。

(A 主体部)

2基の主体部の内、南東側のものである。墓壙は、長方形の二重土壙であり、主軸をN32°Eにとる。一次壙は、長さ320cm、幅160cm、深さは最深部で64cmである。二次壙は、両小口の隅を突出させたH形をしており、突出部を除く部分の規模は長さ185cm、幅60cm、深さは5cmである。突出部は、北東側小口が長くて長さ65cm、幅10cm、南西側小口で長さ10cm、幅12cmである。土層観察によると棺の規模は長さ230cm、幅60cm程度と考えられる。木棺の形状は、二次壙底面が平坦であること、横断面の土層も直線的に立ち上がること、二次壙の平面プランがH形をしていること等から小口板を側板で挟むタイプの組合式木棺であり、その場合側板の長さは最大260cmになると考えられよう。頭位については、二次壙平面の幅が南西側が広いため、南西側にあったものと考えられる。

遺物は、土壙底部東隅から鉄器1点が出土している。

(B 主体部) 二基の内、北東側の主体部である。地山が本主体部の北側側壁辺りから落ち始めており、そのため一次壙の北側側壁の大部分を欠いている。主体部は、長方形の二重土壙であり、主軸をN36°Eにとる。規模は、一次壙が長さ315cm、幅は東の端で

155cm、深さは現状で50cm程度と推定される。二次壙は、一次壙中央に掘り込まれていると推定され、長さ265cm、幅70cm、深さ30cmである。土層観察によると、本土壙に埋納されたと考えられる木棺の形状は、底部がU字形を呈するタイプのものであり、規模は長さ195cm、幅100cm程度のものであることが推定できた。

頭位は、二次壙の幅が南西側が広いことから、南西側にあったものと考えられる。

遺物は、二次壙内西側、底面から25cm浮いた位置から鉄鏃1点が出土している。また、二次壙内西寄り中央部から、直径40cm、厚さ15cmの範囲で赤色顔料を検出しており、その位置関係から、頭部に散布されたものと考えられよう。

遺物

A・B両主体部から鉄器各1点が、また墳頂平坦面及びその周辺から須恵器が出土した。

鑿状鉄製品（第67図80）A主体部二次壙底面から出土した完形品である。全長13.9cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmで断面長方形を呈し、現状では中央辺りでU字形に湾曲している。用途については類例も無く明確にしがたいが、ただ、一方の端が薄く尖っており、或いは本来は湾曲していなかった事も考えられることから、鑿である可能性が高いと考えられる。

鉄錐（第67図81）B主体部二次壙底面から25cm浮いた状態で出土しており、木棺内に副葬されたというよりは、むしろ木棺の蓋の上に置かれていた可能性が高い。現存長10.3cm、茎部はほとんど欠いている。鏃身の長さ8.7cm、最大幅は先端部に近い側にあり2.6cm、以後茎部に向かって緩い曲線を描きながら次第に細くなっている。所謂、柳葉形を呈する大型鏃である。断面はレンズ状をしており、厚さは最大で0.2cmである。茎部は付け根あたりで失われており、幅1.1cm、厚さ0.3cmである。篋被を持たないタイプである。

須恵器（第66図69）墳頂平坦面を中心に墳丘斜面からも出土している。墳頂平坦面については、耕作等によってか後世の攪乱を受けており、築造時にどのような状態で供献されていたのかは明確にし得なかった。ただ、破片の多くが墳頂上から出土しており、墳頂上、主体部の上辺りに供献されていた可能性が高い。

須恵器は中型の甕と考えられ、口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は強く押さえることによって平たくおさめており、体部表面には平行タタキ、内面はスリケシが施されている。極めて稀なタイプの形態であることから明確な製作時期については明言しがたいが、製作技法から判断すれば、須恵器の中でも比較的初期のものと考えられよう。詳しくは、土器観察表に譲る。

小結

第3号古墳は、本古墳群中数少ない円墳の一つであり主体部2基を検出している。2基の主体部については、木棺の形式は違うもののいずれも木棺直葬である点、頭位を南西向きに取る点、副葬品として鉄器1点を副葬している点等共通する点が多く、極めて近接して掘り込まれているにもかかわらず全く重複していないことから、予め計画的に2基の主体部が掘り込まれたのか、或いは一方の主体部の位置を意識して他方の主体部を掘り込んだためかのいずれかであろう。その場合、2基の主体部の占地に着目すれば、現状では斜面によるためか西側の墳丘が崩れており、B主体部がかなり北寄りに位置しているかの印象を受ける。しかし、東側周溝から復元した平坦面の範囲から考えれば、2基の主体

部は両方とも中心を避けて掘り込まれているように観察され、予め計画的に2基の主体部が掘り込まれていることが予想される。2基の主体部の埋葬順序については明確にしがたい。

時期については、大型の柳葉鏃を出土しており、須恵器についても古式な様相を示していることから、5世紀中葉を前後する時期と考えられる。周囲の遺構との関係については、切り合い関係を有しているのは第6号古墳とのみであり、土層観察によれば本古墳が後出するようである。また、前述した溝状遺構との関係についても、溝状遺構が先行しており、その場合築造順序は溝状遺構→第6号古墳→第3号古墳となる。これは、第3号古墳の溝が第6号古墳の墳丘を一部破壊して掘り込まれているのに対して、溝状遺構と第6号古墳の周溝があたかも互いの存在を意識して隣接して掘り込まれているように観察されるという事実からも首肯出来よう。

(5) 第4号古墳

外観 (第43図)

第4号古墳は、本古墳群中最も東に位置し、他の古墳の所在する尾根上平坦面とは鞍部によって隔てられているため、1基のみやや孤立した感を受ける。位置的に丘陵の奥に築造されているため、他の古墳に比べて景観的には最も悪い位置にあり、石内川流域の沖積地を主に意識した立地となっているのかもしれない。現状では、かなりの広さを持った平坦面として意識されたのみである。墳頂平坦面の標高は79.5mである。本古墳の墳形は、方墳と考えられ、規模は一辺6m、高さは現存高0.5mを計る。周溝は、東側で検出されており、尾根線と直交する方向で直線的に6m延びた後、両端で本古墳を取り囲むように屈曲して終わっている。規模は上端幅2.3m、深さ0.2mを計る。墳丘は、その大半を盛土を施すことによって形成されていると考えられる。墳丘下から、掘立柱建物跡のものと考えられる柱穴をはじめ、多数の柱穴を検出しており、周溝の東側からも住居跡の痕跡を検出していることから、住居跡や掘立柱建物跡の築造に際して形成された平坦面を利用して若干の整地を行い、盛土を施した後に、周溝の掘削を行ったものと考えられる。他の外表施設は確認しえなかった。遺物としては、須恵器片多数が墳丘全域から出土している。

主体部 (第42図)

墓壇は、その大半を盛土部分から掘り込んでいるものと考えられるが、土層観察によっても掘り方の識別は困難であり、僅かに黒色土の落ち込みを墓壇上で確認しえたのみである。その結果、地山上に残った痕跡によってその規模を推定し得るのみであり、それによれば主軸をN65°Eにとる長さ1.34cm、幅46cmの墓壇であったようである。墓壇掘り方の四周にはそれぞれ幅5cm、深さ5cmの溝が巡っており、木棺の棺材を固定するためのものと考えられる。このことから、本古墳の主体部は組合式木棺を納めたものと考えられ、その場合棺の規模は前述した墓壇掘り方とほぼ一致すると言えよう。頭位については、墓壇の底面レベルがやや東側が高くなっており、幅も若干東側が広がっていることから、北東にあったものと考えられる。

副葬品は、土壇内の南東隅、底面から5cm浮いた位置から刀子1点が出土している。

遺物

刀子 (第67図85) 頭位横に埋納されたものと考えられ、全長11.0cmの完形品である。

刃部長7.0cm, 最大幅は関に有り1.6cm, そこから内湾しながら急速に幅を狭め中央辺りで0.6cmとなる。厚さも関辺りが最も厚く0.3cmを計り, 鋒に近づくとつれて薄くなる。関は両側にあり, 斜めに緩く切られている。茎部の長さは4.0cm, 最大幅は関にあり1.0cm, 茎尻に向かって次第に細くなり, 端部は鋭角に切り落としている。厚さは0.3cmである。刃部が研ぎ減りのため大きく内湾していると考えられ, 長期の使用が行われた後に, 埋納されたものと推測される。その場合, 被葬者が生前に使用していたものを副葬した可能性が考えられよう。

須恵器 (第66図70) 破片から見れば, 1点のみ供献された可能性が高い。口縁端部の拡張がかなりすすんでおり, 直下の突帯も鈍くなっているものの, 体部内面にはスリケシが施されており, 古式の様相を若干残している。詳しくは土器観察表に示した。

小結

第4号古墳は, 時期的に見れば墳丘周辺から出土した須恵器から5世紀末頃と推定され, 時期の明確な古墳としては本古墳群中最も新しい古墳と考えられる。

また, 規模から言えば, 他の古墳が10m前後であるのに対して一辺6mと特に小規模であり, 直前の築造と考えられる第1号古墳の被葬者に比して, 大幅な勢力の衰退を想起させる。位置的に見れば, 遺跡の所在する丘陵尾根を東西に二分する鞍部の西側に他の9基の古墳が築造されているのに対して, 本古墳のみ鞍部の東側の地点に築造されており, やや孤立した感を受ける。ただ, 他の古墳の築造されている西半部の丘陵尾根についてみれば, 隙間なく古墳が分布しており, いくつかの古墳については他の古墳を削平・破壊することによって古墳を築造している状況であり, 本古墳築造のころには, 一見して他の古墳の破壊なくしては新たな古墳を築造しえない状況であったものと考えられる。そのため, あえて従来墓域とはなっていない新しい地域に墓域を拡張したものと見方も可能であろう。

いずれにしても, 本古墳群は, 本古墳築造をもってその永い歴史を閉じているようである。そのため, 古墳群終焉の理由の一端が, 本古墳を他の古墳から隔絶した地点に築造せざるをえなかったと言う地形的な事情あたりに存在しているとの考えかたもできようが, 一方で規模の縮小傾向も歴然としており, その意味で古墳群の消長を考察する上で本古墳の意味するものは大きいと考えられる。

(6) 第5号古墳

外観 (第44図)

第5号古墳は, 東から派生する丘陵尾根から北方向へ小さく派生した尾根上, 第2号古墳の北側に隣接して築造されており, 他の古墳に比して一段低い地点に位置していると言えよう。墳頂平坦面の標高は79.5m前後と推定される。墳形は, 方墳と考えられるが, 北側墳丘については地形上の制約を受けたためやや狭くなっており, 現状では台形を呈している。規模は現状で一辺8m, 高さ1m程度と考えられる。周溝は, 南半部から尾根を断ち切る形で確認されており, 幅0.5m, 深さ0.2m, 長さ10mである。墳丘は, 第21号住居跡埋没後の平坦面を利用して尾根上部を溝で断ち切り, 低い側に若干の盛土を施すことによって形成している。外表施設については確認し得なかった。

主体部 (第46図)

主体部は, 墳丘のほぼ中央に位置していると考えられ, 主軸をN30°Eにとる箱式石棺

である。住居跡埋土中に掘り込まれているため、墓壙掘り方については明確にし得ないが、現状では幅90cm、長さ220cm程度住居跡床面を掘り下げて石棺を据えている。石棺の規模は、内法で長さ175cm、幅は南側で45cm、北側で30cm、深さは40cmである。石棺の石材は、小口石各1枚、側壁は東側が3枚、西側も3枚の石を横長に立てている。特に、側壁南側の石材については、西側の一枚の石が二つに割れてはいるが、その対称的な位置にある東側の石材が一枚の石のように組み合わせてあることから、本来は側壁を2枚の石で構成することを意図して石材の選定を行った可能性が強いと考えられる。蓋石については、主に4枚の石材で構成されており、南端の石材が最も大きく北に行くにつれて小さくなっている。小規模な石材が多く隙間に詰められており、側壁においても、南から2枚目と3枚目との間のつなぎ目については板石を立て土砂の流入を防ぐ工夫が行われている。また、各石材の接合点及びその周辺については、緑灰色の粘土が厚く詰められており、極めて入念に仕上げられているが、棺内には土砂が充満していた。棺内からは人骨1体分が遺存していたが、遺存状態は極めて悪く、後頭骨、右側側頭骨及び下顎骨、歯4本等のみが残存する。頭位は人骨の出土状態から、南側にあったものと考えられる。副葬品は、刀子1点であり、棺内北寄り底面から6～7cmの高さから、刃部を北に刃先を東に向けて出土した。

遺物

刀子（第67図86）石棺内から出土したものである。出土位置から考えて、被葬者の足元あたりに埋納されたものと考えられる。現状では、鋒及び茎の半分以上を欠失しており、現存長7.2cmの外反り気味の刀子である。刃部は、現存長5.4cm、最大幅は関にあり1.3cm、背の厚さは0.3cmである。刃部中央辺りを中心に緩く内湾しており、長期の使用による研ぎ減りの結果と考えられる。関部は緩く斜めに切られており、次第に幅を減じながら茎部に移行する。茎部の現存長は1.8cmで、関で幅1.3cm、厚さ0.3cm、端部で0.8cm、厚さ0.3cmで、目釘孔2個を持ち、2個目の部分で茎が欠損している。刃の形状等から考えて、かなり長期にわたって使用されていることは明白であり、その意味で被葬者が生前使用していたものを副葬した可能性も考えられよう。

小結

第5号古墳は、第21号住居跡埋没後の平坦面を利用し、主に溝を周囲に巡らすことによって形成された小規模な方墳と考えられる。主体部は箱式石棺であり、内部からは副葬品として刀子1点のみが出土している。

遺存していた人骨の鑑定結果によると、被葬者は熟年の男性と推測される。

本古墳の築造時期については、時期を決定する有効な遺物が出土しなかったため明確にしがたい。ただ、隣接する第2号古墳と切り合い関係を有しており、土層観察によれば第2号古墳が後出のようである。また、本古墳群において箱式石棺を内部主体に持つものは第2号古墳と本古墳の2基のみであり、位置も隣接していることから、第2号古墳と本古墳は築造時期も近接しているものと推測できよう。

(7) 第6号古墳

外観（第44図）

調査前には、第2号古墳と第3号古墳とに挟まれた鞍部状の窪地となっており、おそらく第2号古墳による大幅な削平によって現在の地形になったものと考えられる。現状で

は、前述した如く、残存状況から判断して、墳丘のほとんどを第2号古墳によって削平されており、西側周溝の東壁の一部を第3号古墳東側周溝によって削り込まれている。墳頂平坦面の標高は79.5mあたりにある。墳形はやや胴張りの方墳と考えられ、規模は一辺10m、高さは現存高最高所で1.5mであるが、後述する主体部の残存状況等から推定すれば、更に0.5m程度高かったものと考えられる。周溝は、現状では北側を除いてほぼ全周しており、築造時には北側についても周溝が巡らされていた可能性が高い。周溝の規模は、全長25mで、第2号古墳と重複している東側で幅は溝底部で30cm、上端で最大100cm、深さは中央部で30cmである。第3号古墳と周溝が重複する西側については、幅が周溝底部で30cm、上端で最大70cm、深さは中央部で100cmである。築造前の地形は東から西に緩やかに傾斜していたものと考えられ、現状でも周溝底部の標高が西側中央で100cmほど低くなっていることが、それを傍証している。墳丘は、前述した如く第2号古墳によってほとんど削平されており、築造時の状況については知る手がかりがほとんどないが、墳丘中央に第23号住居跡が存在しており、他の古墳と同様に住居跡埋没後の平坦面を利用して築造されたものと考えられる。また、最も残存状態のよい東側において、削平を受けているにもかかわらず主体部の深さが50cmあり、築造時には地山を深く掘り込んで主体部が造られていることが推定される。これは、盛土がそれほど多くは施されていなかったことを示唆しており、このことから墳丘の大部分は周囲に周溝を巡らし、地山を削り出して墳形を整える事によって形成されていたものと考えられる。

遺物としては、周溝内より鉄鏃2、土師器1個体分が出土し、周溝底部南側から土師器碗1個体分が出土している。外表施設については検出し得なかった。

なお、前述したごとく、本古墳墳丘上からは第23号住居跡掘り方及びそれに伴うと考えられる柱穴、貯蔵穴等が検出されている。

主体部（第47図）

本古墳からは、2基の主体部を検出した。2基の主体部は、墳丘のほぼ中央部に平行して掘り込まれている。

（A 主体部）

2基の主体部の内南側に位置する主体部である。墓壙は、第2号古墳築造時に削平を受けたために残存状態が極めて悪く、現状での規模は、長さ280cm、幅150cm、深さは30cmである。平面プランはやや横長の長方形を呈しており、小口・側壁とも中央辺りがやや膨らむ傾向を持っている。主軸はN46°Eをとる。墓壙底面からは、木棺を埋置したと考えられる側板及び小口板の痕跡を確認した。小口板を納めたと考えられる小口穴は東西双方にあり、西側は墓壙小口から15cm内側で東側は墓壙小口から35cm内側で検出している。西側小口穴については、北側を一部重複した状態で2個検出しており、規模は外側のものが長さ100cm、幅20cm、深さは40cm、内側のものが長さ90cm、幅5cm、深さは30cmと内側が長さ、深さともやや小規模となる。東側小口穴については、長さ120cm、幅15cm、深さ30cmである。なお、南より中央付近の深さ12cmの位置から、長さ72cm、幅7cmの小規模な段を検出している。また、墓壙側壁に沿うように掘り込まれた溝を検出している。南側側壁のものについては、外側の西側小口穴から東側小口穴の間で直線状に掘り込まれており、長さ185cm、幅10cm、深さは8cmである。北側については、南側と同様外側の西小口穴から東小口穴まで掘り込まれているが、ほぼ中央あたりに穿た

れた径25cm深さ10cmの円形のピットを境として途切れ、わずかに屈曲している。ピットを挟んで西側の溝は、長さ90cm、幅5cm、深さは3cm、東側の溝は長さ60cm、幅6cm、深さは5cmである。溝の形状から推定すれば、使用された木棺は、側板を小口板で押さえる形状の組合式木棺と考えられるが、北側側板については2枚の板で構成されていたようである。

また、墓壙底面の形状からいえば、東小口穴から西にかけて長さ130cm、幅は最大で40cm、深さも最大で5cmに渡りU字形の掘り込みを検出している。掘り込みは両側壁のほぼ中央に位置し、東小口穴付近が最も深くて広く、以下徐々に浅くなって消えている。通常、箱式の木棺の場合は、墓壙底面は平坦になる場合が多く、その意味で木棺の形状に疑問が残る。さらに、木棺自体が長さに対して幅がかなり広く、かつあらかじめ木棺の大きさに合わせて掘り込まれるはずの小口穴が2種類掘り込まれているなど、多くの点で通常の木棺には見られない特徴を示しており、木棺の形状に大きな疑問を抱かざるを得ない。その場合、西側小口穴が2つある点、通常よりはるかに幅広である点、土壙底面がU字形を示すとはいえ、それは土壙全面ではなく中央辺りに限られる点等から推測すれば、箱式木棺とは別の形状の木棺（おそらく底面U字形を示すような木棺）が納められ、その外をそれより一回り大きな箱式の木棺で囲うような構造の埋葬施設であった可能性か、あるいは当初埋葬する予定の木棺が、何かの理由によってにわかに変更になり墓壙自体を拡大した可能性かの2つが考えられよう。現状では、墓壙の残存状況が極めて悪く、土層断面等で確認が困難であったため、明確にはしがたい。しかし、墓壙掘り方はかなり大きめに掘り込むのが通例であり、小口穴を掘り変えた例はほとんど報告されていない。一方、二重構造の木棺については、所謂木槨墓として弥生時代の比較的大規模な墳墓に稀に見られる構造であり、後述するように本古墳が古墳時代の初頭に位置づけられる古墳であることから、弥生時代の比較的大規模な墳墓の構造の伝統を引いたものと位置づけることもできよう。その場合、木棺の規模は、内側のものが長さ150cm、幅100cm、外側のものが長さ180cm、幅130cm程度となろう。

頭位については、明確にしえない。

遺物については、鉄片1点が出土しているが小片のため図示し得なかった。なお、表土近くからの出土であり、本主体部との関係は明言しがたい。

(B 主体部)

2基の主体部の内、北側に位置する主体部である。墓壙は、A主体部と同様に第2号古墳築造時に削平を受けたために残存状態が極めて悪く、北側側壁の西半を第8号土壙と重複している。現状での規模は、長さ295cm、幅が北東側で100cm、南西側の端で90cm、深さは30cmである。平面プランは長方形を呈しており、主軸はN43°Eをとる。

頭位は、土壙底面のレベルが北東側が高く、幅も北東側が広がっていることから、東側にあったものと考えられる。木棺の形状は、土壙掘り方の形状から組合式木棺と考えられる。遺物は出土しなかった。

遺物

後世の削平を受けているためか、主体部内及び墳頂から遺物は出土しなかった。周溝からは、土師器2点及び鉄錐2点が出土している。土師器については、68が周溝底面から、67が西側の墳丘斜面及び周溝内一帯から出土していることから、本古墳に伴うと考えら

れる。鉄鏃2点については、83が第3号古墳と周溝の重複しているあたりから、82が第2号古墳の墳丘表土と周溝との境あたりの高さから出土しており、本古墳との関係については明確にしがたい。

鉄錐（第67図82・83）82は、東側周溝上、周溝上端を結んだ線あたりの高さから出土している。全長9.5cmを計る長頸鏃である。身部長7.5cm、刃部は三角形を呈し、長さ3.1cm、最大幅2.1cmで、断面は偏平なレンズ状を呈し厚さ0.2cmである。頸部は、長さ4・6cm、中央で幅0.5cm、厚さ0.3cmで、篋被を有している。茎部は、長さ2.0cm、身部との境界あたりで幅0.3cm、厚さ0.2cmであり、以後端部に向かって次第に細くなる。

83は、西側周溝内、第3号古墳の周溝と重複する辺りから出土したものである。全長7.2cmの完形品である。身部長4.2cm、最大幅は先端近くに有り2.8cmであり、木の葉状を呈している。断面は偏平なレンズ状を呈し、厚さは0.3cmである。茎部長3.0cm、幅は関で最大となり0.9cm、以後先端に向かって次第に細くなっている。

土師器（第66図67・68）双方共に、精製されたものである。特に68については、発土期の古墳から出土する壺と類似した形態の特徴を有しており、注目される。広島市域においては出土例のないものであり、県内でも数例知られるのみであることから、その入手経路に興味をもたれる。詳しくは土器観察表に示した。

小結

本古墳は、本来溝を周囲に巡らし、後に若干地山を削り出すことによって形成されていたと考えられるが、現状では第2号古墳築造時の削平によってその大半を失ったと考えられる。2基の主体部については、ほぼ墳丘中央部に重複することもなく整然と配置されており、当初からの計画性をうかがわせるが、残存状態が極めて悪く、2基の前後関係については明確にし得なかった。ただ、A主体部については、弥生時代の伝統を色濃く残す『木槨構造』をとる可能性があり、注目される。

時期については、周溝埋土中及び周溝底面から出土した土師器から、古墳時代初頭と考えられる。

(8) 第7号古墳

外観（第50図）

第7号古墳は、本古墳群の所在する丘陵西端、尾根上平坦面が西に傾斜を始める地点に位置している。調査前の地表観察によれば、墳丘の大部分は畑として利用されており、わずかに傾斜のゆるやかな部分として認識し得たのみであった。墳丘平坦面の標高は77.5mである。墳形については、後世の削平が著しいため明一言はしがたいが、東側で検出した周溝の形状によれば、方墳と考えられる。規模は一辺9m、高さ0.5m程度と推定され、主体部がかなりの傾斜をもって掘り込まれているため、墳丘自体も丘陵の傾斜に沿って西に傾斜していた可能性も考えられよう。周溝は、本古墳で最も高い東側の面で確認されており、土層観察によれば西側に巡っている可能性をうかがわせる部分があることから、古墳を全周していた可能性も考慮しておく必要がある。規模は、長さ10m、幅0.7m、深さ0.4mである。墳丘は、西に傾斜する緩斜面を利用して形成されており、周囲に溝を掘り込んだ後に若干の盛土を施して墳形を整えたものと考えられる。

遺物は、墳裾周辺及び周溝内から土師器2個体分が出土している。

主体部（第51図）

墓壙は、確認し得た東側周溝から想定される墳丘の中央部に掘り込まれている。墓壙掘り方は、盛土中に掘り込まれているために部分的にしか確認し得なかったが、長方形を呈しており、主軸をN78°Eにとる。規模は、現状で長さ270cm、幅40cmで、土壙底面はU字形を呈している。土層観察によれば、木棺はU字形の底部を有するものと考えられ、長さ270cm、幅80cm程度であったものと考えられる。ただ、土壙底面が両小口間で35cmのレベル差を生じており、他の例に比して傾斜が大きいため奇異な感じを受ける。これは、本古墳が斜面を利用して墳丘を形成しているためと考えられよう。

頭位は、東側がかなり高く、広さも東側が広がる傾向を示していることから、東側と考えられる。遺物は、出土していない。

遺物

後世の削平の影響によってか、墳頂から遺物は出土していない。ただし、南東側の周溝内及び墳丘斜面周辺からは、土師器2点が出土している。

土師器（第65図65・66）66は南東側周溝内に流れ込んだ状態で、65は南東側周溝の途切れるあたりの墳裾から出土したものである。いずれも前期の古墳から出土する壺と類似した形態の特徴を有している。広島市域から出土の報告はなく、県内においても数例を数えるのみであり、その入手経路に興味をもたれる。詳しくは土器観察表に示した。

小結

本古墳は、古墳群の立地する丘陵尾根の西端の緩斜面を利用して古墳を築造している。本古墳が築造された場所は、前述したごとく斜面を利用したものであり、古墳の築造に適した場所とは考えられず、占地の点で疑問が残る。また、主体部についても、かなりの傾斜を持って掘り込まれていることから、埋葬に際し頭位についての何らかの制約が働いたことが考えられ、前述した占地の点も含めて、本古墳築造に際し様々な制約が考慮されていることが予想され、興味を引かれる。

本古墳の時期についてであるが、周溝内及び墳裾周辺から出土した土師器の特徴からいえば、古墳時代前期に位置づけられるもので、古墳時代初頭と考えられる第6号古墳より若干後出する時期のものと考えられる。

(9) 第8号古墳

外観（第53図）

第8号古墳は、西側に延びる丘陵尾根が南に向かって小さく派生する緩やかな斜面を利用して築造されている。墳頂の標高は77mあたりである。位置としては、第3号古墳の南側、比高差で2.5m下にあり、第9号古墳と接している。調査前には、全面が畑として利用されており、その存在を全く予想し得なかった。ただ、隣接する第9号古墳に比して若干低い位置に築造されていたためか、耕作時の削平をあまり大きくは受けていないものと考えられる。現状では、墳形は東西方向にやや長い方形と考えられ、規模は東西8m、南北6m、高さは北側0.35m、南側で0.7mである。周溝は、南側を除く3方向から検出されており、墳丘をコの字状に取り巻いている。規模は、幅が北側中央で0.4m、深さ0.35m、長さ14mである。なお、西側の溝については、第9号古墳の直線的に延びる北側溝を南に折れ曲がるあたりで切り込んで掘られており、本古墳の墳丘に本来残るはずの第9号古墳東側周溝の痕跡が全く確認し得なかったことから、本古墳西側周溝と第9号古墳東側周溝は全く重複して掘り込まれた可能性が高いと考えられよう。墳丘は、周溝を掘り巡ら

したのちに若干の削平及び盛土によって平坦面を造り出していると考えられるが、東西両側の周溝が斜面に沿って掘り込まれており、自然地形を可能な限り利用して墳丘を築造していることが予想されるため、古墳築造時に大幅な地形の改変は無かったものと考えられる。外表施設は、検出し得なかった。

本古墳に伴うと考えられる遺物は、出土していない。

主体部（第52図）

墓壇は、墳丘中央部に位置し、等高線に平行する方向に掘り込まれた長方形の2重土壇である。主軸はN68° Eにとる。一次壇の規模は、長さ250cm、幅は西側で125cm、東側で105cm、深さ35cmである。二次壇はその中央に掘り込まれており、長さ240cm、幅は西側で50cm、東側で45cm、深さ20cmである。二次壇底面は若干U字形を呈していることから、使用された木棺はU字形の底部を持ったものと考えられ、規模は長さ240cm、幅50cm程度と推定される。頭位については、二次壇底面が東側が高くなることから、東側にあったものと考えられる。

墓壇内からは、遺物は出土しなかった。

小結

本古墳は、溝を周囲に巡らすことによって墳丘を形成しているものと考えられ、一見弥生時代の方形周溝裏を連想させる。しかし、主体部については、古墳時代に通有の2重土壇という形式をとり、規模的にも弥生時代の墓壇に比してはるかに大規模なものであることから、本古墳が古墳時代に属していることは確実に考えられる。ただ、時期を示す遺物は出土しておらず、古墳時代のどの時期に属するかは明確にし得なかった。なお、隣接する第9号古墳との関係については、明らかに周溝の一辺を重複しており、互いの存在を意図して意図的に隣接して築造していると考えられることから、時期的にも極めて近接した時期に築造されていることが予想される。

（10）第9号古墳

外観（第53図）

第9号古墳は、第8号古墳と同様に西側に延びる丘陵尾根が南に向かって小さく派生する緩やかな斜面を利用して築造されている。墳頂の標高は本来77.5mにあったものと考えられる。位置としては、第3号古墳の南側、比高差で2m下にあり、第8号古墳及び第7号古墳に挟まれた位置にある。調査前には、第8号古墳の所在する辺りから延びてきた段々畑が続いており、その結果丘陵頂部に近い側の一部を除き、墳丘のかなりの部分が削平を受けていた。現状での墳形は、東西方向に長い長方形を呈しており、規模は東西6.5m、南北5.2m、高さは北側で0.3m、南側で0.3mである。周溝は、北側及び西側で確認されており、東側については、第8号古墳西側周溝と重複していると考えられる。規模は、幅が北側中央で0.9m、深さ0.3m、長さ10mである。墳丘は、周溝を掘り巡らしたのちに若干の削平及び盛土によって平坦面を造り出していると考えられるが、第8号古墳と同様に西側の周溝が斜面に沿って掘り込まれており、自然地形を可能な限り利用して墳丘を築造していることが予想されるため、古墳築造時に大幅な地形の改変は無かったものと考えられる。外表施設は、検出し得なかった。

墳丘内及びその周辺からは、遺物は出土していない。

主体部（第54図）

墓壙は、墳丘中央に位置していると考えられ、等高線に平行する方向に掘り込まれている。墳頂平坦面の大部分が、畑の段等の影響によって大幅な削平を受けており、主体部においてもその例外では無かった。墓壙掘り方は、築造時には長方形の2重土壙であったと考えられ、主軸はN90° Eをとる。現状では、一次壙はほとんど残存しておらず、わずかに東半で確認し得るのみであった。規模は、長さ240cm、幅70cm程度と推定される。二次壙についても、耕作時の影響を受けたためか残存状態が悪く、一部後世のピットと思われるものも掘り込まれているが、断面U字形の長方形の掘り方を検出し得た。規模は、長さ175cm、幅が東側で25cm、西側で15cm、深さ30cmである。木棺は、断面がU字形のものが使用されていたと考えられる。頭位は、二次壙掘り方が東側が広いため、東にあったものと考えられる。

墓壙内からは、遺物は出土しなかった。

小結

本古墳は、第8号古墳と同様に溝を周囲に巡らすことによって墳丘の大部分を形成しているものと考えられ、一見弥生時代の方形周溝墓を連想させる。しかし、主体部の規模形状及び隣接する第8号古墳との関係等から、古墳時代に属するものと考えられるが、詳しい時期については遺物が出土していないため、明確にし得ない。また、第8号古墳との関係については、前述したごとくその密接な関係が指摘し得るが、前後関係については明確な証拠も無く、明言しがたい。ただ、表面観察によれば、第9号古墳の東側周溝を深く掘り直して第8号古墳の西側周溝が掘り込まれているように見える点、第8号古墳の西側周溝の土層観察によれば、溝内に第9号古墳の東側周溝掘削時の影響が何ら観察できない点等から、或いは第9号古墳が第8号古墳に先行する可能性も考えられよう。

(11) 第10号古墳

外観（第37・39図）

第10号古墳は、第1号古墳の墳丘下から検出された古墳である。現状では、東側の周溝及び古墳基底部分のみ遺存していると考えられ、主体部も含め墳丘のほとんどは第1号古墳築造時に周辺の地形とともに削平されたものと考えられる。東側周溝及び南北墳丘基底部分については築造時の姿を止めていると考えられるが、西側斜面については第1号古墳築造時に削られている可能性が高い。それでも、現状での規模は南北10m、東西8.6mと南北方向に長い長方形を呈しており、第1号古墳築造の影響がそれほど大きくは無かったことがうかがわれる。周溝は、東側一辺からのみ検出しており、現状では尾根を絶ち切るような形で掘り込まれていると推測できよう。規模は、幅が周溝底面で0.5m、上端で2.2m、深さ0.3m、長さ8mであるが、溝自体が第1号古墳築造時の削平により浅くなっている、と考えられることから、その規模については明確にし得ない。

遺物は出土しておらず、外表施設についても確認し得なかった。

小結

第10号古墳は、第1号古墳築造に際して主体部及び墳丘の大半を失っており、東側の周溝及び墳丘基底部分を残すのみであった。現状において、本古墳墳丘削平面には建物跡の痕跡と考えられる柱穴が存在しており、削平が本古墳築造時に墳丘上に存在した建物跡を消してしまうほど大規模ではなかったことが予想される。また、本古墳が古墳群中の他のものと同様に建物跡廃棄後の平坦地を利用して築造されていた可能性が高いと言

えよう。本古墳の時期については、遺物も出土しておらず、概要についても明確でないため、不明である。

(12) 土壇墓 (第 55 図)

東側の尾根上平坦面が鞍部に向かって傾斜を始める変換点あたりに位置している。吉墳群中最も東に位置する第4号吉墳と比高差で2m、距離としては10m離れている。現状では、第9号住居跡内に掘り込まれているように見られるが、鉄器1点が副葬されており、弥生時代の墳墓とは考えにくいため、一応古墳時代に属する墳墓と捉えることとした。その場合、住居跡との位置関係から言えば、住居跡床面が斜面と接するあたりを中心として掘り込まれており、当遺跡内の幾つかの古墳と同様に住居跡埋没後に形成された平坦面を利用して墓壇を掘り込んだものと考えられよう。

墓壇は、長さ180cm、幅が北東側で70cm、南西側で60cmという北東側が広がった長方形を呈しており、深さは最深部で40cmである。なお、掘り方四隅が南北方向に若干突出しており、木棺の側板の痕跡と考えられる。その場合、木棺の種類は、小口を両側板で挟む形態のものと推測される。

遺物

遺物としては、墓壇内北側隅の底面から鉄器1点が出土している。

時期は、不明である。

鑿 (第 67 図 84)

全長7.2cmで、刃部の一部を欠いているとはいえほぼ完形品に近いものである。刃部復元幅1.0cmで最大幅となり、以後茎端部に向かって次第に細くなっている。身部と茎部の明瞭な境界を有さない種類のものである。厚さは0.2cmでほぼ均等であり、刃部先端から0.8cmあたりから薄くなりはじめ片刃を成している。

城ノ下 A 地点遺跡古墳群出土土師器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
65	第7号古墳南東側周薄内	壺形土器	口径22.6	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる頸部からやや内湾ぎみに外反し、端部は若干凹面を呈する。口縁部中位に粘土帯をはりつけ垂下させている。	外面 口縁部回転ナデ。頸部ヘラ磨き。肩部ハケ目後ヘラ磨き。以下ハケ目。 内面 口縁部から頸部にかけ回転ナデ以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良好
66	第7号古墳南東側墳裾周辺	壺形土器	口径25.4 胴部最大径33.9	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる頸部からきつく外反し、端部は丸くおさめている。口縁部中位には粘土帯をはりつけ、垂下させている。胴部は、胴張りの強い丸屈を呈している。	外面 口縁部回転ナデ。順上半部ハケ後ヘラ磨き、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部回転ナデ。屈曲点ハケ目。頸部回転ナデ。胸上半部ヘラ削り以下ナデ。口縁部に2段の粗い波状紋、肩部に60条以上の平行沈線紋を施した後、その上から10条の波状紋を施している。口縁部内面に2連の竹管紋を施す	色調 明黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
67	第6号古墳西側薄内及び墳裾周辺	壺形土器	口径27.6	ほぼ垂直に立ち上がる頸部からきつく外反する二重口縁である。口縁部は、ほぼ中位で若干内側に屈曲する立ち上がり部をもつ。屈曲点には粘土をはりつけ、垂下させている。頸部屈曲点には凸帯を巡らせている。	外面 口縁部から頸部回転ナデ。 内面 口縁部回転ナデ、屈曲点付近ナデ。 外面口縁部直下にクシ歯状工具による押さえ痕、立ち上がり部に細かい波状紋、粘土帯に直径1cm程度の円形浮紋を施している。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 良好
68	第6号古墳南西側周薄底面	鉢形土器	口径25.0	丸底の底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部は丸くおさめている。	外面 4分の1以上回転ナデ、以下ヘラ削り。 内面 3分の1以上回転ナデ、以下ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 密 焼成 軟

城ノ下 A 地点遺跡古墳群出土須恵器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
69	第3号古墳平坦面上	甕	口径23.0	口縁部は外反し、端部は若干凹面を呈している。	外面 口縁部回転ナデ。肩部以下平行タタキ。 内面 口縁部回転ナデ、屈曲点付近ナデ。以下スリケシ。	色調 淡青灰色 断面灰色 胎土 やや密 焼成 良好
70	第4号古墳墳頂平坦面周辺	甕	口径17.3	口縁部は外湾ぎみに上方へのび、端部付近で外反し、端部は指でつまむことによって肥厚させており若干凹面を呈する。	外面 口縁部回転ナデ。肩部平行タタキ後回転ナデ。胴部以下平行タタキ。 内面 口縁部から肩部回転ナデ。胴部以下スリケシ。 頸部内面に指頭痕。	色調 青灰色 断面外側 青灰色 内側 赤紫色 胎土 密 焼成 良好
71	第1号古墳墳丘斜面	甕	口径15.5	口縁部は、やや外湾ぎみに外反し、端部は凹面を呈する。屈曲点及び中位に凹線を巡らせ、4分の1位に鋭い凸帯を巡らせている。	外面 口縁部回転ナデ。胴部以下細かい平行タタキ。 内面 口縁部回転ナデ。胴部以下同心円紋、半スリケシ。口縁部凸帯直下に波状紋を施している。	色調 外面 暗青灰色 内面 青灰色 断面 赤紫色 胎土 密 焼成 極めて良好 口縁部内面に灰色の自然油
72	第1号古墳墳丘斜面	甕	口径25.6	口縁部は外湾ぎみに立ち上がり端部は凹面を呈する。口縁部直下に鋭い凸帯が一条巡る。	外面 口縁部回転ナデ、屈曲点付近ナデ。以下平行タタキ。 内面 口縁部回転ナデ。屈曲点付近指頭圧痕、以下スリケシ	色調 暗青灰色 断面 赤紫色 胎土 密 焼成 良好 肩部に灰白色の自然釉がかかる

＜鉄 鏃 計 測 表＞

■凡例 断面形類別記号－ A=片刃箭式 B=片丸 C=両丸 D=平造 E=片縞

(☆鉄鏃の型式については、型刃箭式のみ表示し、他は全て鑿箭鏃である。)

単位－長・幅・厚＝cm、() 付データは残存値。重量＝g、完形遺物を中心に計量、計量器具は OHAUS・J20699

	全長 cm	刃 部				頸 部			茎部長	重量	備考
		長	幅	厚	断面形	長	幅	厚			
棺 外 東 側	(15.4)	2.3	0.9	0.3	A	8.8	0.6	0.3	(4.3)	14.3	逆刺102
	(12.7)	1.9	0.7	0.3	A	9.6	0.4	0.3	(1.2)	9.9	不明103
	(12.5)	2.7	0.9	0.4	A	9.1	0.5	0.35	(0.7)		逆刺
	(11.3)	2.6	0.9	0.3	A	8.7	0.6	0.4	0.0		逆刺
棺 内 北 側	(16.2)	2.3	0.9	0.3	B	10.3	0.5	0.3	(3.6)		明略な逆刺104
	(15.8)	(2.4)	1.0	0.3	B	10.3	0.6	0.5	(3.1)		小さな逆刺105
	18.4	1.8	1.1	0.2	D	11.1	0.6	0.35	5.5	14.5	小さな逆刺106
	(15.1)	2.4	1.0	0.3	C	8.5	0.6	0.4	(4.2)		小さな逆刺107
	(12.5)	2.8	0.9	0.3	A	9.2	0.5	0.4	(0.5)		明瞭な逆刺108
	18.2	2.5	1.0	0.3	B	10.4	0.5	0.4	5.3		小さな逆刺
	16.8	2.2	1.1	0.3	B	10.4	0.6	0.4	4.2	14.8	小さな逆刺
	(16.6)	2.5	1.0	0.3	B	10.5	0.5	0.45	(3.6)		小さな逆刺
	(15.9)	(2.4)	1.0	0.3	B	10.4	0.6	0.4	(3.1)		小さな逆刺
	(15.7)	(1.4)	1.1	0.3	B	10.2	0.6	0.5	4.1		小さな逆刺
	(15.7)	2.3	1.0	0.3	B	10.3	0.5	0.4	(3.1)		小さな逆刺
	(15.3)	2.4	1.0	0.3	B	10.4	0.5	0.4	(2.5)		小さな逆刺
	(15.1)	2.4	0.9	0.3	B	10.5	0.6	0.5	(2.2)		不明
	(15.0)	2.3	1.0	0.3	B	10.3	0.5	0.5	(2.4)		小さな逆刺
	(14.8)	2.6	1.0	0.4	B	10.2	0.6	0.5	(2.0)		小さな逆刺
	(13.8)	(0.9)	1.0	0.3	B	10.1	0.5	0.35	(2.8)		小さな逆刺
	(13.8)	2.3	1.0	0.3	B	10.2	0.6	0.45	(1.3)		小さな逆刺
	(13.3)	2.5	1.1	0.3	B	10.2	0.6	0.5	(0.6)		小さな逆刺
	(14.0)	欠	1.0	0.3	B	10.5	0.6	0.4	(3.5)		小さな逆刺
	(13.0)	欠	1.1	0.4	B	10.4	0.6	0.4	(2.6)		小さな逆刺
(12.4)	欠	1.1	0.3	B	8.4	0.6	0.3	(4.0)		小さな逆刺	
(14.9)	(1.4)	1.1	0.3	D	8.8	0.6	0.4	4.7		小さな逆刺	
(13.5)	(1.3)	1.0	0.2	D	10.6	0.5	0.5	(1.6)		小さな逆刺	
(13.6)	欠	欠	欠	C	9.0	0.6	0.3	4.6		小さな逆刺	
(14.5)	欠	欠	欠	不明	10.1	0.55	0.4	4.4		不明	
(10.1)	欠	欠	欠	不明	(7.4)	0.6	0.4	(2.7)		不明	
棺 内 南 側	(12.8)	1.9	1.1	0.4	C	10.2	0.5	0.4	(0.7)		小さな逆刺109
	(14.9)	2.2	1.1	0.4	C	9.9	0.4	0.4	(2.8)		小さな逆刺110
	16.4	2.2	1.1	0.3	C	10.0	0.5	0.4	4.1	12.4	無111
	17.2	2.4	1.2	0.3	C	9.7	0.4	0.3	5.1	13.0	小さな逆刺112
	16.7	(1.8)	1.2	0.3	C	10.2	0.4	0.3	4.7	15.0	小さな逆刺113
	16.5	2.1	1.1	0.3	C	10.1	0.5	0.4	4.3	15.0	小さな逆刺114
	15.9	2.1	1.0	0.2	D	9.7	0.5	0.4	4.1	11.1	無115
	17.4	2.5	1.2	0.3	E	10.2	0.4	0.3	4.7	15.9	小さな逆刺116
	16.0	2.2	1.0	0.4	C	9.8	0.5	0.4	4.0	12.9	小さな逆刺
	(15.9)	1.8	1.0	0.3	C	10.1	0.4	0.4	(4.0)	13.3	小さな逆刺
	(15.9)	(1.5)	1.0	0.3	C	10.3	0.4	0.4	(4.1)	13.4	無
	(15.5)	2.3	1.1	0.3	C	9.8	0.5	0.4	(3.4)	13.9	小さな逆刺

	全長 cm	刃 部				頸 部			茎部長	重量	備考
		長	幅	厚	断面形	長	幅	厚			
棺 内 南 側	15.2	(1.9)	(0.9)	0.3	C	9.9	0.4	0.3	3.4	11.8	無
	15	1.9	1.1	0.3	C	9.7	0.5	0.4	3.4	12.0	無
	(14.6)	1.9	1.0	0.4	C	9.9	0.4	0.3	(2.8)		小さな逆刺
	(14.5)	2.2	1.1	0.3	C	10.1	0.3	0.3	(2.2)		小さな逆刺
	(14.1)	2.1	1.1	0.4	C	10.1	0.4	0.3	(1.9)		小さな逆刺
	(13.8)	2.2	1.1	0.4	C	10.0	0.5	0.4	(1.6)		小さな逆刺
	(13.4)	2.1	1.1	0.4	C	10.3	0.5	0.4	(1.0)		小さな逆刺
	(13.4)	(1.7)	1.1	0.3	C	9.7	0.4	0.4	(2.0)		小さな逆刺
	(13.2)	2	1.0	0.4	C	10.1	0.4	0.3	(1.1)		小さな逆刺
	(13.1)	(1.6)	(0.8)	0.3	C	10.1	0.4	0.3	(1.4)		無
	(12.8)	1.9	1.0	0.3	C	9.9	0.3	0.3	(1.0)		小さな逆刺
	(12.5)	2	1.1	0.4	C	10.2	0.4	0.4	(0.3)		小さな逆刺
	(12.1)	1.1	0.9	0.4	C	9.8	0.4	0.3	(1.2)		不明
	16.4	1.7	0.9	0.3	D	10.7	0.4	0.3	4.0	12.0	小さな逆刺
	(16.0)	1.9	1.0	0.3	D	10.0	0.5	0.4	4.0	13.1	無
	13.7	2	0.9	0.3	D	9.7	0.5	0.4	2.0		小さな逆刺
	(13.2)	2.1	0.9	0.3	D	9.7	0.4	0.4	(1.4)		無
	(18.5)	(2.4)	1.0	0.3	B	10.5	0.5	0.5	5.6	17.3	不明
棺 外 西 側	(13.4)	3.3	1.3	0.2	D	8.5	0.6	0.3	(1.6)		無117
	(16.1)	(2.3)	1.2	0.3	B	11.1	0.6	0.4	(2.7)		小さな逆刺118
	(15.2)	2.4	1.1	0.4	B	10.1	0.6	0.4	(2.7)		小さな逆刺119
	(13.8)	2.8	1.1	0.4	B	10.1	0.6	0.4	(0.9)		明瞭な逆刺120
	(12.5)	1.9	1.0	0.3	C	9.5	0.5	0.4	(1.1)		小さな逆刺121
	(14.9)	2.9	0.9	0.3	A	8.6	0.7	0.4	(3.4)	不明	不明122
	(12.3)	2.4	1.0	0.3	A	8.5	0.7	0.4	(1.4)		小さな逆刺123
	(17.9)	2.2	1.3	0.3	D	12.1	0.6	0.4	(3.6)		明瞭な逆刺
	(16.9)	2.2	1.0	0.3	D	11.1	0.5	0.3	(3.6)		不明
	(15.9)	2.8	1.1	0.3	D	10.7	0.5	0.5	(2.4)		不明
	(14.3)	2.3	1.0	0.3	D	10.9	0.60	0.4	(1.1)		小さな逆刺
	(13.8)	(1.3)	1.1	0.3	D	10.6	0.6	0.3	(1.9)		不明
	(13.8)	2	1.1	0.3	D	10.4	0.5	0.4	(1.4)		不明
	(13.4)	3.5	1.0	0.3	D	8.5	0.7	0.3	(1.4)		不明
	(13.3)	2.3	1.2	0.4	D	11.0	0.5	0.4	欠		小さな逆刺
	(12.9)	2.1	0.9	0.3	D	-9.8	0.5	0.5	(1.0)		小さな逆刺
	(12.9)	2	1.1	0.3	D	(10.9	0.5	0.4	欠		不明
	(11.9)	(1.9)	1.3	0.3	D	9.4	0.6	0.4	(0.6)		無
	(11.0)	2.7	1.1	0.3	D	7.9	0.7	0.3	(0.4)		小さな逆刺
	18.3	2.3	1.0	0.3	B	10.4	0.5	0.4	5.6	18.4	小さな逆刺
(16.1)	2.7	1.1	0.3	B	10.4	0.5	0.5	(3.0)		小さな逆刺	
(15.3)	2.4	1.0	0.3	B	10.3	0.5	0.5	(2.6)		小さな逆刺	
(14.4)	3.1	1.1	0.4	B	9.8	0.6	0.5	(1.5)		小さな逆刺	
(13.1)	2.8	1.1	0.4	B	10.0	0.6	0.4	(0.3)		小さな逆刺	
(12.3)	2.7	1.1	0.3	B	7.1	0.7	0.4	(2.5)		不明	
不明	(16.0)	2.4	1.0	0.3	D	10.1	0.6	0.4	(3.5)		小さな逆刺

IV 総括

今回調査を実施した城ノ下A地点遺跡からは、弥生時代後期の遺構と古墳時代の遺構が出土している。ここでは、それぞれの時代ごとに考察を加え、まとめに代えることとする。

(1) 弥生時代後期の集落跡について

調査の結果、丘陵尾根上平坦面及び斜面から竪穴式住居23軒、住居跡状遺構5か所、掘立柱建物跡2棟、テラス状遺構2か所、土壇9基及び貝塚を検出し、遺物として弥生時代の土器、鉄器および青銅器が出土した。

焼失住居の炭化材について（第6図、第19図）

本遺跡第4号住居跡及び第16号住居跡からは多量の炭化材が検出された。これらの炭化材の樹種の同定を行ったところ、第4号住居跡から検出された炭化材は、大部分がシイ属の一種で、一部にクリが含まれていた。第16号住居跡から出土した炭化材は、大部分がクリで、一部にマツ属の一種が含まれており、これらは、現在の本地域周辺の植生に見られる樹種である。このことから、住居を建てる時ある特定の樹種を選んで使用していることがわかる。ただ、第4号住居跡と第18号住居跡では、選ばれた樹種が異なっており、この2つの住居跡の相違が時期の差によるものか、それを取り巻く時代の環境の違いによるものか、住居跡の大きさに伴う部材の大小によるものかは明確にし得なかった。今後の資料の増加を待って再度検討を加えたい。

弥生時代集落構成の変遷について

本遺跡の集落構成を立地の状況から概観すると、第1号～第9号住居跡、第2号住居跡状遺構、及び第1号テラス状遺構から構成される東側住居跡群、第10号～第19号住居跡、第3号住居跡状遺構と第1号掘立柱建物跡から構成される中央部住居跡群及び第20号～第23号住居跡、第4号・第5号住居跡状遺構、第2号テラス状遺構及び第1号掘立柱建物跡から成る西側住居跡群という3群に分けることができる。東側住居跡群は尾根上平坦面とその周辺に住居跡、住居跡状遺構とテラス状遺構を配し、平坦面上には空地が存在しており、遺構の配置から、同時期に営まれたと考えられる住居跡の件数は最大5軒と考えられる。また、本住居跡群で、同一プラン内、あるいは先行する住居跡に重複する形での建て替え、拡張を行っているものは第1号・第3号～第8号住居跡であるが、全て1回の建て替えあるいは拡張に限られ、存続期間は後述する中央部住居跡群の住居跡に比べて短いと考えられる。

中央部住居跡群は尾根上の鞍部のほぼ平坦な部分を中心として造られており、遺構の配置及び出土遺物から同時期には少なくとも3軒程度の住居が営まれていたと考えられる。住居跡は第10号～第12号住居跡が最低2回、第13号～第15号住居跡は最低4回、第16号～第19号住居跡が最低4回の建て替え、あるいは拡張を行っており、比較的住居跡群の存続期間が長かったものと考えられる。

西側住居跡群は尾根が南西方向と北西方向へ分岐する地点の尾根上に位置する住居跡群であるが、古墳群築造時に大幅な削平を受けており、立地、及びその概要については不明瞭である。第20号・第21号・第23号住居跡は中型～大型の住居跡であり、周辺に第22号住居跡、第4号・第5号住居跡状遺構が造られている。遺構の配置及び出土遺構から本住居跡群において同時期に営まれていた住居跡及び住居跡状遺構は2～3軒程度で

あったと考えられる。

本遺跡からは第13号住居跡から出土した上深川Ⅰ式に属する土器(12)を始めとして、上深川Ⅱ式及び上深川Ⅲ式(古段階)とそれに並行すると考えられる弥生時代終末期～古墳時代初頭の時期の土器が出土している。ただ、12は上深川Ⅱ式の土器と共伴しており、第13号住居跡の便用開始時期が上深川Ⅱ式の時期まで下がる可能性も考えられる。このことから、集落の開始時期は上深川Ⅰ式の終わりかあるいは上深川Ⅱ式の初めの時期あたりにあり、上深川Ⅲ式(古段階)の時期に終焉を迎えるものと考えられる。

次に、土器の出土状況についてみると、先述のように本遺跡で最も古く位置づけられる上深川Ⅰ式の土器は中央部住居跡群の第13号住居跡から出土している。上深川Ⅱ式の土器は集落全体を通して出土している。また、上深川Ⅲ式(古段階)は西側住居跡群の第2号テラス状遺構及び東側住居跡群の第2号住居跡状遺構のみから出土しており、それと並行する時期の土器(43)が東側住居跡群の貝塚から出土している。また、前述したごとく、上深川Ⅱ式でも新しい時期に入ると考えられる土器の多くが東側住居跡群周辺から出土している。

住居跡のプラン及び規模についてみてみると西側及び中央部住居跡群では円形に近いプランを持つ中型から大型の住居跡が多く、東側住居跡群では比較的小型の方形又は隅丸方形のプランを持つ住居跡が多い傾向がみられる。これは、立地の相違による結果というとりえ方もできようが、前述したごとく東側住居跡群周辺から出土する遺物に比較的新しい時期のものが多く、一般的にいわれる住居跡プランの円形から方形への変化の結果というとりえ方も可能である。

以上のことから本遺跡の集落は上深川Ⅰ式の終わり、若しくは上深川Ⅱ式の初期に成立し、生活の中心を中央部住居跡群から、次第に東側住居跡群に移しながら、上深川Ⅲ式(古段階)の時期には廃棄されたものと考えられる。なお、その場合、上深川Ⅲ式(古段階)の土器については、出土例がわずかに2点と少なく、上深川Ⅱ式(古段階)でもかなり早い時期に集落が終焉を迎えたことが想像できよう。

最後に本遺跡と周辺遺跡の関係、及び弥生時代後期から古墳時代初頭の集落立地の変遷について考察を加えてまとめとしたい。石内川、八幡川流域において、城ノ下A地点遺跡と規模、時期共にほぼ同様な遺跡として下沖5号遺跡、浄安寺遺跡、小林A地点遺跡などがある。これらは、出土遺物や存続時期に若干の相違は有るものの、尾根上の比較的平坦な所に位置する中～大型住居跡と斜面にみられる小型の住居跡が一体となって集落を形成しているという点において城ノ下A地点遺跡と共通しており、それぞれ同時期に存在していたことが考えられることから、石内川、八幡川流域においては普遍的な集落の形態の一つであるといえよう。

また、城ノ下A地点遺跡を見下ろす丘陵上に位置する、小林B地点遺跡からは周囲に溝を伴う土壙墓6基が検出されている。城ノ下A地点遺跡からは弥生時代のものと考えられる墓の跡は検出されておらず、小林B地点遺跡が城ノ下A地点遺跡を見下ろす尾根上に位置しているという点、時期が城ノ下A地点遺跡の存続期間の中心的な時期とほぼ一致すること等から、城ノ下A地点遺跡に関係する墳墓群と考えることも可能であろう。

最後に、集落と古墳群との関係についてであるが、従来、市域において弥生時代後期の集落と古墳の立地に共通点が多く、しばしば重複した形で検出されており、当遺跡の場

合はその好例と言えよう。これは、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての時点で集落立地に大きな変化が生じたことを示しており、それについては古墳時代初頭における集落立地の変化と古墳文化の受容とが密接に関係しているとの考え方もある。(1)城ノ下A地点遺跡の場合、集落及び古墳群に伴うと考えられる遺物に着目すれば、集落の終焉と古墳群の造営開始の時期が近接しており、その両者の間に密接な関係が予想されることから、集落立地の変化の原因を考察する上で極めて示唆的な事例であると言えよう。

(2) 城ノ下古墳群について

城ノ下古墳群からは、古墳10基、土壙墓1基を検出した。ここでは、まず、古墳群全体の変遷、及び古墳群全体の特色等を述べたのち、本古墳群中最大かつ最も豊富な遺物の出土した第1号古墳について考察を加えることで本古墳群のまとめとしたい。

古墳群の変遷について城ノ下古墳群は、円墳2基、方墳8基からなっており、周囲に溝を掘り込んだ後に若干の盛土を施したもの(第5号、第6号、第7号、第8号、第9号古墳)、墳丘の大部分を地山を削り出すことによって形成するもの(第2号、第3号古墳)、墳丘の大部分を盛土を施すことによって形成するもの(第1号、第4号古墳)の三種類に分類できよう。また、主体部の構造から言えば、2基が石棺であるほかは、すべて木棺直葬のものである。なお、第10号古墳については基底部分と周溝を残すのみであり、築造方法及び主体部の構造については明確にしがたい。ただ、建物跡の柱穴が墳丘上に残っていることから、それほど大きくは削平を受けていないことが推定されるため、周囲に溝を掘り込んだ後に若干の盛土を施した程度のものであったと考えられる。

出土遺物からみると、墳丘内及びその周辺から土器が出土したものについては、土師器の出土したもの(第6号、第7号古墳)、須恵器の出土したもの(第1号、第3号、第4号古墳)に分かれる。副葬品をみると、金銅製垂飾や短甲等豊富な遺物を出土した第1号古墳は例外として全く副葬品を持たないもの(第2・6・7・8・9号墳)や鉄製品1点のみを副葬するもの(第3号古墳A・B主体、4・5号古墳、土壙墓)にとどまる。出土した鉄製品の種類については、刀子2、鉄鍬1、鉄鑿2である。特に、第4号古墳及び第5号古墳出土の刀子については、いずれも使用による磨滅が著しく、被葬者が生前使用していた日用品をそのまま副葬した可能性が強い。このことは、他の古墳についても同様と考えられ、豊富な副葬品の出土した第1号古墳との格差は歴然としている。また、第1号古墳は例外として、古墳群全体の遺物出土量は、同時期の太田川流域の古墳群と比して極めて少量な例の一つと考えられよう。その場合、同一古墳群内においてただ一基のみ他に倍する規模を誇り豊富な副葬品を持つ第1号古墳のあり方は、この地域における首長権の継承の様相の一端を示唆していると考えられ、前方後円墳で幅2・3m、推定長7mとも言われる粘土槨を主体部に持つ倉重向山古墳、銅鏡をはじめ多くの副葬品を出土したと伝えられる高井古墳等規模内容的に優れた古墳の分布状況と共に注目される。

次に本古墳群の築造時期及び築造順序についてであるが、もっとも早く築造されたのは、古墳群中最も古い土器を出土した第6号古墳であろう。第6号古墳の主体部には、弥生時代の墳丘墓の系譜を引く「木槨構造」が採用されている可能性が考えられ、弥生時代とのつながりを強く感じさせる。(2)これに続く時期の古墳として第7号古墳があげられる。時期的には、第6号古墳を古墳時代初頭に、第7号古墳をそれに次ぐ時期に位置づ

けておきたい。これらの古墳から出土した土師器は、畿内を中心に広く全国に分布する壺形土器に類似するものであり、市域はもとより県内においても稀少なものであることから、当地域と畿内勢力との関係が注目される。これらに次ぐ古墳で時期の明確なものは、第3号古墳、第1号古墳、第4号古墳であろう。墳丘出土の須恵器から第1号古墳は5世紀後半でも早い時期、第4号古墳は5世紀終末であり、第3号古墳については主体部出土の鉄錐の形式及び出土須恵器が古式のものであることから、一応5世紀中葉かそれを若干遡る時期と考えておきたい。また、土層観察及び切り合い関係から言えば、第2号古墳は第1号に先行しており、第5号、第6号古墳より後出であること、第6号古墳が第3号古墳より先行すること、第10号古墳が第1号古墳より先行すること等があげられる。特に、第6号古墳及び第10号古墳については、第2号古墳及び第1号古墳によってそれぞれ大規模な削平を受けており、第2号古墳及び第1号古墳造営時には既にその存在を意識されていなかったと考えられるため、第1号古墳と第10号古墳、第2号古墳と第6号古墳との間に大きな時間的隔たりをうかがわせる。以上のことから総合的に判断すれば、出土遺物から第6号古墳→第7号古墳→第3号古墳→第1号古墳→第4号古墳の順序となり、第2号古墳及び第5号古墳については、前述した切り合い関係、須恵器を伴わない点、県内の石棺を主体部とする古墳の多くが5世紀代を中心として位置づけられている点などを勘案した場合、4世紀終末から5世紀前半となる可能性が高いため、第7号古墳と第3号古墳の間に時期的には位置すると言えよう。また、第10号古墳については、第1号古墳築造時にその存在を意識されていないことから、築造時期がかなり離れていると考えられ、第1号古墳築造時に第2号古墳を意識して墓域の設定が行われているかに見えることと対照を成しており、少なくとも第10号古墳は第2号古墳よりも先行する時期のものである可能性が高い。これは、墳丘の築造方法の相違から考えても首肯し得る。第8号、第9号古墳については、出土遺物も皆無であり、他の古墳との切り合い関係も明確でないため、時期は明確にし得ない。ただ、第9号古墳の東側の溝を深く掘り替える形で第8号古墳が造られており、尾根線を外れた位置に造られているという点でも他の古墳と大きく異なった共通点であり、互いに近接した時期に造られていると言うことができよう。

また、第3号古墳墳丘下の溝状遺構についてであるが、土層観察によれば本古墳群中最古と考えられる第6号古墳より先行した遺構であり、第6号古墳、第7号古墳、第8号古墳、第9号古墳などの周溝と類似した形態を取っていること、北端及び南端において第3号古墳の墳丘を取りまくように曲がること、スペース、周囲の景観、高さのどれを取っても古墳築造の条件としては第6号古墳や第7号古墳より優れていること、本来円墳であるはずの第3号古墳の墳丘北側の一部に方墳状に直線的に削られた部分があること、などからプレ第3号古墳とも言うべき古墳の周溝の一部であった可能性が想定出来よう。その場合、この古墳が本古墳群中最古と言うことになり、第6号古墳、第7号古墳、第8号古墳、第9号古墳については、プレ第3号古墳を取りまくように順次築造されていった可能性も考えられる。とりわけ、溝状遺構の形態と第8号古墳、第9号古墳の周溝の形態が酷似しており、プレ第3号古墳の時期が本古墳群中最古となる可能性が強いだけに第8号古墳、第9号古墳の時期を考えるうえで示唆的である。

以上、大胆な推測を許していただけるなら、次のとおりとなる。

(第9号古墳→第8号古墳)(第10号古墳)
プレ第3号古墳→第6号古墳→第7号古墳→第5号古墳→第2号古墳
く古墳時代初頭>く古墳時代前期>
→第3号古墳→第1号古墳→第4号古墳
く5世紀中葉>く5世紀後半>く5世紀終末>

すなわち、城ノ下古墳群は古墳時代前半期全期間を通して代々築造された世代墓であり、被葬者はおそらく石内川、八幡川流域の一部を掌握した有力家族の長の一人であった可能性が高い。ただ、! 第5号古墳を境として一点とはいえ鉄器の副葬が行われている点(但し、第2号古墳を除く)、”5世紀終末と考えられる第4号古墳以降古墳の造営が終わる点、# 時期的に見て他の古墳と同様に世代墓の一つと考えられる第1号古墳のみが規模、副葬品とも群を抜いている理由等解決すべき多くの問題を含んでいる。特に! の変化が広島市域において豊富な副葬品を有する古墳の増加する時期と、”の変化が横穴式石室が全国的に導入される時期とほぼ同一であることは、広島湾頭における古墳文化の変遷と深く関わる問題であり興味深い。

また、隣接する丘陵上からは、溝で区画された墳墓が確認されており(小林B地点遺跡・小林A地点遺跡)、時期的に若干先行するものと考えられていることから、地理的に隣接する本古墳群との関係が注目されよう。

なお、土壙墓については住居跡埋没後の平坦面を利用して築造されたものと考えられ、明確な外表施設や供献土器等が確認できなかったため、時期等は明確にし得なかった。ただ、副葬品として土壙内から鉄器1点が出土しており、本古墳群において同様な出土状態の古墳についてはほぼ5世紀代の中におさまることから、同様な時期に築造されたものと考えられる。

第1号古墳について 第1号古墳は、5世紀後半の古墳であり、市内はもとより県内においても出土例の少ない短甲を初めとする豊富な鉄製品とともに全国的にも類例の稀な金銅製の垂飾が出土しており注目される。また、古墳群内の他の古墳が、一辺10m前後、高さ1m程度と小規模であり、内容的にも副葬品を全く持たないか或いは小型の鉄製品を1点副葬するのみであるのに対して、第1号古墳は長径21m、短径14m、高さ2mと他に倍する規模を誇り、副葬品の内容の点でも質・量ともに格段の差を有している。このような格差が如何なる原因によって生じたものか、周辺の古墳の状況が明確でない現在明言はしがたいが、少なくとも第1号古墳のみが突出しており、その後に造営された第4号古墳が古墳群中での優越性を全く感じさせないという事実は、第1号古墳の優越性が一代限りで終わらざるをえないような性格のものであったことを示していると考えられよう。

周辺で現在知られている古墳は少なく、そのほとんどは横穴式石室を主体部とするものである。また、調査された例は極めて少なく、北に500mの位置に所在する和田古墳や八幡川・石内川による沖積地を挟んだ対岸の丘陵に所在する倉重向山古墳程度であろう。和田古墳は、微高地の水田中から発見された6世紀末から7世紀前半に比定される横穴式石室墳であり、馬具一式や鉄鏃、玉類等が出土している。倉重向山古墳は、石内川・八幡川流域を含めた広島湾西部地域で唯一の前方後円墳(全長38m)であり、前方部墳裾には貼石状の列石が巡り、墳丘斜面の一部には葺石の存在を予想させるなど、ほとんど葺

石の伝統を持たない広島湾沿岸において特筆すべき古墳の一つといえよう。また、銅鏡や鉄刀など数多くの副葬品を出土した高井古墳の存在も伝えられるが、大正時代の報告であり、位置についても現在明確にし得ない。谷を二つ隔てた西側には、月見城古墳群が存在しているが、11基の古墳から成り立っており、全体的には副葬品をあまり持たないものが多く、溝を掘る程度で明確な墳丘を持った古墳が少ない点に城ノ下古墳群との明確な相違を感じさせる。以上のように、城ノ下第1号古墳に匹敵するような古墳は、倉重向山古墳のみであり、全容は明確にしがたいが高井古墳がそれに次ぐ内容のものとしてあげられる程度である。しかし、盟主墳とも呼ぶべき大規模な古墳群の形成は見られず、当地域の盟主とも呼ぶべき地位が当地の有力家族の長の中の有力な人物により順次継承されていた可能性も考えられ、第1号古墳の特殊な在り方もそのような人物の一人を被葬者として持ったためと解釈出来なくもないであろう。

広島湾沿岸において、城ノ下第1号古墳に匹敵する副葬品を出土した古墳についてみると、中小田第2号古墳、三王原古墳、西尾古墳等があげられる。中小田第2号古墳は(3)、竪穴式石室を内部主体とする直径約15m、高さ2.5mの規模の円墳である。副葬品としては、素文鏡1、横矧板鋌留衝角付冑1、三角板鋌留短甲1の他、鉄鏃、鉄刀、鉄剣等の武器類や鉄製農工具類もあわせて多数の鉄製品が出土しており、内部主体の規模、形状および副葬品の豊富さから考えて、広島湾頭をおさえる有力首長を被葬者とする古墳と考えられる。西尾古墳は、広島湾東部に位置しており、竪穴式石室を内部主体とする長径20m、短径14m、高さ5mの円墳で、金銅装の蝶番金具を有する横矧板鋌留短甲1の他、鉄鏃、鉄刀、鉄錐、轡、ガラス小玉等の出土が伝えられている(4)。時期は、墳丘周辺で須恵質の円筒埴輪を表採しており、その形式から考えて、5世紀中葉をそれほど大きくは下らない時期と考えられる。三王原古墳(5)は、広島湾頭太田川流域西岸に位置しており、早い時期に破壊されたため全容は明確にしがたいが、竪穴式石室を内部主体とする円墳であったと考えられる。副葬品としては、銅鏡1面の他、ガラス製玉類、鉄鏃、鉄刀、鉄剣、鉄鏃等の多数の鉄器の中に馬具や短甲残欠等も含まれていたと伝えられており、馬具が副葬されているにもかかわらず須恵器の出土が伝えられていないことから、5世紀でも中葉を若干さかのぼる時期と考えられる。

この他、竪穴系横口式石室という待異な内部主体をもち、蛇行剣身や三輪玉等の遺物を出土した空長1号墳や、盗掘を覚けているため全容は明確にしえないが、多量の鉄製品の副葬が推測され、竪穴式石室を内部主体に持ち、市域の古墳としては稀な円筒埴輪や須恵質の埴輪、形象埴輪、葺石等の外表施設を有する池の内第2号古墳等、いずれも副葬品や規模の点で市域を代表する様な古墳の多くが、須恵器の国産化が行われる時期を前後して築造されている点で注目される。特に前述した短甲出土を伝えられる古墳がそれぞれ、中小田第2号古墳二広島湾中部太田川東岸、三王原古墳＝広島湾中部太田川西岸、西尾古墳＝広島湾東部、城ノ下第1号古墳二広島湾西部という古墳の多く分布する地域に対応するように分布しており、短甲配布の主体及びその契機が如何なるところにあるか興味をひかれるところである。安芸国最大の前方後円墳である三ツ城吉墳がほぼ同時期の築造であるにもかかわらず、その副葬品に甲冑を含んでおらず、広島湾周辺の同時期の古墳の様相と対照をなしている。被葬者の性格が異なるためか、地理的条件の相違によるためか明確にはしがたいが、県内における短甲出土の古墳(黒崎山古墳、三玉大塚古

墳，八幡山古墳）が，海上交通や陸上交通の要地に分布しており，他地域においても同様の分布状況が予想されるとの論考（6）もあることから，瀬戸内海のほぼ中央に位置するという広島湾の地理的な位置関係と5世紀中葉を前後するという築造時期，短甲という副葬品のもつ性格等を併せ考えるとき，当時期における広島湾周辺の果たした役割を想像させ興味深い。特に，城ノ下第1号古墳出土の金銅製品は，コイル状鎖と呼ばれる垂下飾をつけたもので，国内で同様の物を使用した例は新沢126号墳出土の物が唯一知られるのみという（7）。ただ，当古墳出土の物は，コイル状鎖を使用した垂下飾の例としては極めて質素なものであり，同様な垂下飾が伽耶地方の古墳出土品に多く見られると伝えられることから，彼の地からの舶載品とも考えられよう。また，短甲についても，横矧板鋌留短甲という最も量産化されたタイプの物であるが，蝶番金具が1本鋌という稀な特徴を持つもの（8）であり注意される。第1号古墳の被葬者の性格を考える場合，短甲にしる金銅製垂飾にしる中央勢力との関係なくしては入手困難な物品であり，当古墳の被葬者の中央勢力との強い結びつきを感じさせるが，そのみではなく，特に金銅製品の特殊性に注目すれば朝鮮半島との何らかの関係をも考慮しておく必要がある。

城ノ下第1号古墳を含めた短甲出土の古墳について見てみると，安芸国内において広島湾周辺に分布が集中していること，さらにそれらが5世紀半ばを前後してほぼ一斉に築造されていること等の事実は，その時期に広島湾周辺の勢力と中央勢力との関係が，直接的にか間接的にか急速に接近した事を予想させる。それは，言い換えれば，短甲の配布された5世紀中葉を前後するある時期に，広島湾周辺の地理的重要性が増加する状況が生じたことを示しているとも考えられよう。城ノ下古墳群で生じた如き，同一古墳群内で特定の古墳のみが突出して規模内容共に優越するようになる例は市域においては稀である。これが，当地域を取り巻くいかなる政治情勢を反映したものかは明確にしがたいが，倭の五王の活躍したと言われる5世紀に，それも朝鮮半島との関係による影響のもとで，広島湾周辺一体を巻き込んで創り出されたある状況の結果と考えられる。また，このような状況は，5世紀段階における他の地域の短甲を出土した中小古墳とも相い通じる様相を示しているとも考えられ，貴重な資料を加えることが出来たと言えよう。ただ，市域における古墳文化の全体像については不明確な部分が多く，今後解決して行くべき問題点を多く残したとも言える。

注）（1）広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良事業地内遺跡群発掘調査報告』1988

（2）広島県内においても，佐田谷第1号墓，槇ヶ坪第2号遺跡SK1等が2重構造を持つ墳墓の例としてあげられよう。ただ，前者が後期初頭，後者が中期後葉と弥生時代でも比較的早い時期の例であり，時期の点で関連性に疑問を残す。

広島県教育委員会『佐田谷墳墓群』

（財）広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群1』1990

（3）広島市教育委員会『中小田古墳群』1980

（4）矢野町編『広島県矢野町史』1958

（5）中田昭「広島市砥園町二王原古墳について」『芸備』第1集1973

（6）田中新史「5世紀における短甲出土古墳の一様相～房総出土の短甲とその古墳を

中心として～』『史館』第5号 1975

(7) 中村潤子「日本と朝鮮半島の金工品」『季刊考古学』第33号 1990

(8) 滝沢誠「鋌留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号 1991

〈参考文献〉

広島県『広島県史・考古編』1979

広島市『新修広島市史』第1巻総説編 1961

[付編]

広島市城ノ下 A 地点遺跡出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・佐伯和信*

キーワード：広島市，古墳時代人骨，男性，保存不良

はじめに

城ノ下A地点遺跡は広島市佐伯区五日市町大字口和田に所在し，広島市西部の石内川と八幡川沿いの平野を望む小高い尾根上に立地する遺跡で，弥生時代後期の住居跡と古墳時代の墳墓群からなる複合遺跡である。この遺跡の発掘調査が大規模な住宅造成工事に伴い，1990年から1991年にわたって行われ，その結果，古墳時代に属する2基の墳墓から2体の人骨が出土した。本遺跡からは10基の古墳が発見されたが，内部主体はそのうちの2基が石棺で，残りは木棺である。人骨はいずれも石棺から検出された。

現在までに広島県下で古墳時代人骨が出土した地域は，広島市よりも東部地域に限られているようである。本例は広島市の西部地域にあたり，広島市域あるいは広島県内での古墳人の地域差を考える上では貴重な情報を提供してくれる人骨と期待され，その形質的特徴が注目されたが，人骨の保存状態は悪く，古墳人骨の特徴を明らかにすることはできなかった。しかし，出土人骨の性別，年齢を推定することができたので，その結果を報告しておきたい。

資 料

表1 出土人骨一覧 (Table1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年 齢
2号墳人骨	男性	成年～壮年
5号墳人骨	男性	熟年

本遺跡から出土した古墳時代人骨は合計2体で，表1に示すとおり。両者とも成人骨であり，性別は下記の所見より，男性と推定した。

各人骨の残存状態は図2に示すとおりで，残存量は少ない。

この2体の人骨は，別稿で述べられているように，考古学的所見より，古墳時代（5世紀）に属する人骨群である。

* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

[長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）]

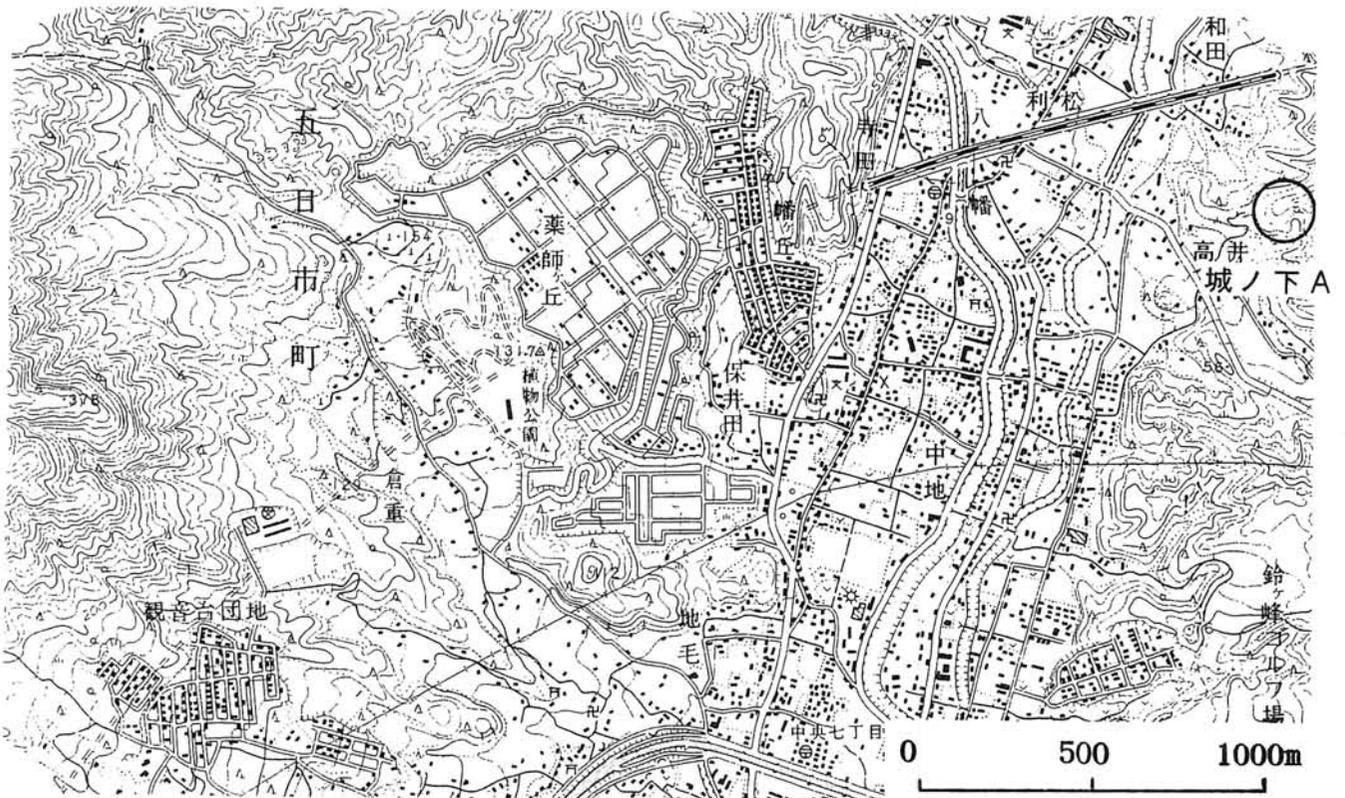
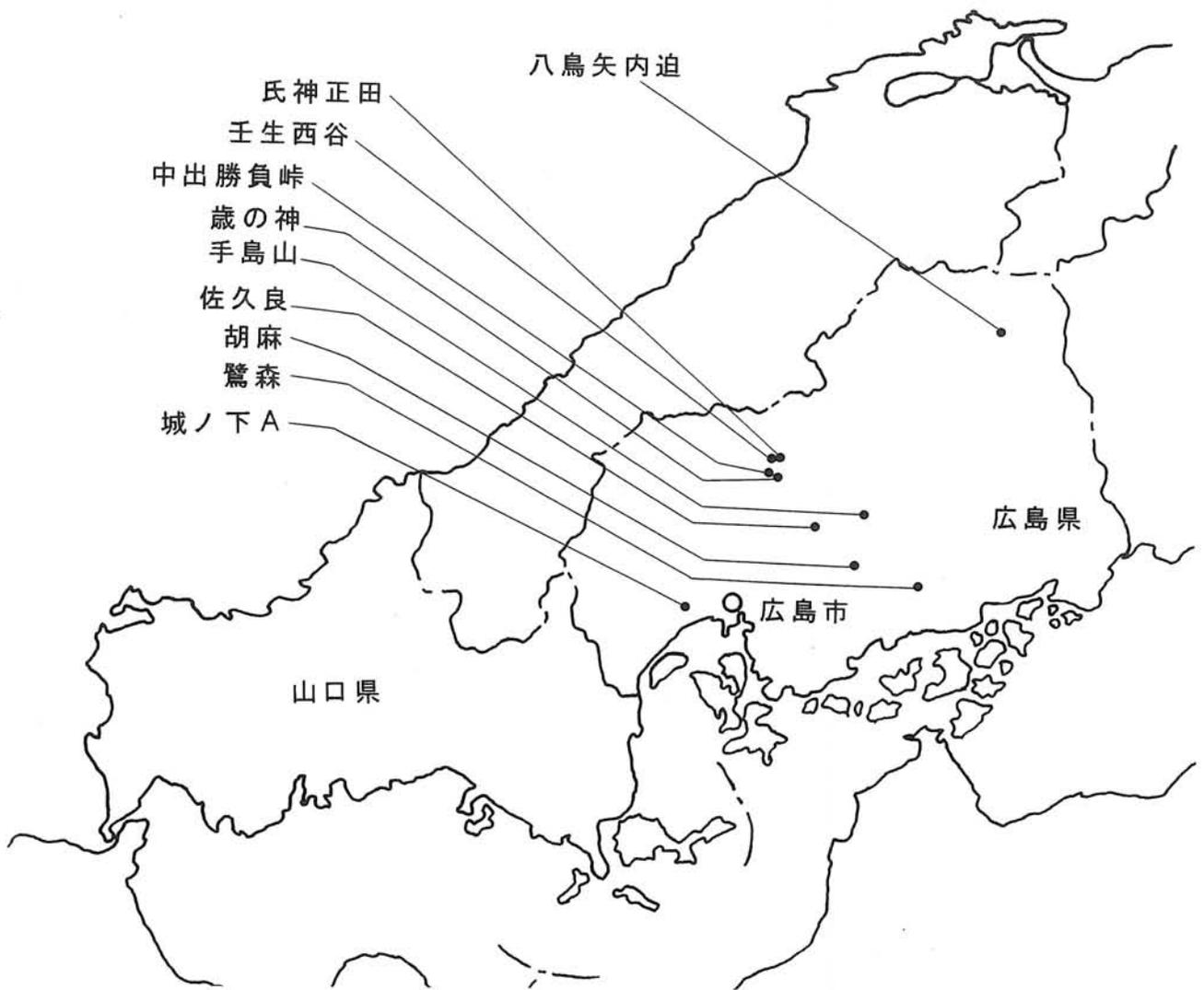


図1 遺跡の位置 (Fig.1. Location of the Jonoshita A site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture)

所 見

2号壊人骨（男性，成年～壮年）

1. 埋葬状態

内部主体は組合式箱式石棺で、広島県で古墳時代の石棺として普通使用されている厚手の花崗岩の切り石で造られている。残存していたのは頭蓋（後頭部）と左右大腿骨の一部と考えられる骨片であった。埋葬姿勢は頭蓋の状態から、仰臥であったと考えられる。上下肢の状態は、上肢骨が全く残存していなかったため、上肢については不明であるが、下肢は大腿骨の骨片の位置から伸展の可能性が高い。

2. 頭蓋

脳頭蓋の後頭半が残存していたにすぎない。外後頭隆起の発達はやや良好である。外耳道は両側とも観察できない。縫合は、矢状縫合とラムダ縫合の観察が可能で、いずれも内外両板は開離している。頭蓋の計測はまったくできないし、頭型は観察によっても推測できない。

3. 性別・年齢

性別は、外後頭隆起の発達がやや良好であることから、男性の可能性が高い。年齢は、観察できた縫合がいずれも内外両板とも開離していることから、壮年ないしこれよりも若い成年と推測される。

5号墳人骨（男性，熟年）

1. 埋葬状態

本例も内部主体は組合式箱式石棺で、厚手の花崗岩製である。

残存していたのは頭蓋のみで、下顎骨と頭蓋底である。下顎骨と頭蓋底はその正中線が石棺の主軸とほぼ一致していることと石棺の長さが内法で約170cmであることから、埋葬姿勢は仰臥の伸展葬と考えられる。上下肢の状態は全く不明である。

2. 頭蓋

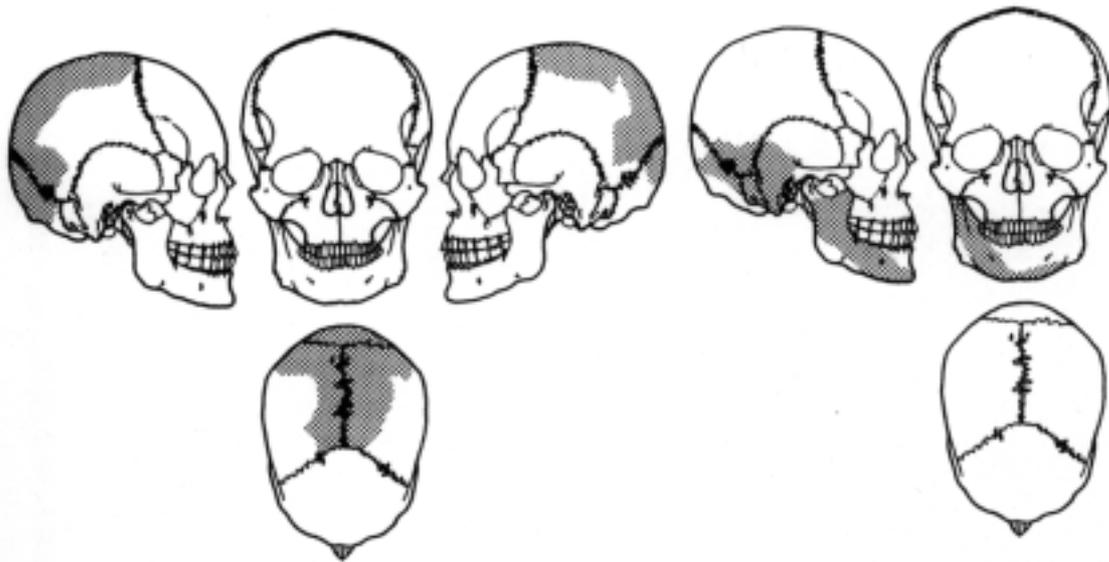
後頭骨と右側側頭骨および下顎骨が残存していた。外後頭隆起の様態は不明である。右側外耳道の観察ができたが、骨腫は存在しない。乳様突起はやや大きく、下顎骨の径もやや大きい。下顎体は低く、歯槽は一部しか観察できないが、右側の大白歯部は閉鎖していたものと考えられる。下顎枝は幅広く、筋突起は大きい。また、下顎枝の底部には著しい凹みが認められる。

また、遊離歯が4本存在する。うち1本は上顎右側の第一大臼歯で、残りの3本は下顎の小白歯であるが、咬耗が著しく、左右の判別ができない。これら4本の歯の咬耗度はBrocaの3度である。なお、風習的抜歯の有無と歯の咬合形式は不明である。

性別は、乳様突起がやや大きいことと下顎骨の径がやや大きいことから、男性と推定した。年齢は、正確には推測できないが、大白歯部の歯槽が閉鎖していること、歯の咬耗が強いことおよび下顎枝が後方へ傾いていることから、壮年などの若年層ではなく、少なくとも熟年に達していたものと考えられる。

要 約

広島市佐伯区五日市町大字口和田に所在する城ノ下A地点遺跡の発掘調査が1990年から1991年にわたって行われ、古墳時代の2基の墳墓から2体の人骨が出土した。出土例



2号墳人骨（男性・成年～壮年）

(Skeleton from No2 tumulus, adolescent~young adult male)

5号墳人骨（男性・熟年）

(Skeleton from No5 tumulus, mature male)

図2 人骨の残存部分，アミかけ部分

(Fig.2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

はできなかつた。人骨の残存部分や性別，年齢などは次のとおりである。

1. 本遺跡の古墳から出土した人骨は2体で，いずれも古墳時代（5世紀）に属する人骨である。
2. 人骨を出土した古墳の内部主体は2基とも組合式箱式石棺である。
3. 2体とも男性人骨である。2号墳人骨は壮年ないし成年と推定され，5号墳人骨は熟年と推測される。
4. 人骨の保存状態は悪く，計測が可能な骨は存在しなかつた。また，頭型は観察によつても推測できなかつた。
5. しかし，5号墳の被葬者の歯の咬耗度は著しく強く，また，下顎骨の様態から咬筋が強大であつた可能性があり，少なくとも下顎骨にはきゃしゃな様子は認められない。

参考文献

1. 池田次郎, 1953: 三ツ城古墳出土人骨, 並びに広島県下の古墳人骨について。三ツ城古墳 (広島県文化財調査報告 1): 48 - 51.
2. 池田次郎, 1979: 峠古墳出土人骨について。広島県安芸郡蒲刈町峠古墳発掘調査報告書: 22 - 25
3. 池田次郎, 片山一道, 1984: 広島県氏神正田遺跡出土の古墳時代人骨について。広島県山県郡千代田町氏神正田遺跡発掘調査報告: 13 - 18.
4. 松下孝幸, 1984a: 広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区白木町所在佐久良遺跡発掘調査報告 (広島市の文化財第 27 集): 25 - 46
5. 松下孝幸, 1984b: 広島市芳ヶ谷 3 号墳出土の古墳時代人骨。広島市安佐南区紙園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第 30 集): 61 - 68.
6. 松下孝幸, 1984c: 広島市末光遺跡群 B 地点出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区高陽町所在末光遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第 28 集): 90 - 95.
7. 松下孝幸, 分部哲秋, 中谷昭二, 1985: 東広島市大槓 3 号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槓遺跡群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告害第 38 集): 117 - 122.
8. 松下孝幸, 分部哲秋, 中谷昭二, 1986a: 歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告害第 49 集): 201 - 212.
9. 松下孝幸, 分部哲秋, 中谷昭二, 1986b: 中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告害第 49 集): 213 - 244.
10. 松下孝幸, 分部哲秋, 佐伯和信, 小山田常一, 1989a: 広島県千代田町壬生西谷遺跡出土の弥生時代人骨。壬生西谷遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告害第 75 集): 63 - 80.
11. 松下孝幸, 分部哲秋, 佐伯和信, 小山田常一, 1990: 東広島市胡麻 2 号古墓・胡麻 4 号遺跡出土の人骨。東広島ニュータウン遺跡群 I: 341 - 357
12. 松下孝幸, 佐伯和信, 小山田常一, 折原義行, 1990: 広島県西条町八鳥矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。(印刷中)
13. 松下孝幸, 太田純二, 分部哲秋, 佐伯和信, 小山田常一, 1991a: 広島県竹原市鷺森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告 (付編): 1 - 40
14. 松下孝幸, 佐伯和信, 小山田常一, 折原義行, 太田純二, 1991b: 広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群 (広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第 93 集): 61 - 80
15. 沢野十蔵, 長岡淳, 坂元保太郎, 1957a: 広島県下出土頭蓋 11 例。人類学輯報, 18: 373 - 386.
16. 沢野十蔵, 安沢清文, 米谷寛, 山口邦宏, 1957b: 広島県下から出土した古墳人骨の 3 例。瀬戸内海史跡, 1: 3 - 21.
17. 鈴木誠, 池田次郎, 1950: 広島県下箱式石棺出土の人骨に就いて。人類学輯報, 4: 1 - 8.
18. 安沢清文, 米谷寛, 1954: 広島県波多見の組合式石棺から出土した頭骨について (会)。解剖学雑誌, 29: 136.
19. 吉岡郁夫, 早川正市, 1979: 府中市千原古墳出土人骨。芸備, 8: 6 - 8.
20. 吉岡郁夫, 1985: 広島県の古墳時代人骨。芸備古墳文化論考: 105 - 117.

Human Skeletal Remains Excavated from the Jonoshita A Site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]

Keywords : Hiroshima Pref., Kofun skeleton, Male, Poor preservation

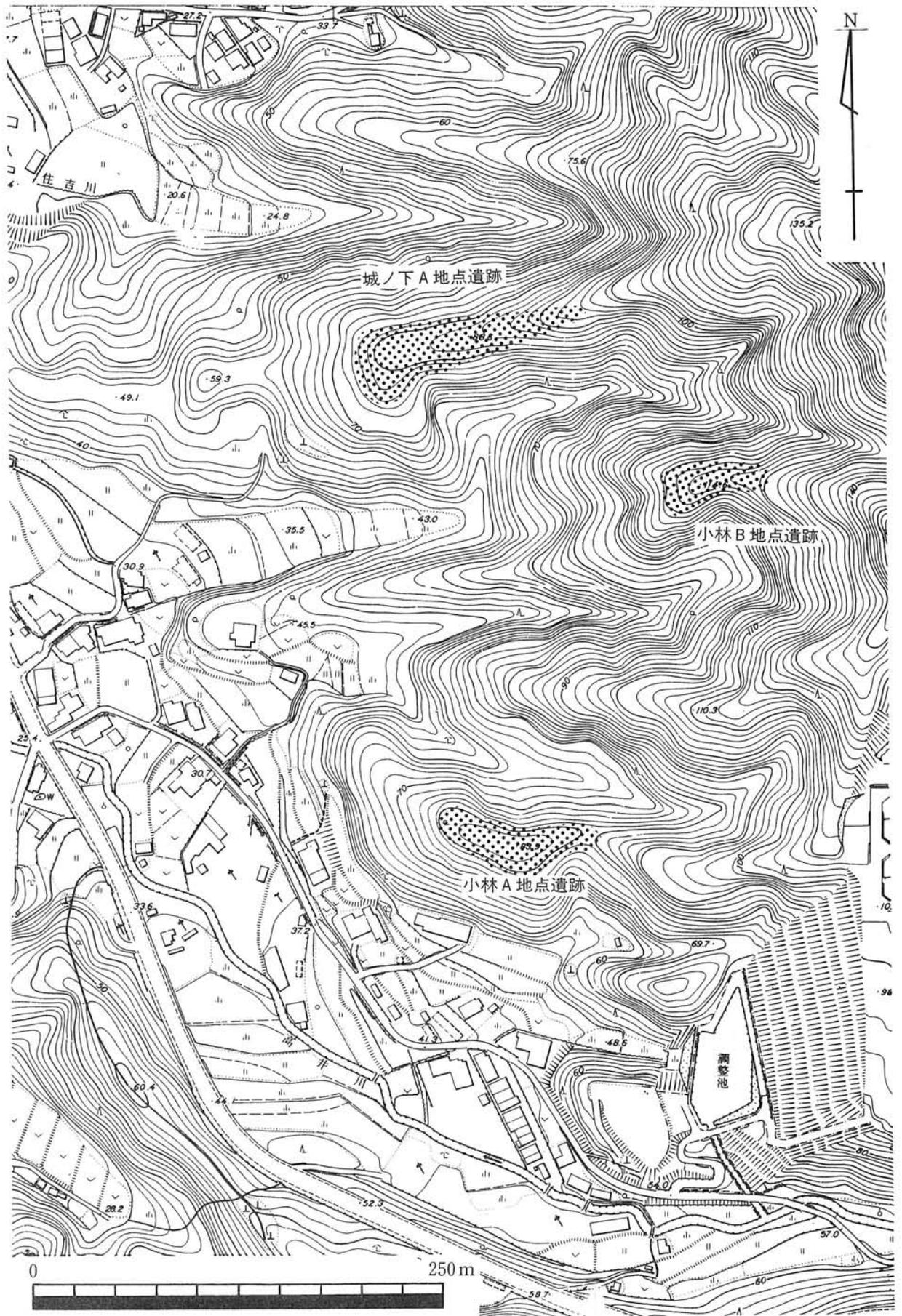
Two human skeletal remains dating the Kofun Period (5th century A.D.) were excavated from the tombs at Jonoshita A site, Hiroshima city, Hiroshima Prefecture, in 1990-1991.

An anthropological study of the human skeletal remains was conducted.

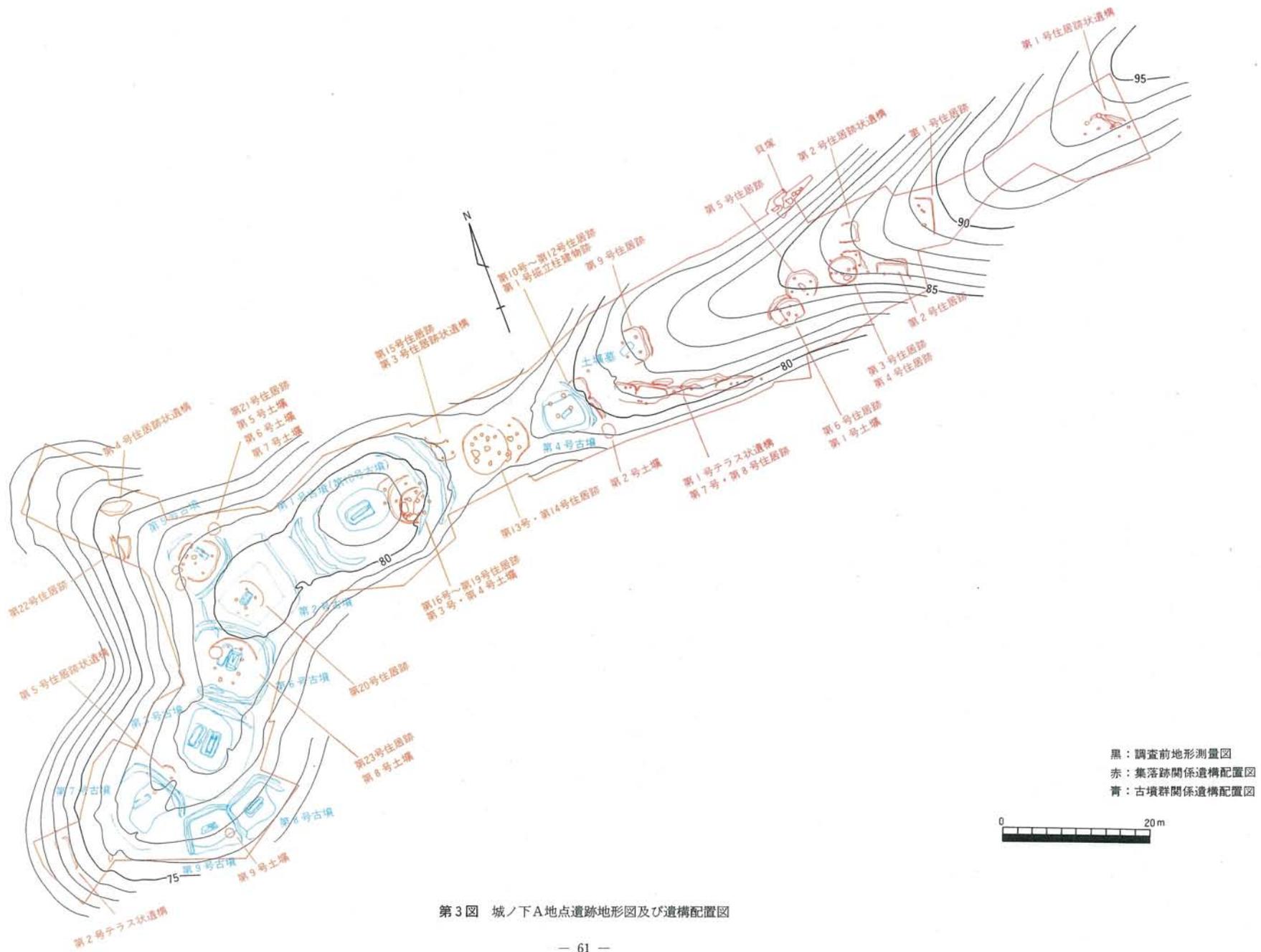
Skeleton from No.2 tumulus, a part of the skull and a fragment of the right femur, is presumed to be adolescent-young adult male.

Skeleton from No.5 tumulus, a part of the skull and the mandible, is presumed to be mature male.

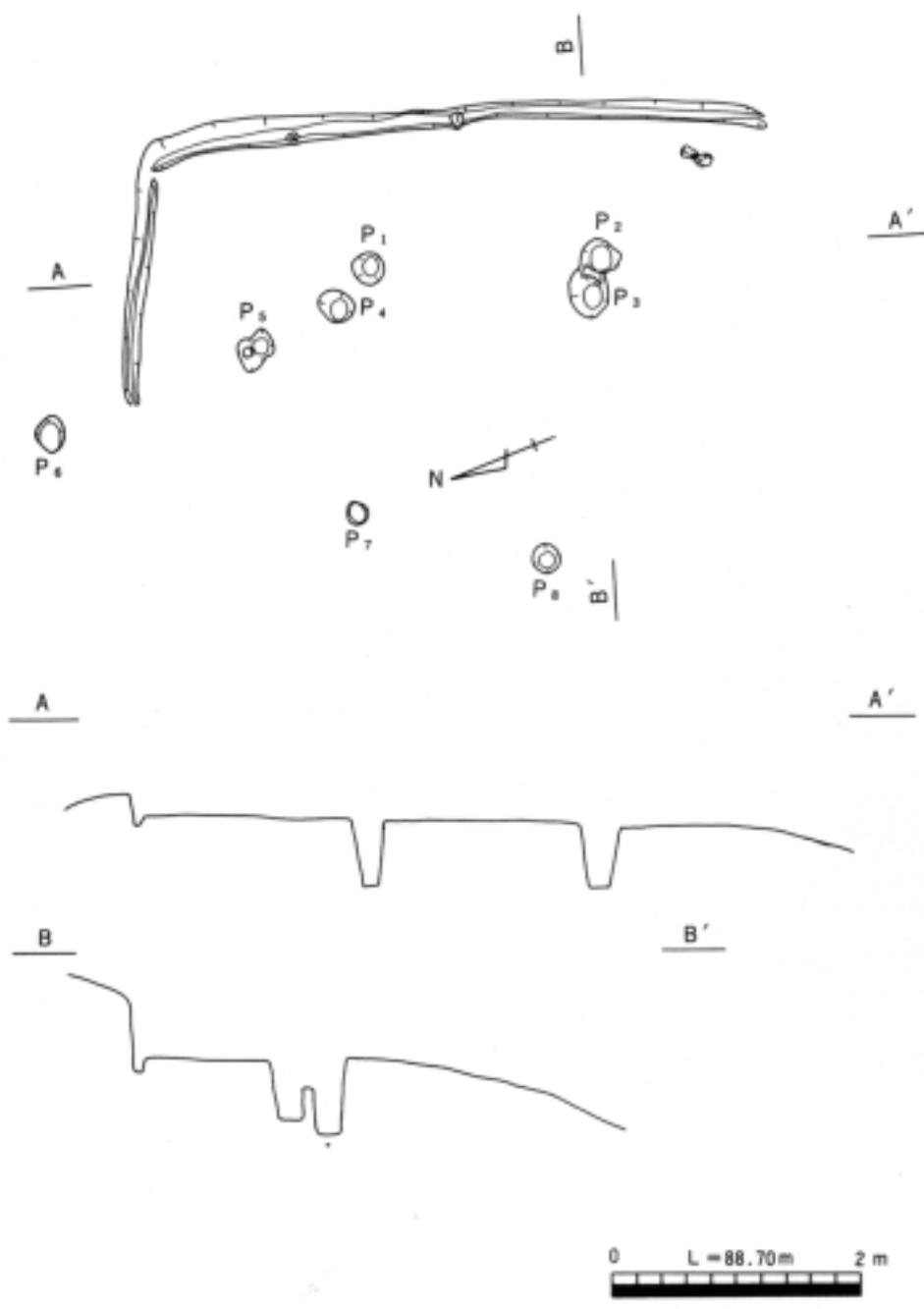
Due to the poor preservation of skeletons, it is not possible to clarify the cranial type, the feature of the facial skeleton and the estimated stature.



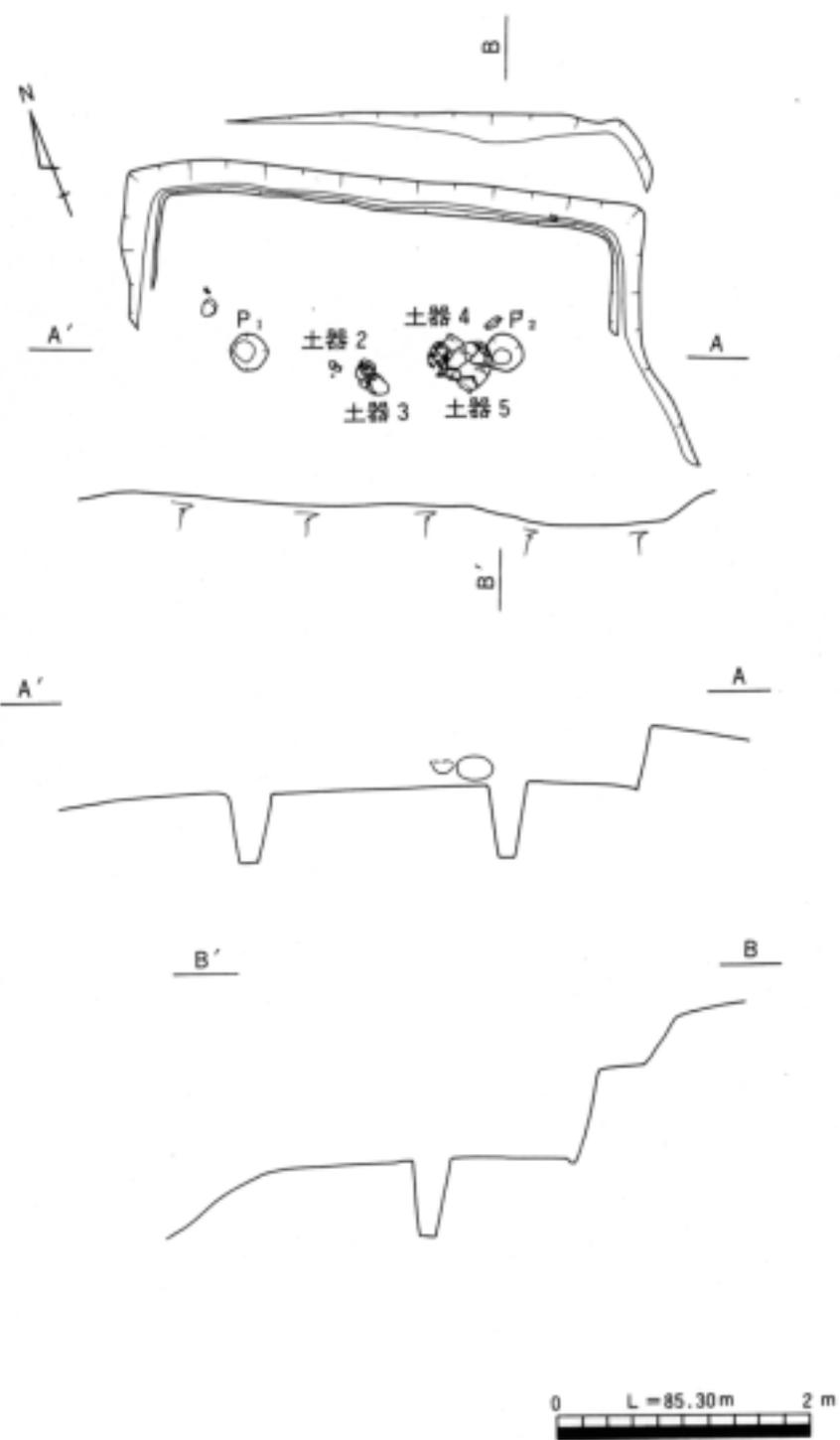
第2図 城ノ下A地点遺跡周辺遺跡配置図



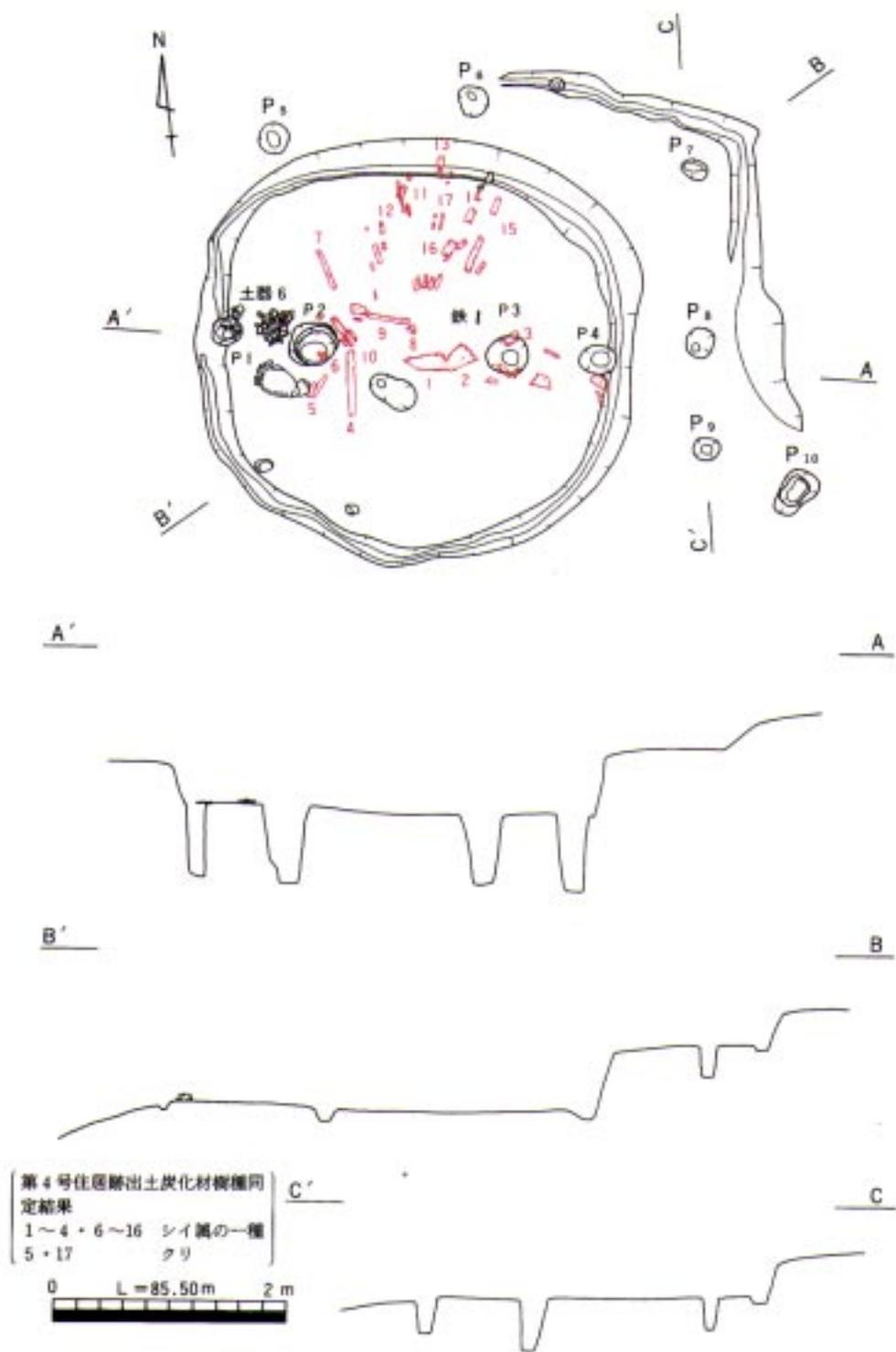
第3図 城ノ下A地点遺跡地形図及び遺構配置図



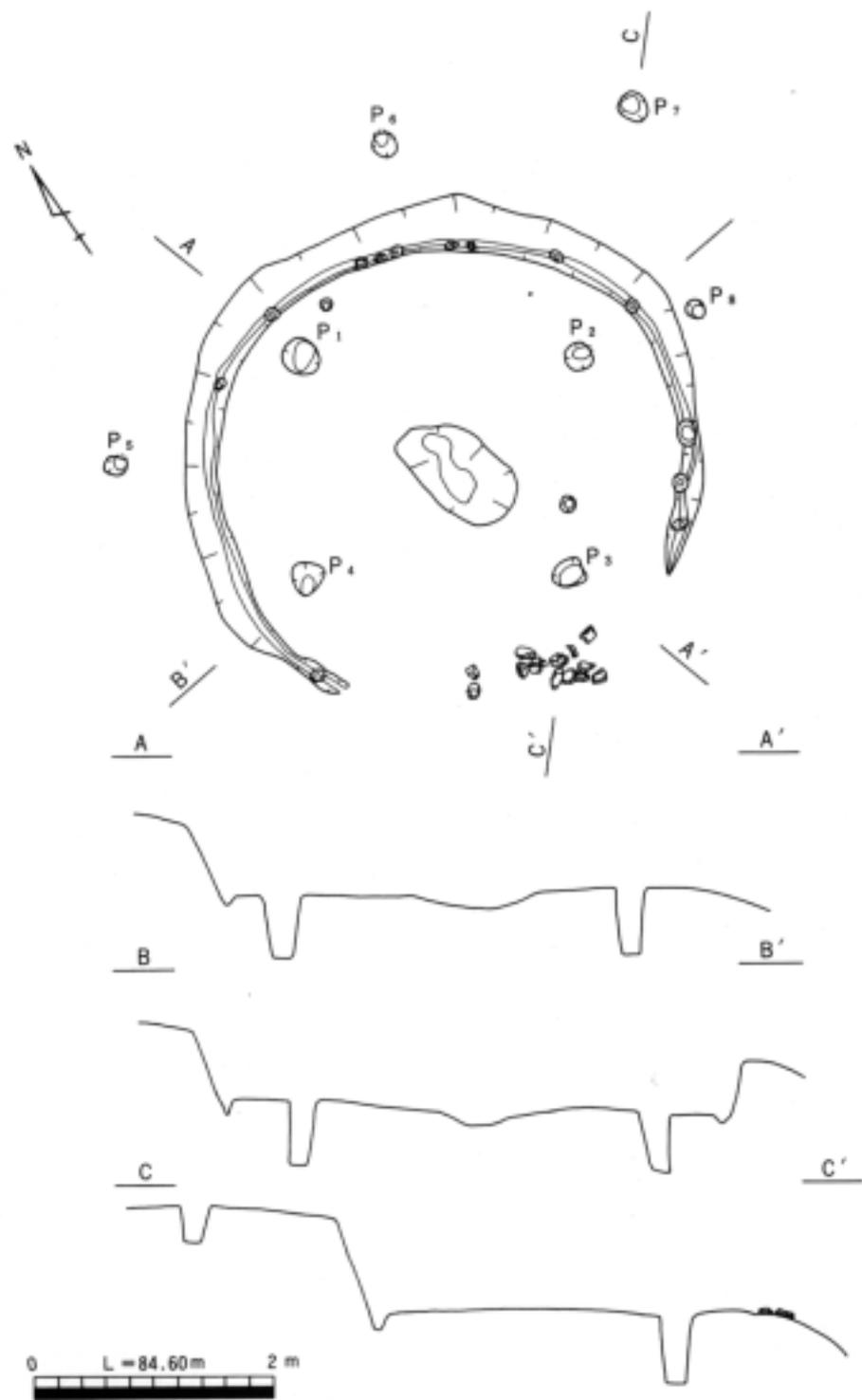
第4图 第1号住居跡実測图



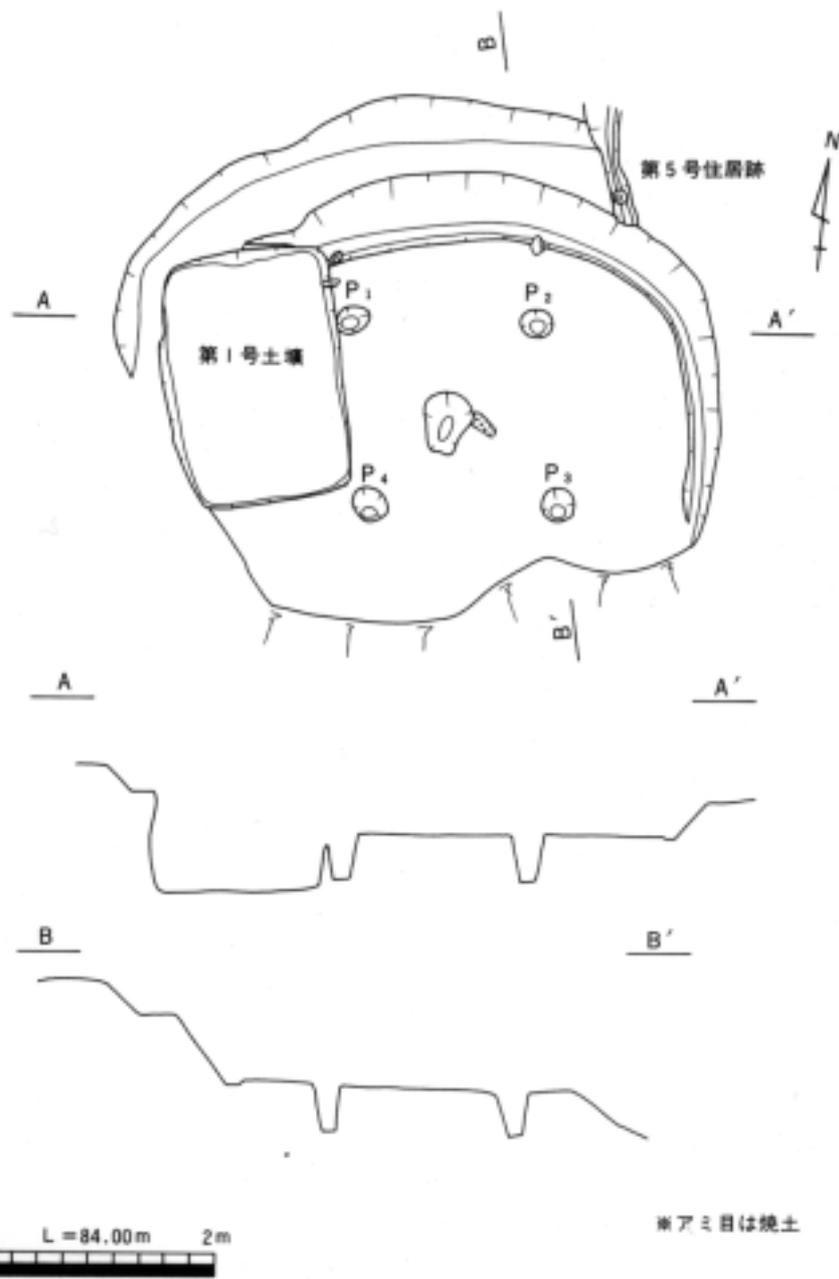
第5图 第2号住居跡実測图



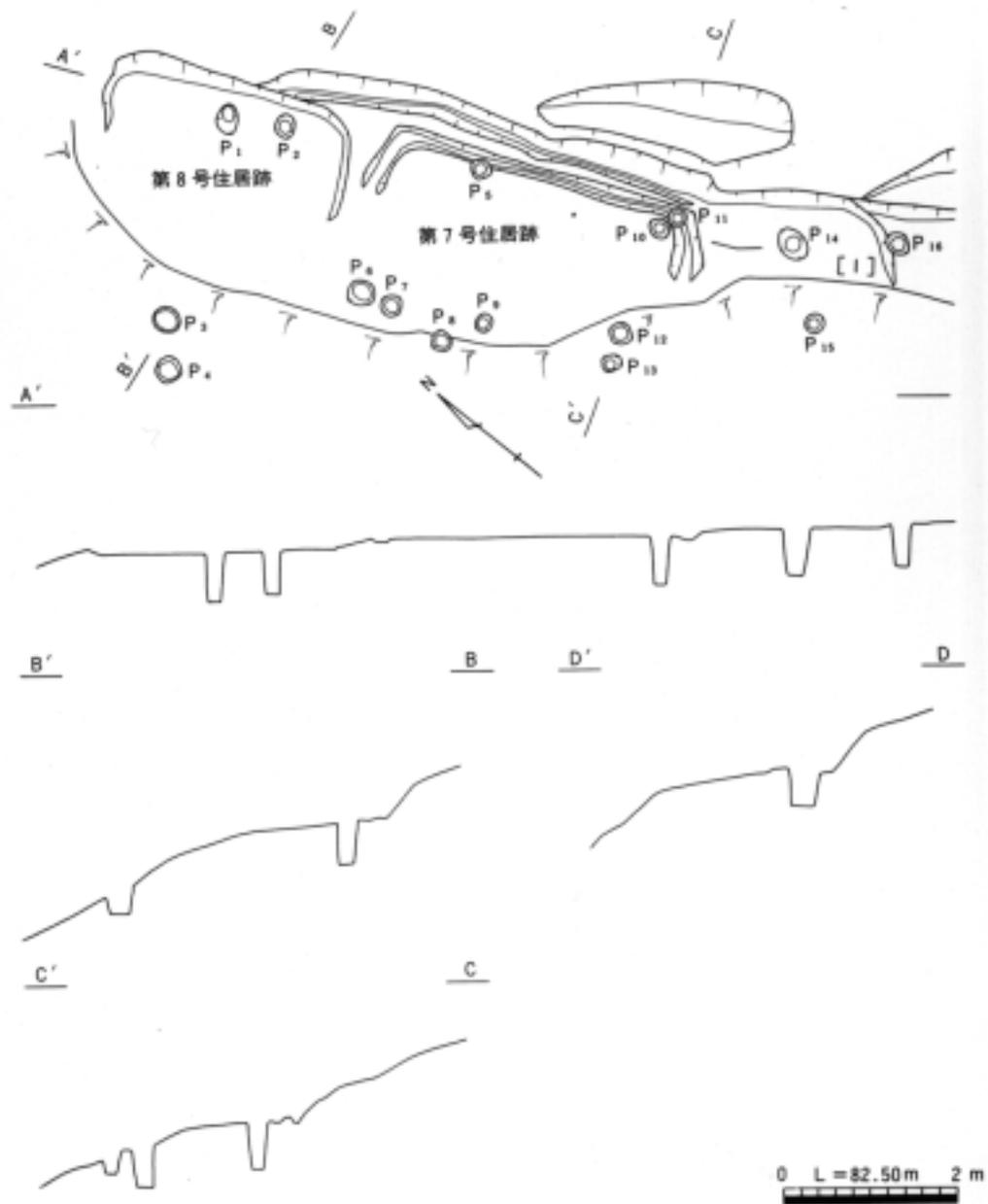
第6図 第3号・第4号住居跡実測図



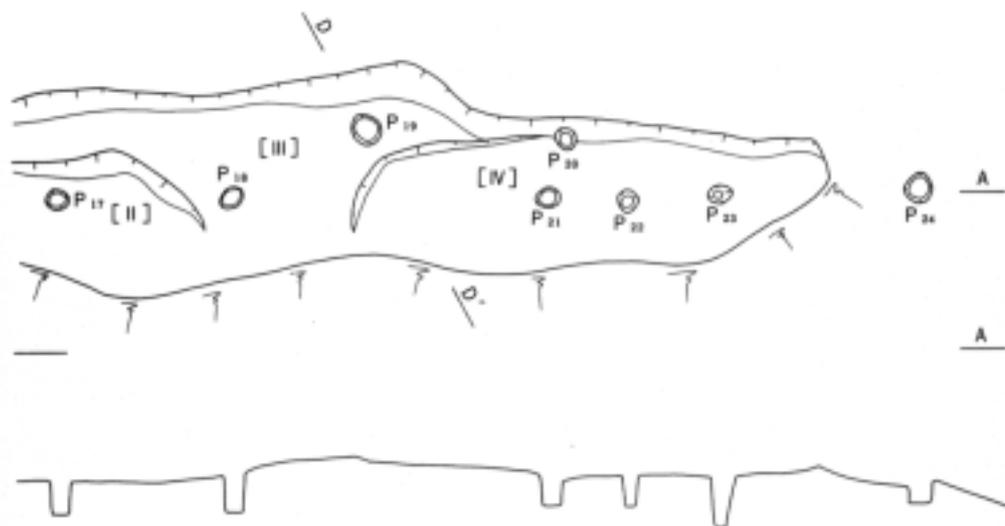
第7图 第5号住居跡実測図



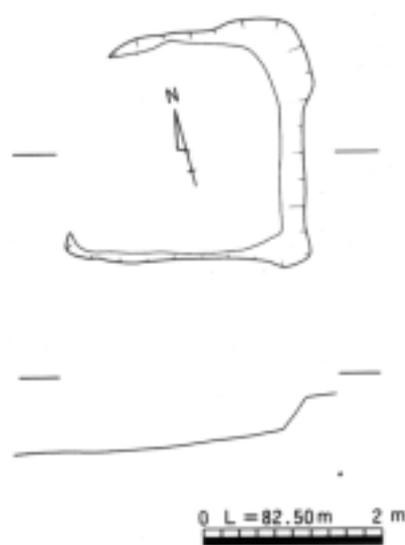
第8図 第6号住居跡及び第1号土壇実測図



第9図 第7号・第8号住居跡、第1号テラス状遺構実測図（その1）



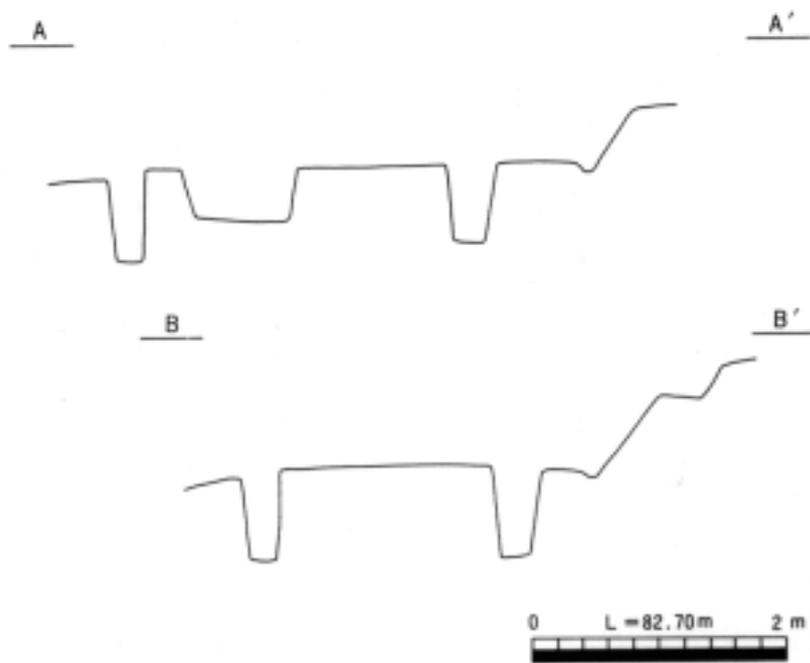
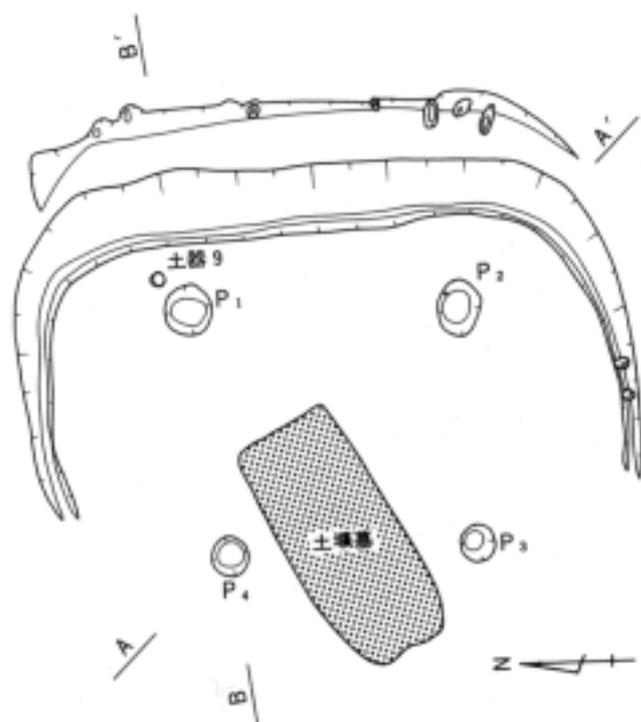
第10図 第7号・第8号住居跡、第1号テラス状遺構実測図（その2）



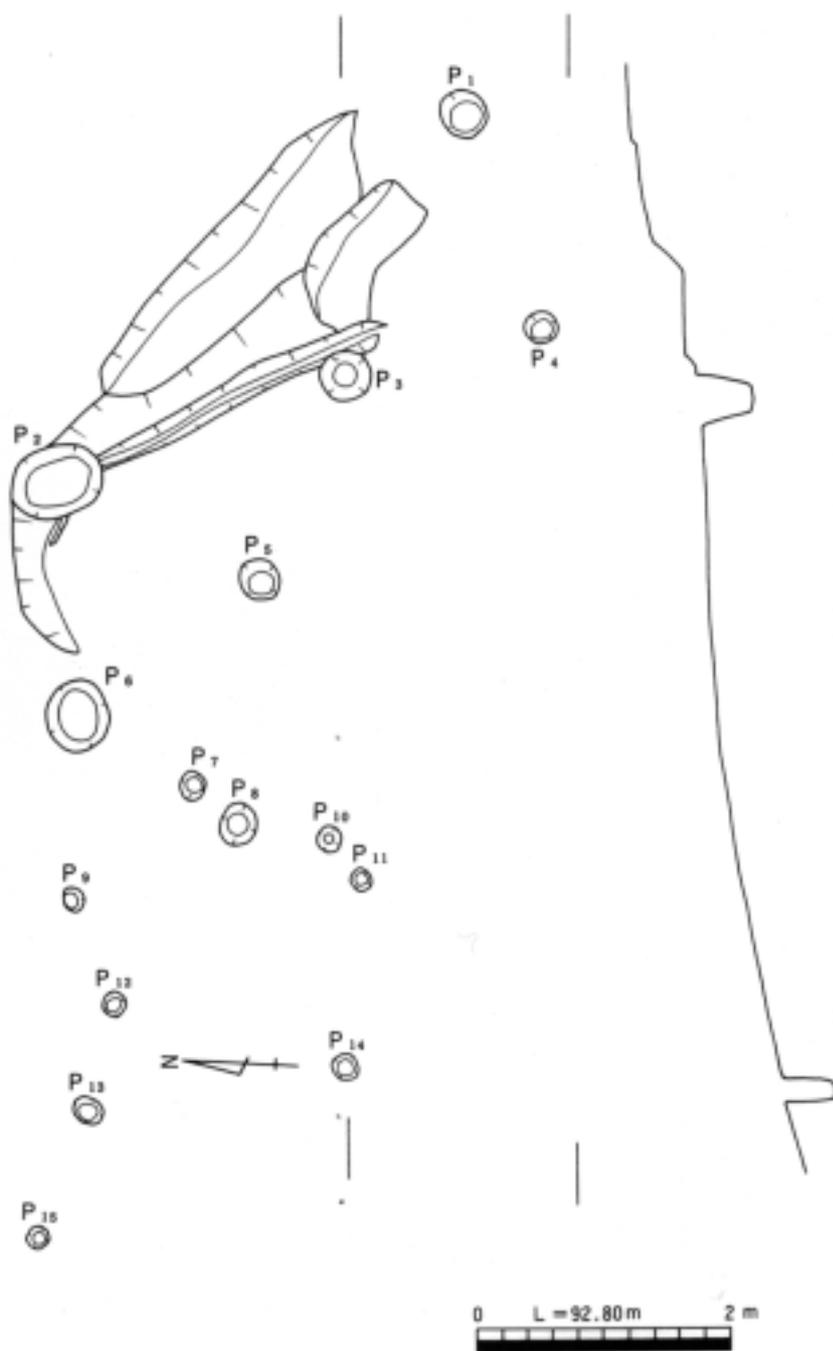
第11図 第2号住居跡状遺構実測図



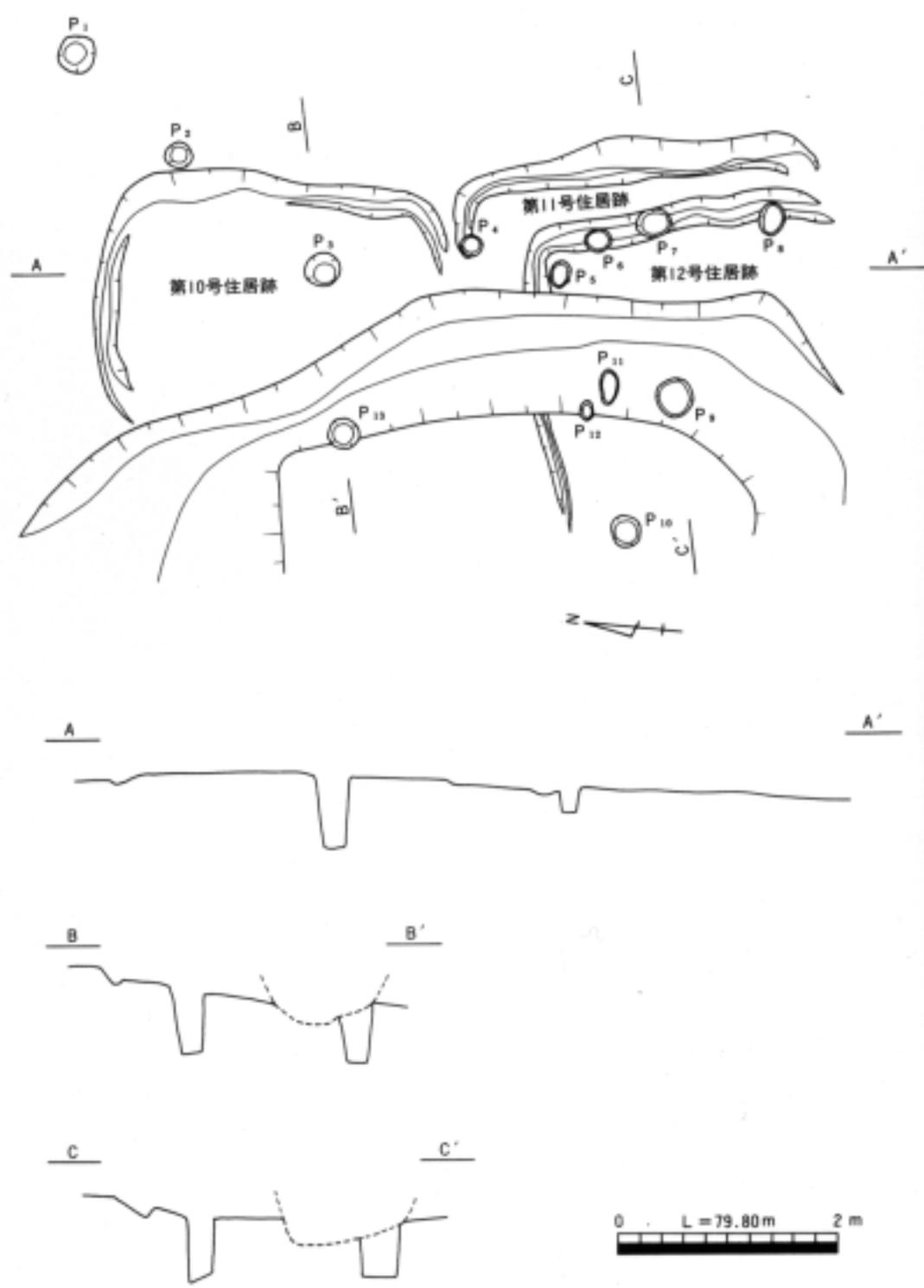
第12図 第2号土壇実測図



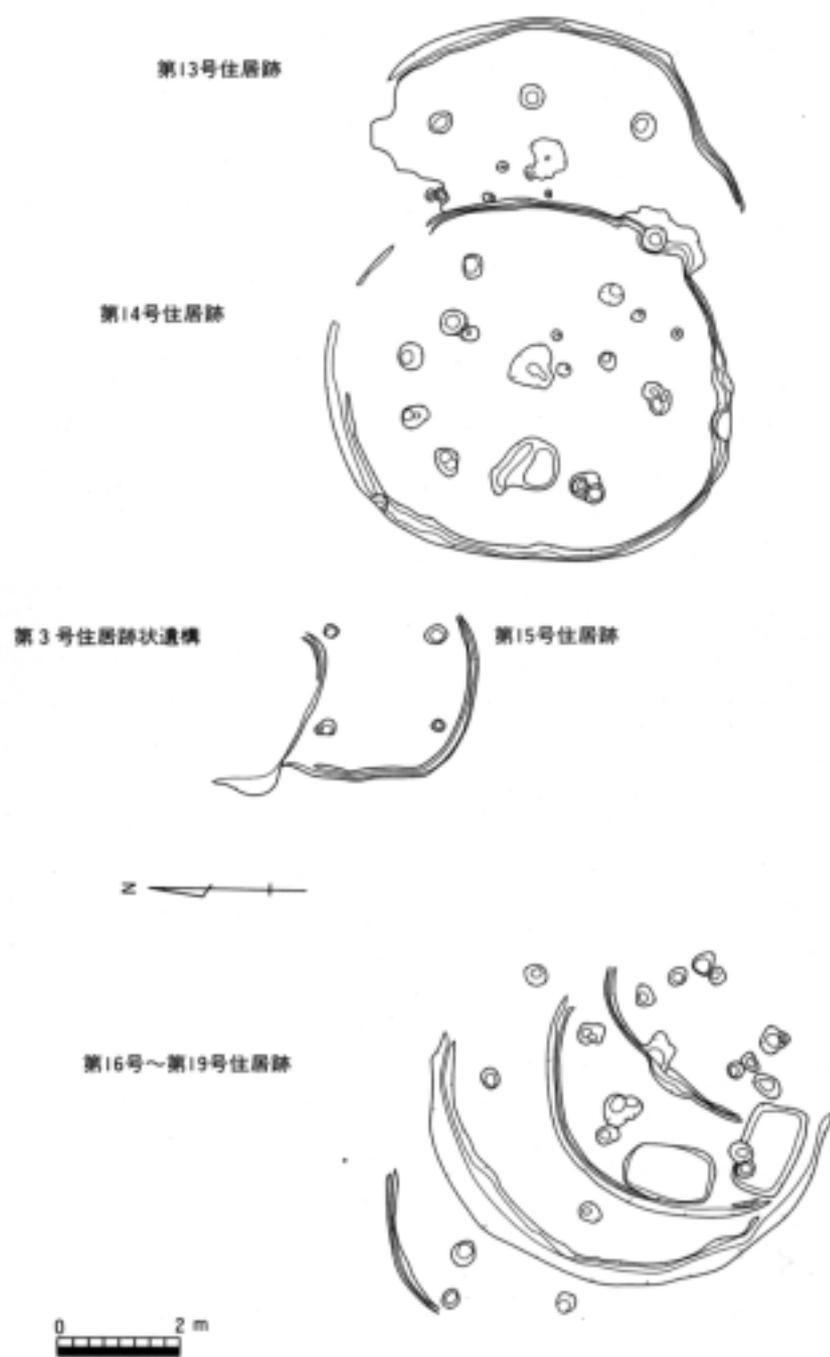
第13图 第9号住居跡实测图



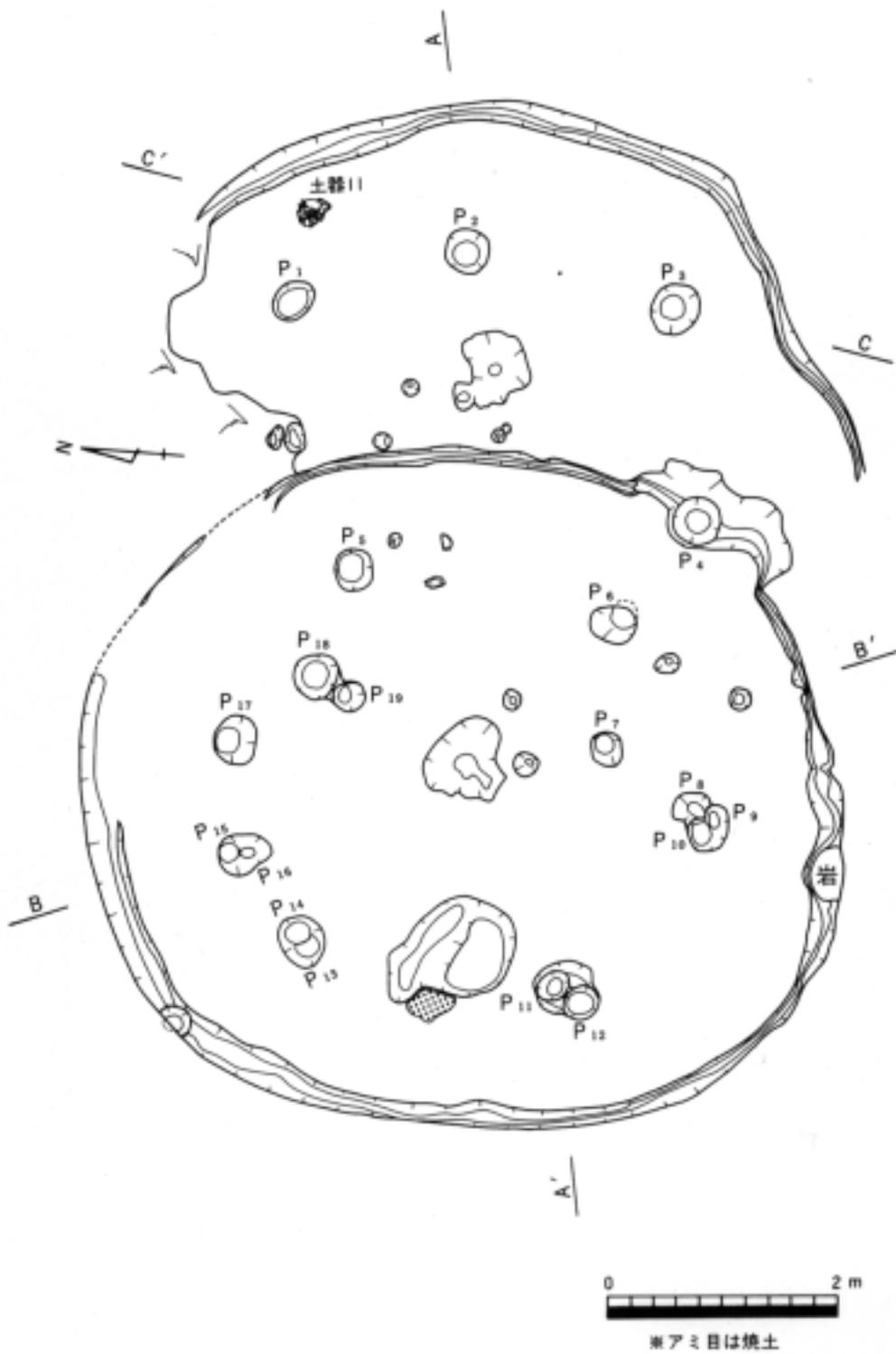
第14图 第1号住居跡状遺構実測図



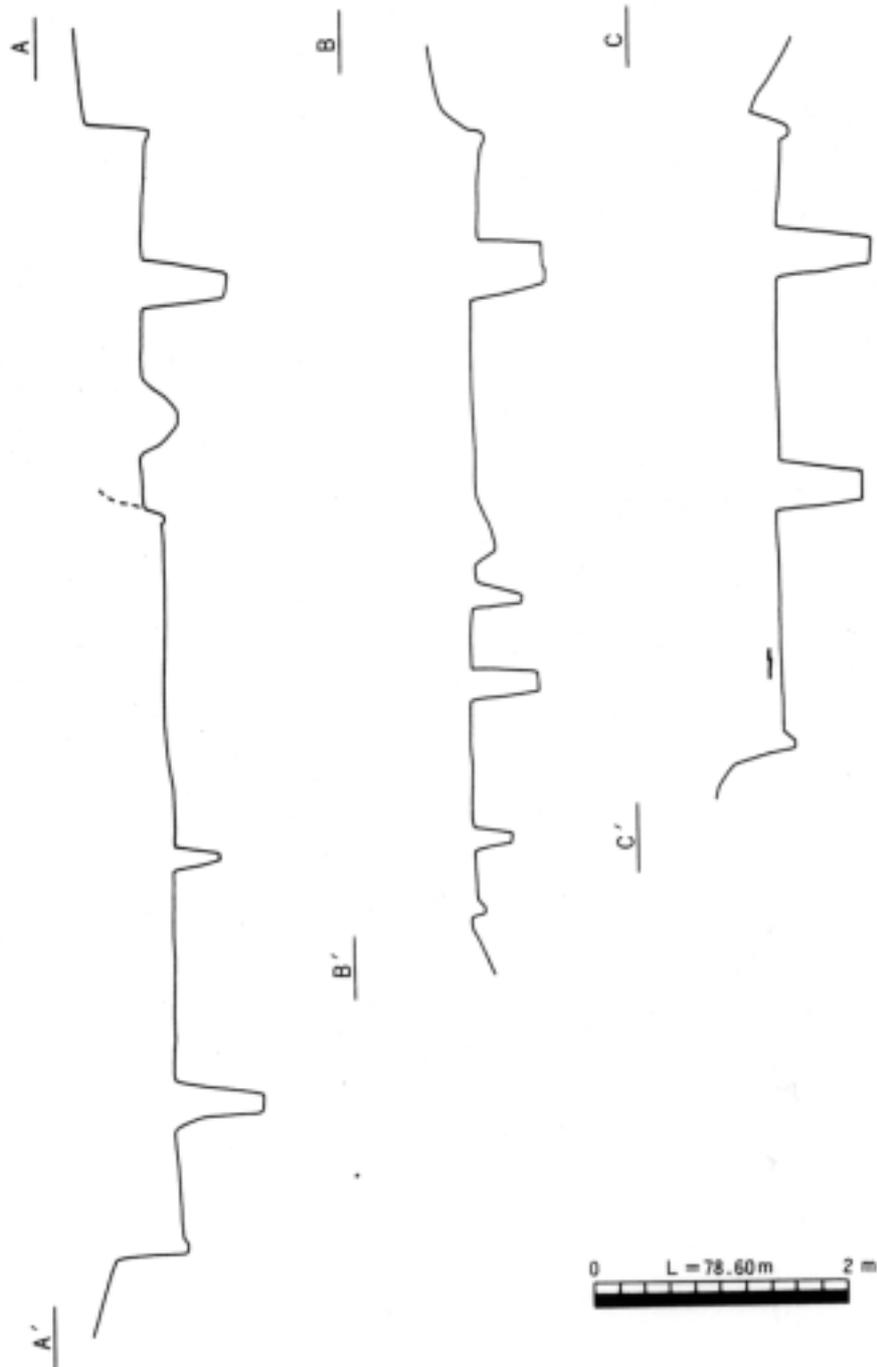
第15图 第10号·第11号·第12号住居跡実測图



第16図 第13号～第19号住居跡、第3号住居跡状遺構配置図

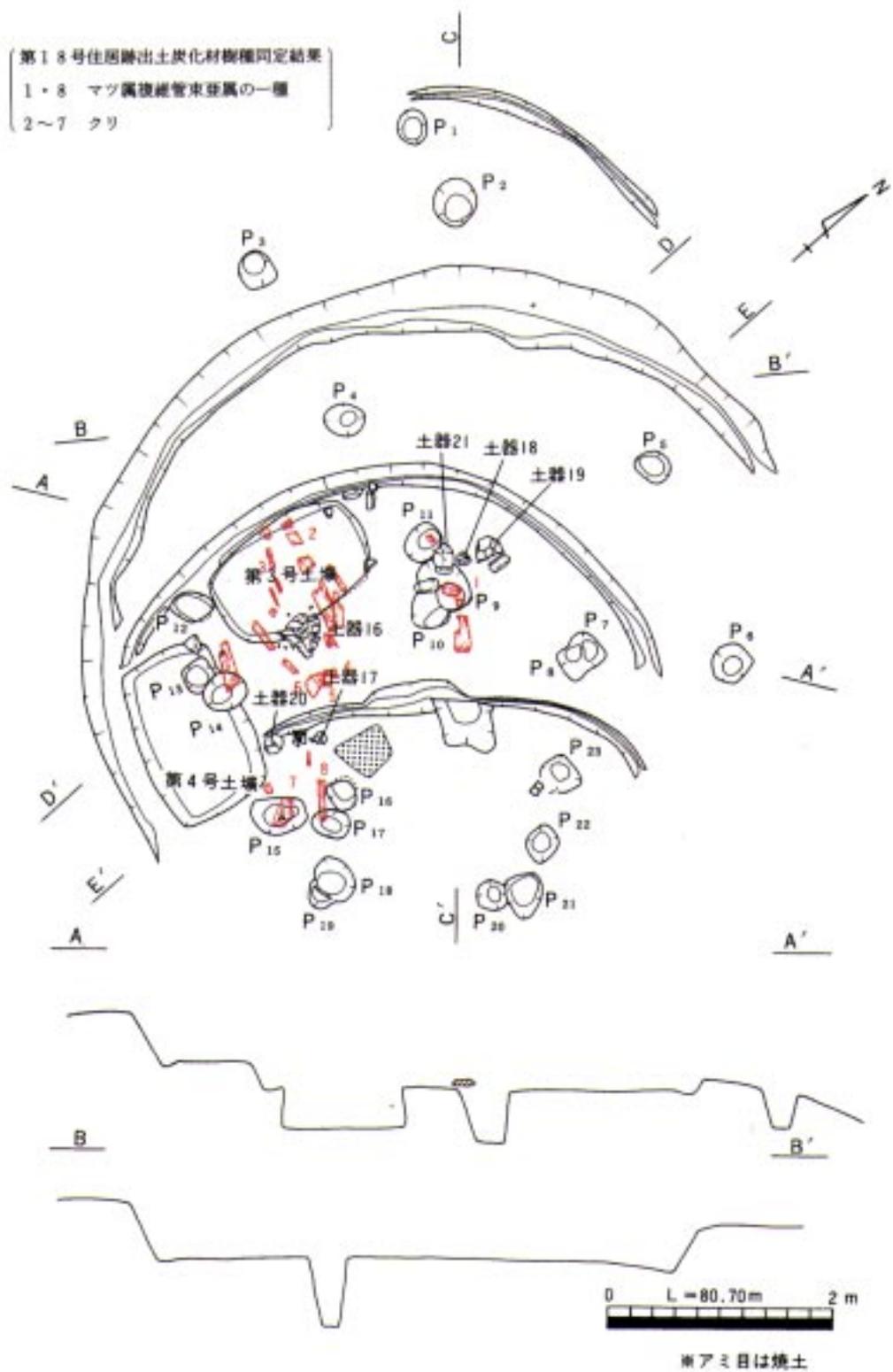


第17図 第13号・第14号住居跡実測図

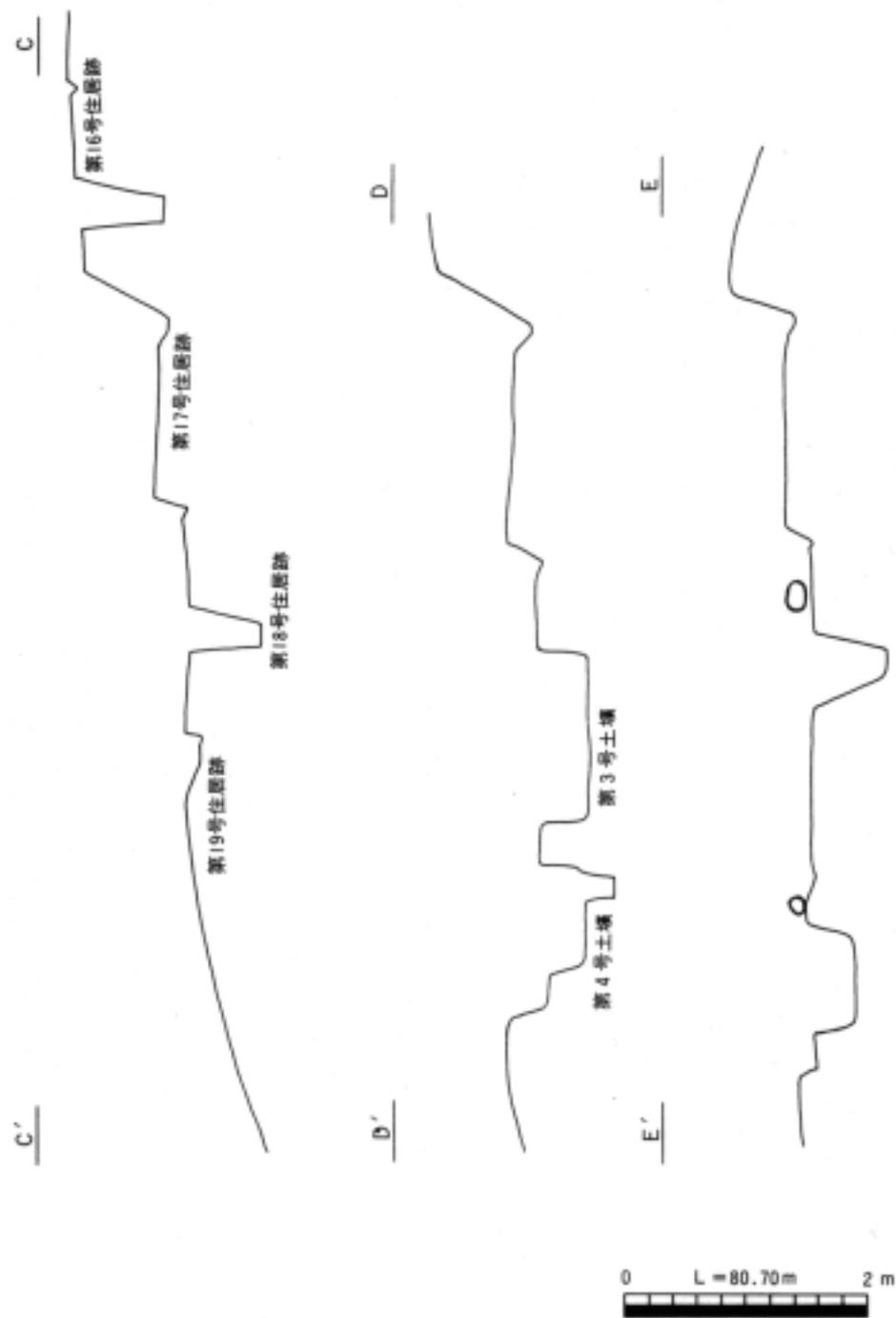


第18图 第13号·第14号住居跡断面実測図

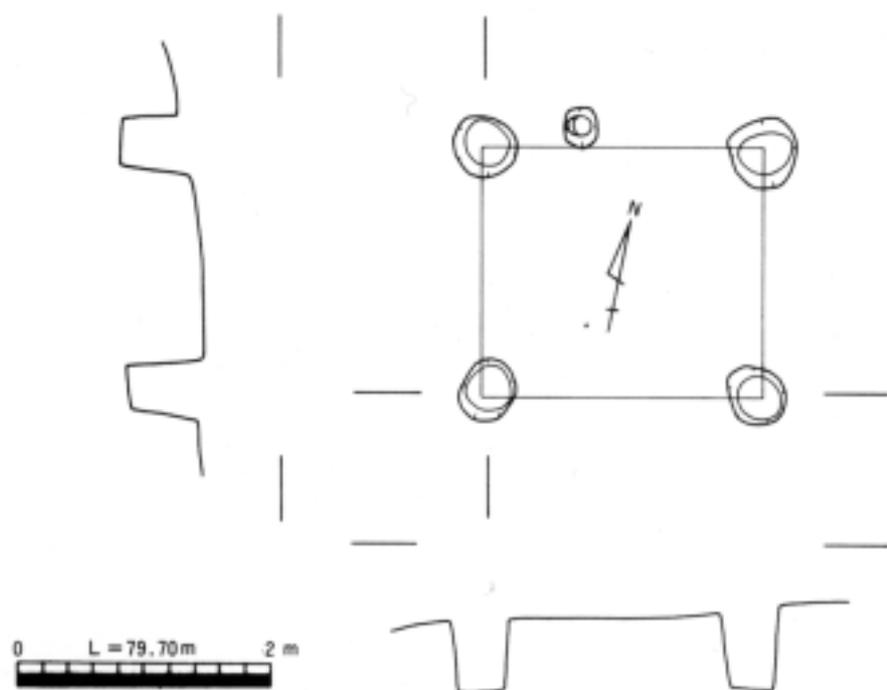
第18号住居跡出土炭化材物種同定結果
 1・8 マツ属複維管束亞属の一種
 2~7 クリ



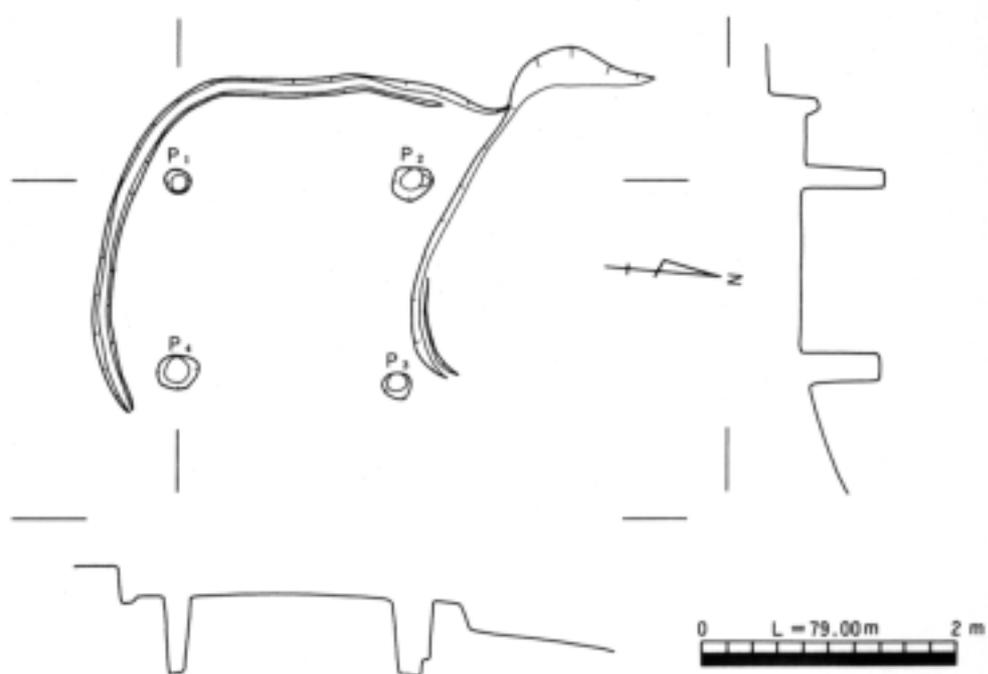
第19図 第16号・第17号・第18号・第19号住居跡及び第3号・第4号土坑実測図



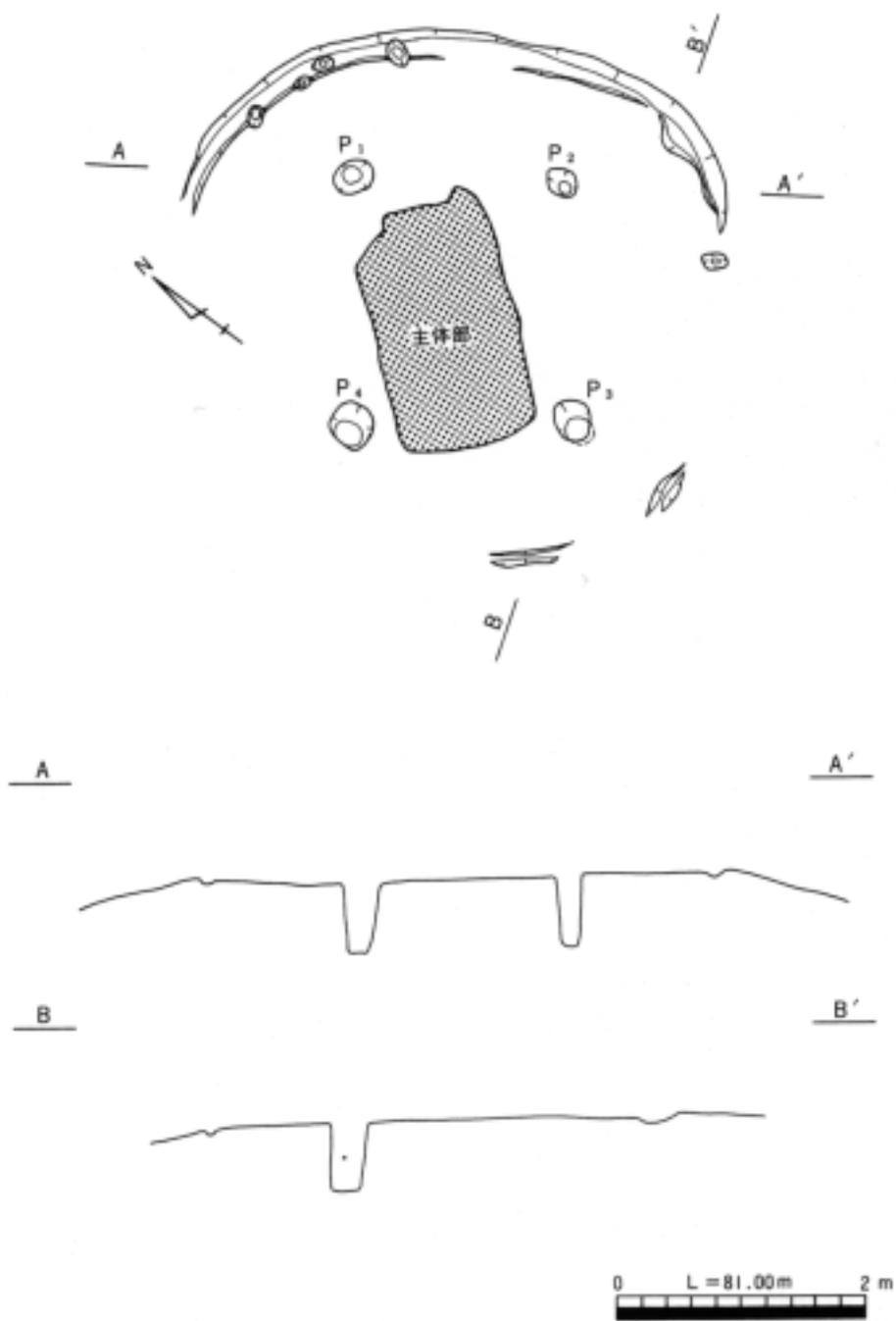
第20图 第16号·第17号·第18号·第19号住居迹断面实测图



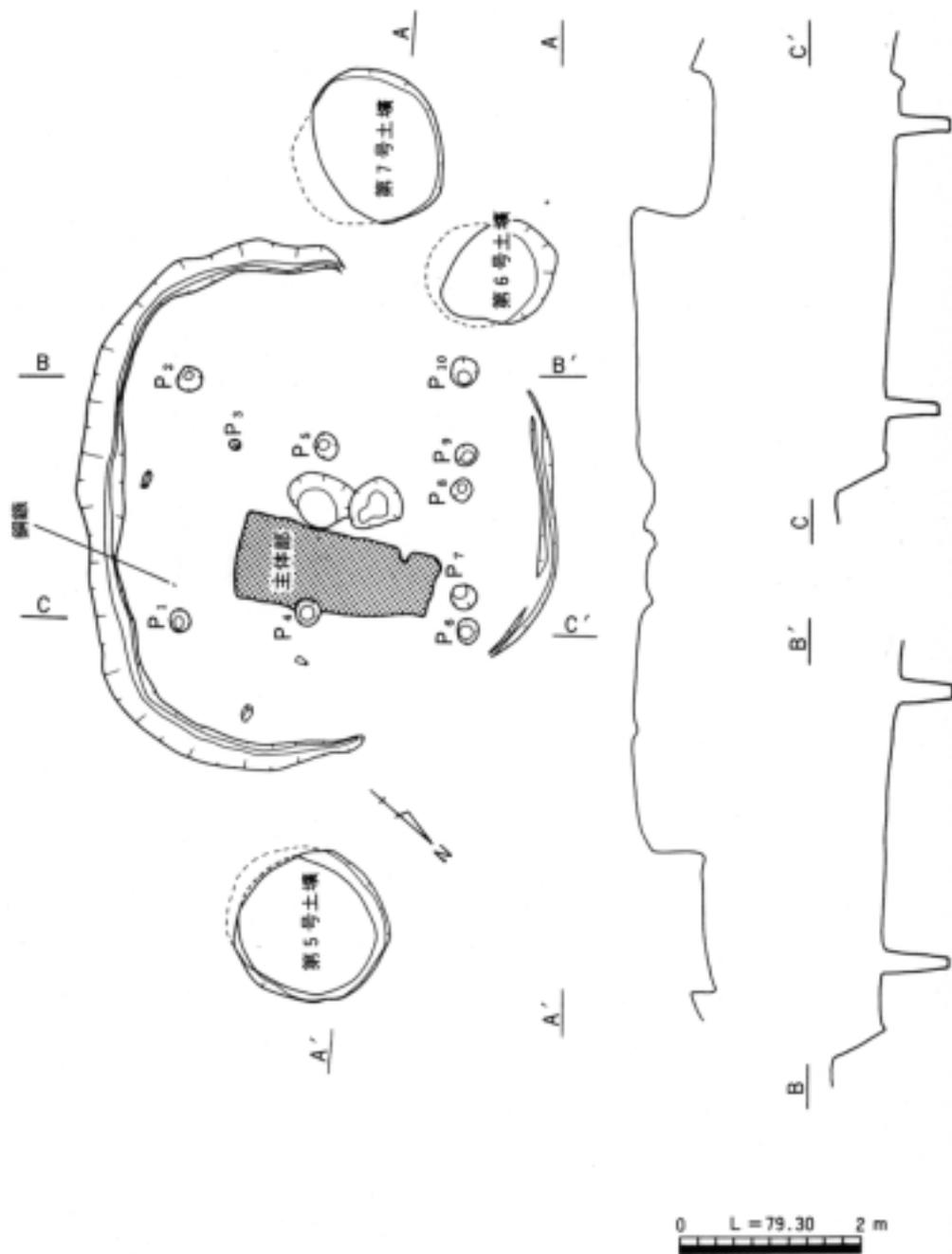
第21图 第1号据立柱建物跡実測図



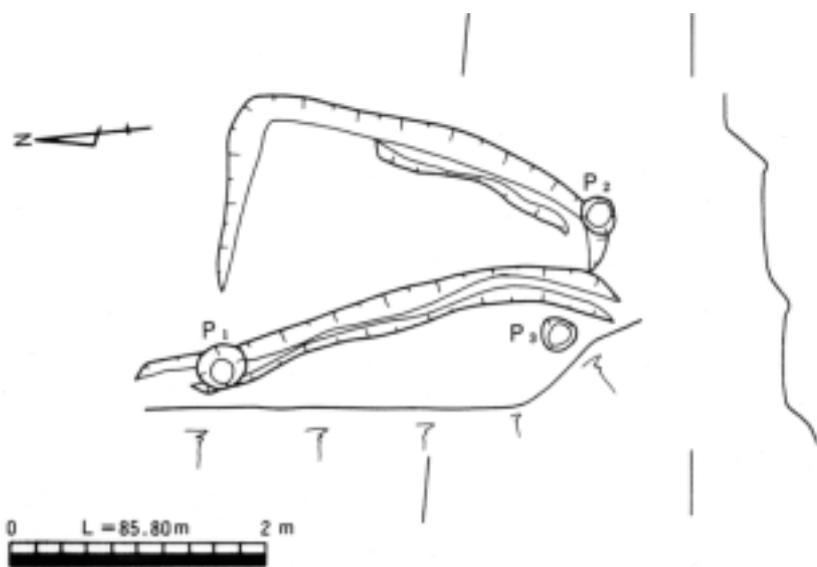
第22图 第15号住居跡、第3号住居跡状遺構実測図



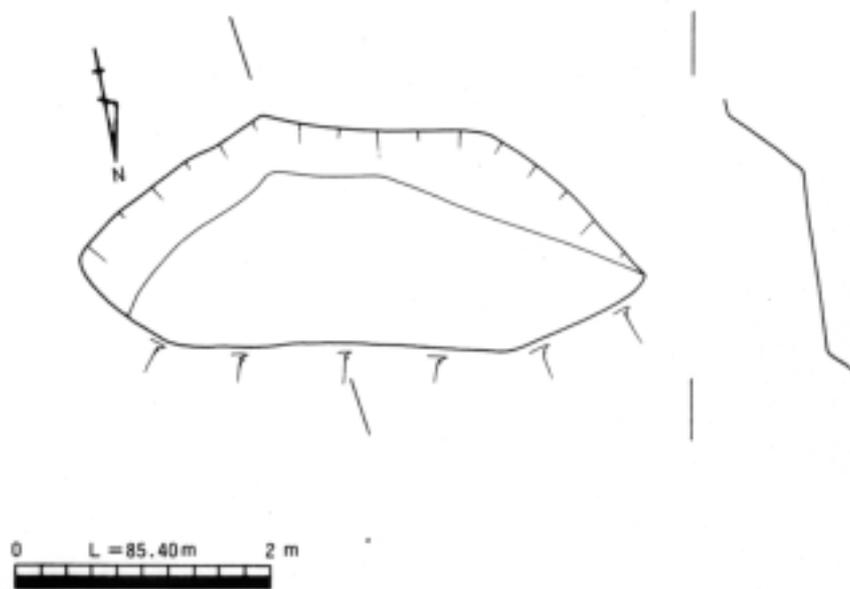
第23图 第20号住居跡実測図



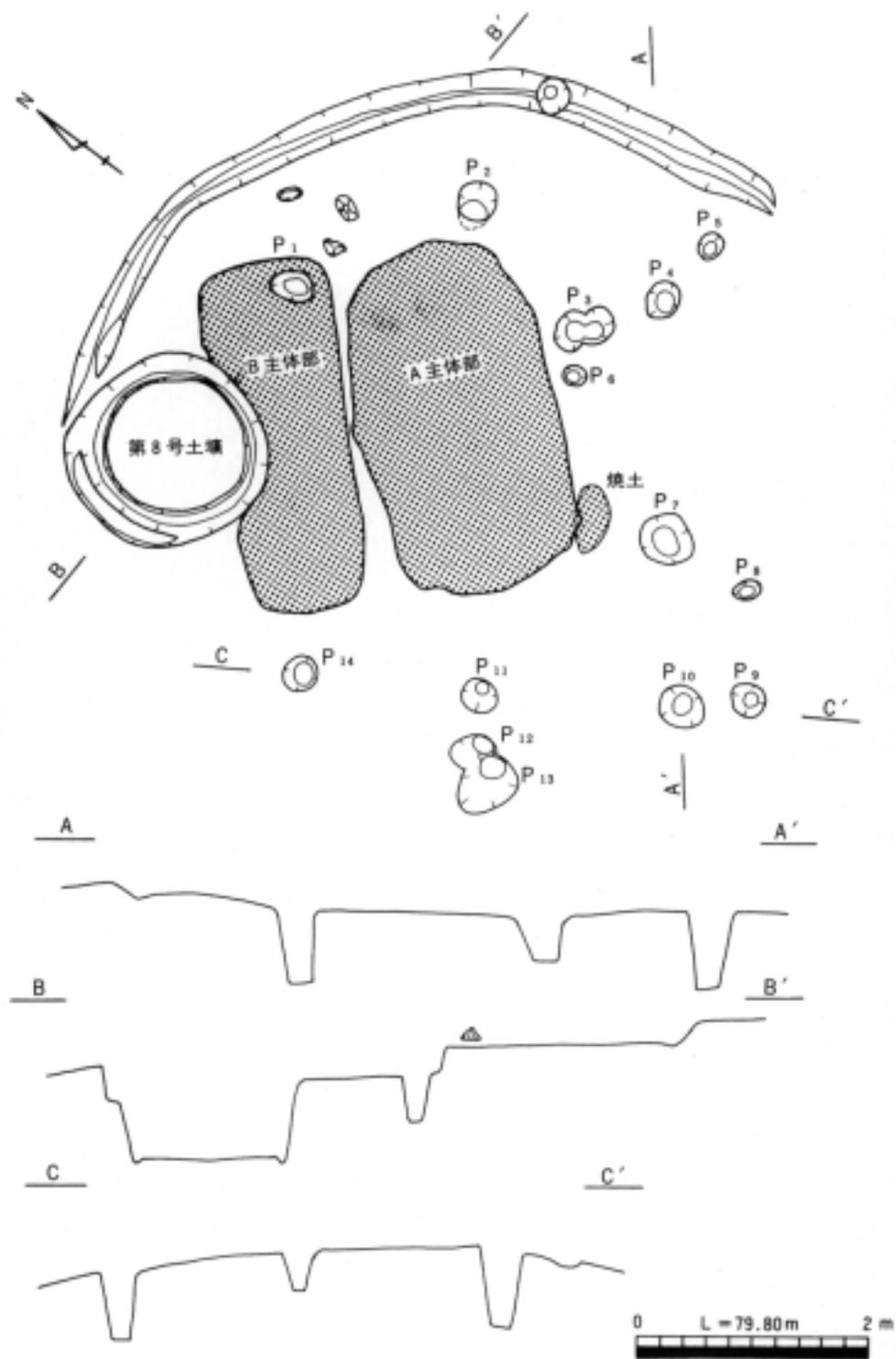
第24图 第21号住居跡実測図



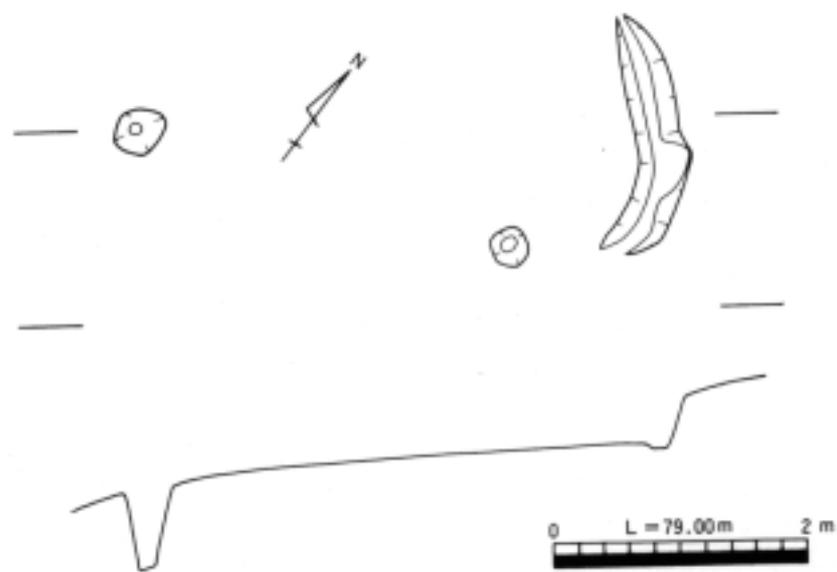
第25图 第22号住居跡実測図



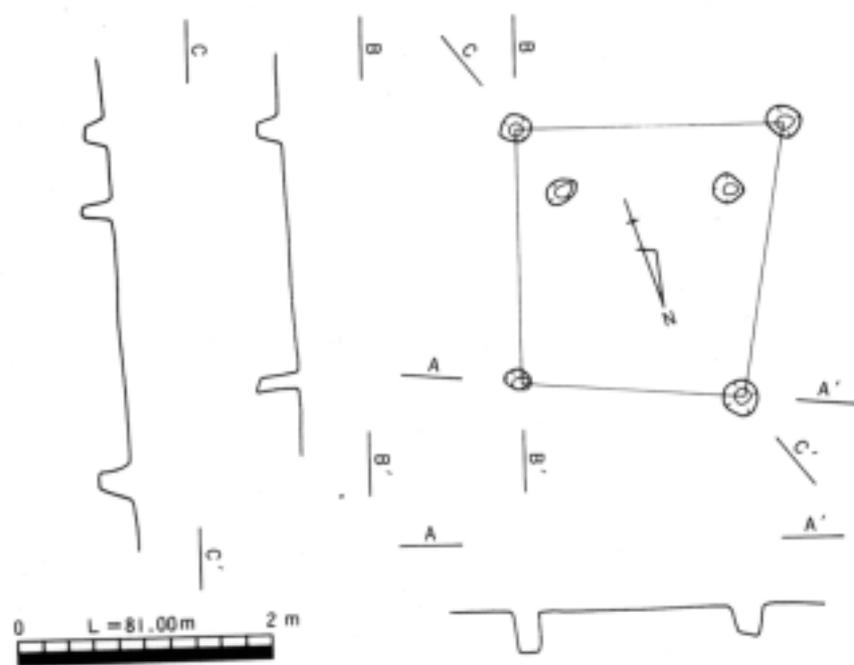
第26图 第4号住居跡状遺構実測図



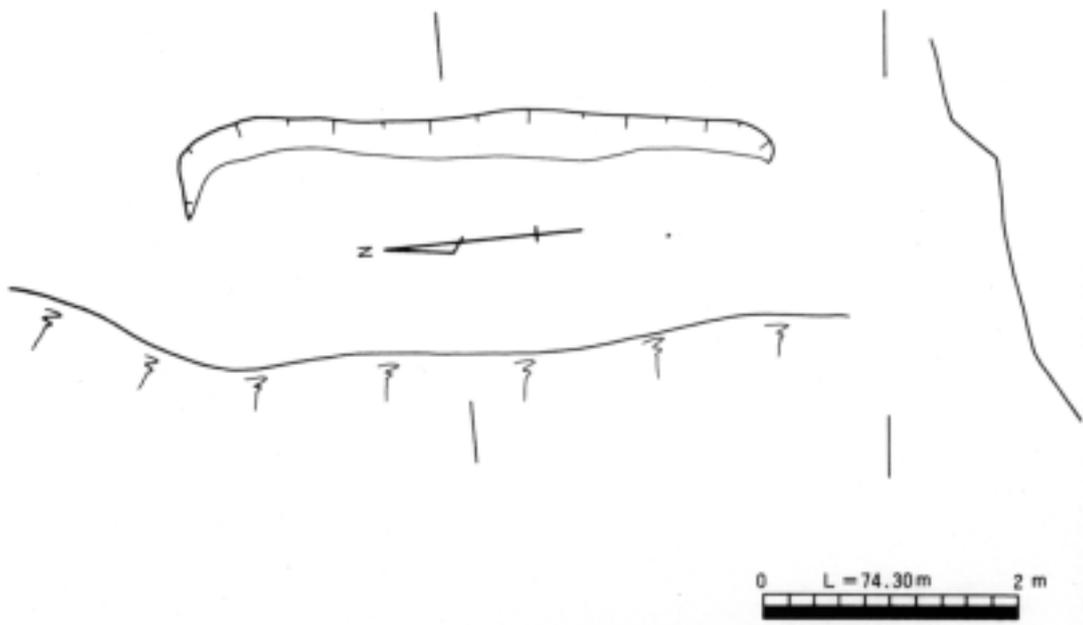
第27图 第23号住居跡実測图



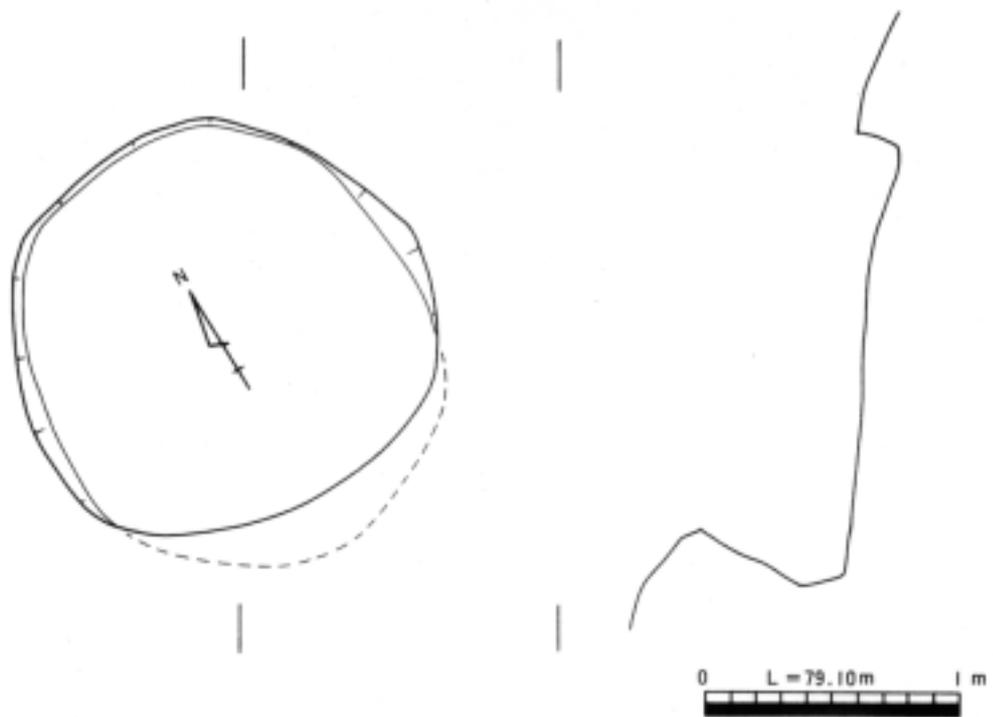
第28图 第5号住居跡状遺構実測図



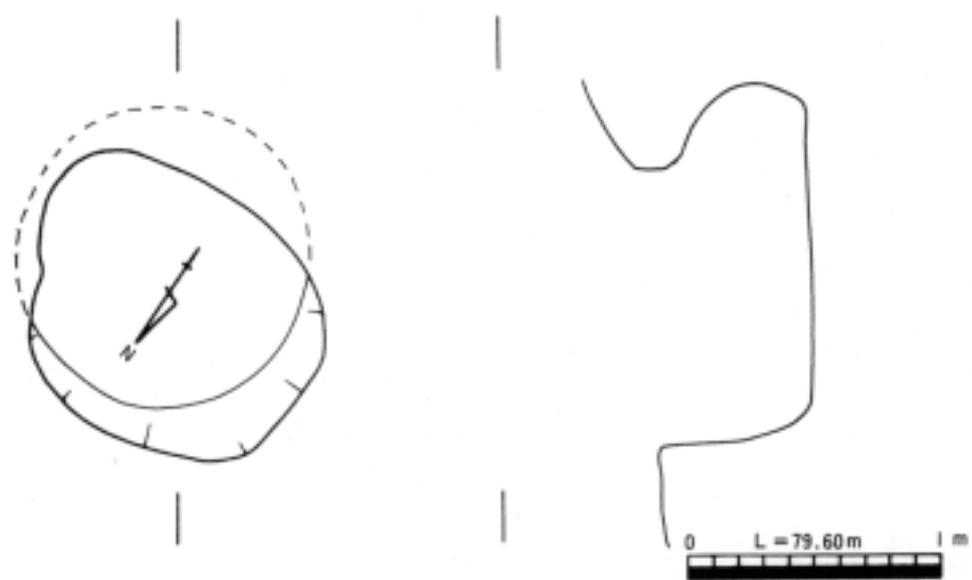
第29图 第2号掘立柱建物跡実測図



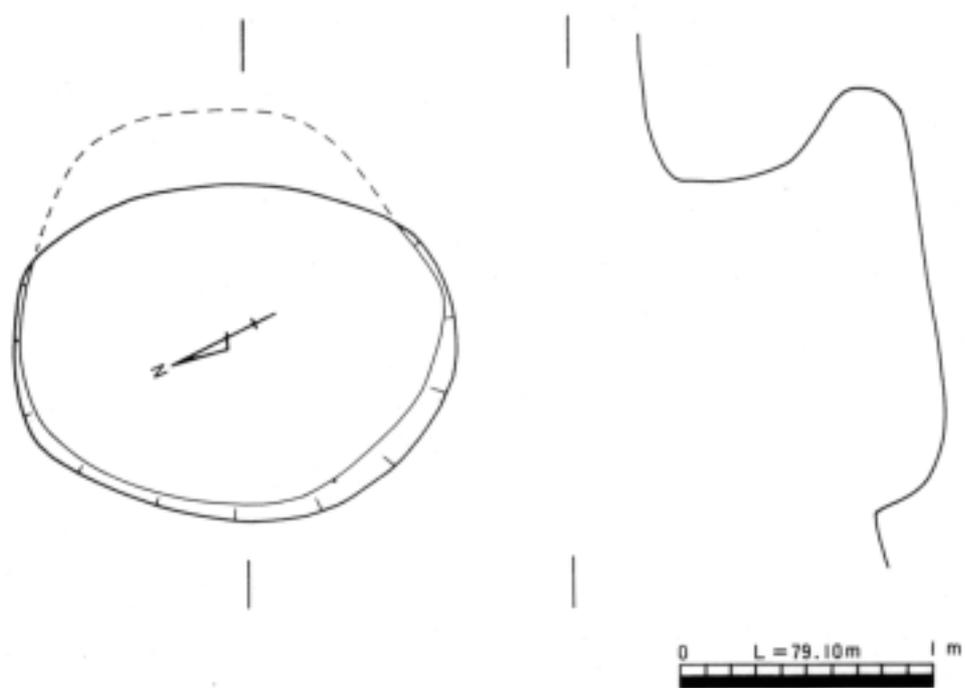
第30図 第2号テラス状遺構実測図



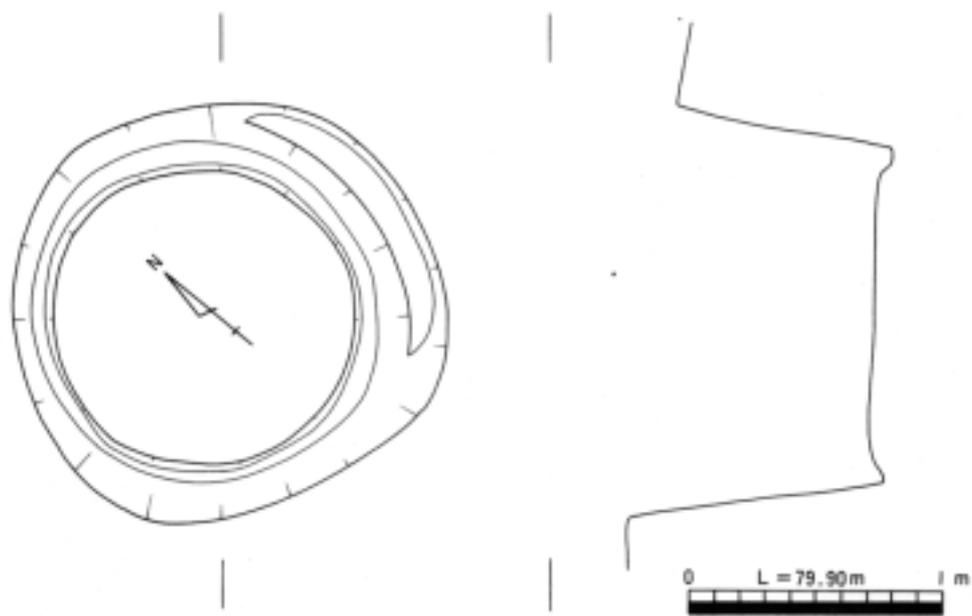
第31図 第5号土壇実測図



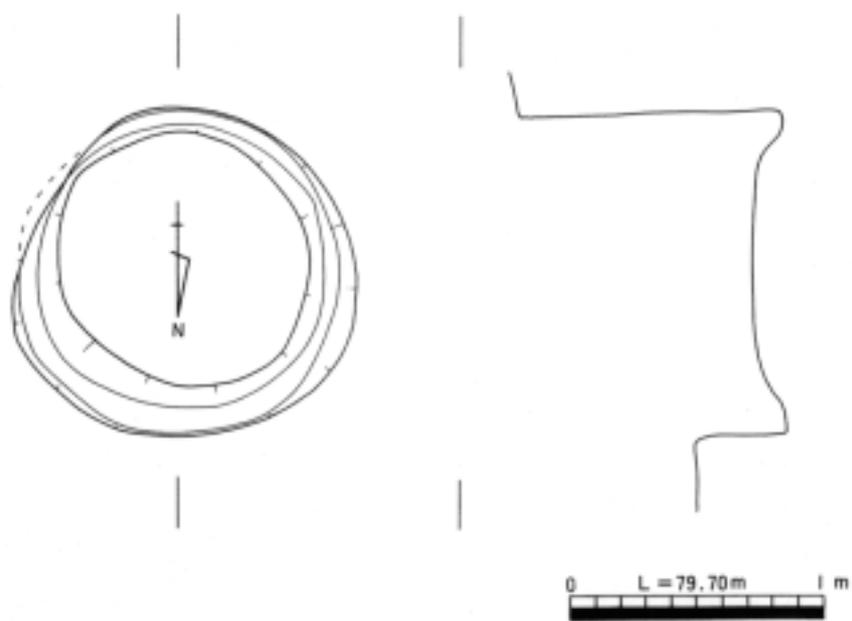
第32图 第6号土壤实测图



第33图 第7号土壤实测图



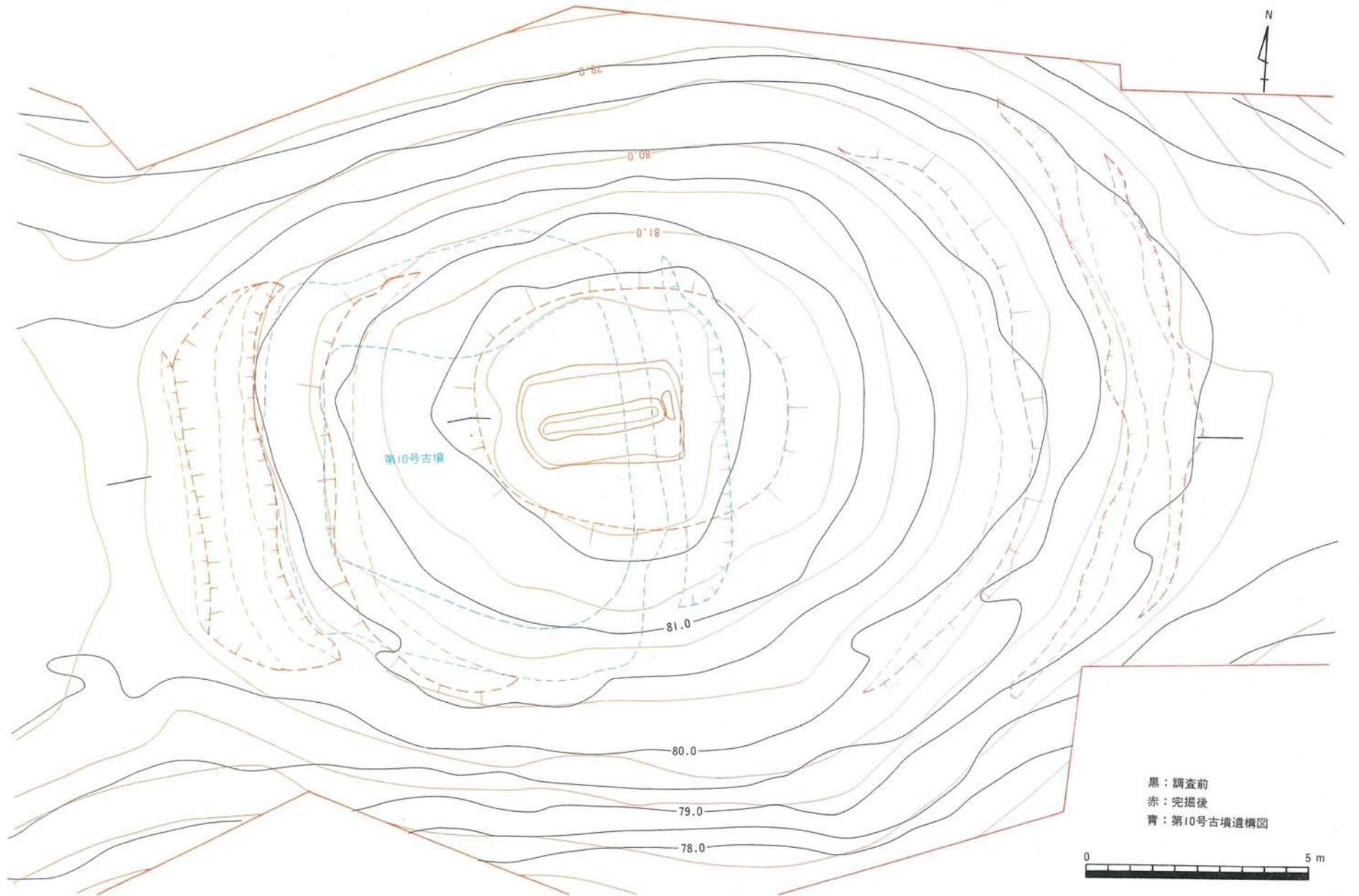
第34图 第8号土壤实测图



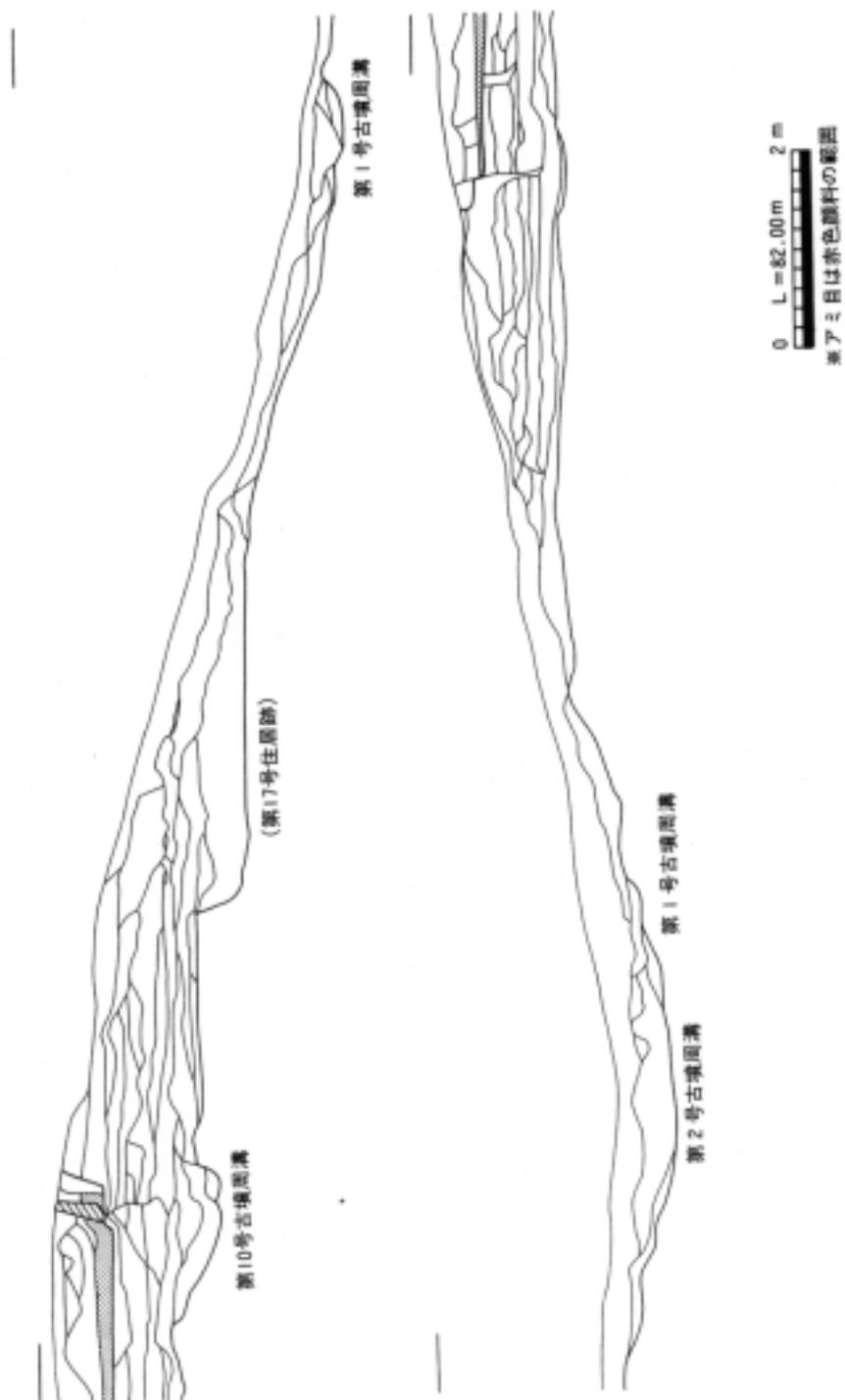
第35图 第9号土壤实测图



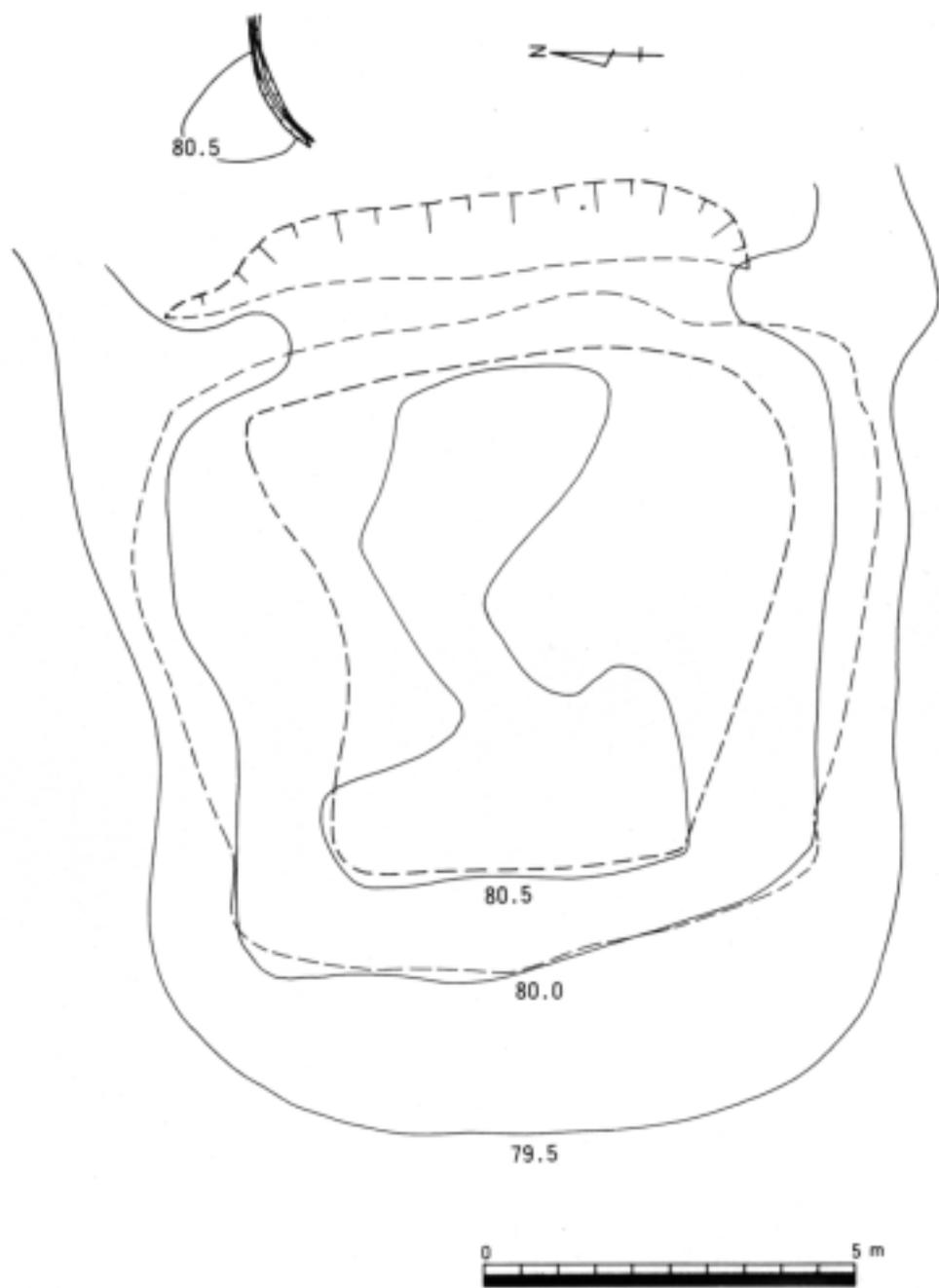
第36图 城ノ下古墳群古墳配置図



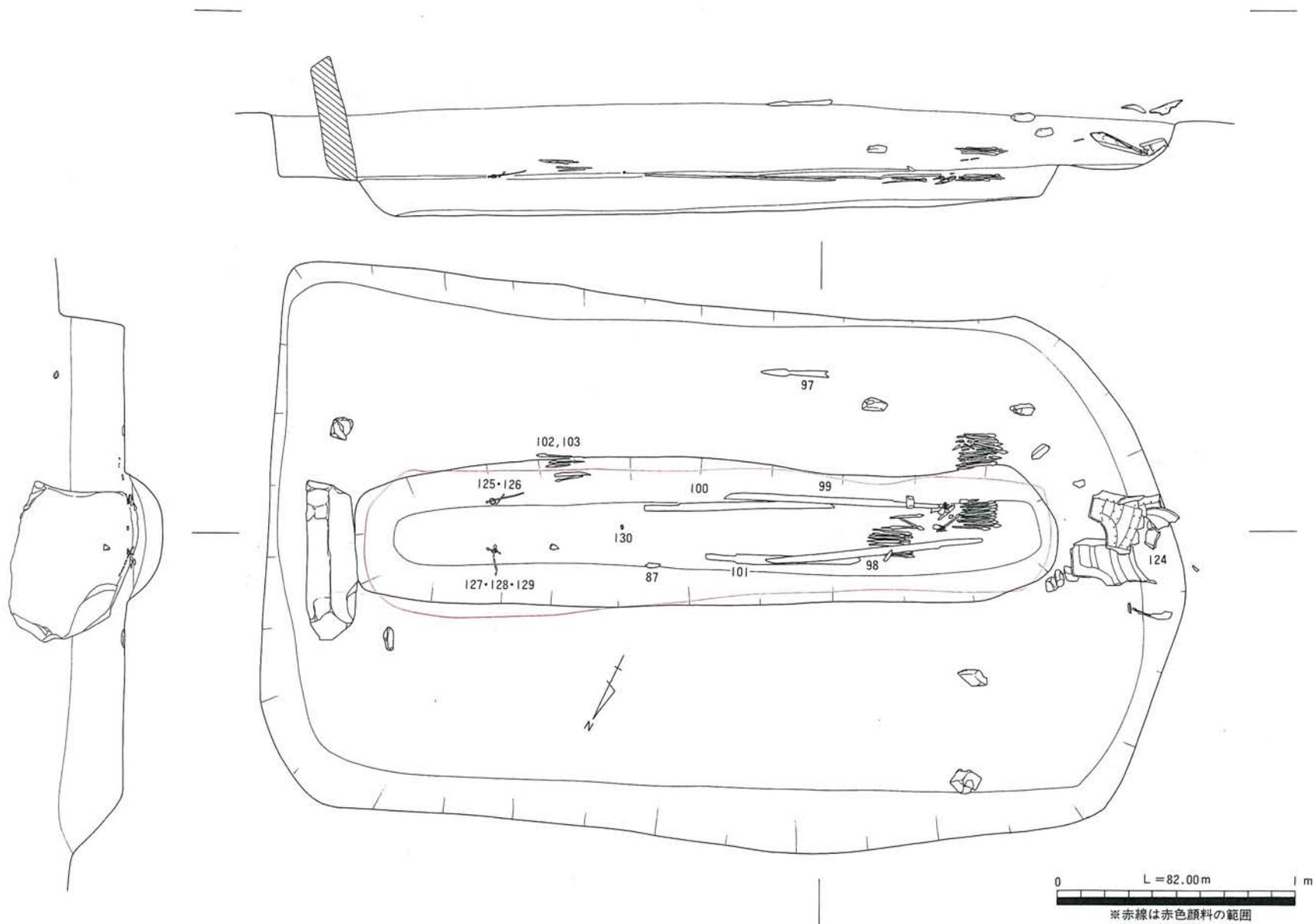
第37図 第1号・第10号古墳墳丘測量図



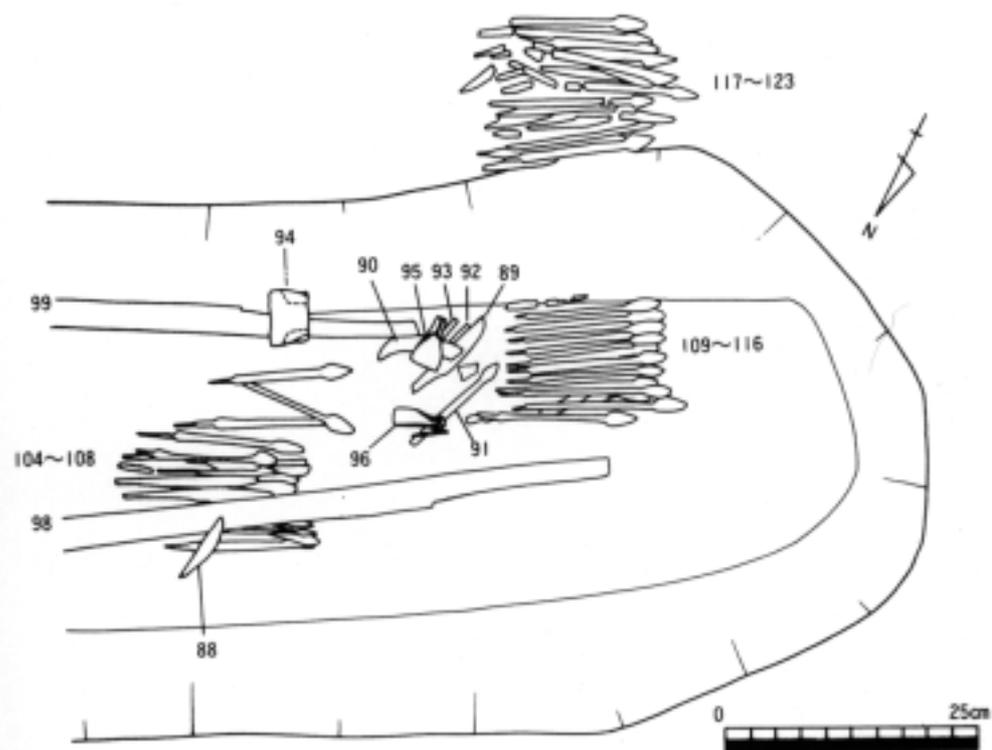
第38図 第1号・第10号古墳土層断面図



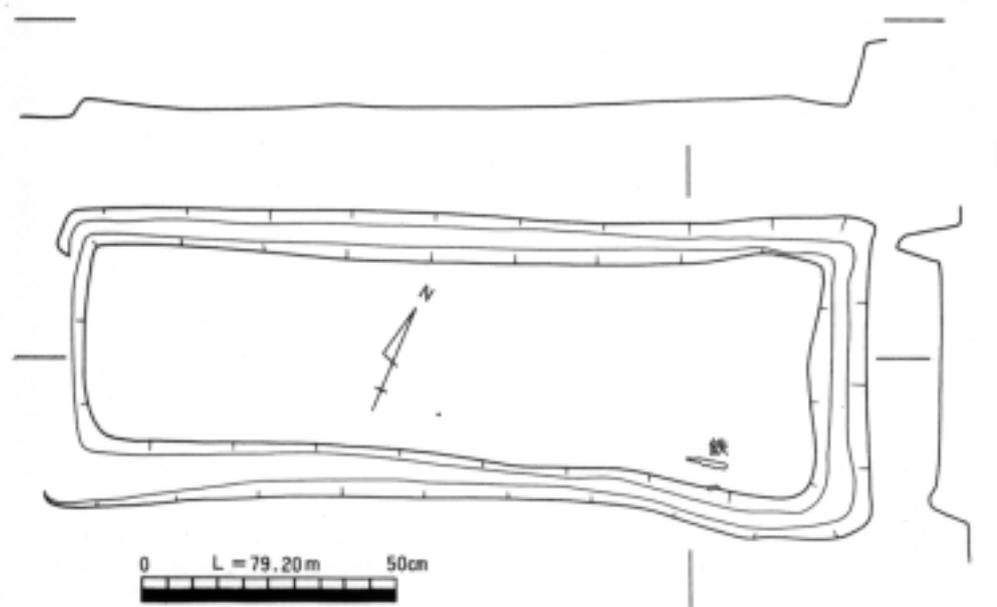
第39图 第10号古墳墳丘測量図



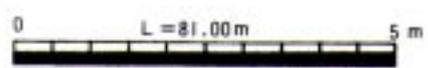
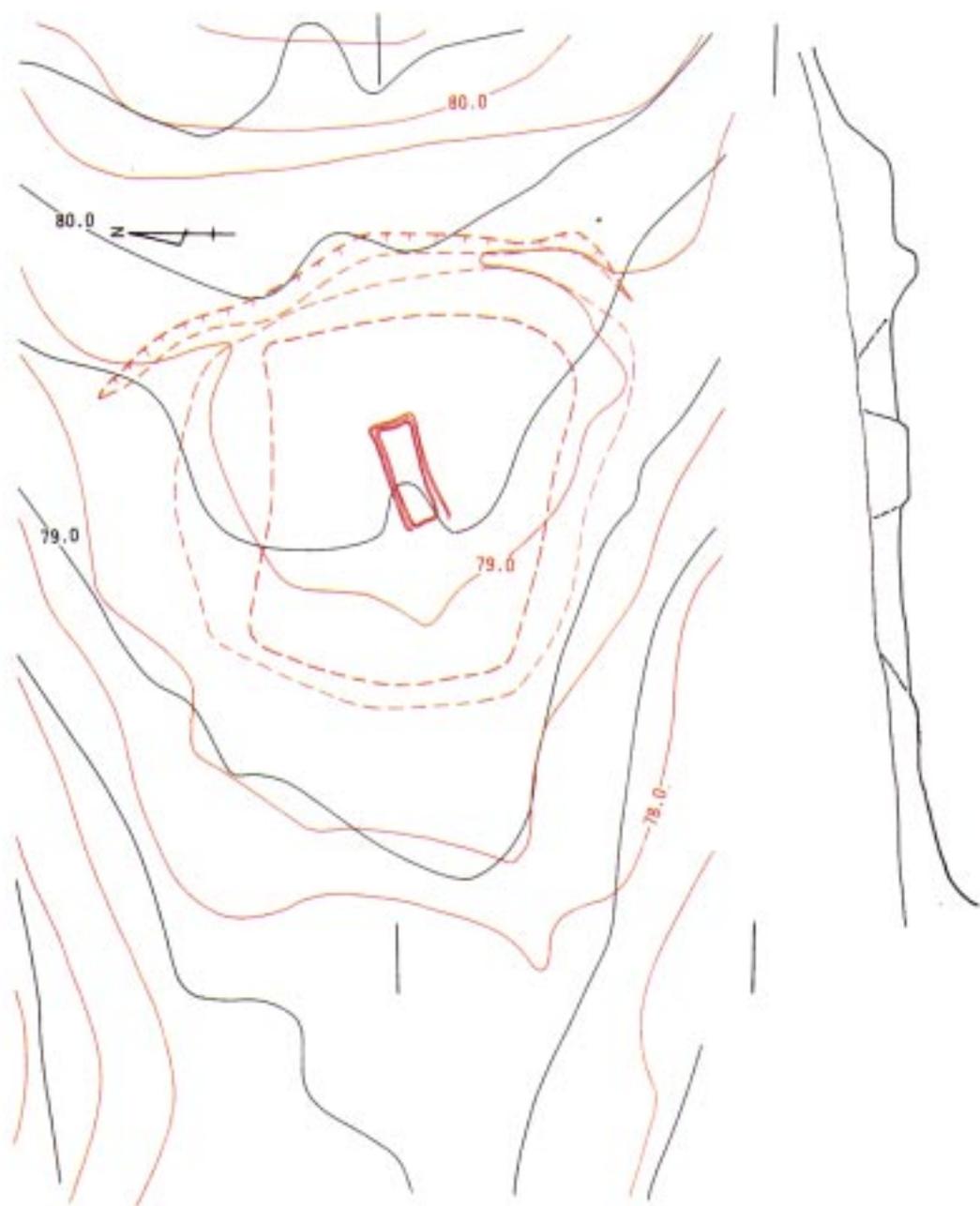
第40図 第1号古墳主体部実測図



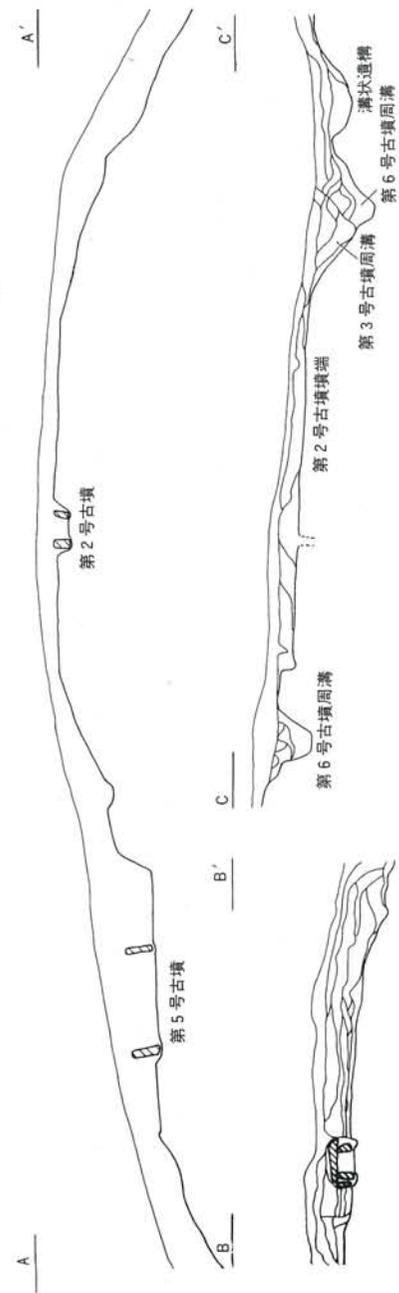
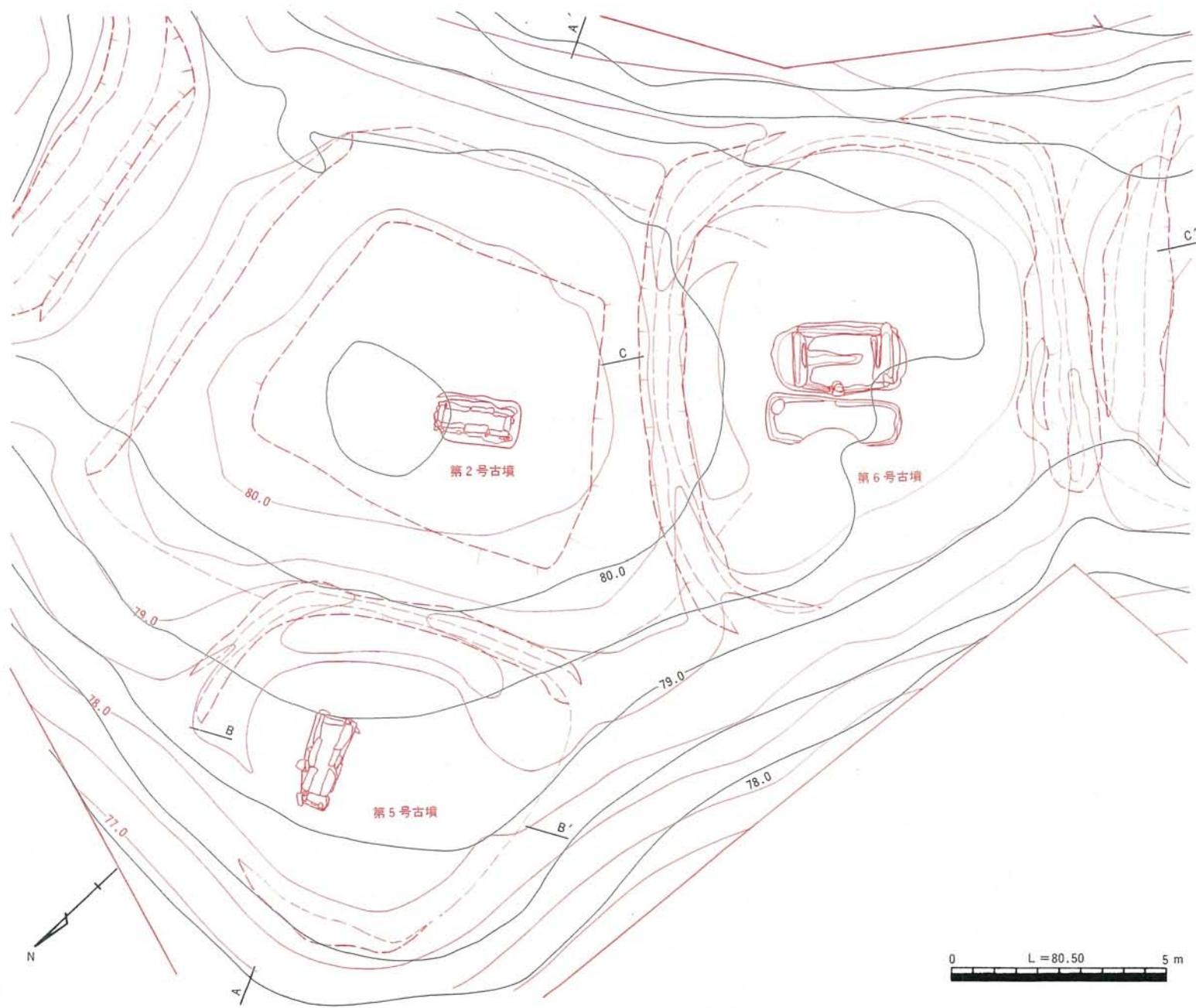
第41图 第1号古墳主体部遺物出土状況（西半）



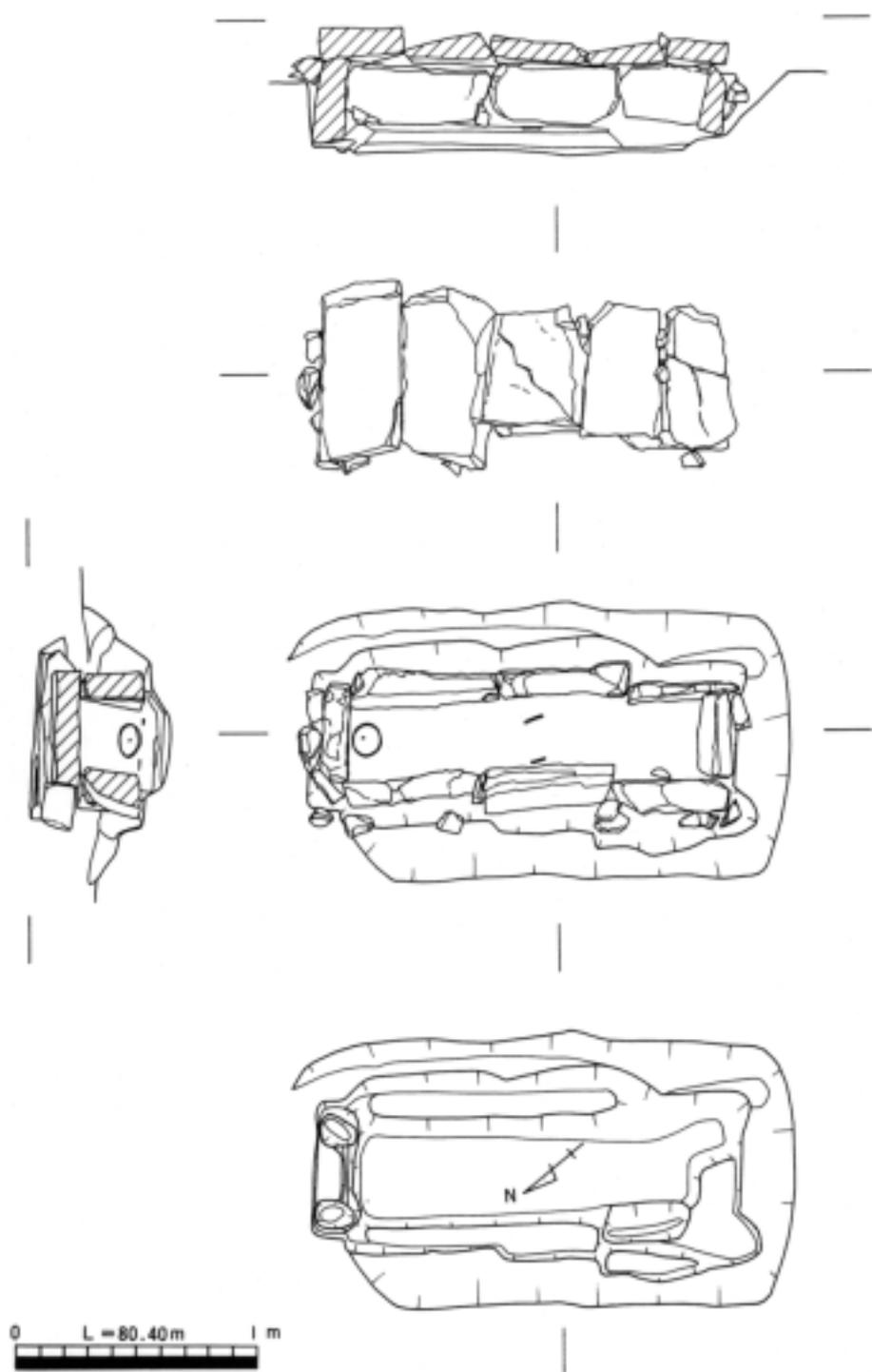
第42图 第4号古墳主体部実測図



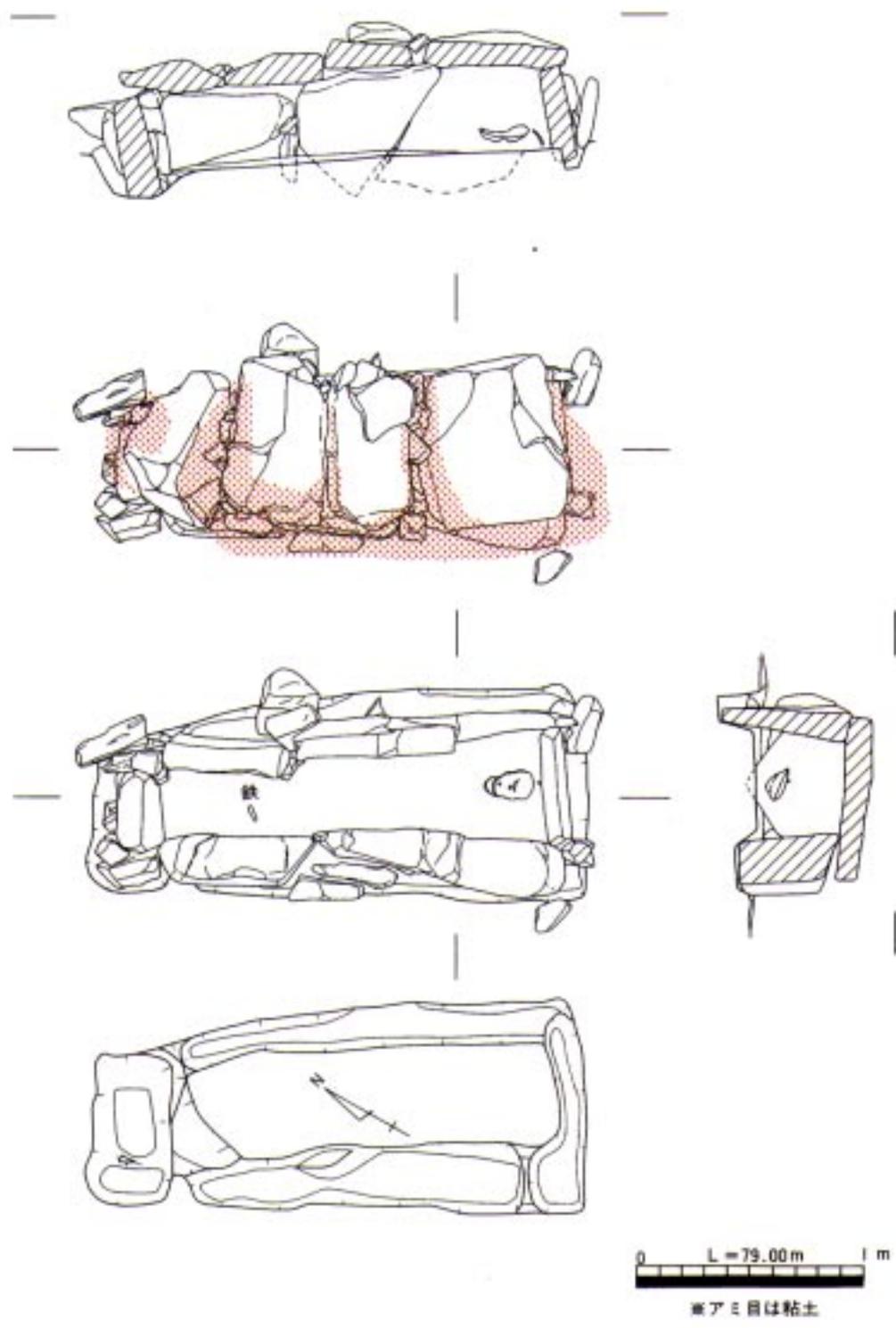
第43图 第4号古墳墳丘測量図



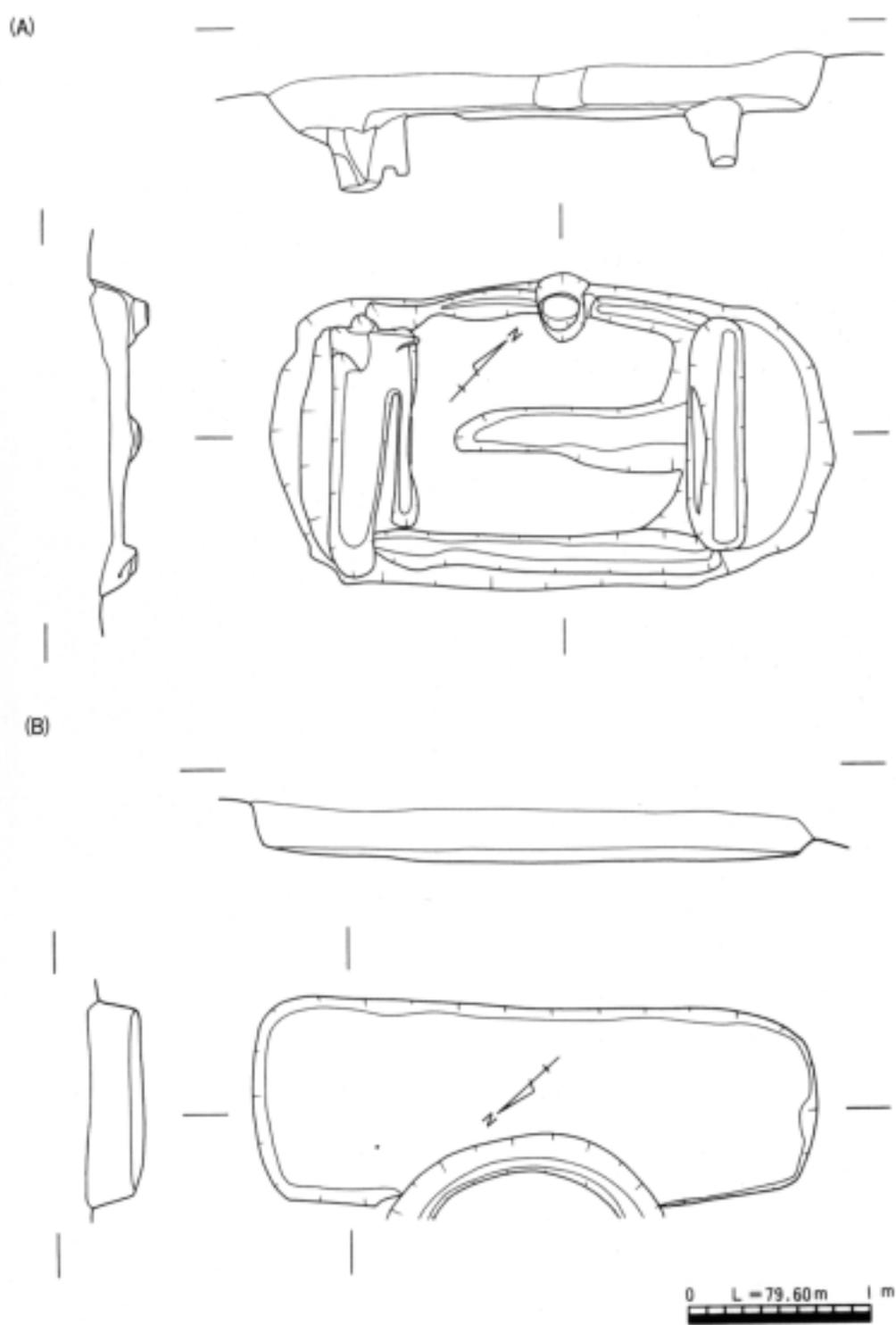
第44图 第2号・第5号・第6号古墳墳丘測量图



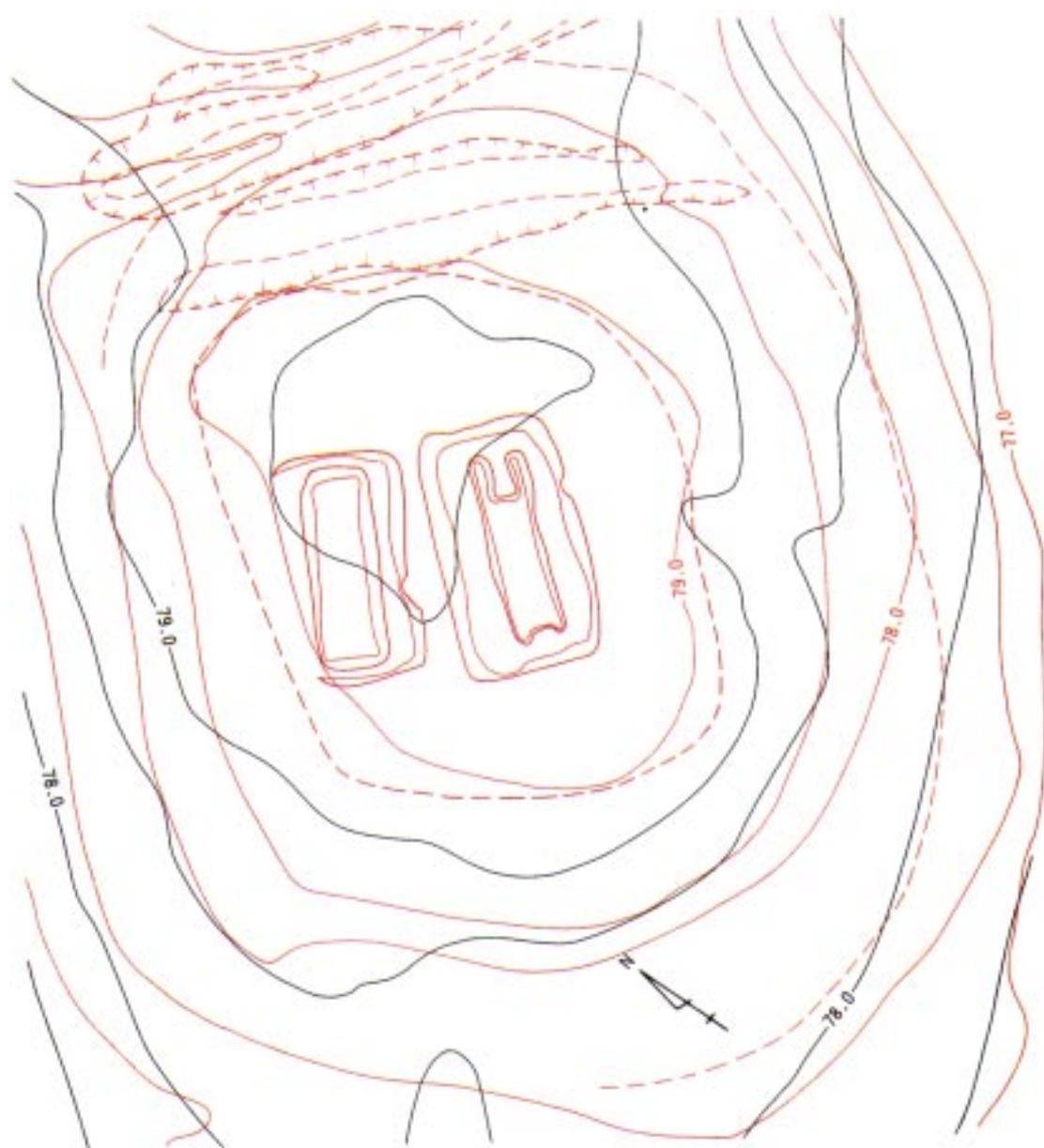
第45图 第2号古墳主体部実測図



第46図 第5号古墳主体部実測図

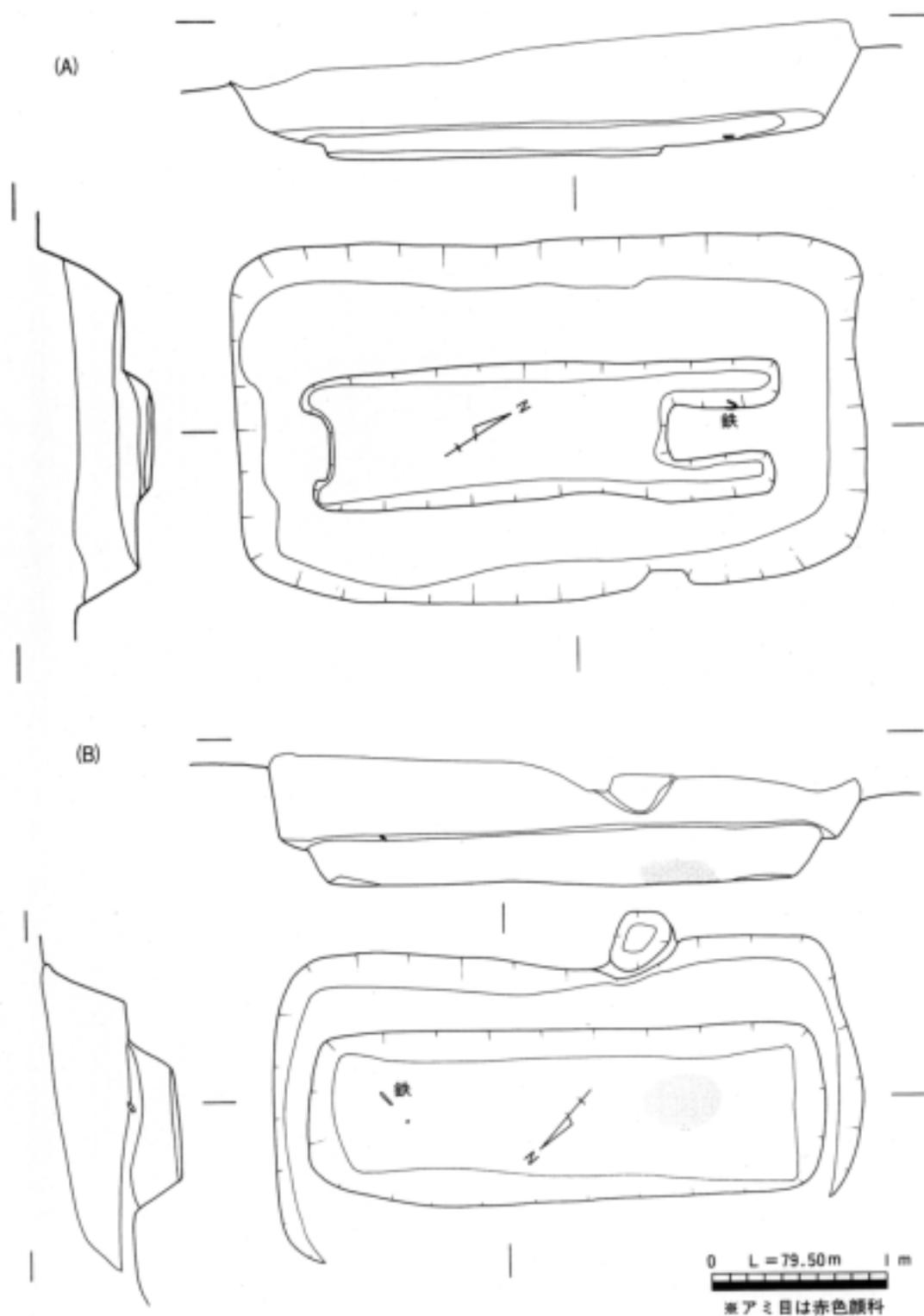


第47図 第6号古墳A(上)・B(下)主体部実測図

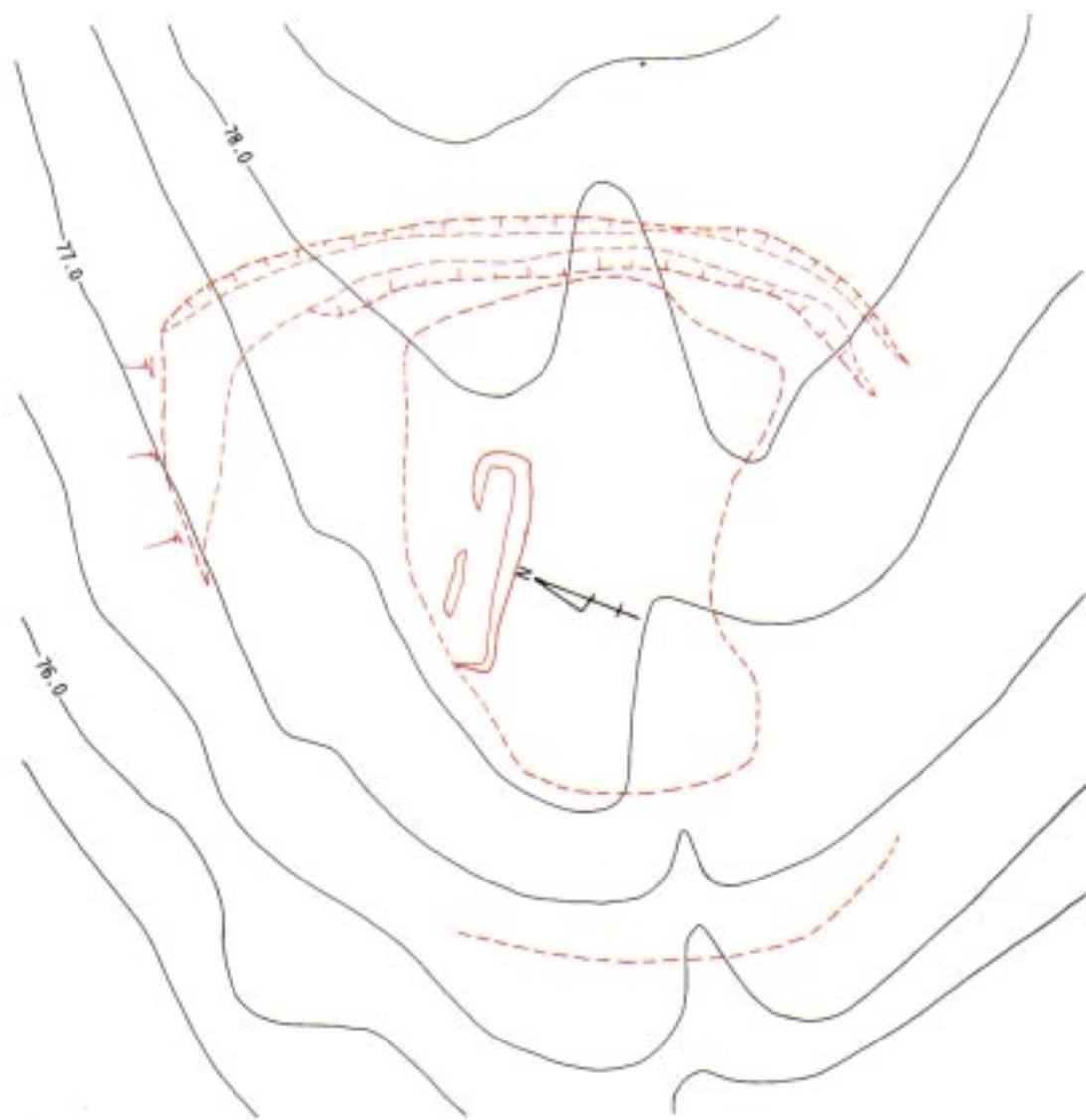


黒：調査前
赤：発掘後

第48図 第3号古墳墳丘測量図

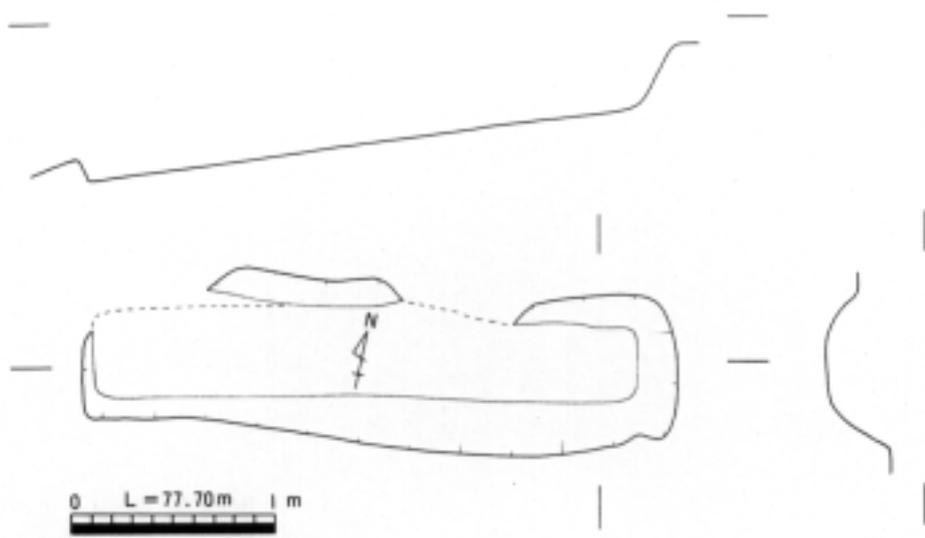


第49図 第3号古墳A(上)・B(下)主体部実測図

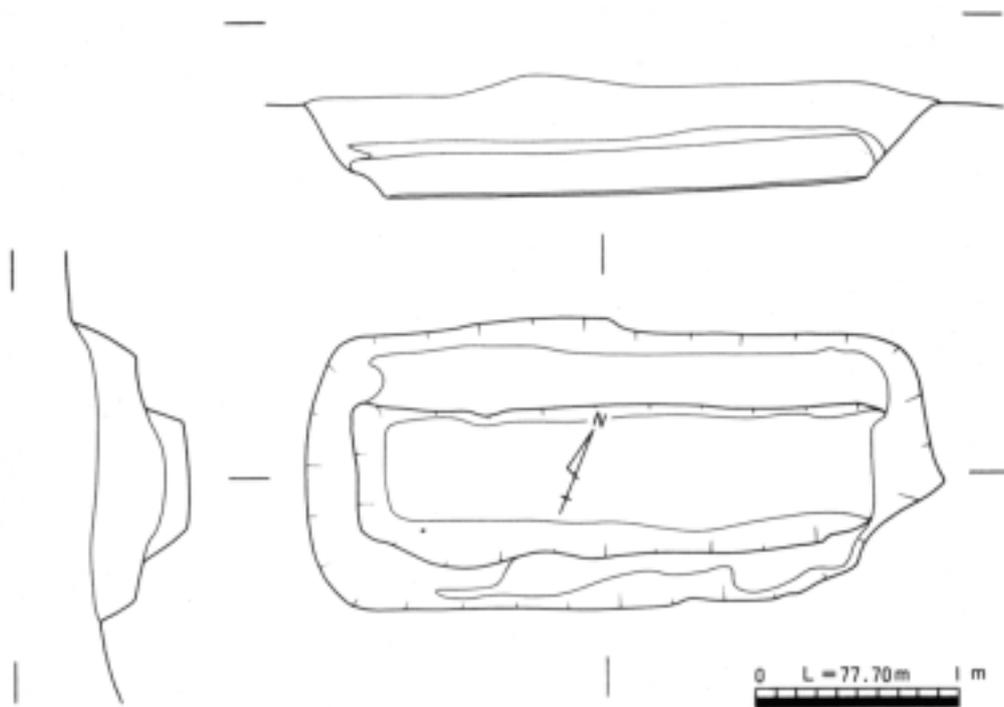


※黒線は調査前

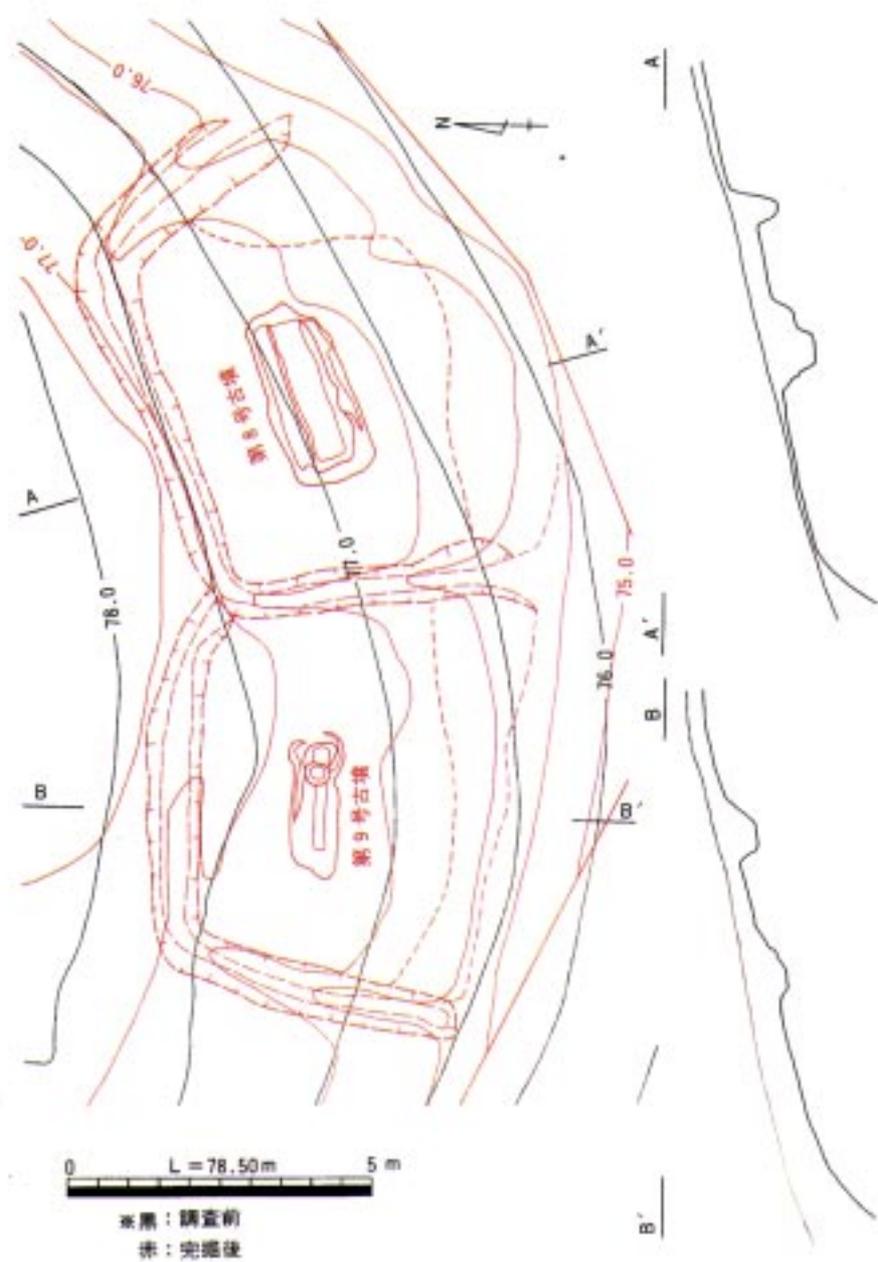
第50図 第7号古墳墳丘測量図



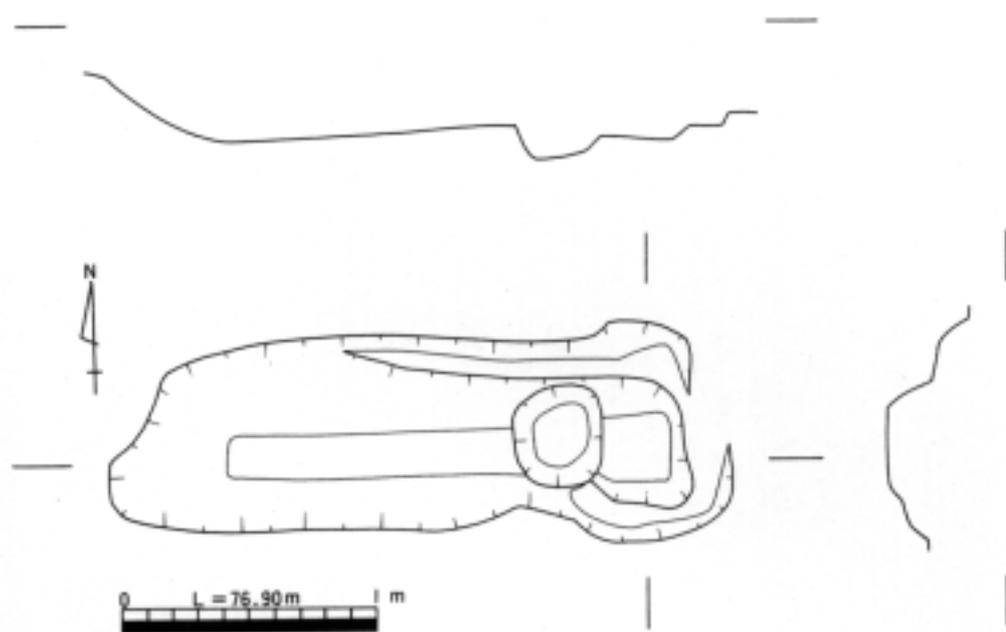
第51图 第7号古墳主体部実測図



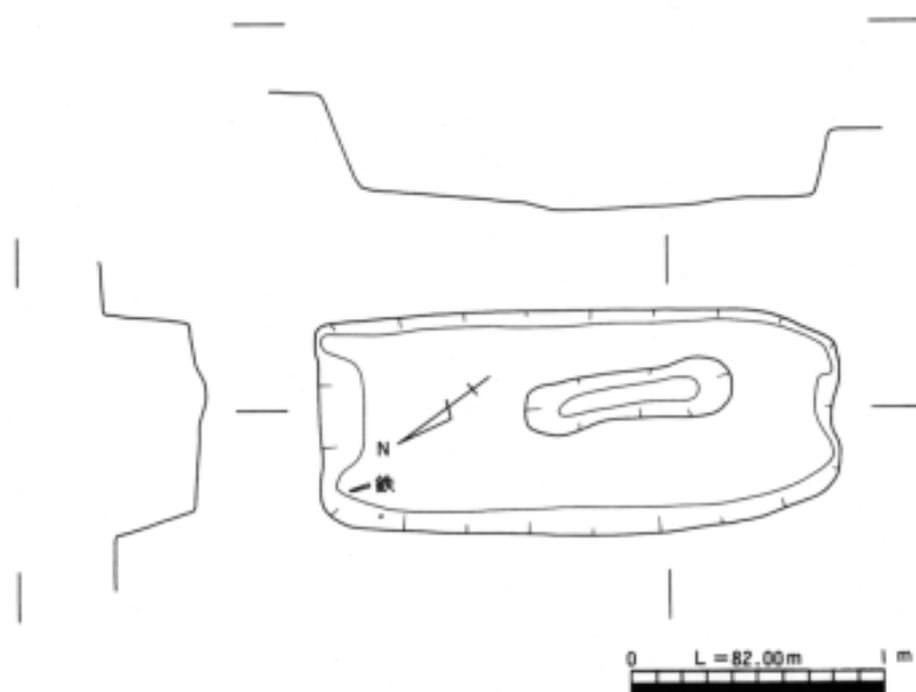
第52图 第8号古墳主体部実測図



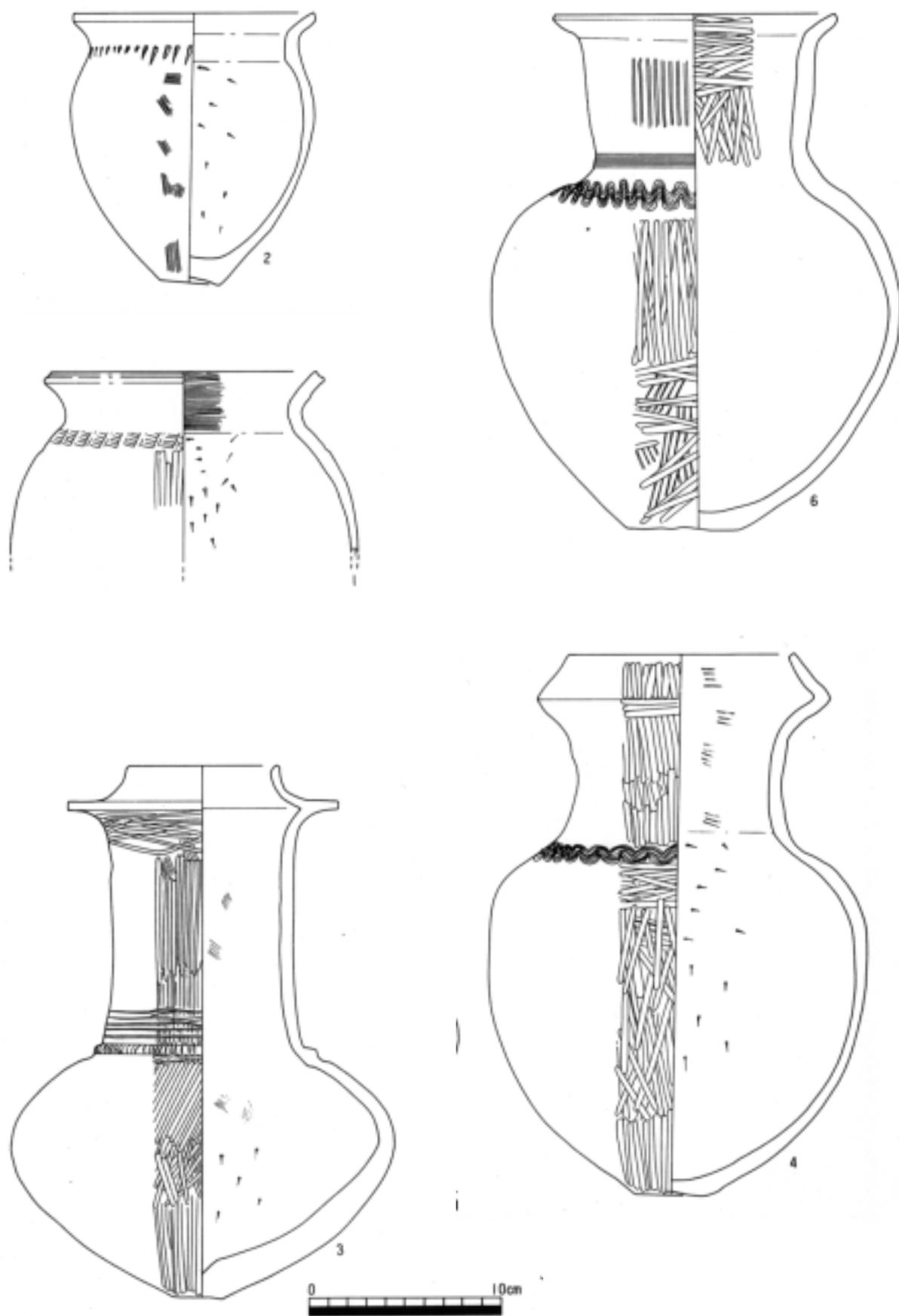
第53図 第8号・第9号古墳墳丘測量図



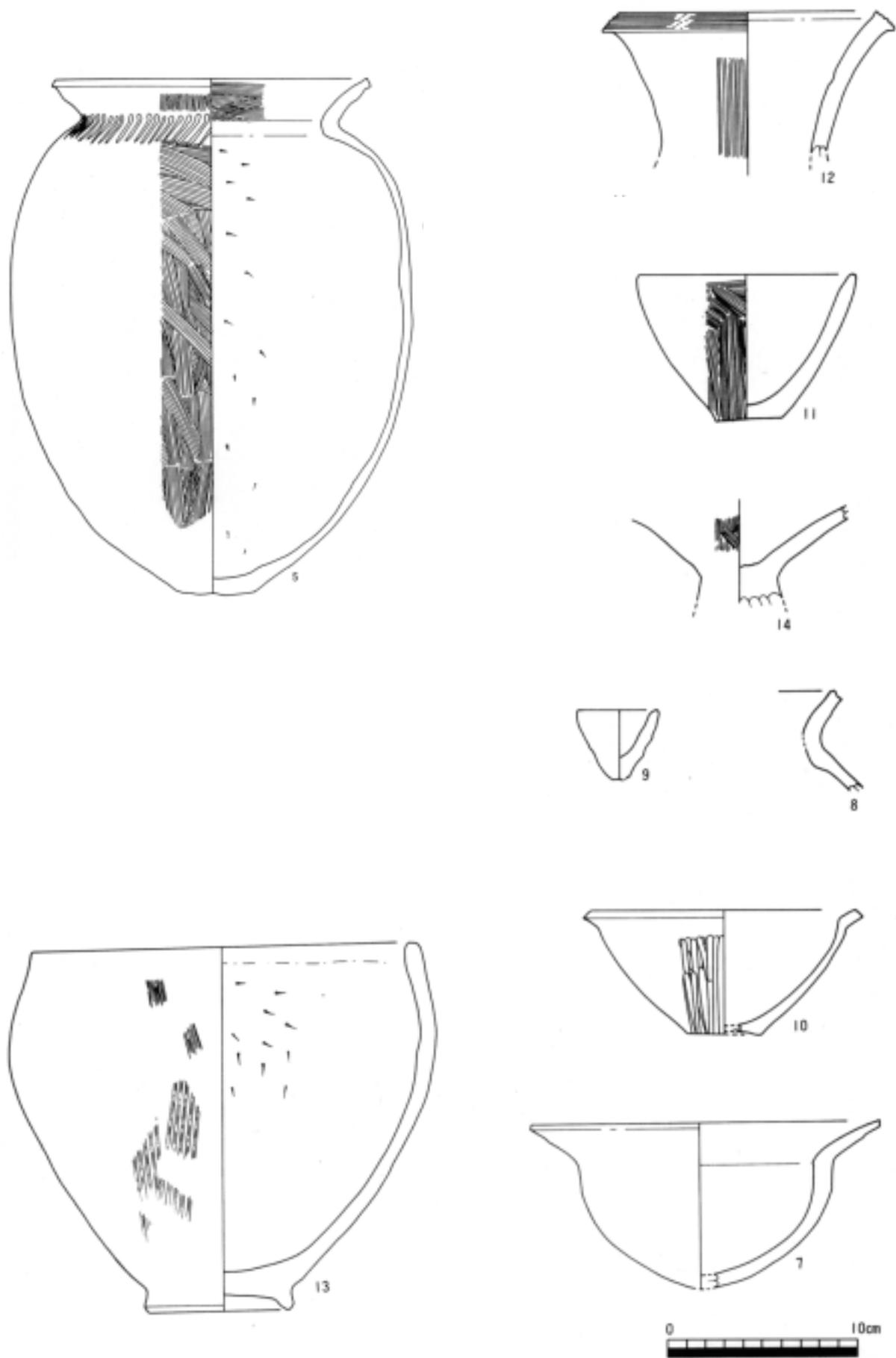
第54图 第9号古墳主体部実測図



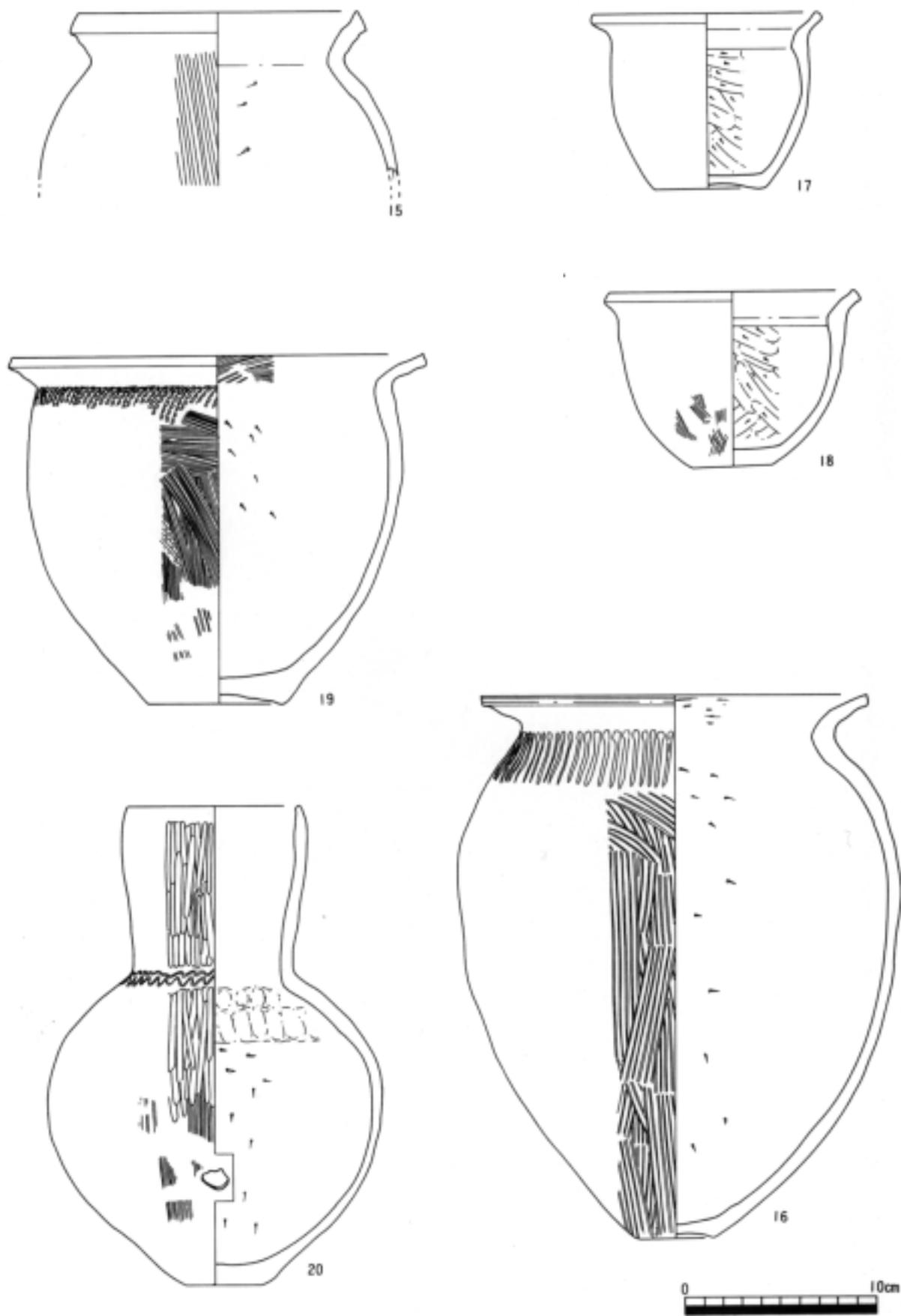
第55图 土墳基実測図



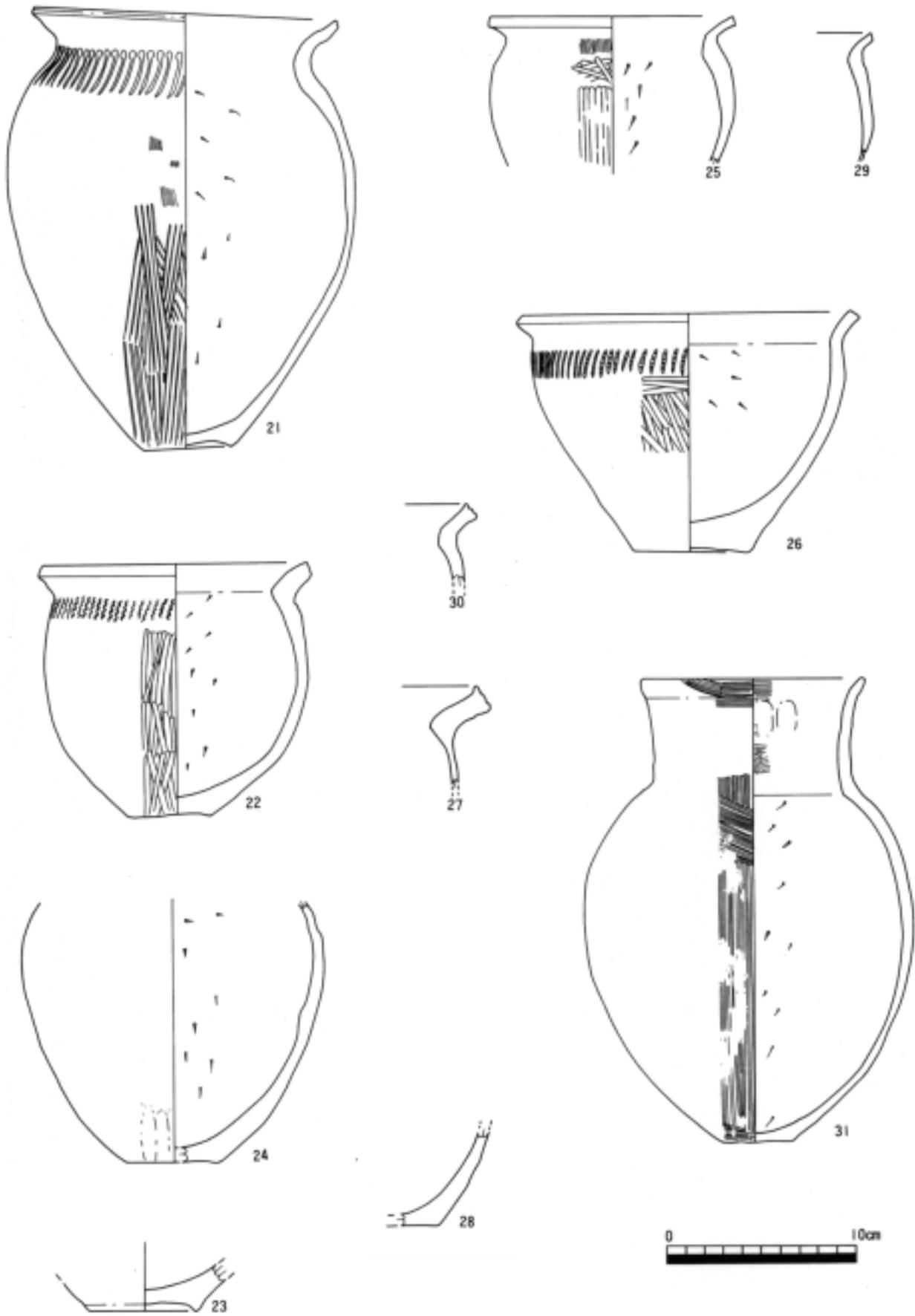
第56図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図



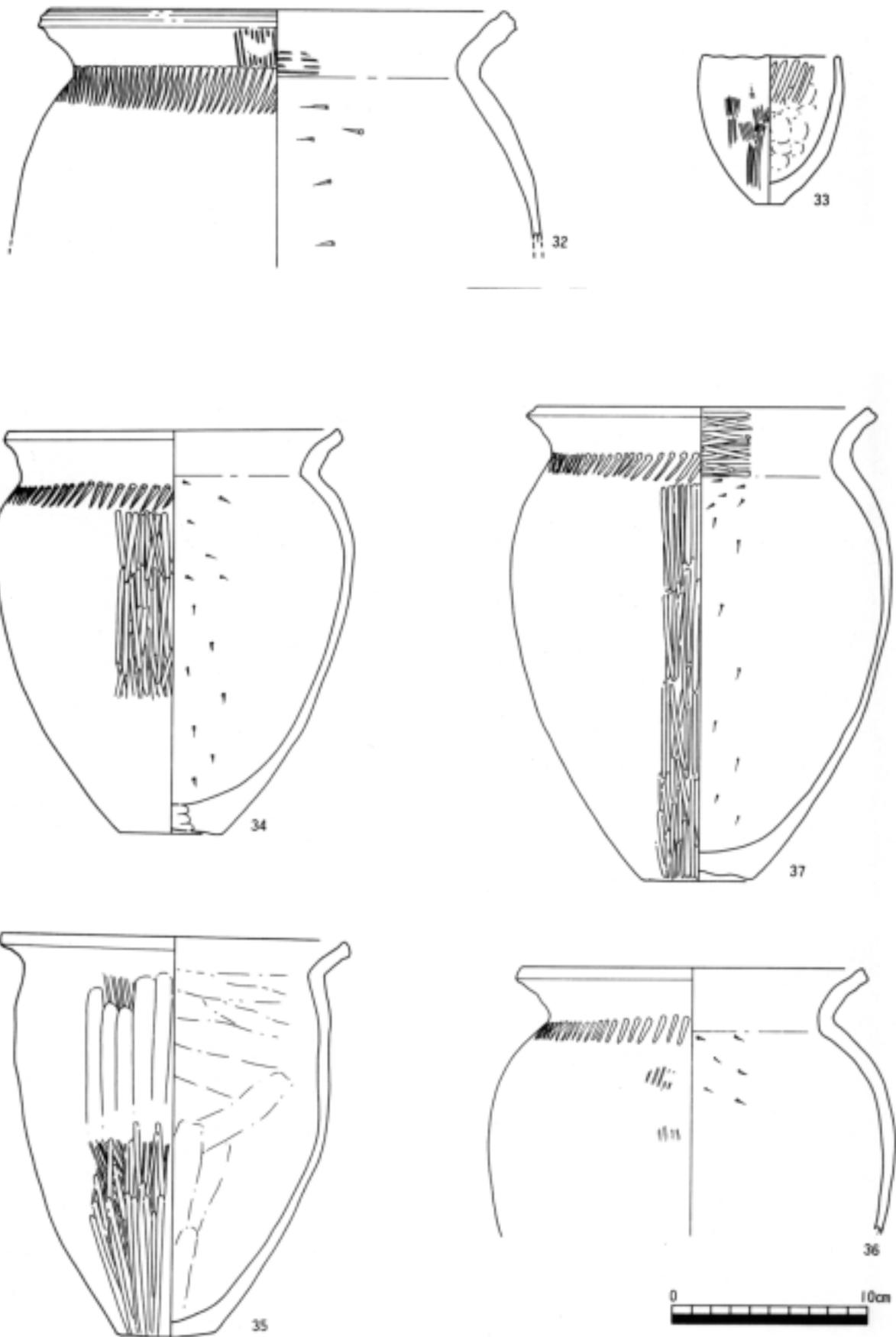
第57図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(2)



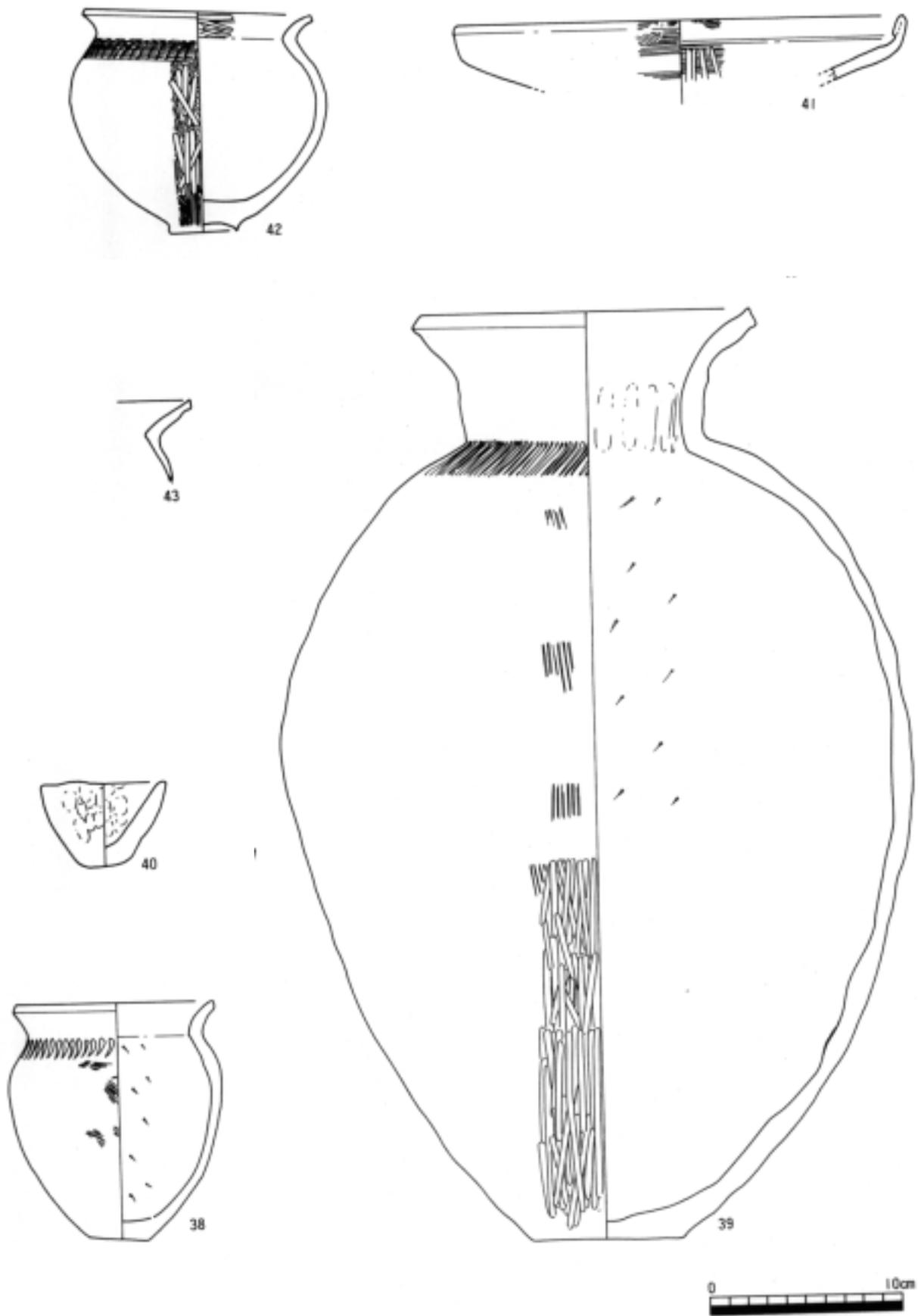
第 5 8 図 城ノ下 A 地点遺跡出土土器実測図 (3)



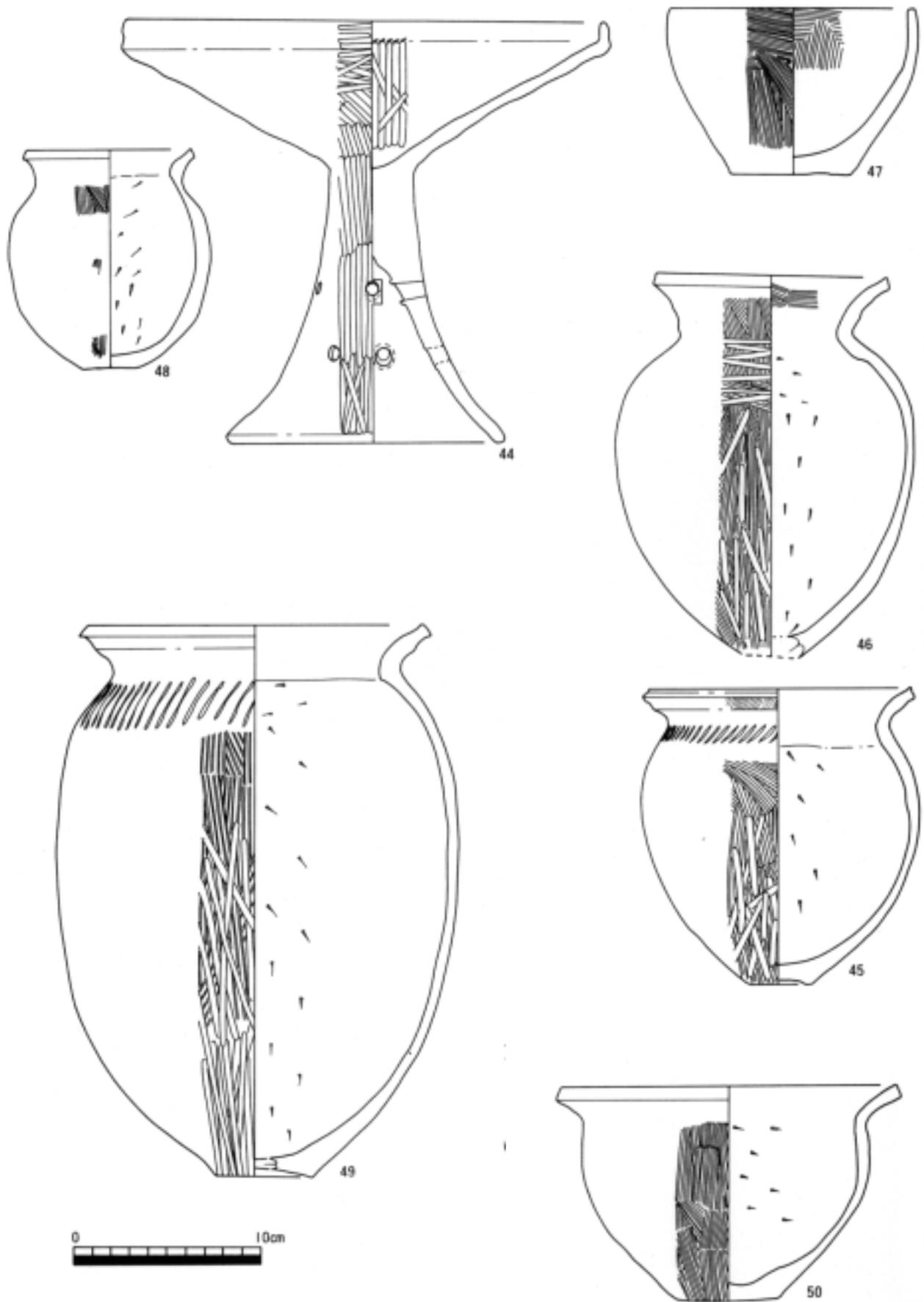
第59図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(4)



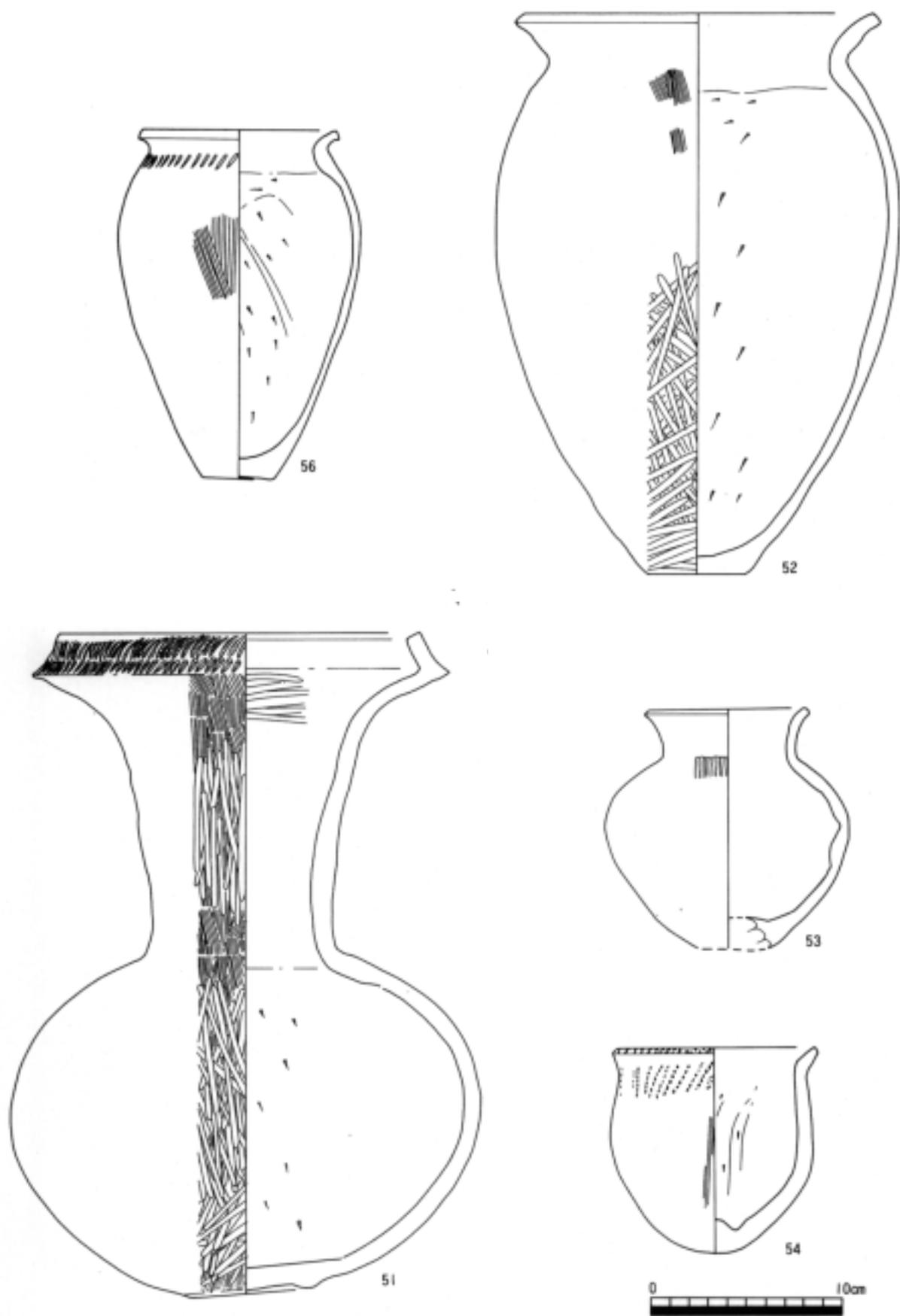
第60図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(5)



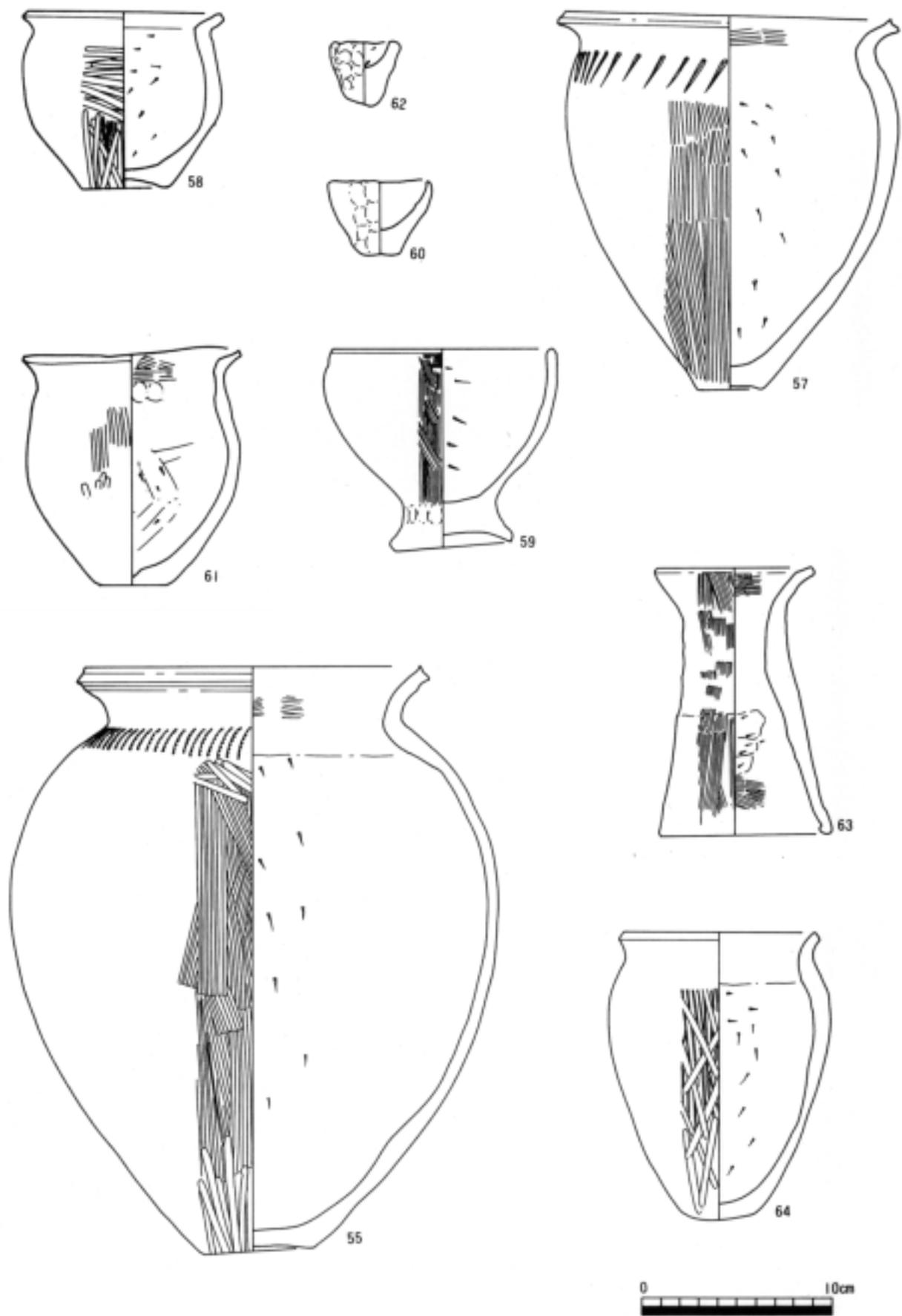
第61図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(6)



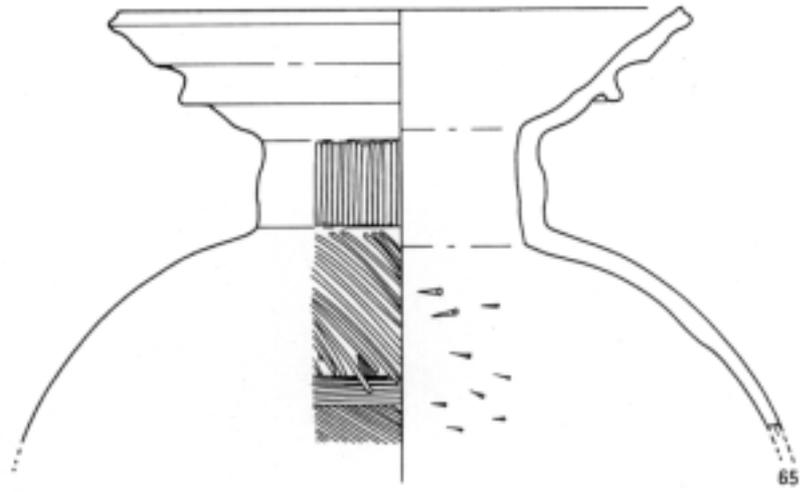
第62図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(7)



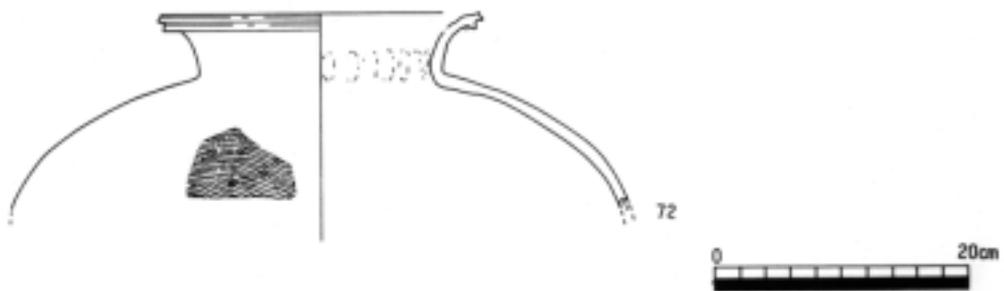
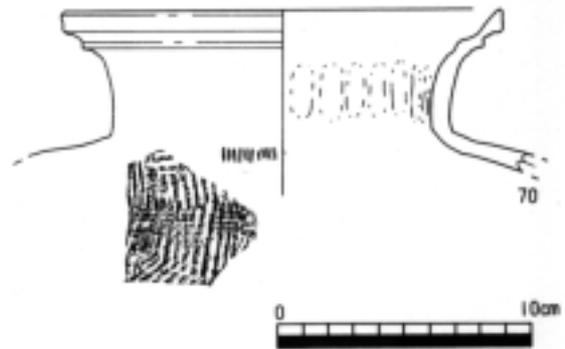
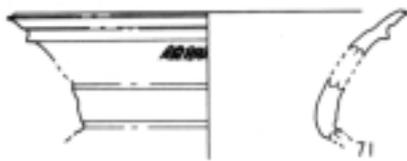
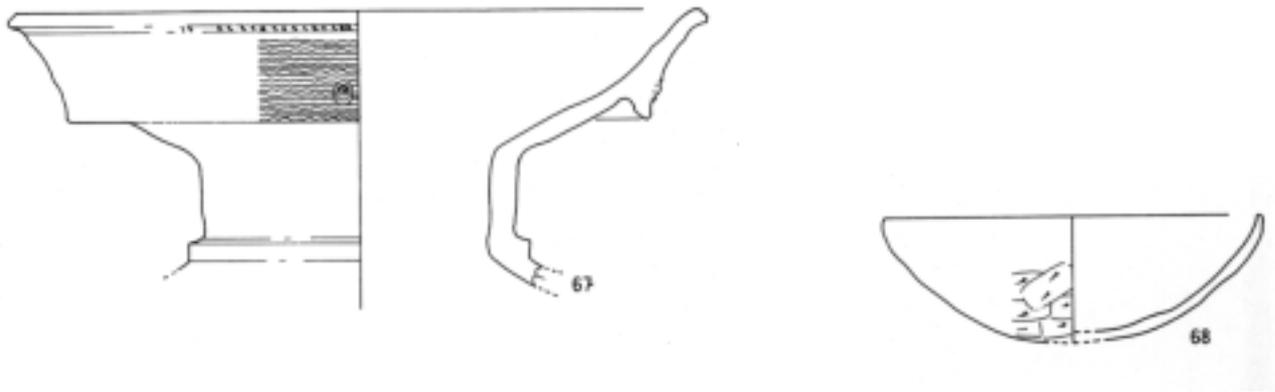
第63図 城ノ下A地点遺跡出土土器実測図(8)



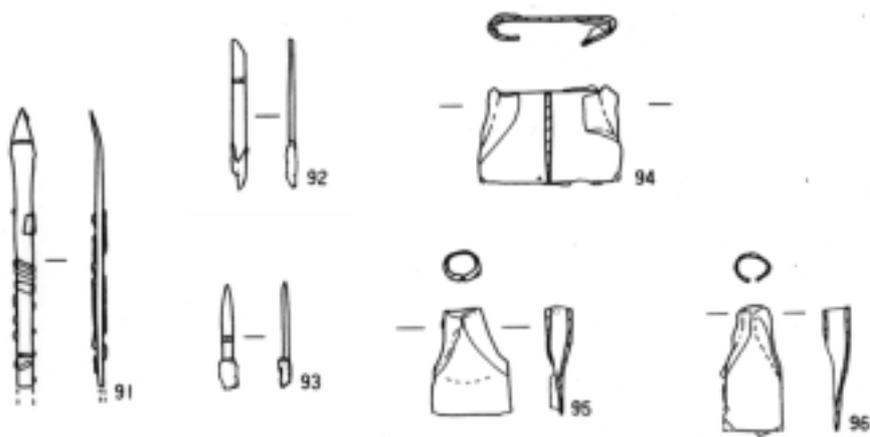
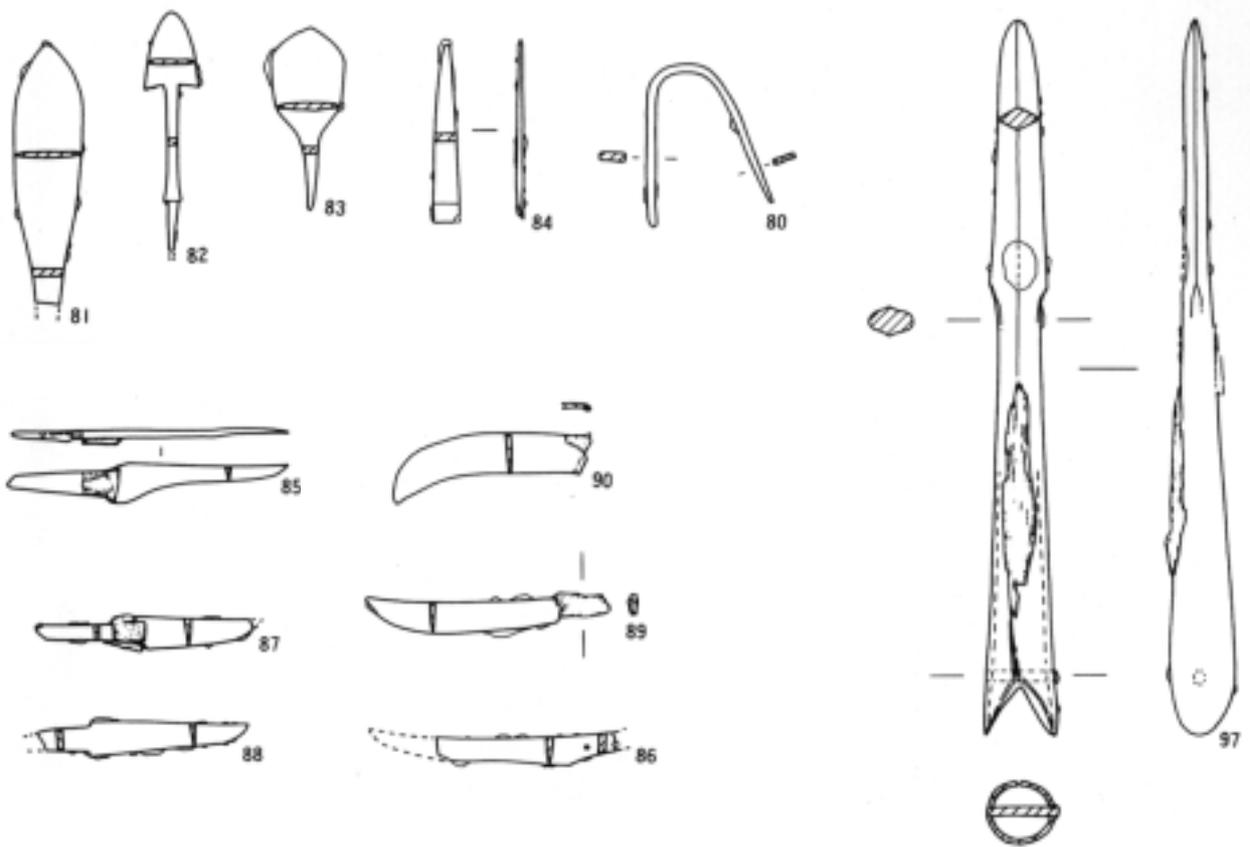
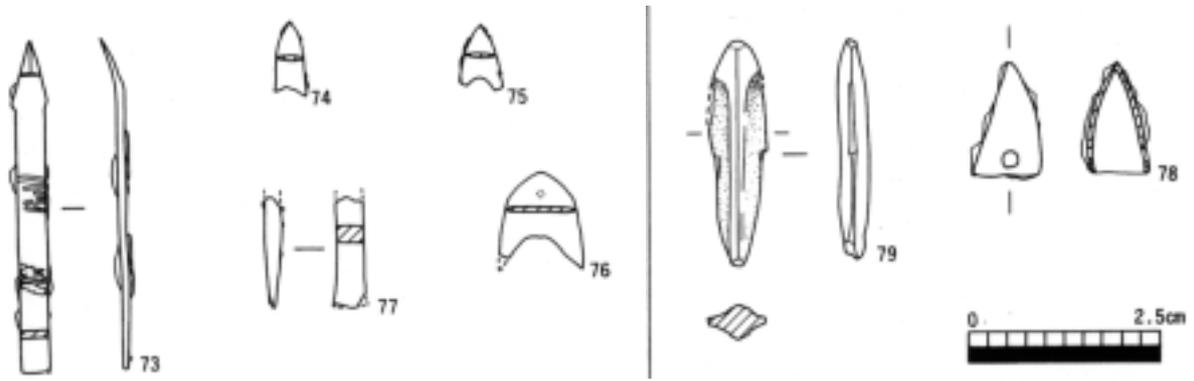
第 6 4 図 城ノ下 A 地点遺跡出土土器実測図 (9)



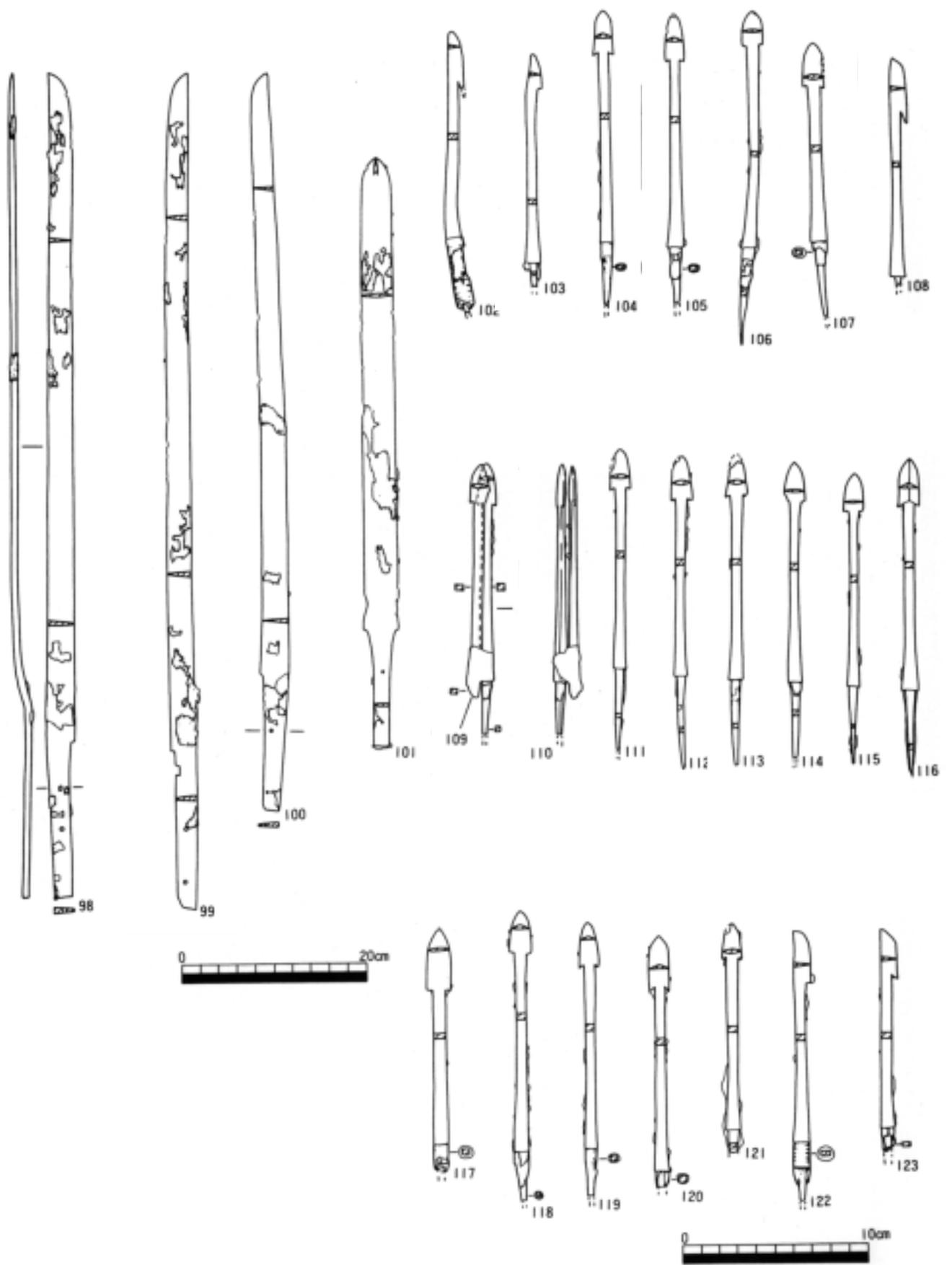
第65図 城ノ下A地点遺跡出土土師器実測図



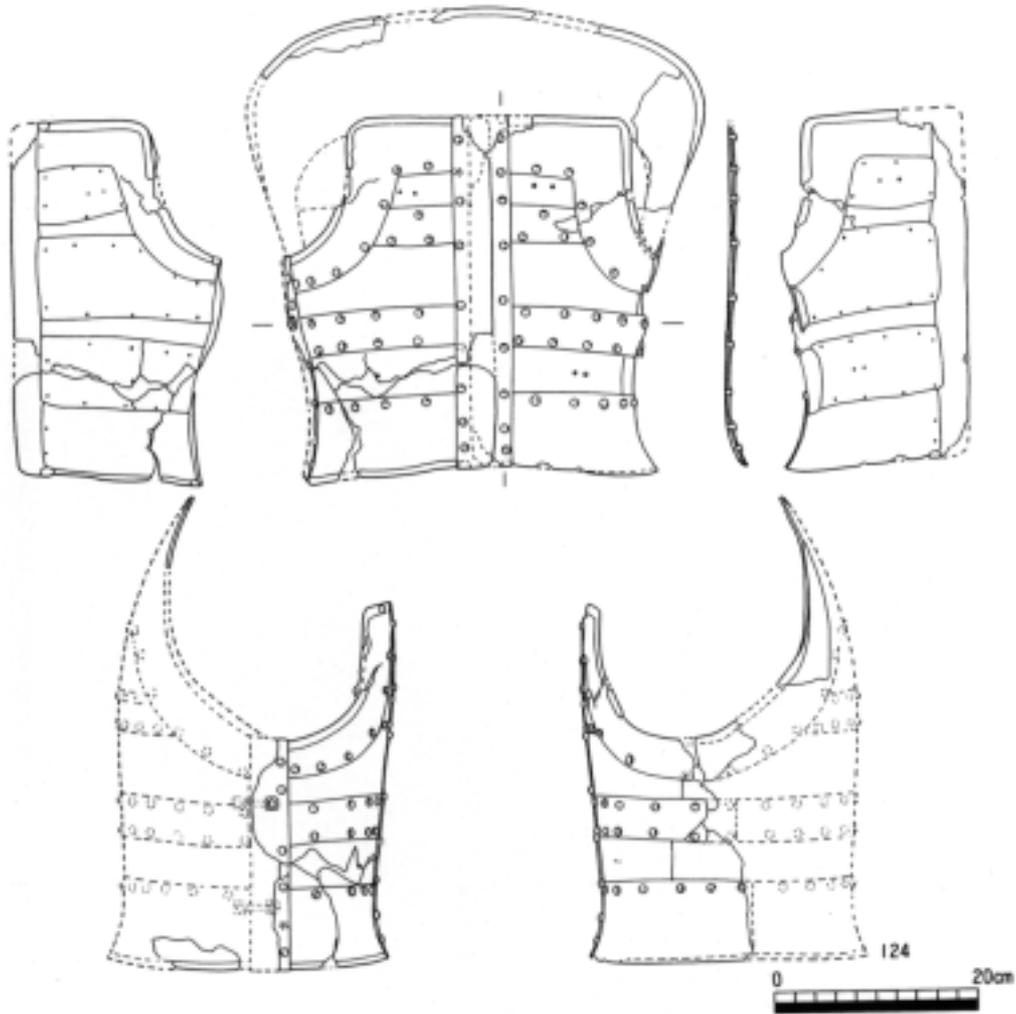
第 6 6 図 城ノ下 A 地点遺跡出土土師器及び須恵器実測図



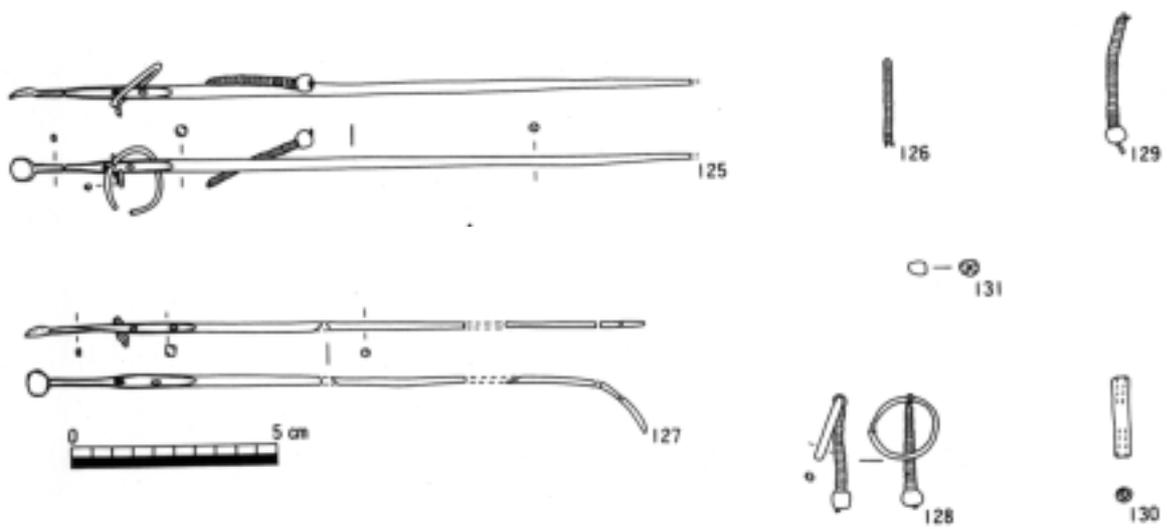
第67図 城ノ下A地点遺跡出土鉄器及び銅鏃実測図



第68図 城ノ下第1号古墳出土鉄器実測図



第69図 城ノ下第1号古墳出土短甲実測図



第70図 城ノ下第1号古墳出土金銅製品及び玉類実測図

圖 版



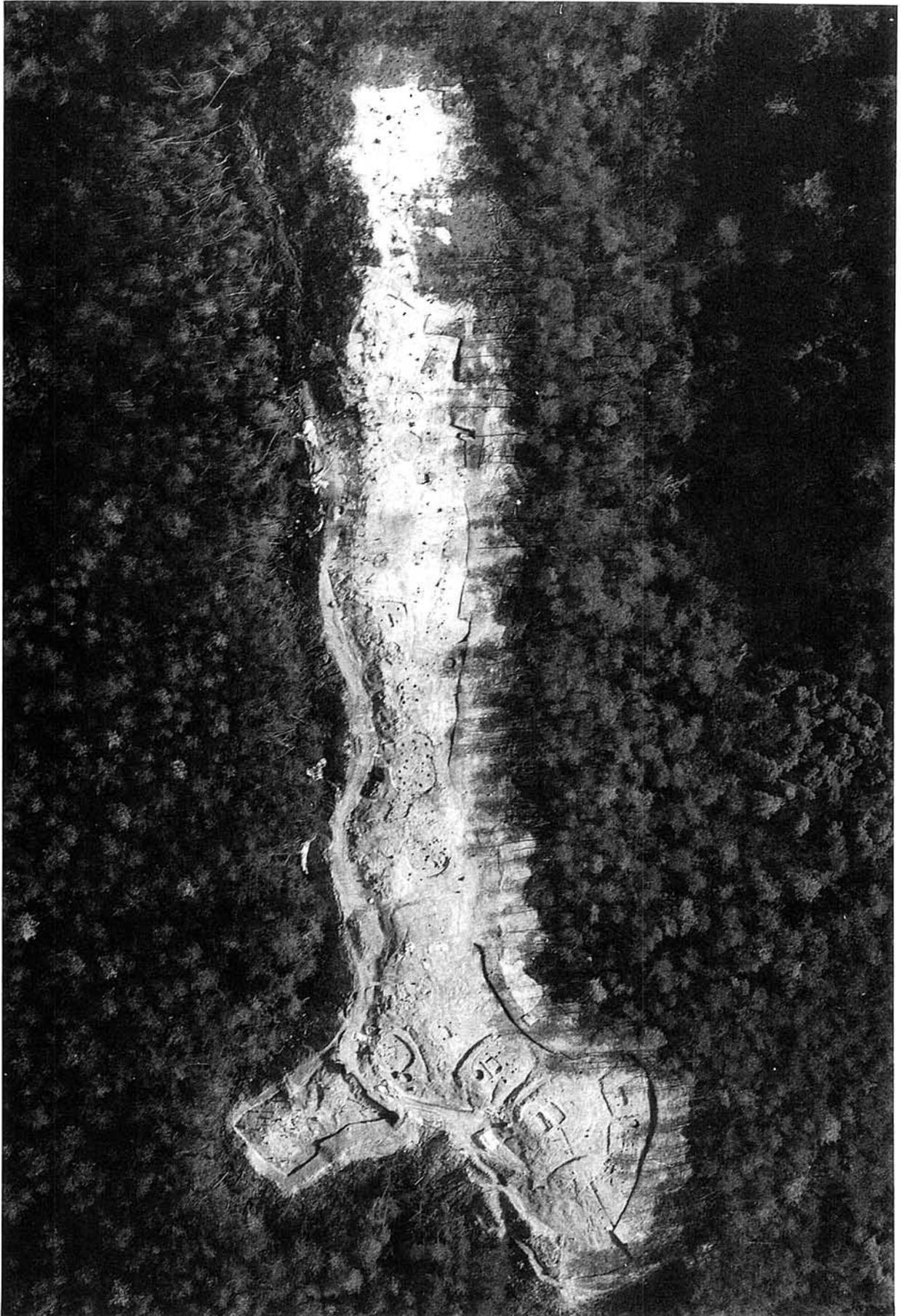
図版 1 遺跡近景及び周辺遺跡（南から）



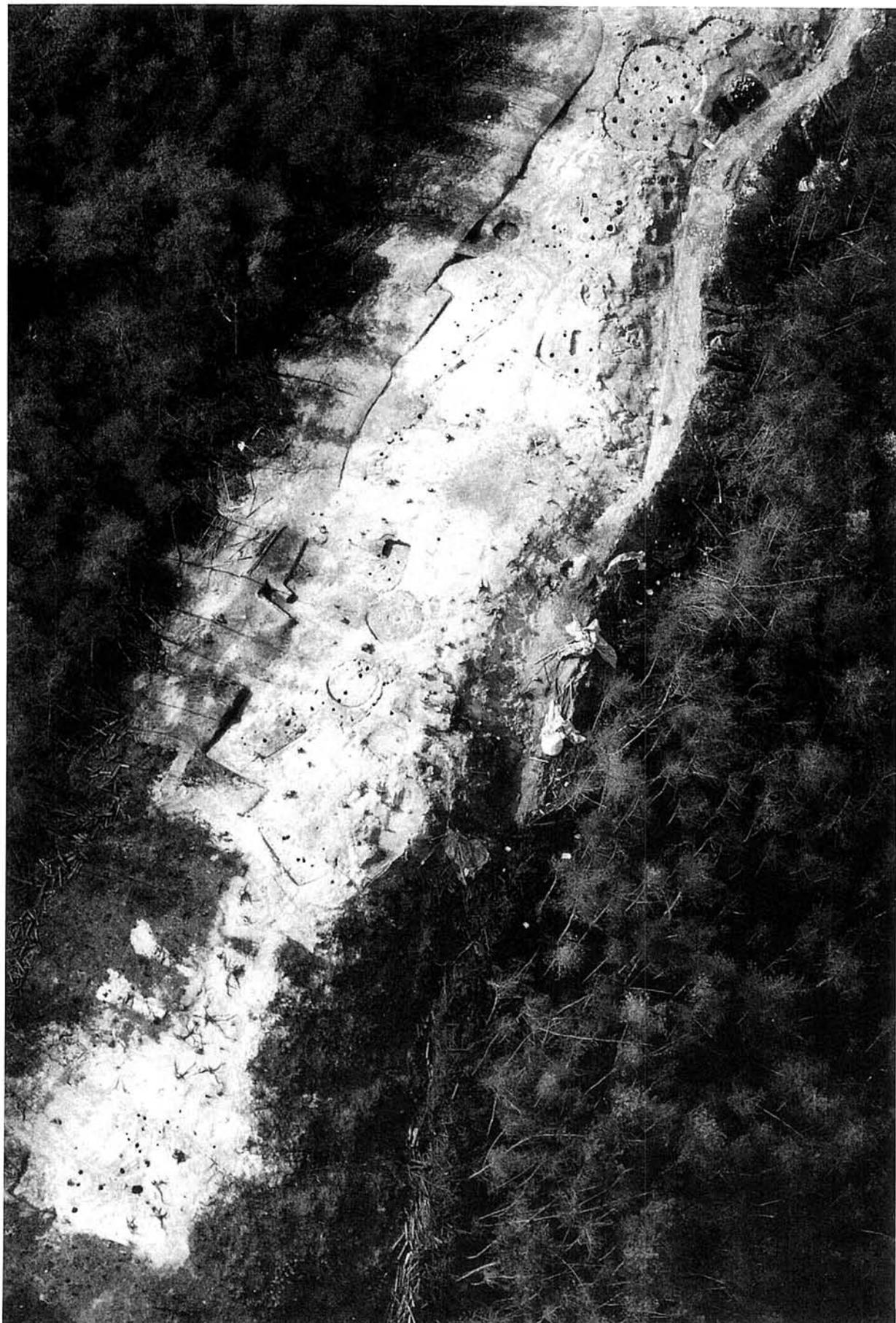
図版 2 a 城ノ下A地点遺跡遠景（調査前 北東から）



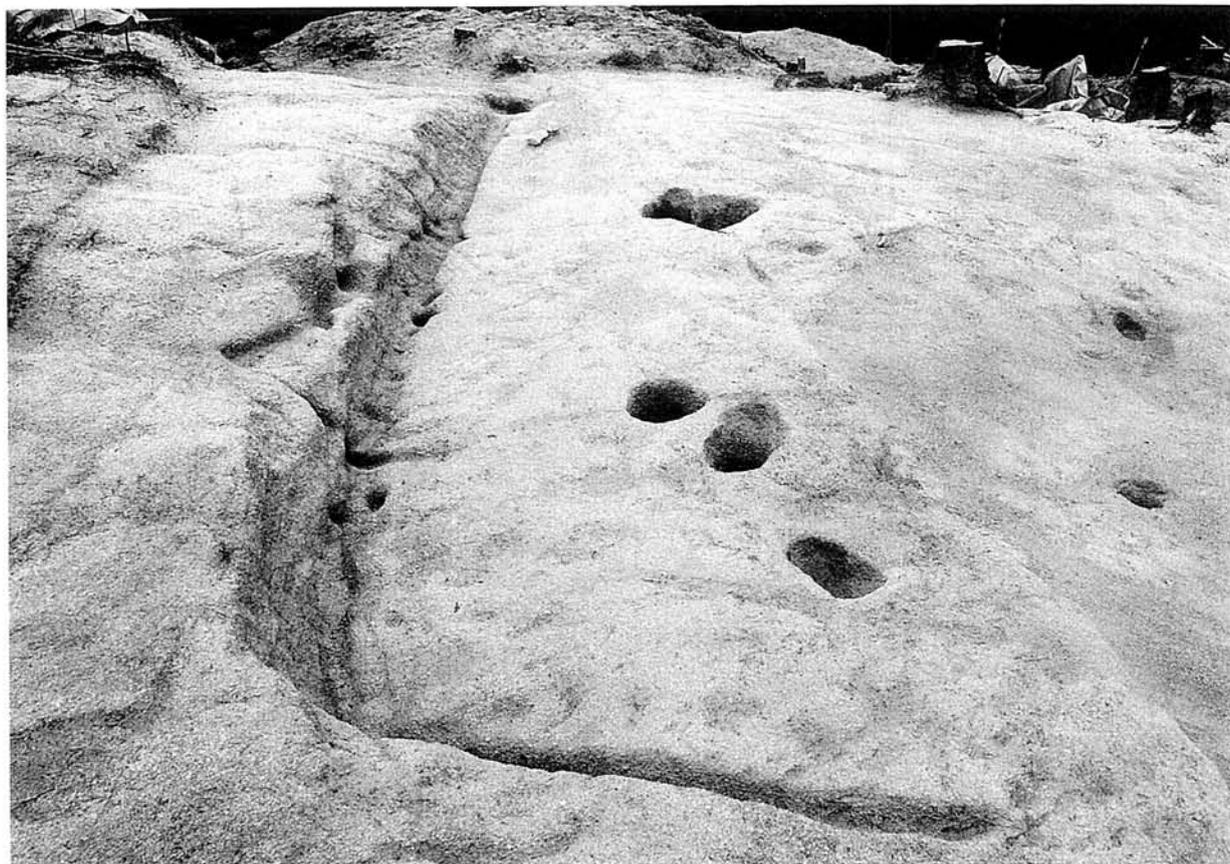
図版 2 b 遺跡全景（調査前）



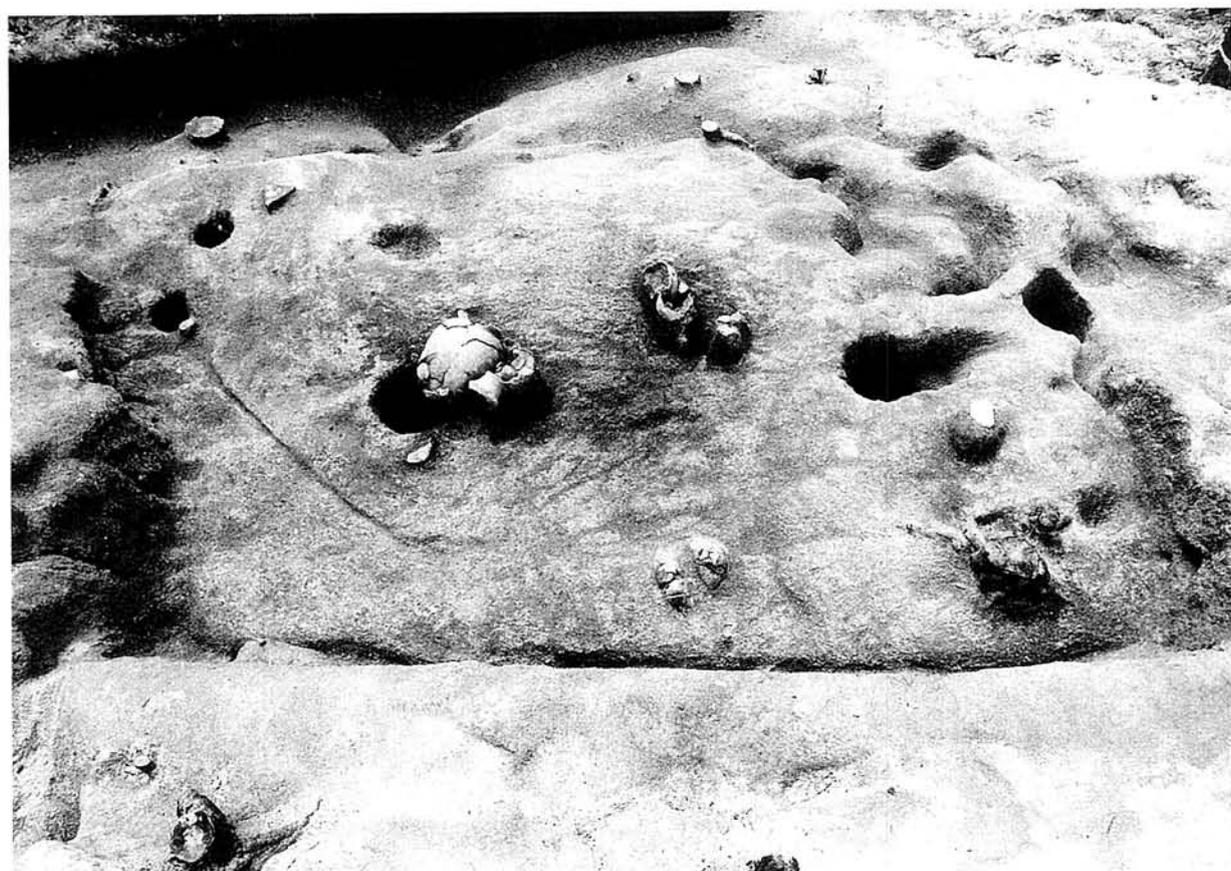
図版3 遺跡全景（調査後）



图版 4 遺跡東側近景



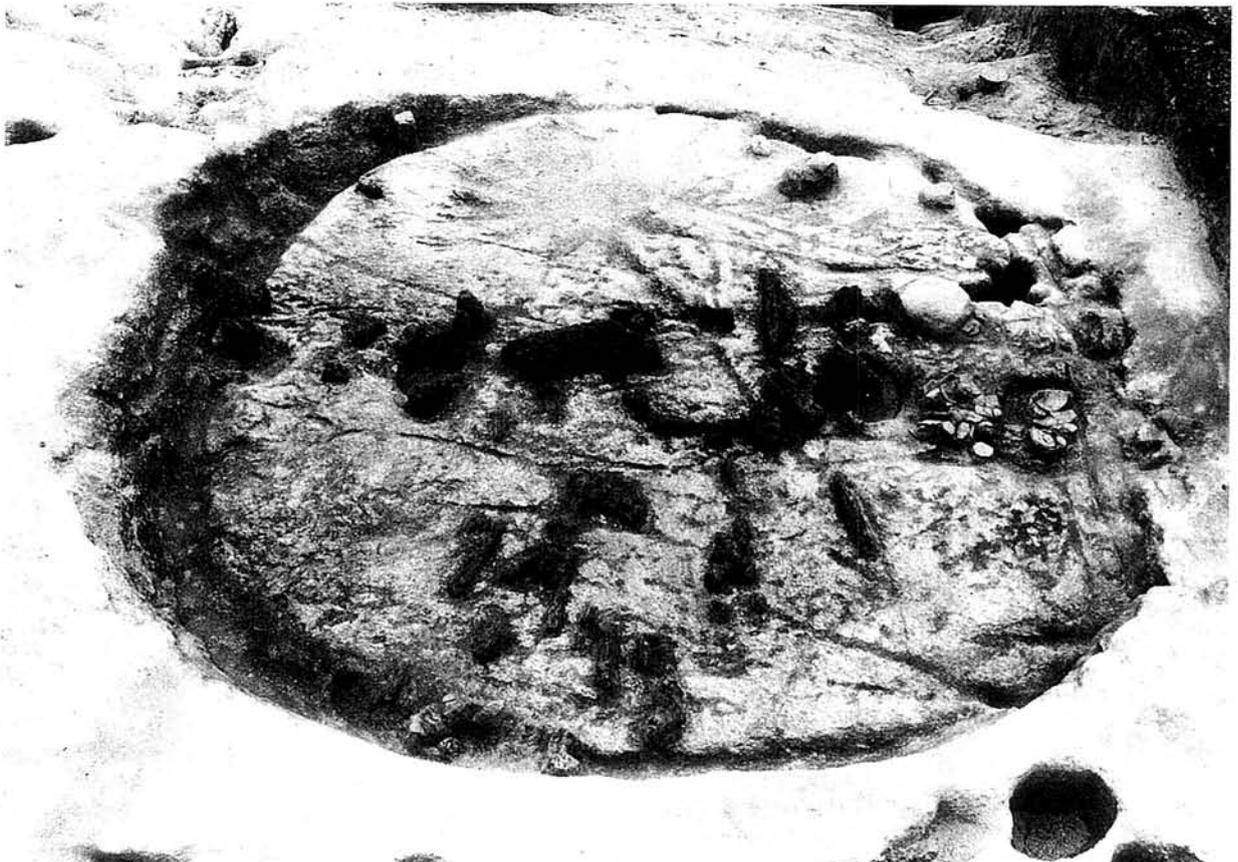
图版 5 a 第 1 号住居跡



图版 5 b 第 2 号住居跡



図版 6 a 第 3 号・第 4 号住居跡（完掘後）



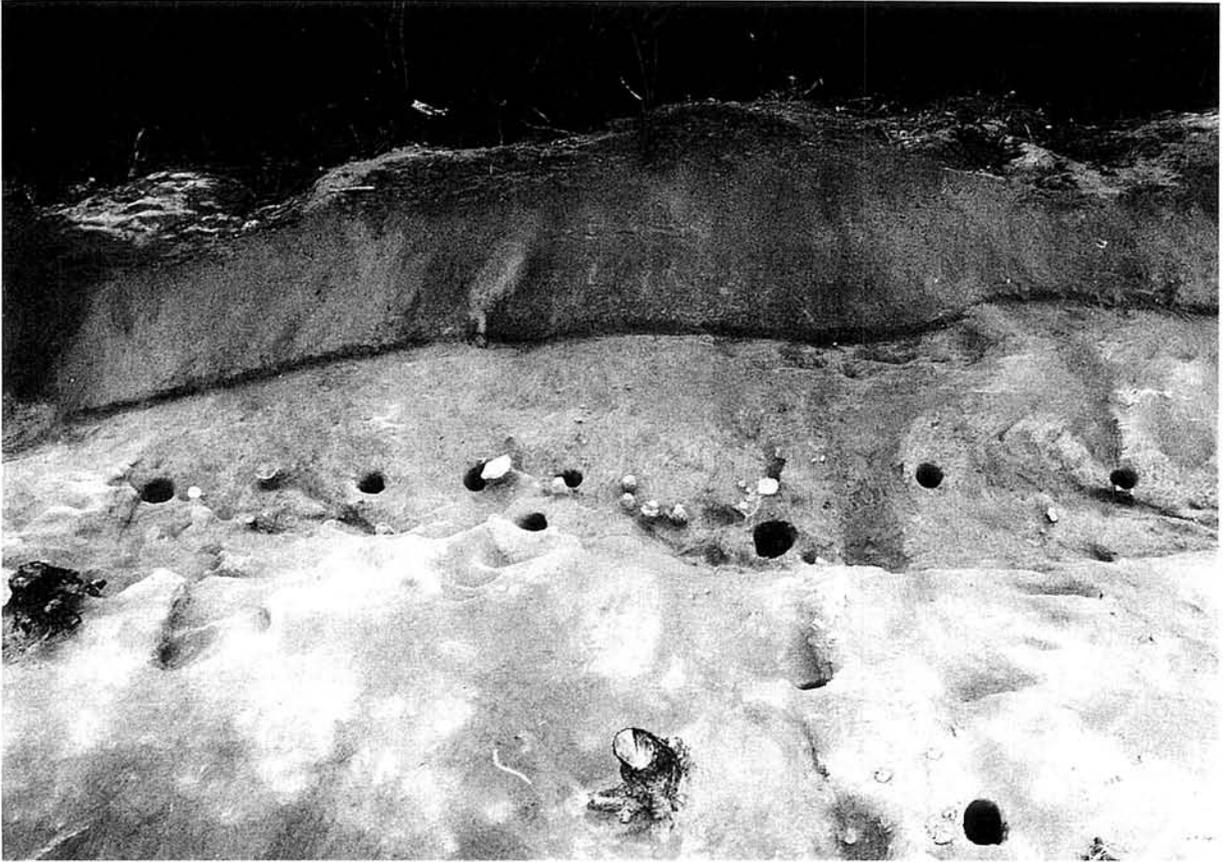
図版 6 b 第 4 号住居跡炭化材及び遺物出土状況



図版 7 a 第 5 号住居跡



図版 7 b 第 6 号住居跡及び第 1 号土壙



図版 8 a 第 7 号・第 8 号住居跡及び第 1 号テラス状遺構（東側）



図版 8 b 第 7 号・第 8 号住居跡及び第 1 号テラス状遺構（西側）



图版 9 a 第 9 号住居跡



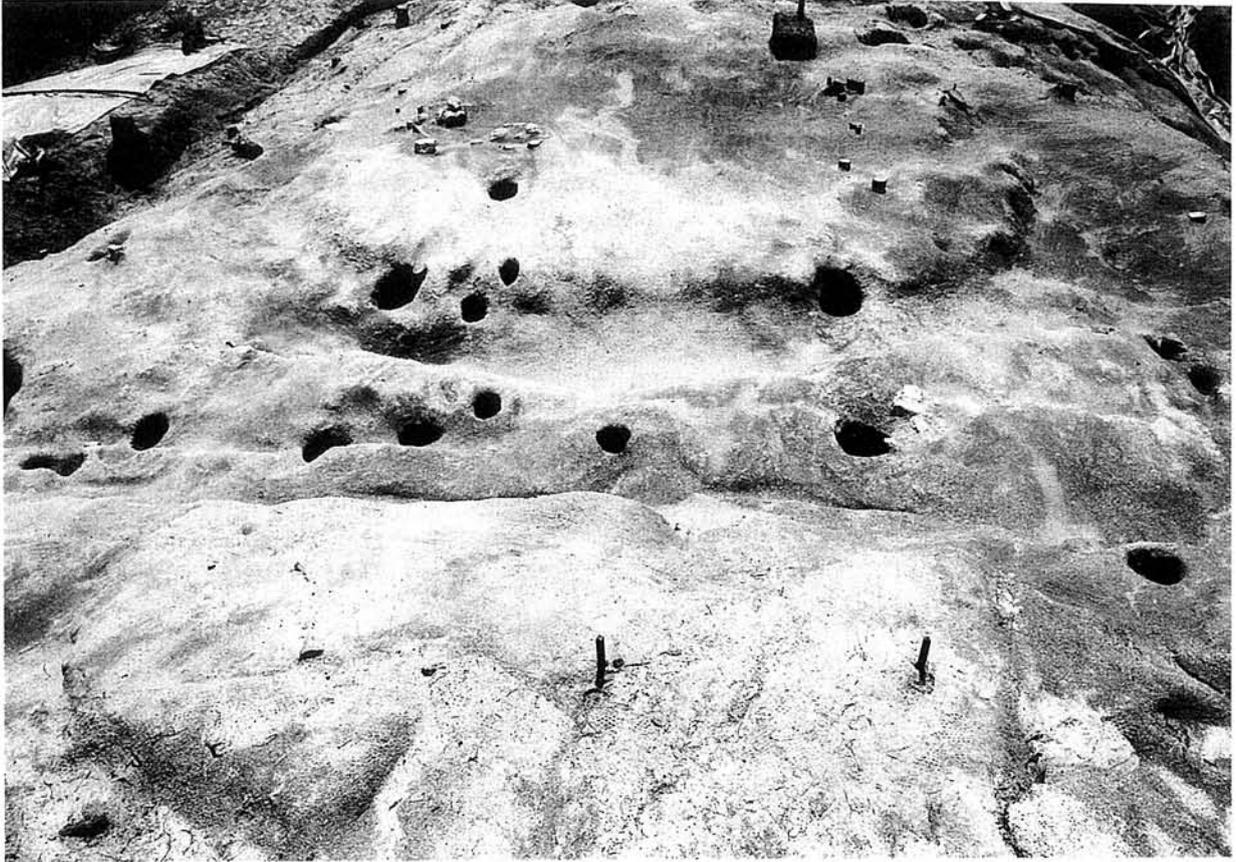
图版 9 b 土墳墓



図版10 a 第1号住居跡状遺構



図版10 b 第2号住居跡状遺構



图版11 a 第10号·第11号·第12号住居跡



图版11 b 第2号土壙



図版12 a 第4号古墳及び第1号掘立柱建物跡（東から）



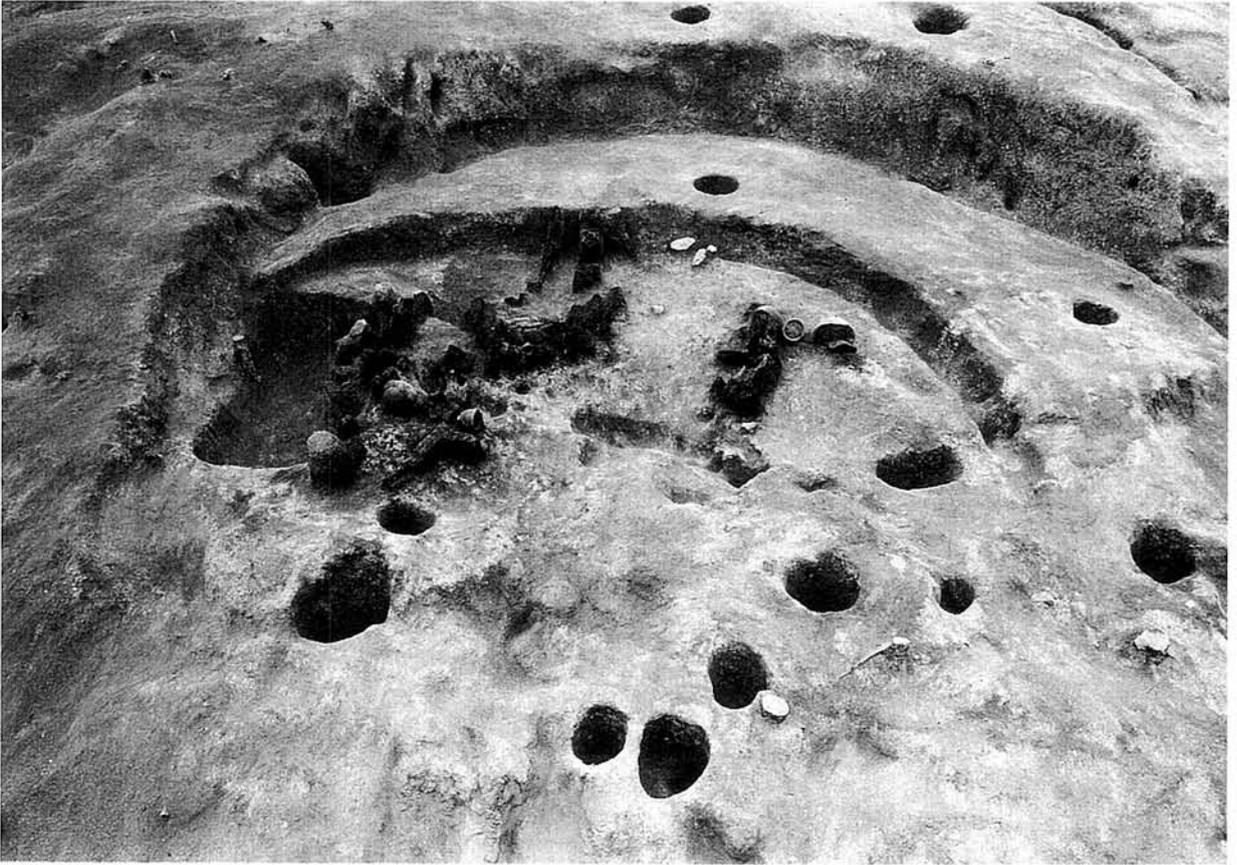
図版12 b 第4号古墳主体部



図版13 a 第13号・第14号住居跡



図版13 b 第15号住居跡及び第3号住居跡状遺構



図版14 a 第18号住居跡炭化材及び遺物出土状況



図版14 b 第16号～第19号住居跡群及び第3号・第4号土壌



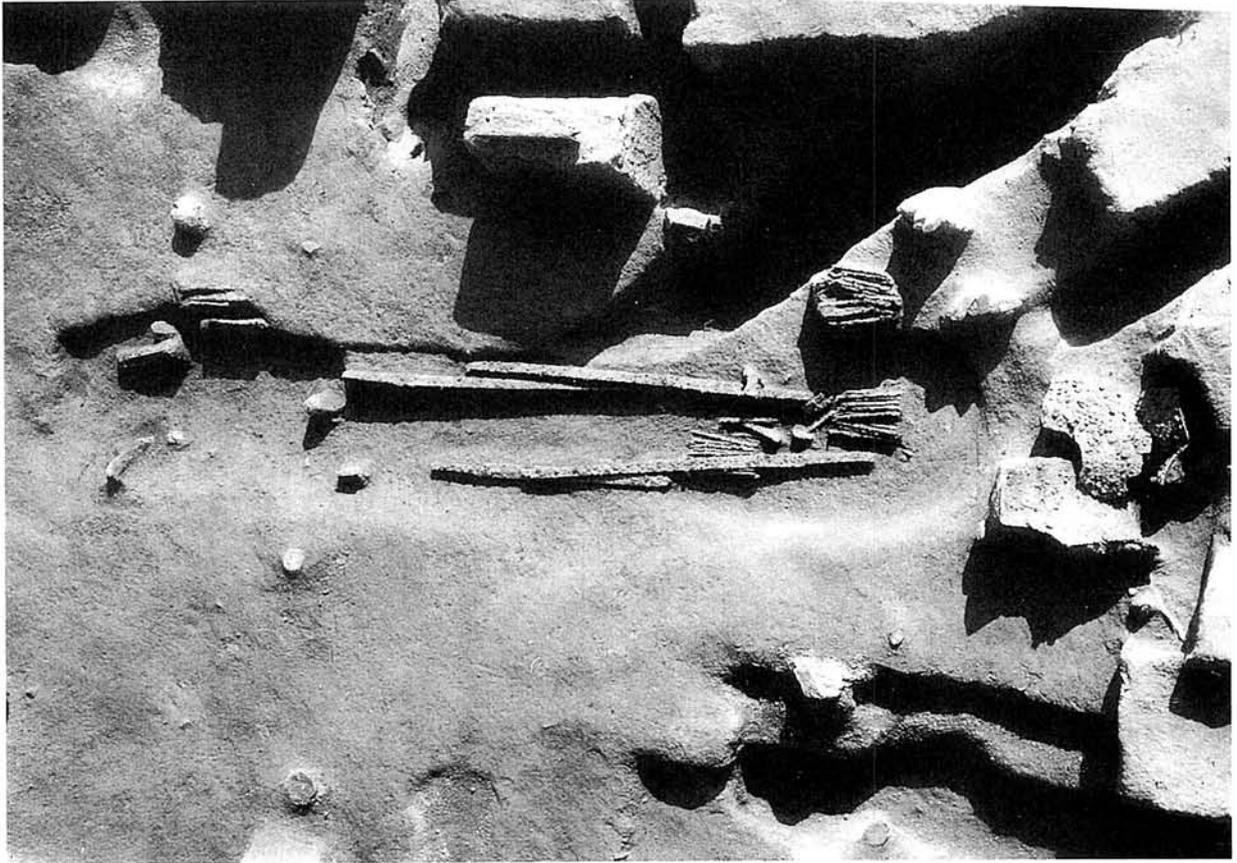
図版15 a 遺跡西側近景 (調査後)



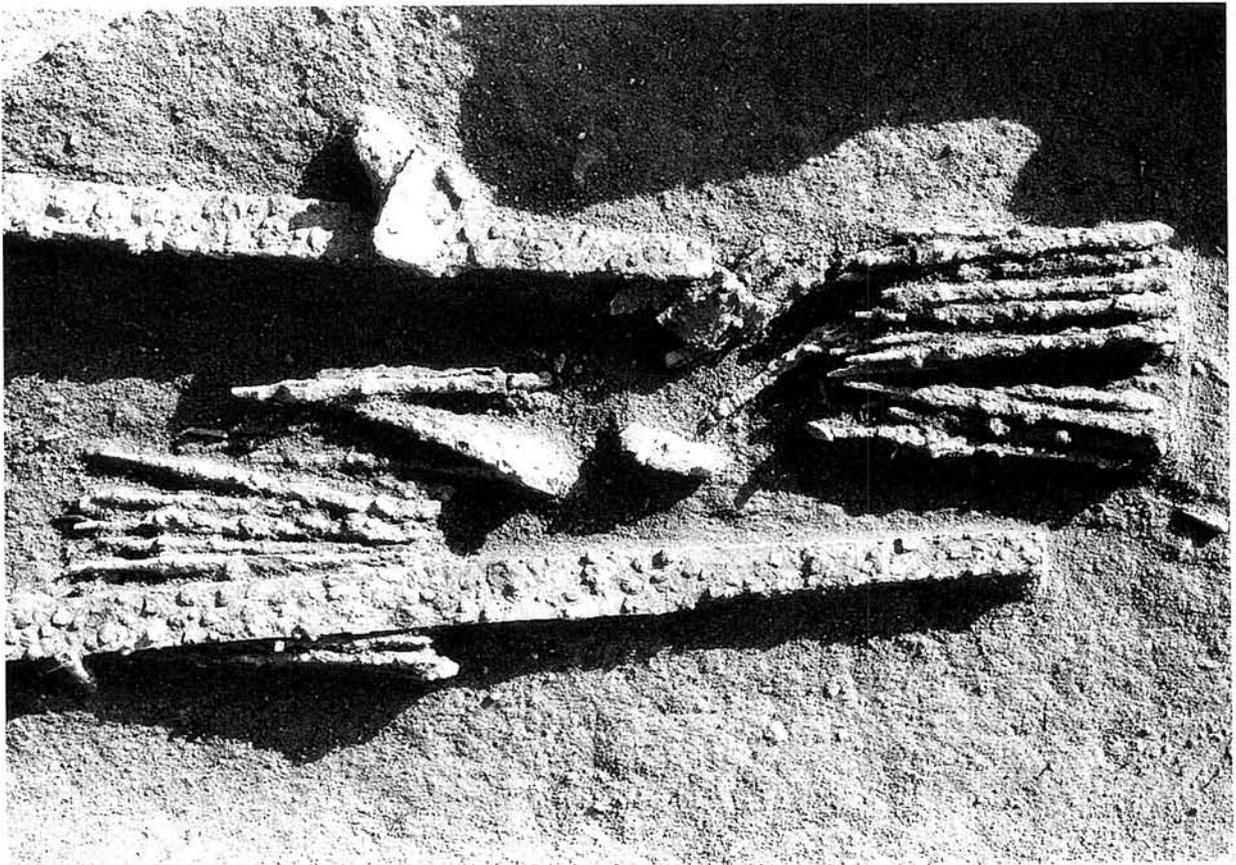
図版15 b 第1号・第2号・第3号古墳近景 (調査前西から)



図版16 第1号古墳（完掘後）



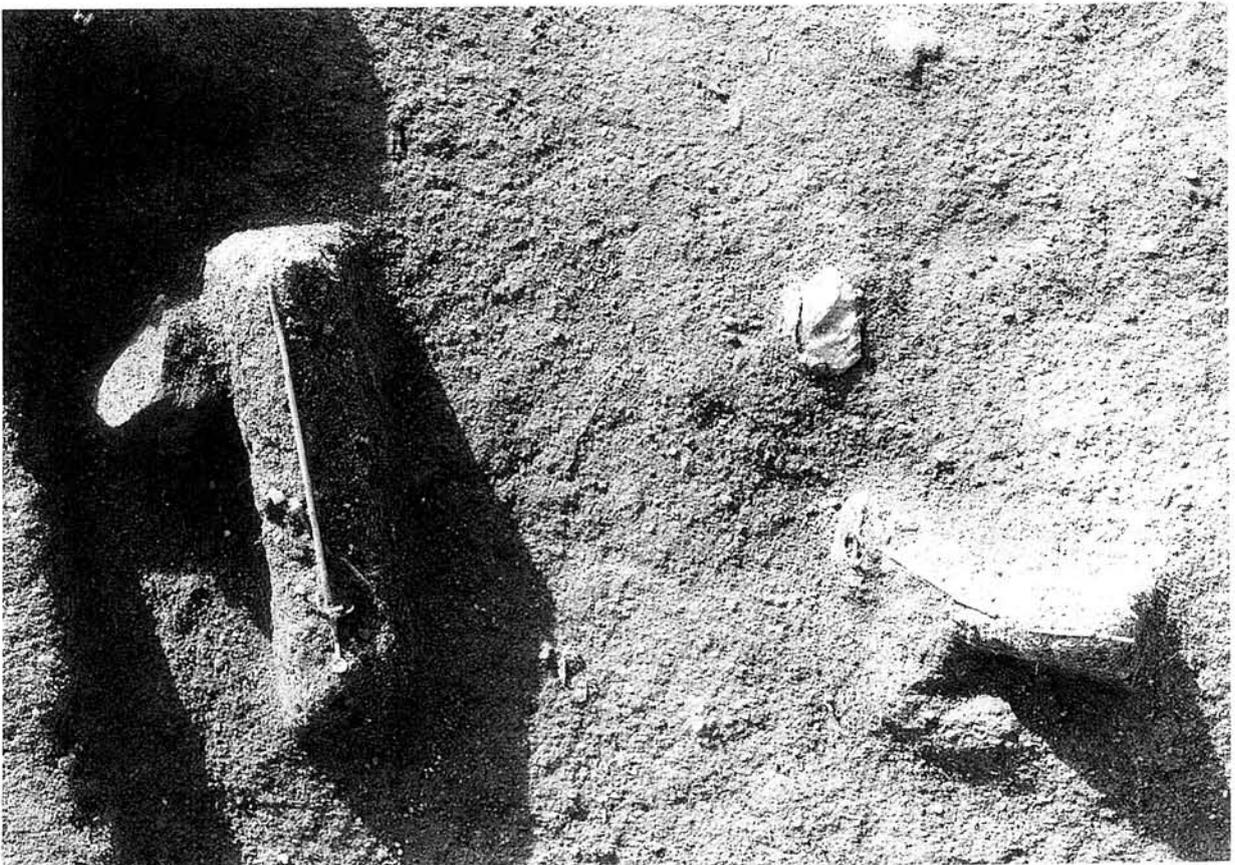
图版17 a 第1号古墳主体部内遺物出土状況（全景）



图版17 b 第1号古墳主体部内遺物出土状況（西半部分）



図版18 a 第1号古墳主体部内短甲出土状況



図版18 b 第1号古墳金銅製品出土状況（東から）



図版19 a 第1号古墳主体部（完掘後）



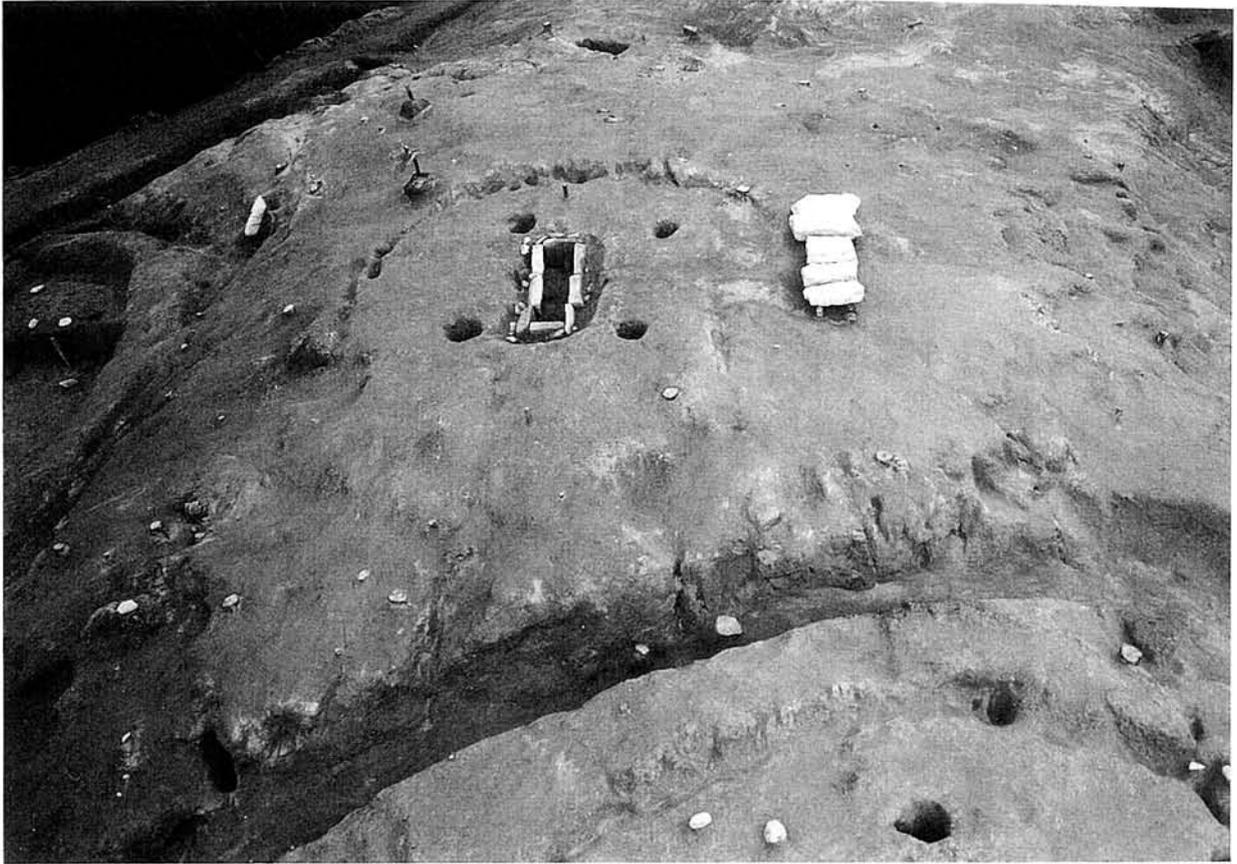
図版19 b 第1号古墳土層断面（南側から）



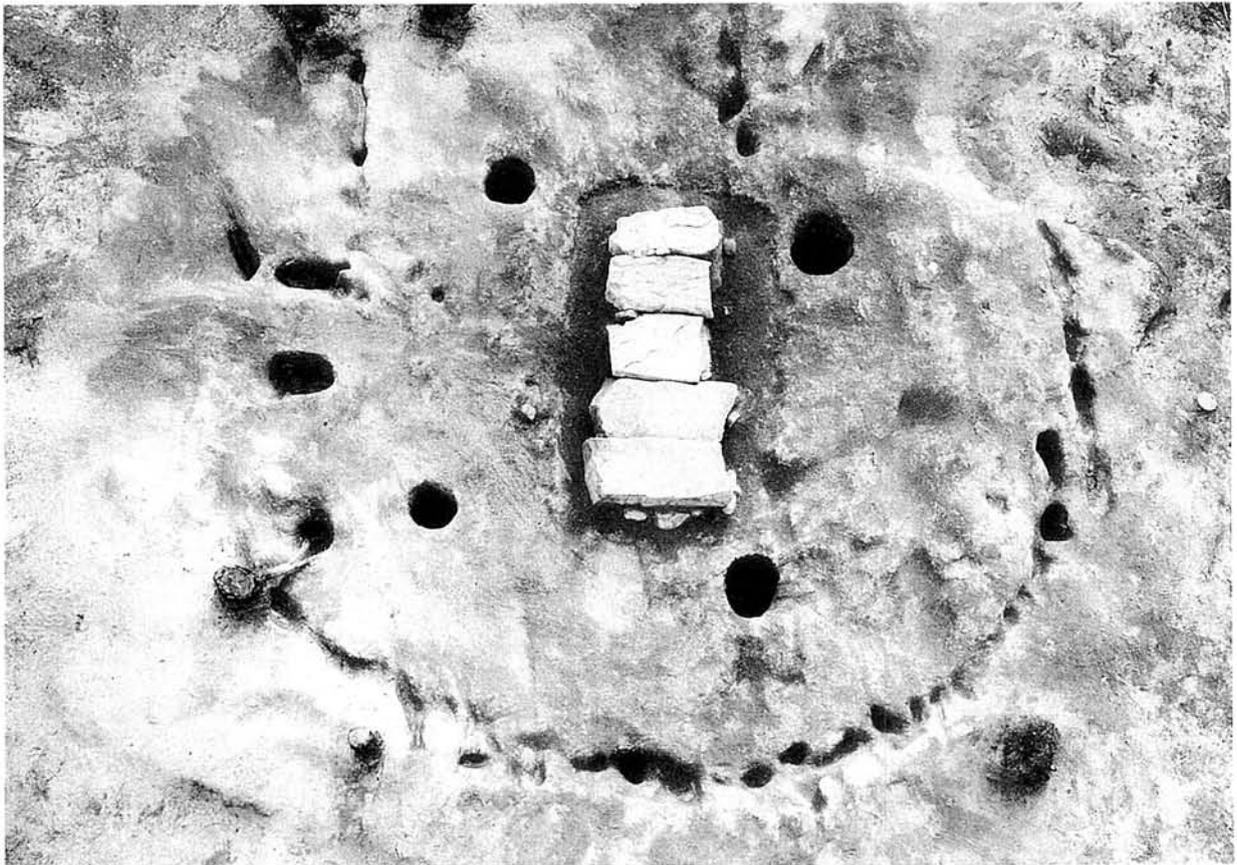
図版20 a 第10号古墳及び第2号掘立柱建物跡



図版20 b 第1号古墳盛土除去後（東から）



図版21 a 第2号古墳全景（調査後）



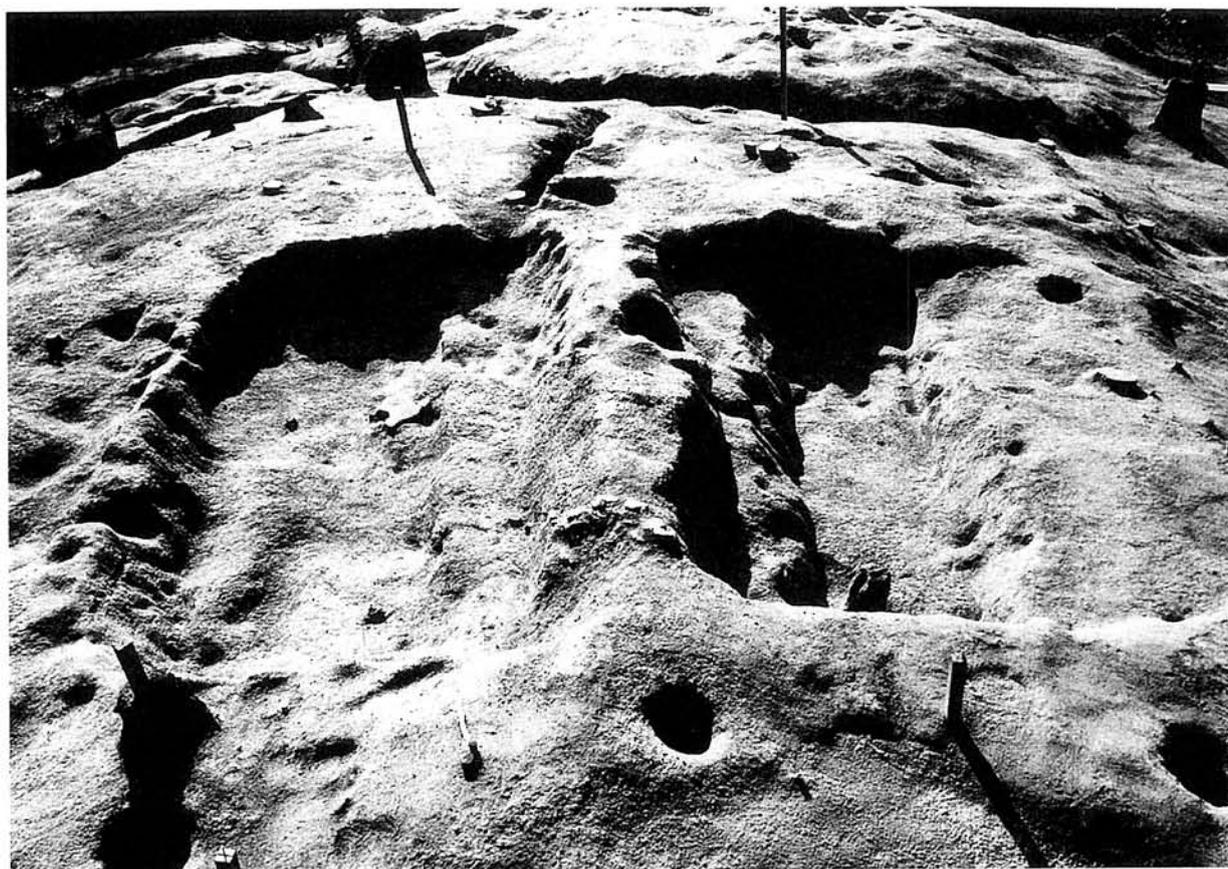
図版21 b 第2号古墳主体部石棺（開棺前）及び第20号住居跡



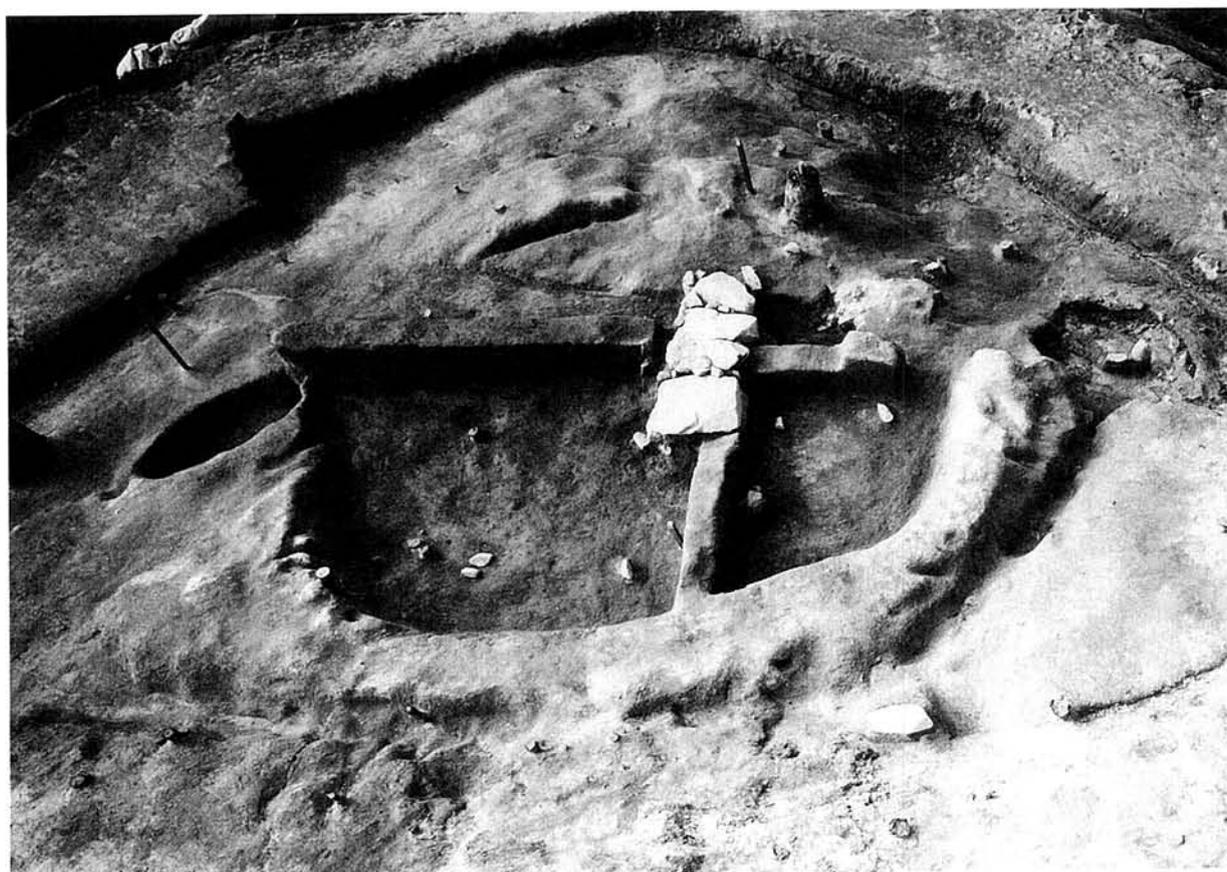
図版22 a 第2号古墳石棺内人骨出土状況



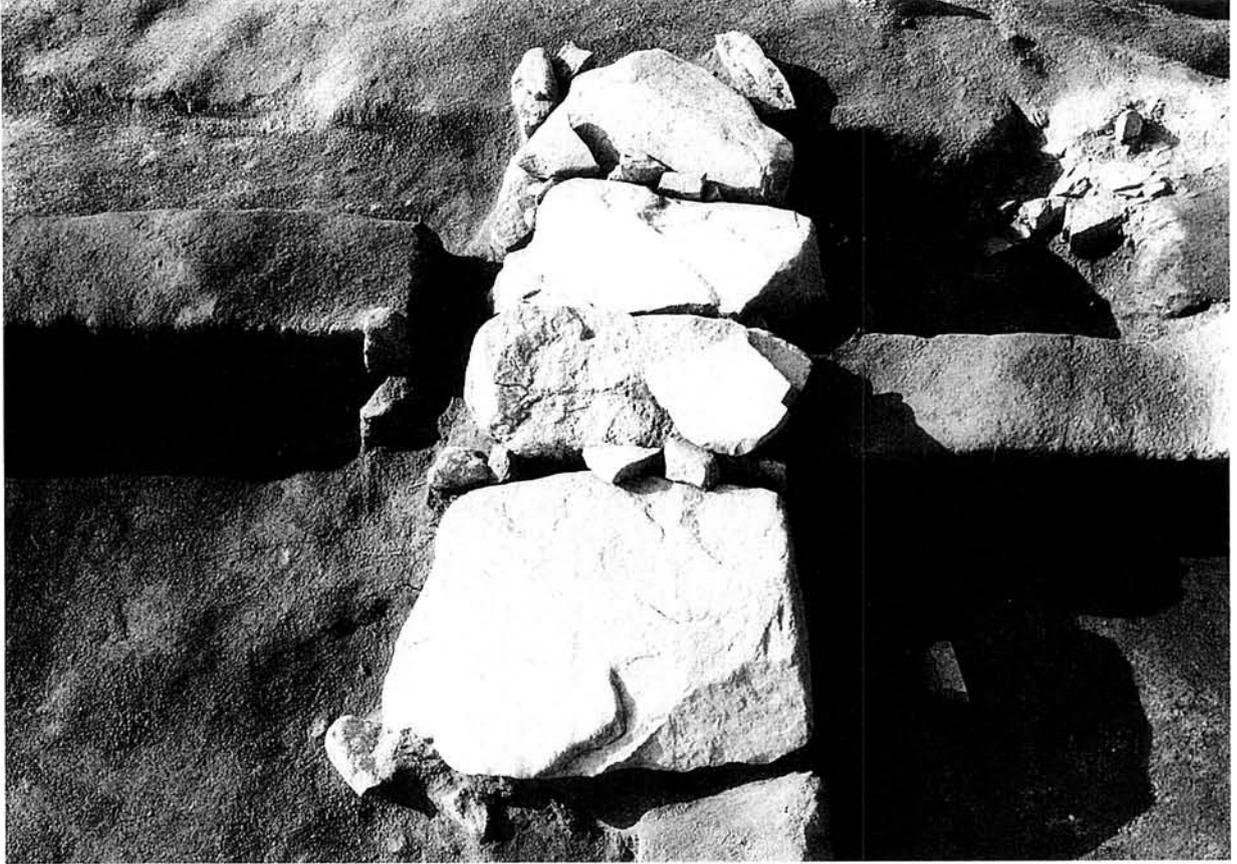
図版22 b 第3号古墳全景（西から）



図版23 a 第3号古墳A(右)・B(左)主体部



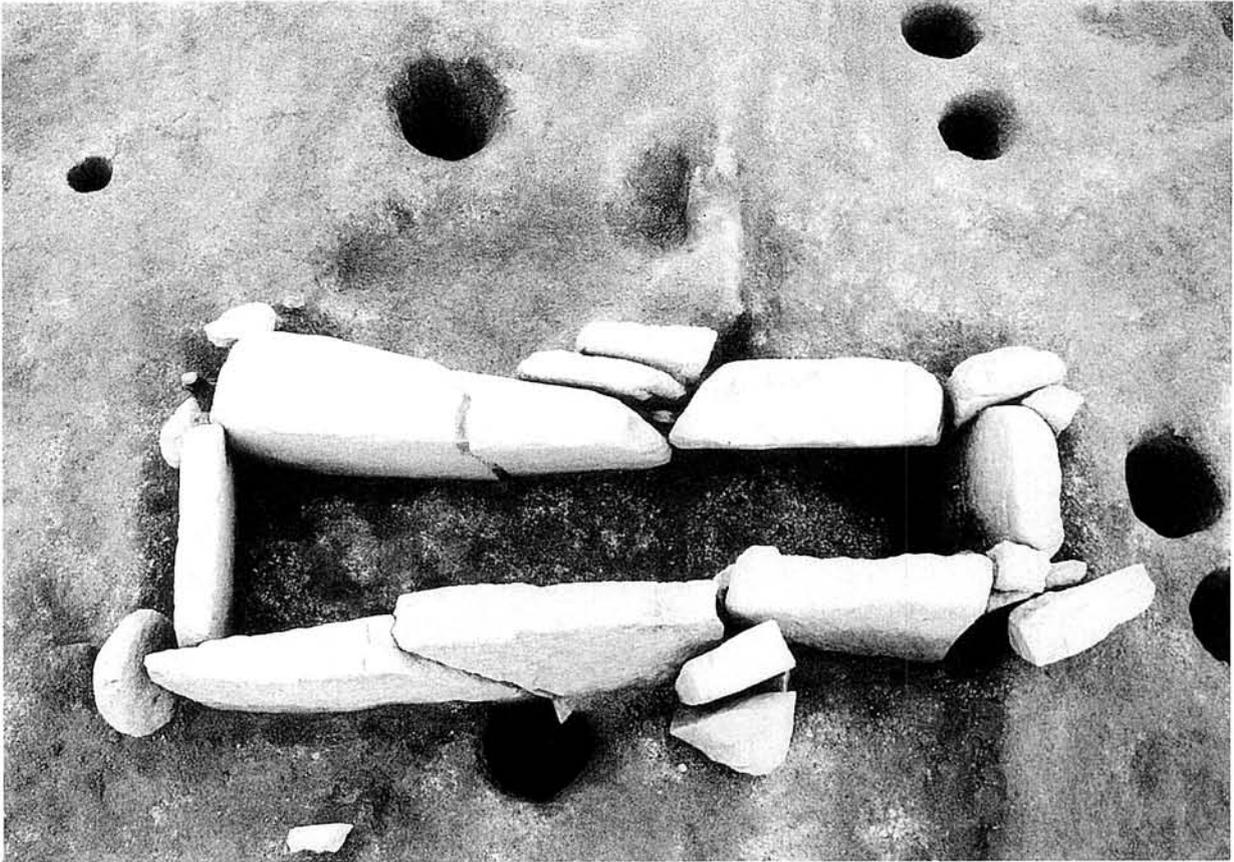
図版23 b 第5号古墳全景(南から)



図版24 a 第5号古墳主体部石棺（開棺前）



図版24 b 第5号古墳主体部石棺内人骨出土状況



图版25 a 第5号古墳主体部石棺（完掘後）



图版25 b 第21号住居跡



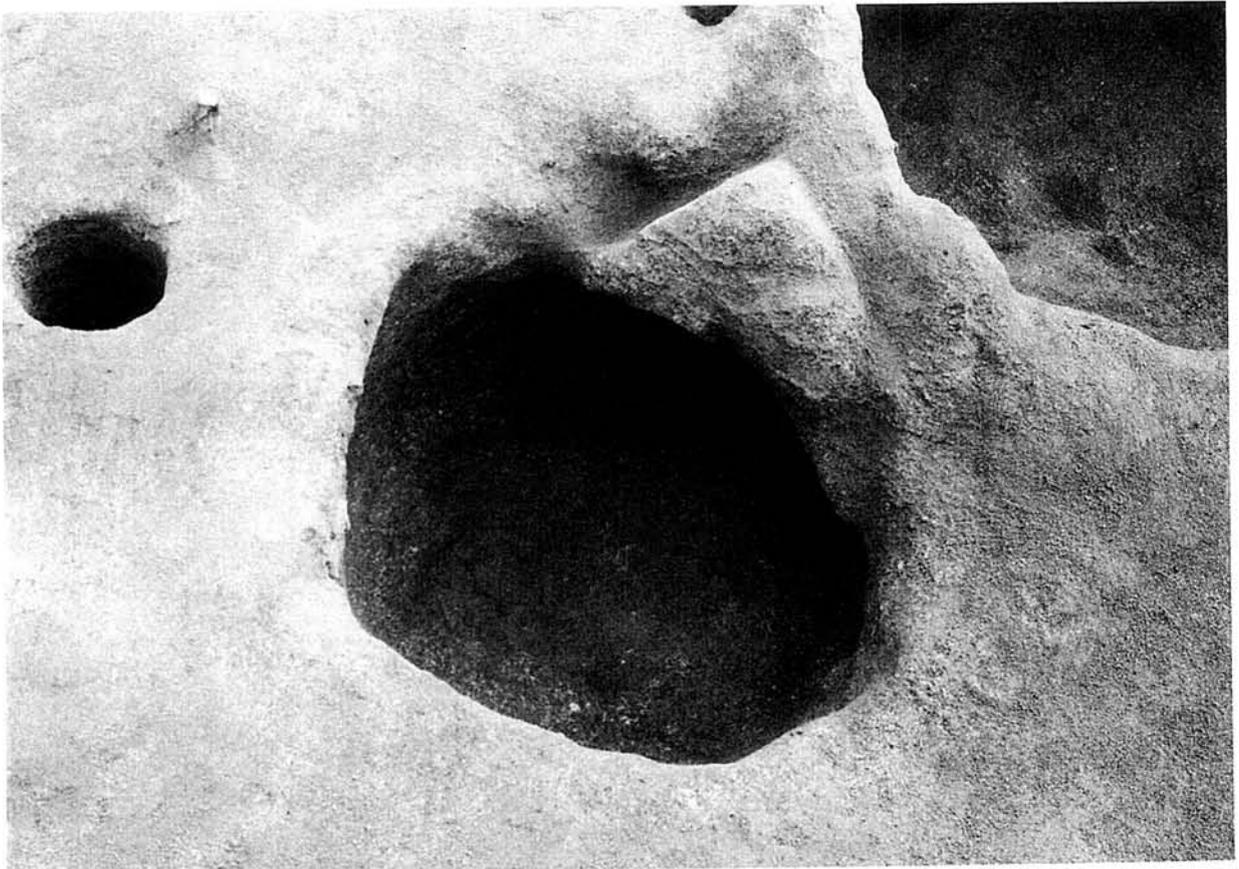
図版26 a 銅鏡出土状況



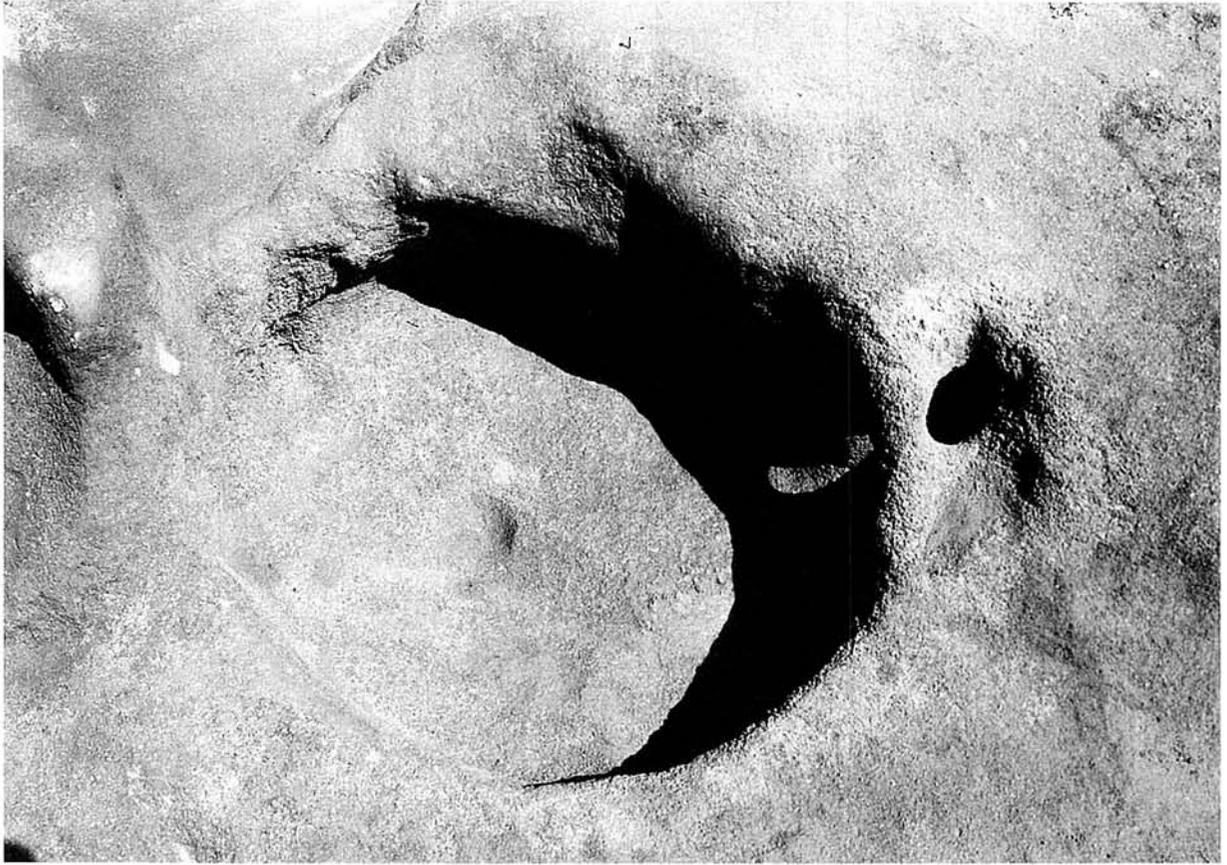
図版26 b 第5号土壙遺物出土状況



图版27 a 第5号土壤



图版27 b 第6号土壤



図版28 a 第7号土壙



図版28 b 第6号古墳全景（東から）



图版29 a 第6号古墳A主体部



图版29 b 第6号古墳B主体部



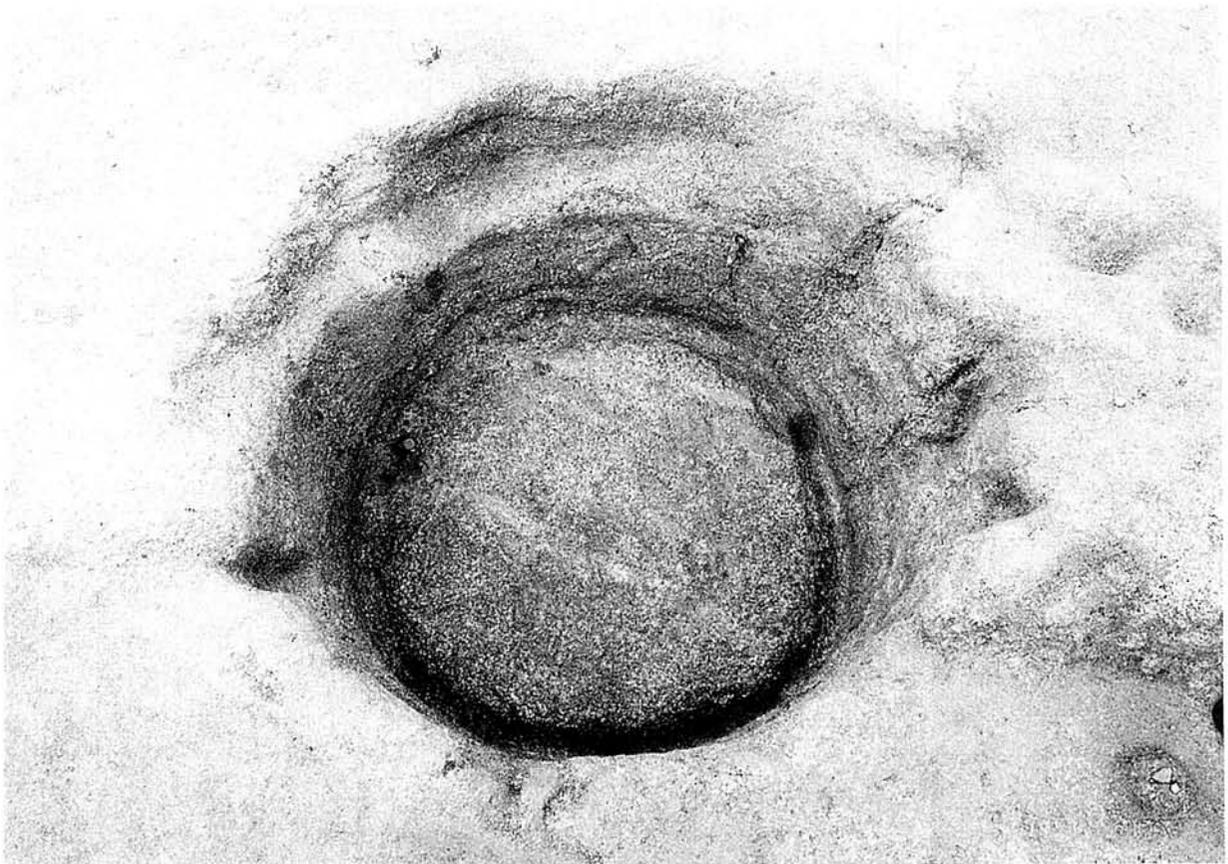
図版30 a 第6号古墳東側周溝



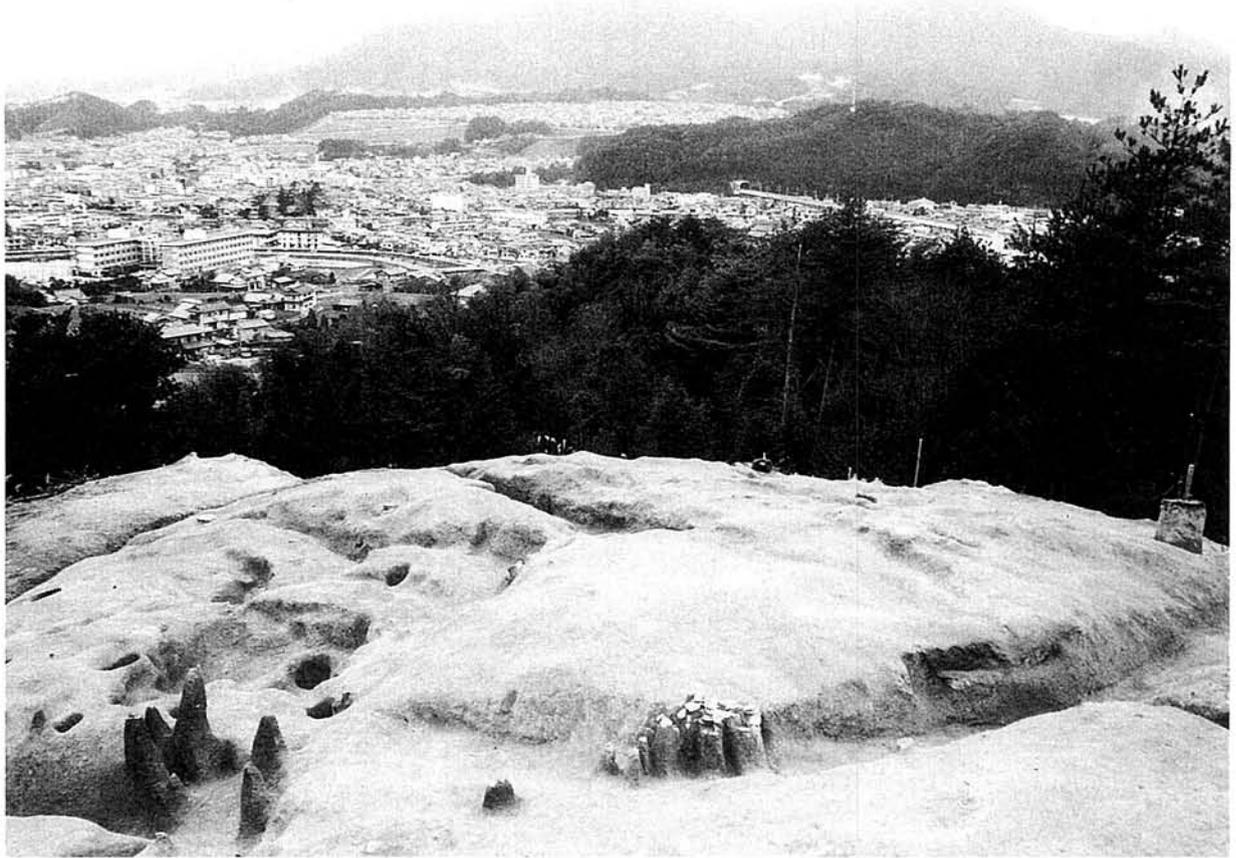
図版30 b 第6号古墳西側周溝・第3号古墳東側周溝及び溝状遺構（南から）



图版31 a 第23号住居跡



图版31 b 第8号土坑



図版32 a 第7号古墳全景（東から）



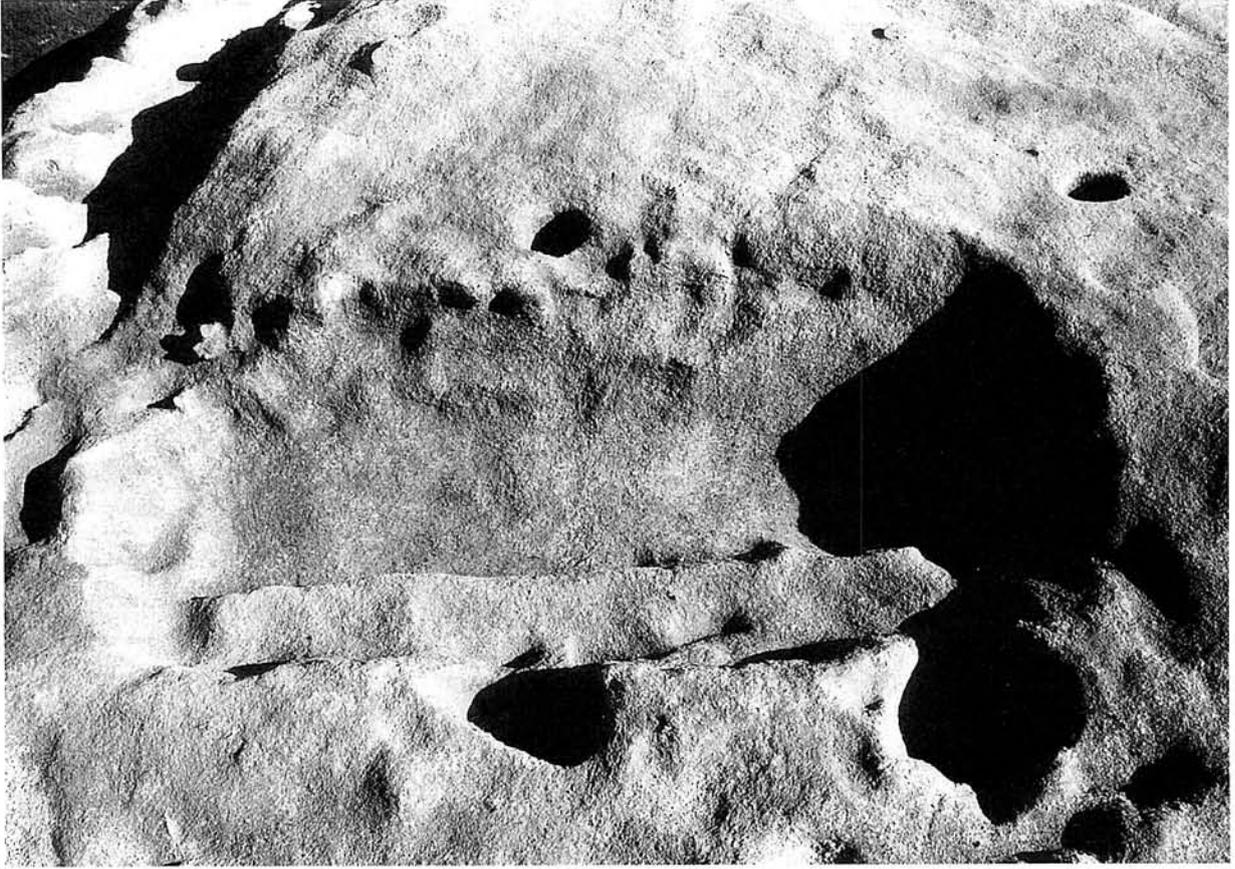
図版32 b 第7号古墳主体部



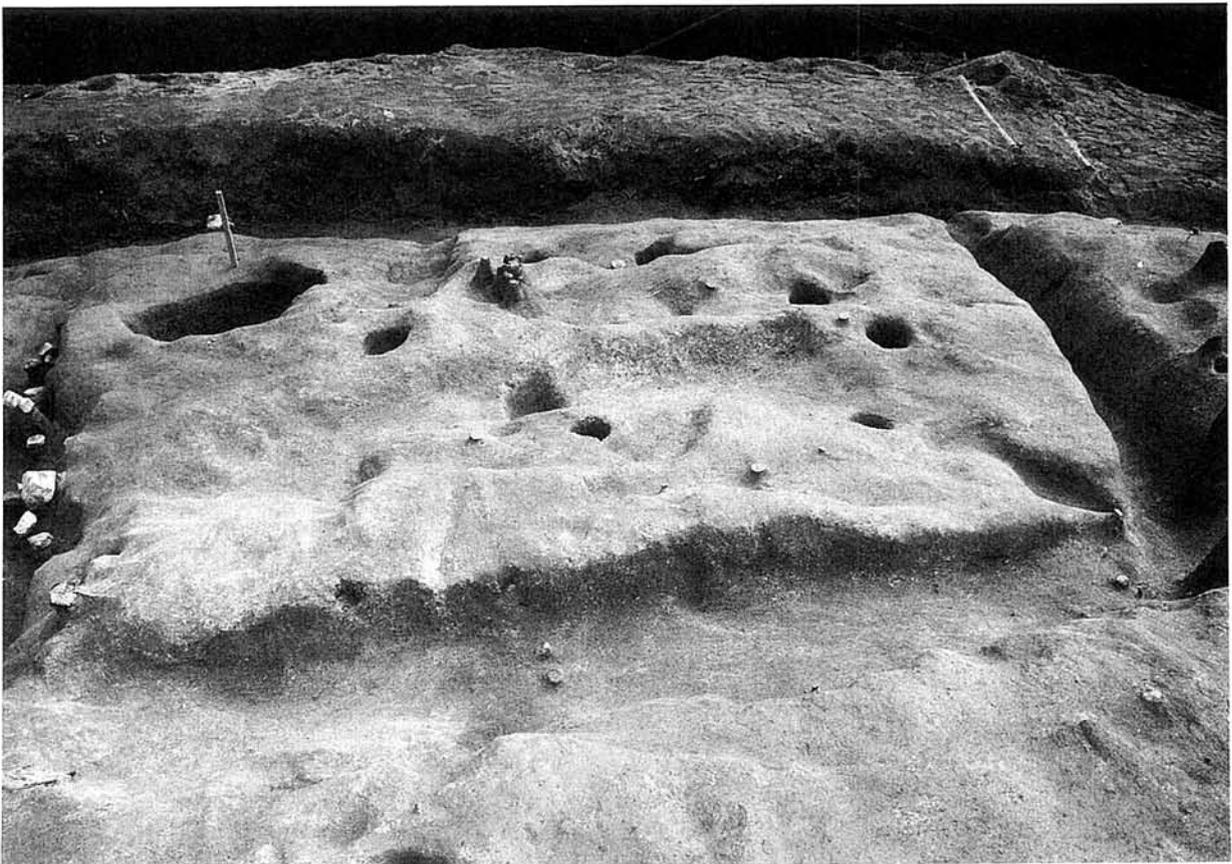
図版33 a 第7号古墳東側周溝遺物出土状況及び第5号住居跡状遺構



図版33 b 第8号古墳全景（東から）



図版34 a 第8号古墳主体部



図版34 b 第9号古墳全景及び主体部



図版35 a 第9号土壙



図版35 b 第22号住居跡及び第4号住居跡状遺構



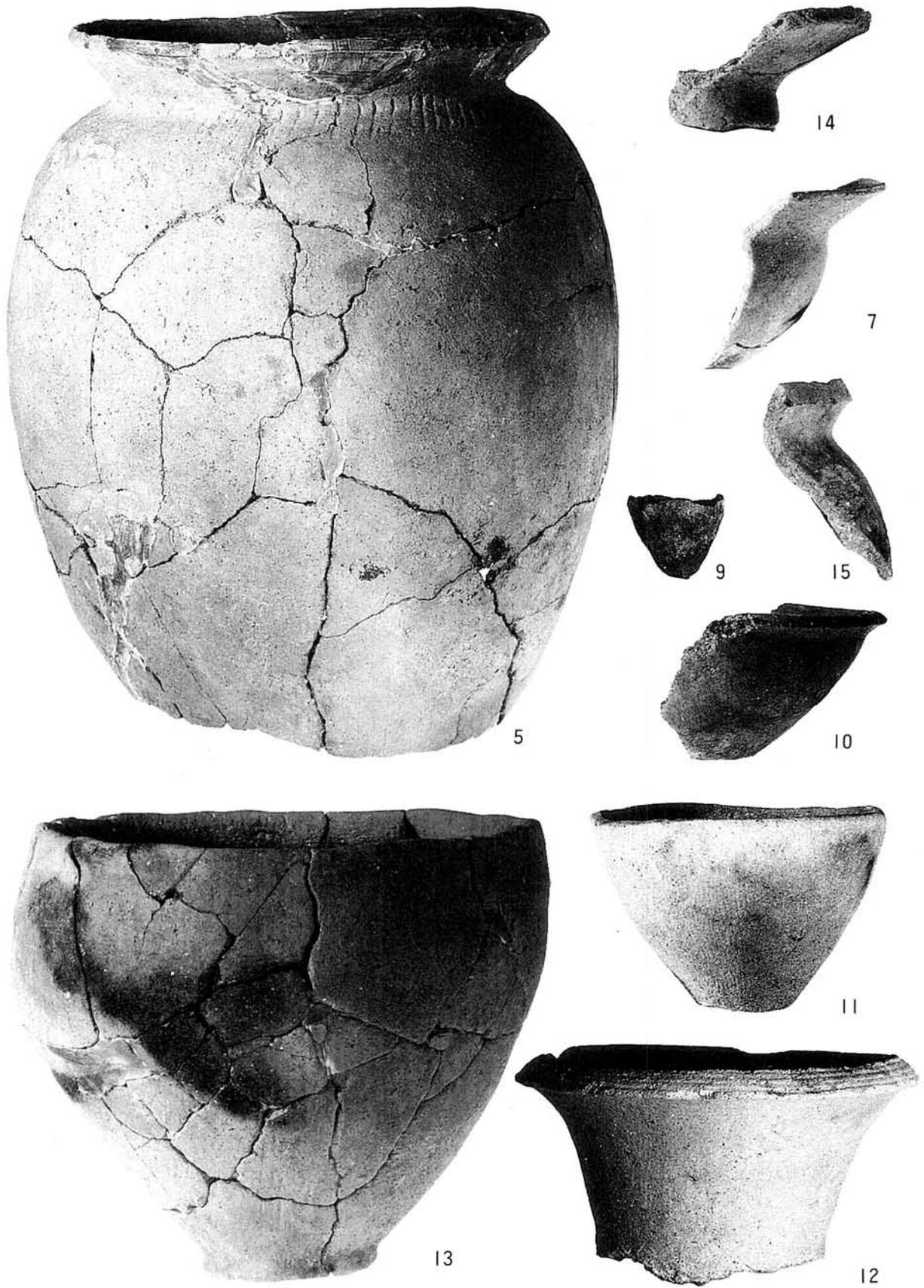
図版36 a 第2号テラス状遺構



図版36 b 貝塚近景（西から）



図版37 城ノ下A地点遺跡出土土器(1)



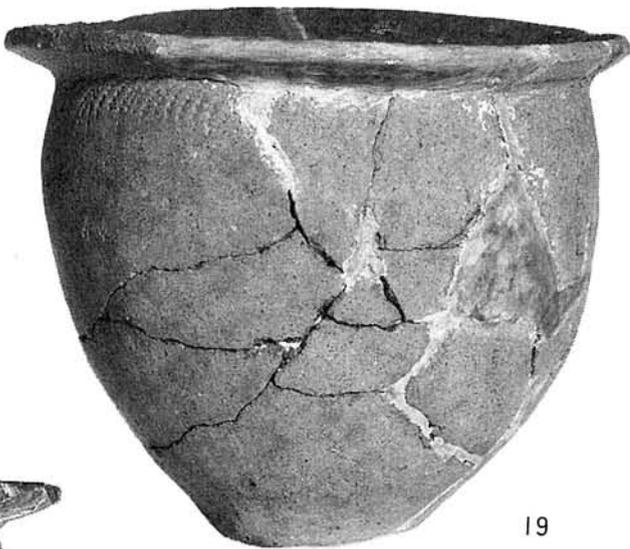
図版38 城ノ下A地点遺跡出土土器(2)



21



18



19

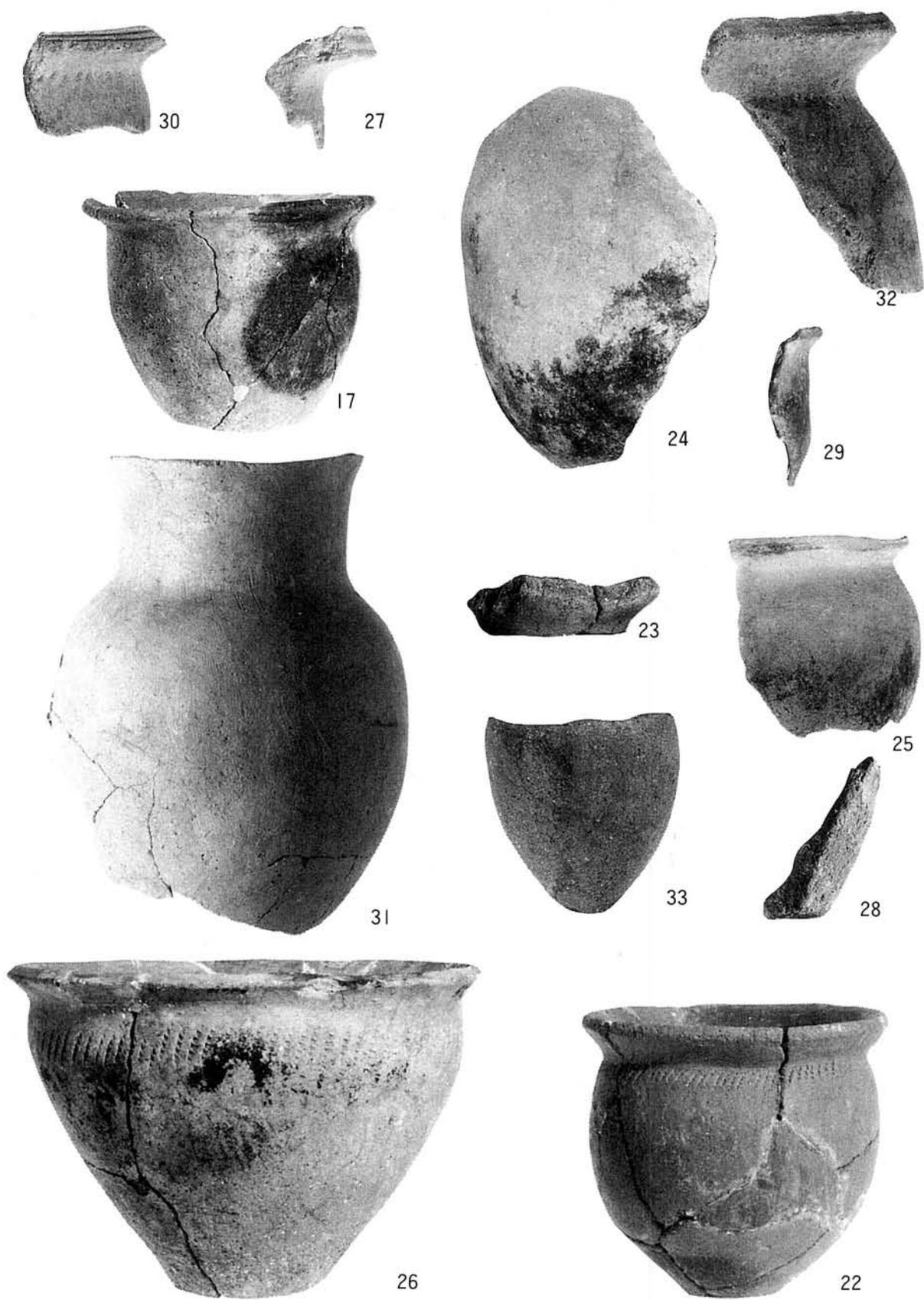


16

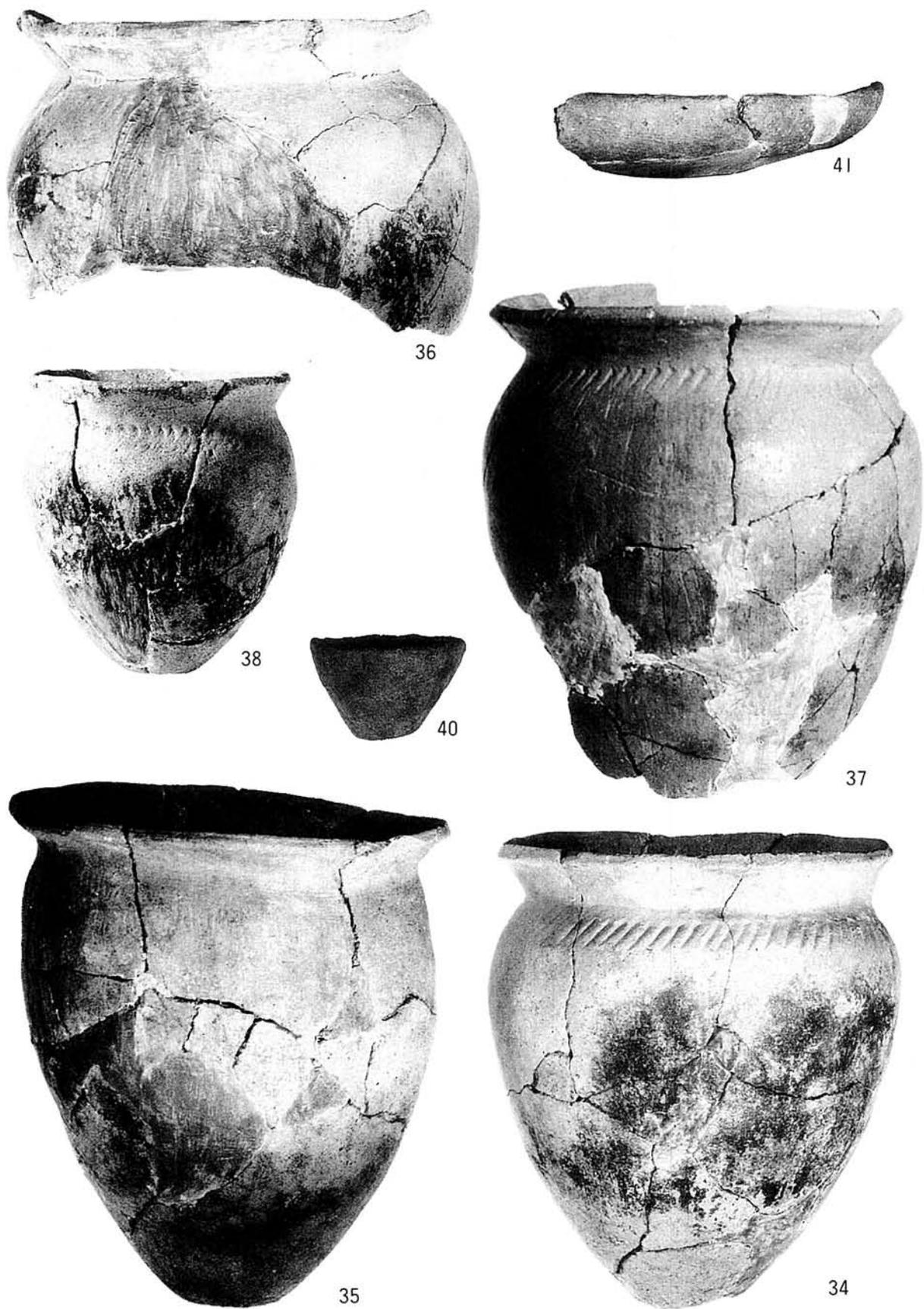


20

図版39 城ノ下A地点遺跡出土土器(3)



图版40 城ノ下A地点遺跡出土土器(4)



図版41 城ノ下A地点遺跡出土土器(5)



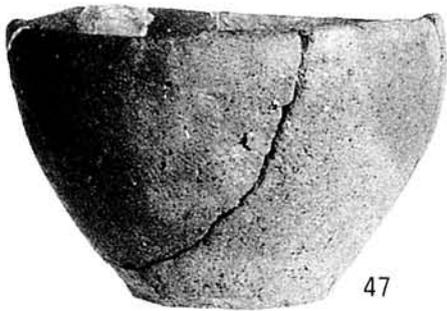
42



43



48

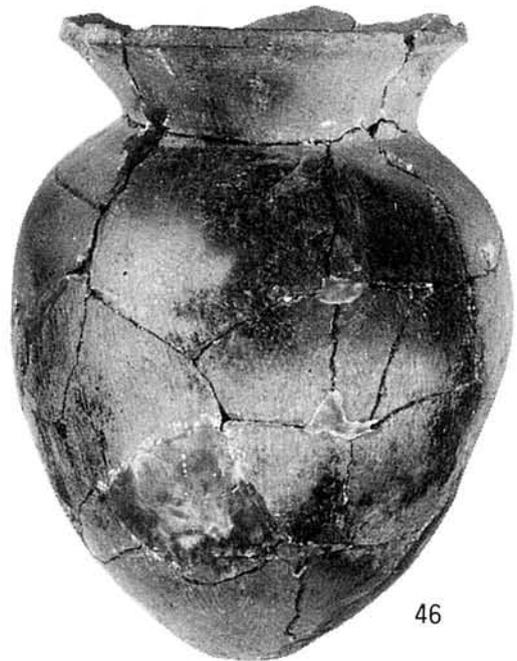
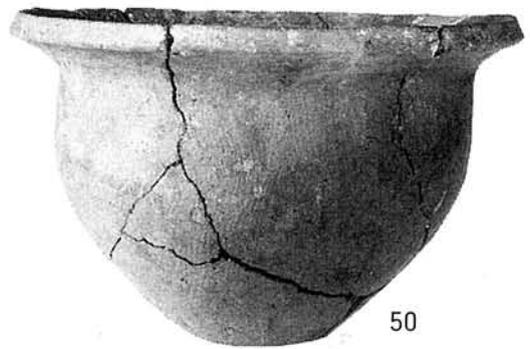


47



39

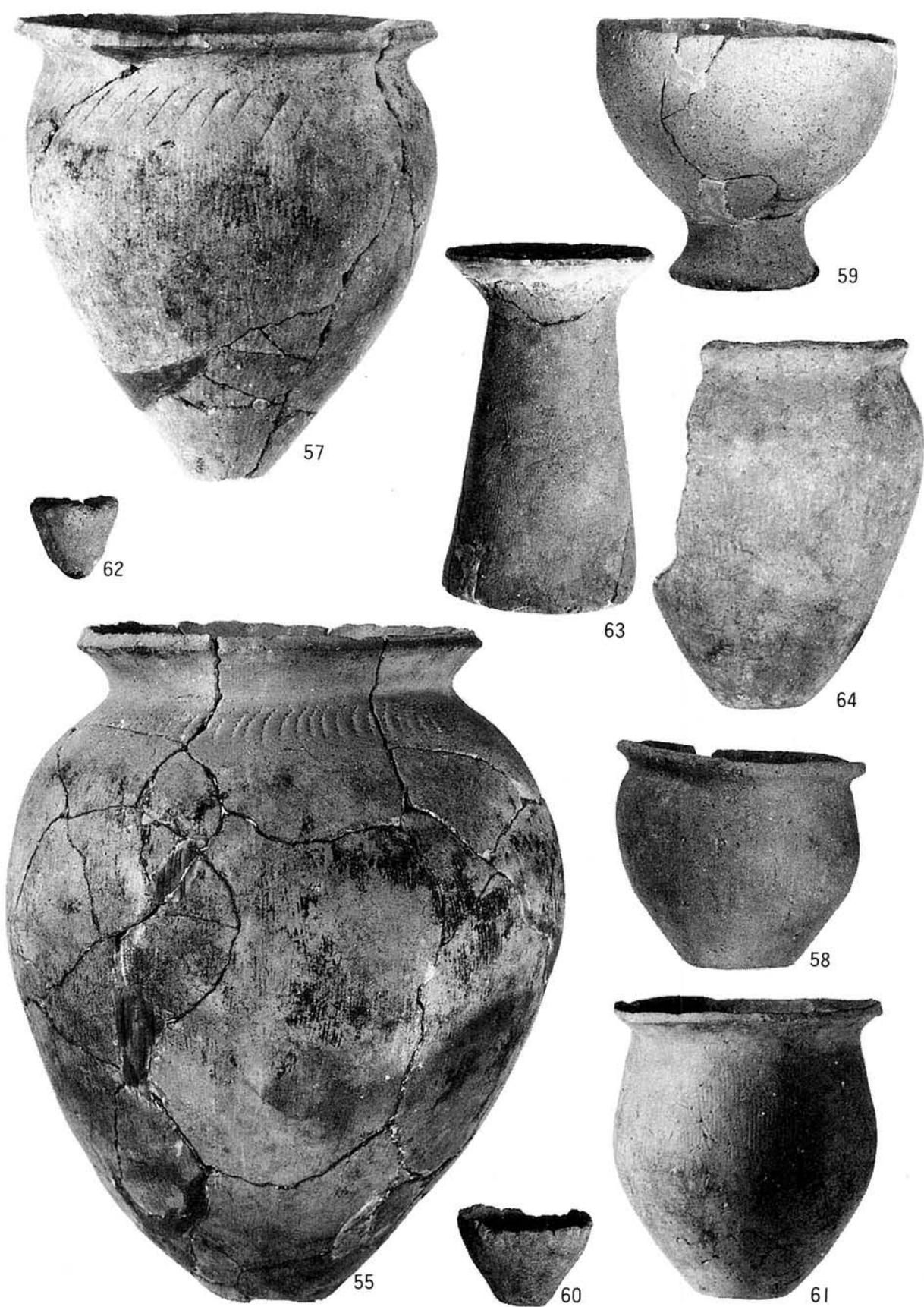
図版42 城ノ下A地点遺跡出土土器(6)



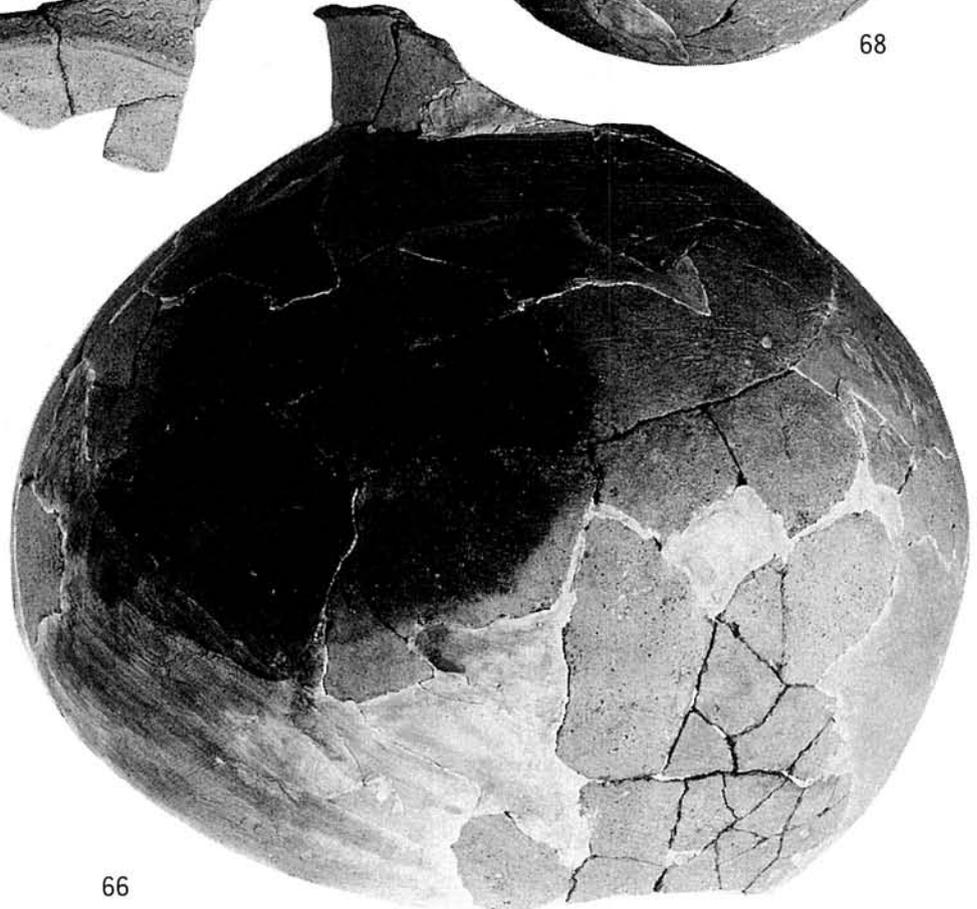
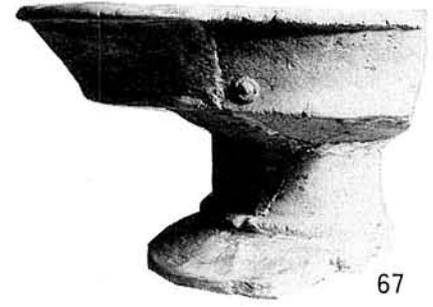
図版43 城ノ下A地点遺跡出土土器(7)



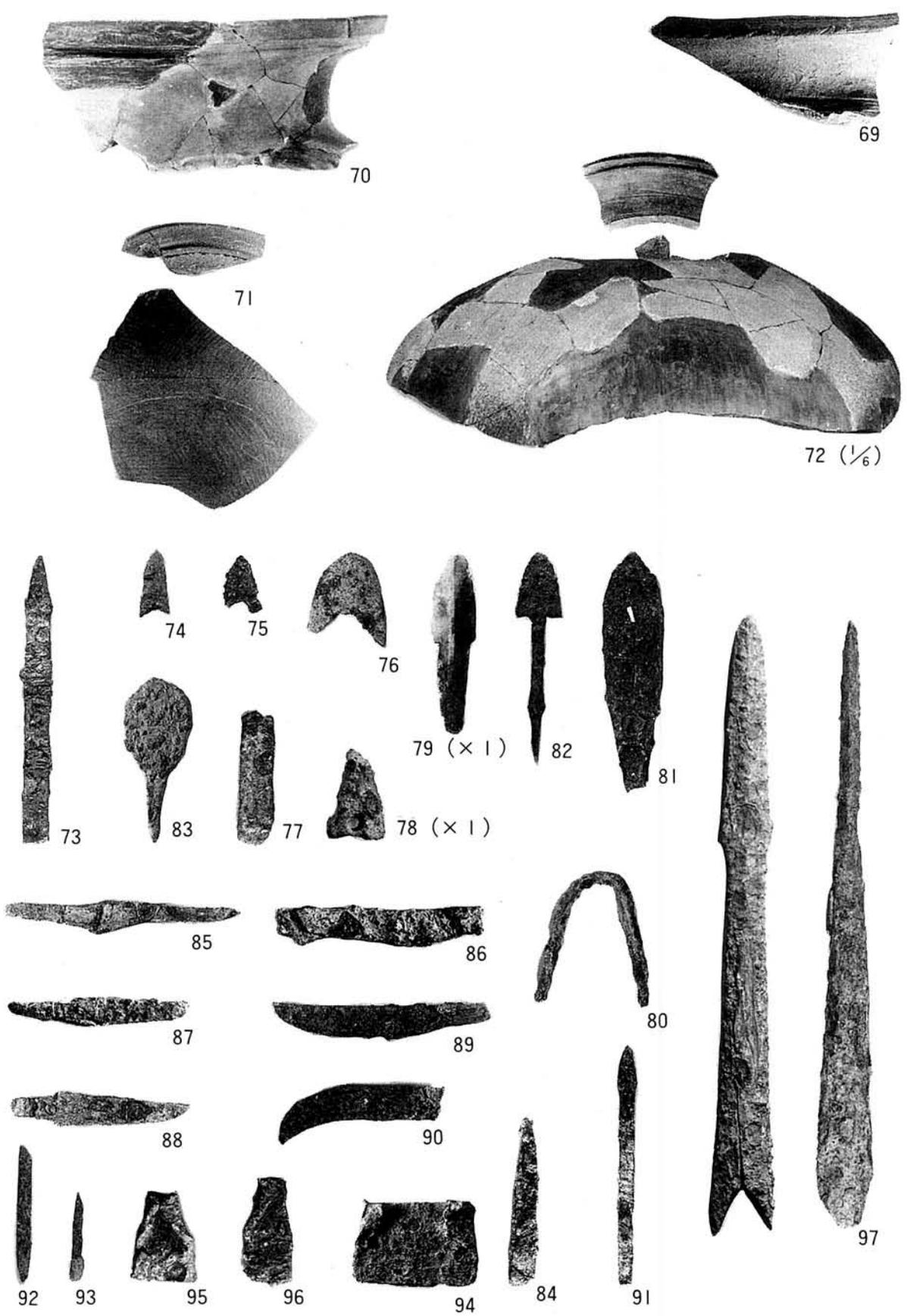
図版44 城ノ下A地点遺跡出土土器(8)



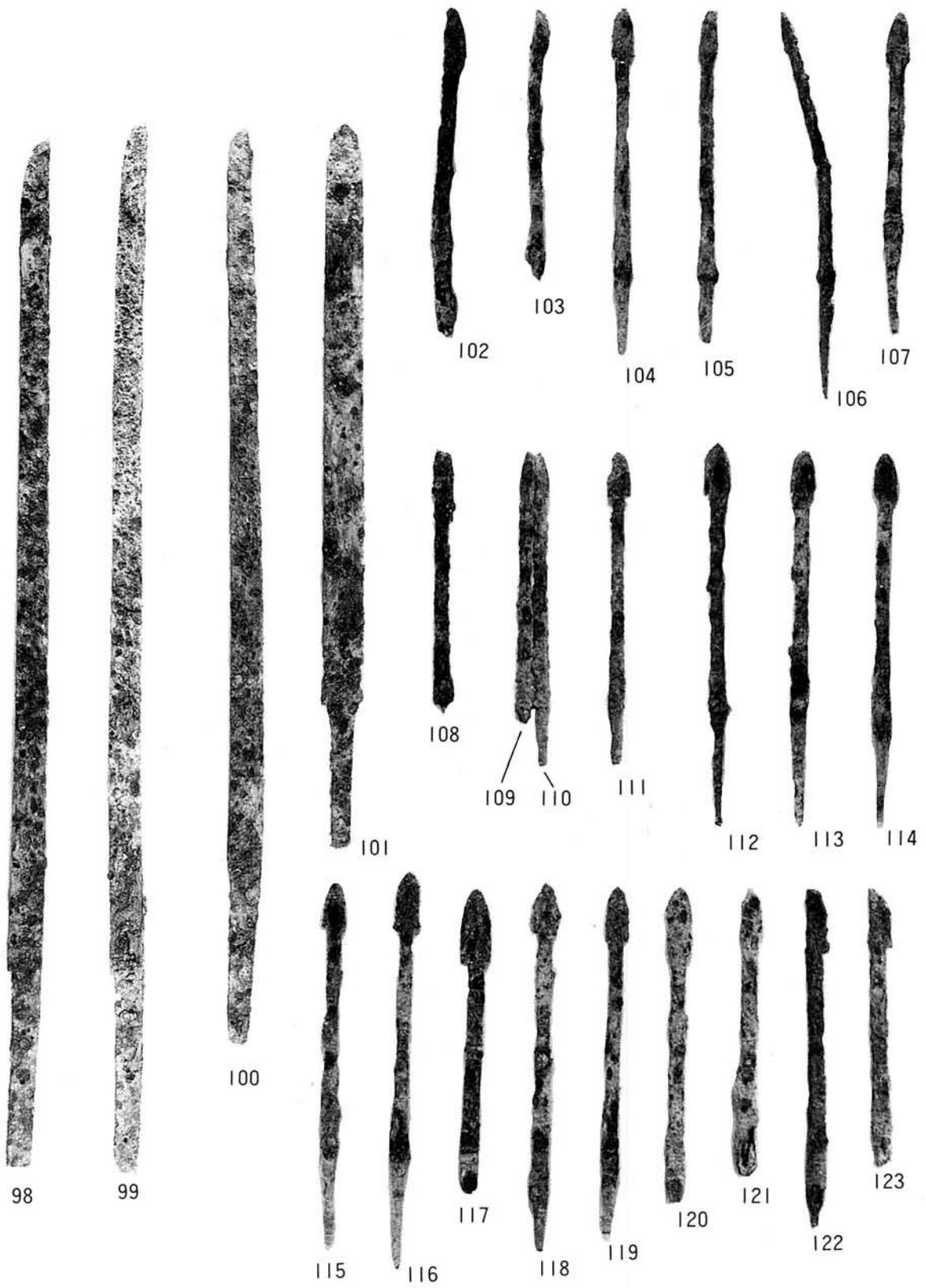
図版45 城ノ下A地点遺跡出土土器(9)



図版46 城ノ下A地点遺跡出土土師器



図版47 城ノ下A地点遺跡出土須恵器及び金属器



図版48 城ノ下A地点遺跡出土鉄器



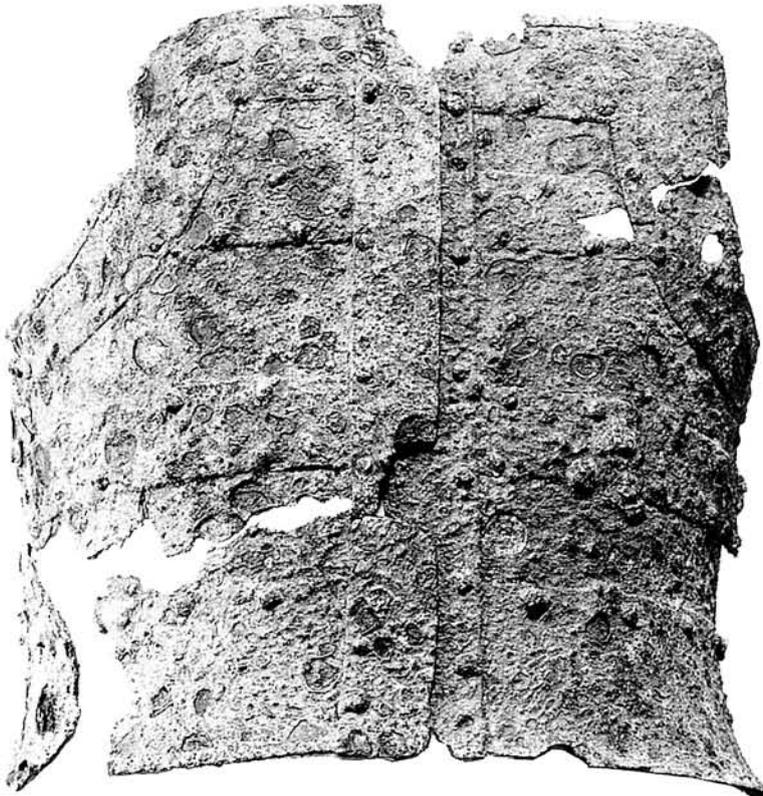
a .



b .



c .



124



130



131



128



129



127



125

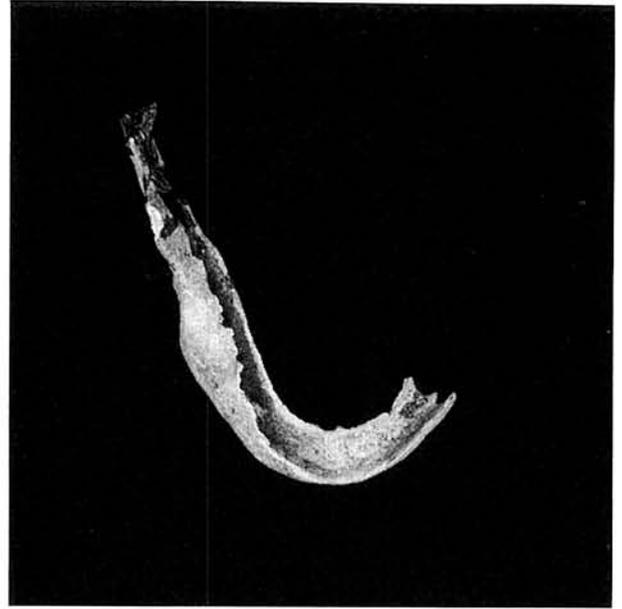


126

図版49 城ノ下A地点遺跡出土短甲，金銅製品及び玉類
(a . 蝶番金具， b . 垂飾結合部分， c . 垂飾)



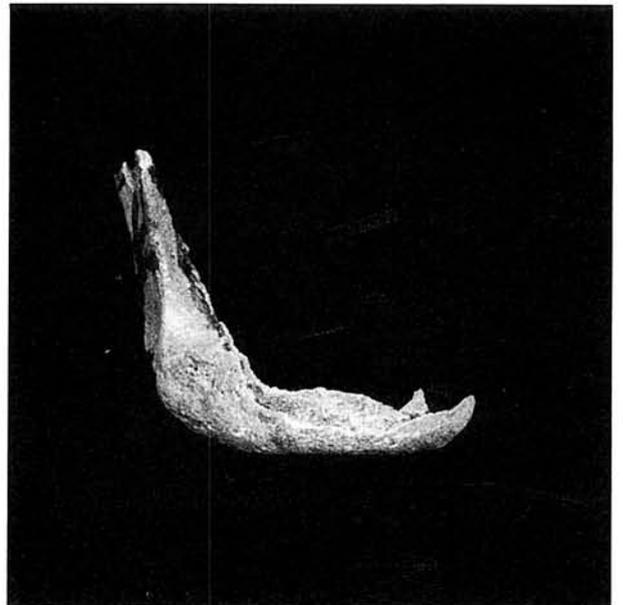
頭蓋上面 (Superior view of the skull)
 城ノ下A 2号墳人骨 (男性・成年~壮年)
 (Jonoshita A sketeton of No2 tumulus,
 adolescent~young adult male)



下顎骨上面 (Superior view of the mandible)

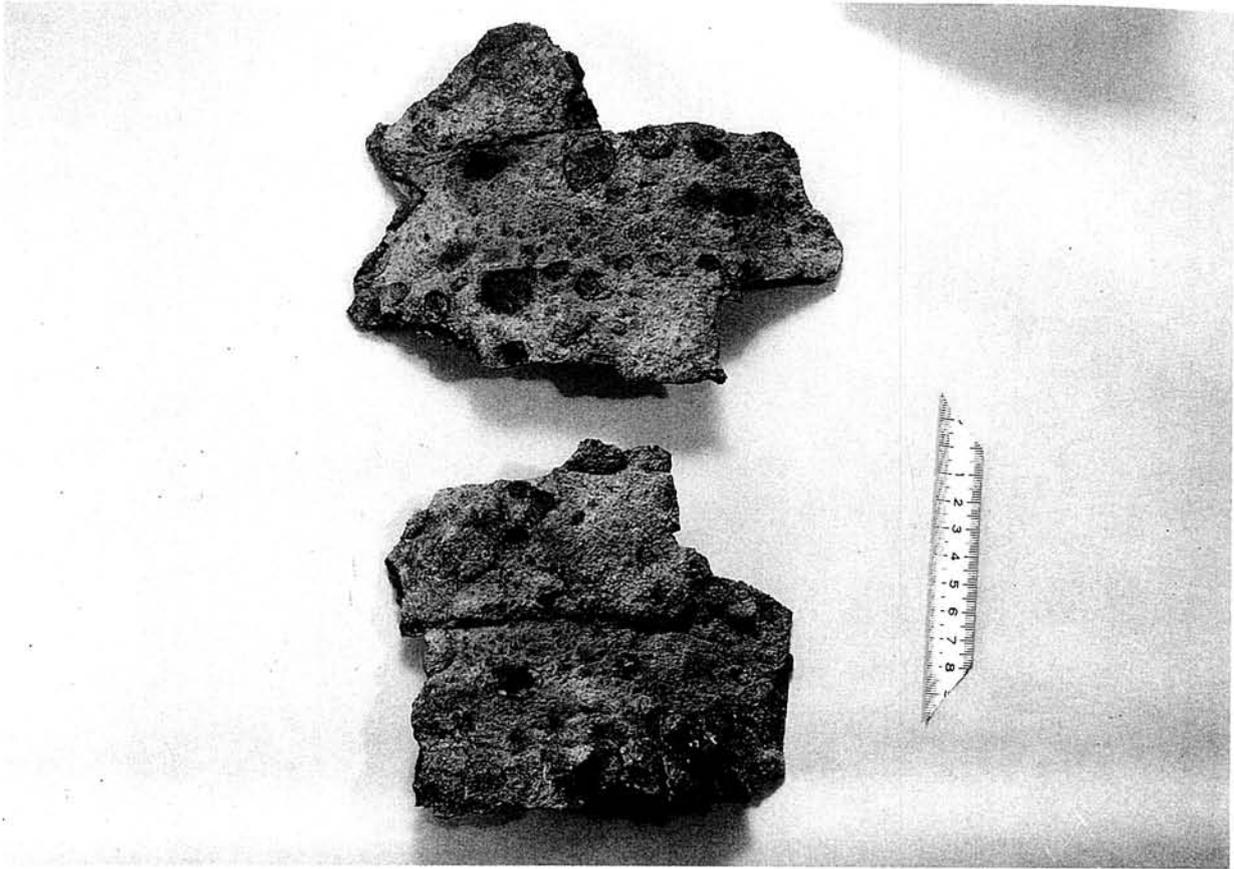


下顎骨側面 (lateral view of the mandible)



下顎骨前面 (Frontal view of the mandible)

城ノ下A 5号墳人骨 (男性・熟年)
 (Jonoshita A sketeton of No5 tumulus, mature male)



图版51 西尾古墳出土短甲残余

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第2集

広島市佐伯区五日市町所在

城ノ下 A 地点遺跡発掘調査報告

1991年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 産興株式会社

広島市中区舟入南1丁目1番18号